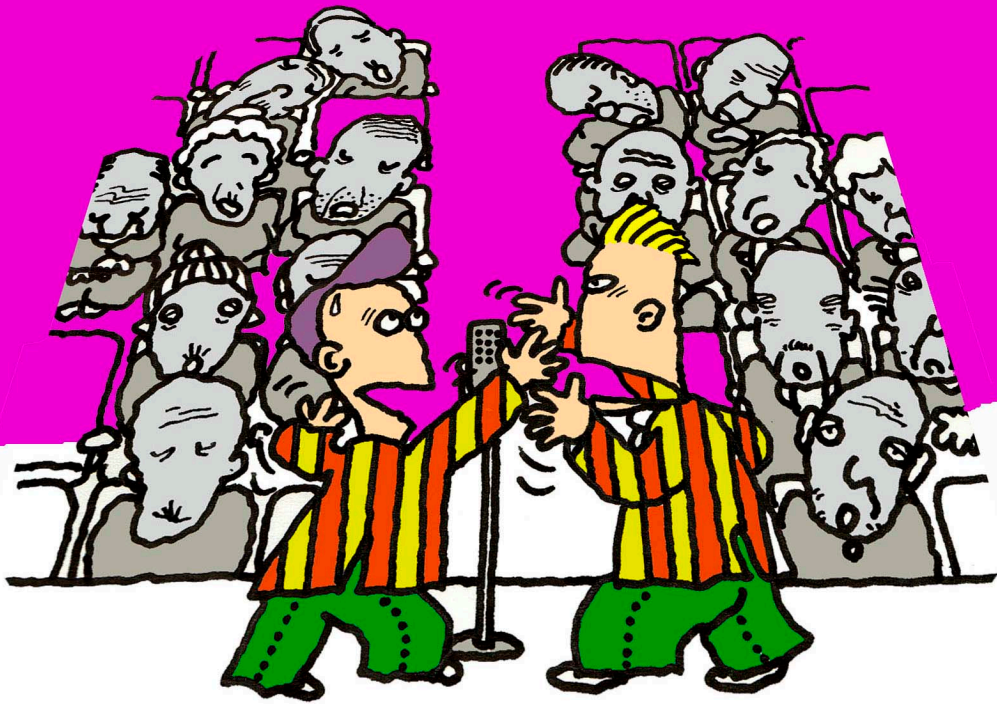


連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 6 No. 2

第22号

対人援助学会

NO. 22 M O K U J I

目次		002
ハチドリの器	見野 大介	003
執筆者@短信	執筆者全員	004-013
知的障害者の労働現場	千葉 晃央	014-019
臨床社会学の方法	中村 正	020-029
ケアマネだからできること	木村 晃子	030-033
街場の就活論	団 遊	034-035
カウンセリングのお作法	中島 弘美	036-041
映画の中の子どもたち『きみはいい子』	川崎二三彦	042-043
コミュニティを探して	藤 信子	044-046
続・家族理解入門 1	団 士郎	047-058
学校臨床の新展開	浦田 雅夫	059-061
学びの森の住人たち	北村 真也	062-065
福祉系対人援助職養成の現場から	西川 友理	066-073
先人の知恵から	河岸 由里子	074-078
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	079-082
日本のジェノグラム	早樫 一男	083-086
きもちは言葉をさがしている	水野 スウ	087-095
七日参り	竹中 尚文	096-102
これからの男性援助を考える	坊 隆史	103-105
ノーサイド 禍害と被害を超えた論理の構築	中村 周平	106-107
男は痛い！「ペコロスの母に会いに行く」	國友 万裕	108-114
援助職のリカバリー	袴田 洋子	115-118
周旋家日記	乾 明紀	119-121
トランスジェンダーをいきる	牛若 孝治	122-125
役場の対人援助論	岡崎 正明	126-129
十代の母という生き方	大川 聡子	130-132
電腦援助	浅田 英輔	133-137
講演会&ライブな日々	古川 秀明	138-141
Journey to my PhD@York in イギリス	浅野 貴博	142-145
養育里親～もうひとつの家族～	坂口 伊都	146-150
周辺からの記憶	村本 邦子	151-161
病児保育奮闘記	大石仁美	162-165
ラホヤ通信	高垣 愉佳	166-171
知的発達障害の家族の日々	大谷多加志	172-175
対人支援点描	小林 茂	176-178
連載第二回 「あ！萌え」の構造:序論	齋藤 清二	179-184
連載第二回 海の向こうにでて見れば	石田 佳子	185-190
連載第二回 清武システムズ	しずてむきよたけ	191-202
連載第二回 そうだ、猫に聞いてみよう	小池 英梨子	203-213
編集後記	編集長&編集員	214-215

ハチドリの器 5

見野 大介

Mino Daisuke

自作の器でコーヒータイム。



工房の庭を、庭師に施工して頂きました。人や鳥が多く集まるようにと、7種類の実の成る木が植えられています。

先日、大阪某所で挙式されたY夫妻に引出物としてお選び頂いた湯飲みです。包装も、外箱以外は全て手作りです。熨斗や水引も、一つ一つ丁寧に折り、結んでいます。



ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ

第22号

執筆者

@短信

齋藤 清二 新連載第2回

4月に京都に来てから、会う人ごとに、「京都の夏は暑いですからね、覚悟しておいてくださいよ」と言われてきた。「なーに、富山も北陸は涼しいだろうと誤解している人が多いけど、最近は毎年暑いし、それにフェーン現象って、日本海側の人以外は知らないから…」とたかを括っていたら、7月の末くらいから、「確かに京都は暑い！」と実感するようになった。幸い夏休みは、富山でかなりゆっくりと過ごせたが、天気予報を見る限りでは、平均すると、毎日2〜3℃くらい京都の方が気温が高いようで、やっぱり真夏は避難してよかったです。とはいえ、そろそろ涼しくなってきたので京都に戻ってみると、やはり見る場所はたくさんあるし、昨年までと比べると段違いに人間的な生活をさせてもらっている。これから秋の紅葉の季節を、今から楽しみにしているところである。

石田 佳子 新連載第2回

先日、夫が“右足”の小指をベットの角にぶつけてしまい、翌日になっても痛むというので、骨が折れていないことを確認するため、クアラルンプール市内の私立総合病院へ行きました。初診の場合は昼間でも「救急」へ行くことになっているため、そこで受け付けを済ませてから待たされ

ること数時間の後、やっと診察を受けることができ、レントゲン撮影も会計も済ませて帰りかけていたところ、夫の携帯電話に「至急戻ってくれ」との連絡がありました。「いったい何事？」と急いで戻ると、職員は何事もなかったような様子で、「書類に“左足の怪我”と書いてしまったから書き直させて欲しい」とのこと。

今回は大した怪我でなく実害はなかったのですが、これがもっと深刻な病気や怪我だったらと考えると、突っ込みどころが満載すぎて呆れてしまいます。冗談まじりながら「たとえ右足が悪くても左足を切り落とされたりしそうで怖い」と言っていた在マレーシアの友人(日本人)の慧眼に改めて脱帽しました。なおこのような場合には、「ここはマレーシア！」という呪文を三回唱えて心を落ち着ける(他ない)、という説もあります。ここはマレーシア！ここはマレーシア！ここはマレーシア！…。

小池英梨子 新連載第2回

9月1日〜4日まで、どうぶつ基金の仕事で鹿児島県からフェリーで3時間の三島村竹島に行ってきます。島民72名、猫100頭の竹島は、糞尿の臭いや発情期の鳴き声など多くの問題を抱えています。これ以上問題を悪化させないためには連載で書かせていただいているようにTNRが必要です。



©公益財団法人どうぶつ基金
しかし、離島となると動物病院へ運ぶのも簡単ではないし、費用もかさんでしまう。そこで、鹿児島三島村役場からの申請を受け、竹島地区会とNPO法人みしまですよ、の協力の元、どうぶつ基金による出張手術を行うことになりました。3日間で100頭全頭に不妊手術と、ノミダニ駆除、ワクチンを実施します。医療費やスタッフの旅費は全てどうぶつ基金が負担します。会場の準備や猫の捕獲とリターンは地元行政や島の方々が担う官民協働事業で

す。



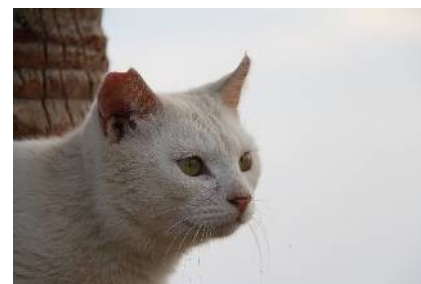
船酔いしないか、2日に1本のフェリーが運休しないか、忘れ物は無いか、それぞれですが、猫と島の方々のために頑張ってきます。興味を持ってくださった方はぜひ、下記リンクを見てください。

竹島のさくらねこ TNR 事業についてはこちら

<http://doubutukikin2010.blog58.fc2.com/blog-entry-615.html>

どうぶつ基金 HP はこちら

<https://www.doubutukikin.or.jp/>



「さくらねこ」は不妊手術済みの印桜のように皆から愛されますように

しすてむきよたけ

新連載第2回

僕は、立命館大学大学院応用人間科学研究科が行っている「東日本・家族応援プロジェクト」に参加している(村本邦子さんの『周辺の記憶』を是非)。現地における活動期間中、「団士郎・家族漫画展」の常駐者だ。

今年の活動は例年より少し早く、8月27日から青森県むつ市で開催。今年は、準備期間からちょっとだけ加わらせていただいている。迷惑をかけつつ、そして、助けられながら、プロジェクトの立ち上げや共催いただいているスタッフがいることで、場に参加できる自分に気づかされる。

今年は、「家族漫画展」と上記活動と同じ漫画展であるが、「ココロかさなるプロジェクト」と新しい活動も。現役生や修了生

スタッフもあり、普段の漫画展とは違う展示会場となった。

来場される方もいつもとは違った。例えば、副編集長の千葉さん(『知的障害者の就労現場』)。ホンブロックの団遊さん(『街場の就活論』)と今回初の「web 漫画展」の制作者である駒ちゃんだ。一般的な展示会場であれば、近場のネットワークの人と会うことは多いが、これまでの家族漫画展はそうでなかったから、新鮮な体験だった。そして、会うだけで、もーちょっと工夫してみようかな！なんてワクワクも増量したりして。これは、いつもの漫画展でも同じ。共に創り上げていく人たちの存在は、メンバーの一人である僕のフットワークを軽くさせる。

また、会場を提供してくれる場で普段から仕事をされている方々と知り合っていく機会もそうだ。今回の場では、点字ブロックが、数時間前より綺麗になっていたり、にっこりと、ときに懸命に地上の道案内する駅員さんと言葉を交わす機会があったことを思い出す。

「京阪三条駅」でさせていただけたことに感謝だ。



小林茂

(臨床心理士)

昨年から、日々、積み重ねる体験が、自分が良いと思えない粗い経験としか蓄積されていないと感じるようになった。ただ忙しいだけで、自分がどんどん愚鈍になる感覚がある。もっと取り組みたいと

いう衝動に反し、思考が低下していく嫌な感じと言い換えても良い。そんなことを感じながら、自分の活動を再構築しなければならぬと思うに至った。浦河に来て8年となるが、そろそろ今の働き方を見直そうと考えている。専門性や生き方にこだわりを持つと、時々不便が生じる。大変でも安定した勤めや収入よりも、わがままが許される限り、自分が大事にしたいことをしたい。内田百閒よろしく「イヤダカラ、イヤダ」。自分のことながら困ったものである。

「人はパンだけで生きるのではない!」と、氣勢をあげる今日この頃です。

水野スウ

やっとやっと、私のこの夏の宿題が終わりました。いえ、マガジンの原稿のことではありません。

安保法案国会がはじまると同時に、私が自分に課した宿題のことです。私が日ごろ、おはなしの出前で語っている憲法のことを、一冊のちいさな本にまとめようと思いついたのが、5月末のこと。

書きはじめた時は、もっと薄いブックレットになるはずが、国会審議を通して、安保法案の中味が次々あきらかになり、それとともに、民主主義そのものが壊されていくエライ事態になってきました。

こりゃあもう、憲法の存立危機事態だわ!と確信して、リアルタイムの出来事も書き足していくうちに、あらら、152 ページにもなってしまいました。とはいえ B6 版なので、もとより、小さい本には違いないんですが。

目次からいくつか見出しをひろうと――紅茶の時間／私の依って立つところ／ホウテキアンテイセイ、って?／憲法違反はリトマス試験紙／あなたはほかの誰ともとりかえがきかない／13 条のうた／“ふだん”の努力／わたしの 12 条宣言／誰が書いたの? 日本国憲法／改正草案って、どんな案?／緊急事態条項に要注意／アンポホウセイ、どこが 9 条違反?／9 条を持っているということ／憲法を親友に／平和のひとかげら／みるく世がやゆら、etc.

ね、ちょっとおもしろそうでしょ? このブックレット、「わたしとあなたの・けんぼう BOOK」は、お値段もかわいい 600 円。

興味をもたれました方、ぜひ私までご一報くださいませ。sue-miz@nifty.com

高垣愉佳

2 週間程スペインへ行って来ました。マドリドを中心に、少し北にあるエスコリアル、そして南に下ってグラナダ、マラガ辺りをうろろしました。テロ対策からか、普通の警察官がマシンガンを持っている事に軽い衝撃を受けました。一方でというべきか、そのおかげでと言うべきか、街はとても安全で、スリにすら遭うことなく旅が来ました。また「シエスタ」という制度が都市伝説ではなく、今も実行されている事にも驚きました。シエスタで日中お店が閉まる分、夜は遅くまでやっていて、街は人で賑わっていました。

スペインと言えば「タパス」。その「タパス」を支えているのが、恐らく「オリーブ」や「オリーブオイル」です。オリーブやオリーブオイルと言えば、「イタリア」と思いがちですが、実はスペインのものの方が価格は安く、品質は高いように思いました。そして、恐らくオリーブオイルの質の良さが影響していると思いますが、「純石鹼」の質の高さにも驚きました。スペイン語もワンプレーズだけ覚えました。「カフェ・コン・イエロ」これでアイスコーヒーをスムーズに買う事が出来ます。ただし、私たちが思っているアイスコーヒーとは違って、エスプレッソを氷の上からかけて飲むタイプの濃いものです。

電車はやはり、日本ほど正確には到着しません。遅れる事があるだけでなく、早く到着してしまう事もあるのが不思議です。運転スピードをコントロールしきれていないのでしょうか。そして、遅れる時も早く着く時にも、当然ながらお詫びのアナウンスはありませんでした。現地の感覚に身を委ねて、ゆっくりと異文化体験を楽しむ事が出来ました。

浦田雅夫

30 年ぶりくらいに母親とふたりで大阪駅を歩きました。80 歳を超えたおばあさんですが、私よりも軽やかに人波をかき分けて前へ進むパワーに圧倒されました。しかし、大阪駅もすっかり変わってしまいましたね。

早樫一男

今年の夏も厳しい暑さが続きました。年齢を重ねるごとに夏の疲れを感じるようになって自分を再発見しています。

ここで、前回の短信では身の回りの物の整理について話題にしましたが、プライベートでは、5月中旬から、夫婦中心の生活スタイルになりました。

必要最小限のスペースと物に囲まれて生活しています。以前にも触れたかもしれませんが、家族の発達段階を着実に歩んでいます。

発達段階を理論ではなく、自らのこととして、身を持って味わっている昨今です。

この先は…と考えるよりも、これまでの予想外の歩みと出会いに感謝！

中島弘美

ミニコンプ発表！？

CON(こん)カウンセリングオフィス中島、家族支援心理カウンセラーの中島弘美です。オフィスで家族面接をしながら、大学や専門学校で、カウンセリング論、心理学や社会福祉の授業を担当しています。学校以外に、対人支援にかかわる現場の職員さんや地域ボランティアの方々への研修もお引き受けしていて、支援する人への支援や養成にも関心を持って活動中です。

講座の講師をしていると受講者の方から、何か参考文献はありませんかとたびたび質問があります。これまでは本を紹介していましたが、最近キラリ☆とアイデアがひらめきました。それは、この対人援助学マガジン19～21号の「カウンセリングのお作法 1～3」分を印刷するのです。本をご紹介しても、入手までに時間がかかる場合もあるし、すぐに読み切れるものではありません。それに比べるとマガジンの連載分は、簡単に読み終えることができるので、お渡ししました。

そのままのサイズ印刷や A4 用紙にマガジン2頁分や4頁分を縮小します。マガジンを見てくださいとサイトをご案内するのも良いのですが、印刷したものを直接、お渡しするとすぐに読んでいただけました。

仕上がりは文庫本サイズの冊子です。

ミニサイズの CON(こん)のブックで「ミニコンプ！！」私は気に入っているのですが、このネーミングはやや無理があるでしょうか。

木村晃子

～ゼロ地点その3@ゆうぱり～もうすぐ一年

ちょうど一年前の9月をもって、息子は春に入学した大学を辞め、家を出て、夕張という見ず知らずの土地へ就職しました。

冬を越し、春が過ぎ、夏も越そうとしています。一年近くのひとり暮らしと、仕事の日々を経験し、すっかり逞しくなっています。障害をもつ子ども放課後等サービスの支援員をしていますが、夏場は農家の手伝いや、地域のイベントの手伝いなど、様々なことをしているようです。自分が何をしたいか、というよりも、今、与えられた仕事をしながら社会を知っていくことの面白さを実感しているようです。息子は10年後、何をしているのだろうか？と思うことがあります。何をしてもいいから、元気に楽しく仕事をしていたらいいなと思います。親の手から離れれば、離れるほどに、未知なる世界が広がっていく。いつの日か、親を追い越して行く日が来ると思うと、それが何よりも楽しみです。

バーベキューの炭おこしができたり、除雪機で雪を飛ばしたり、電動草刈機で、広い公園の草刈をしたり。そんなことができる息子のことをかっこよく思う親バカです。北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。



藤信子

この夏の異常な暑さは、体力を弱らせるように思うのは、年齢のせいだろうかとはんやり考えている。でも今週の終わりが

ら、クロアチアの Rovinj に IAGP(国際集団精神療学会)の大会に参加するために出かける。Rovinj はアドリア海のヴェネチアの対岸にある町で、現在はクロアチアに属するが、13世紀から18世紀までヴェネチア領だった。旧ユーゴスラビアだったこともあり、今回の大会のテーマ「危機の中での絶望と願い・・・」というテーマで、社会的無意識や災害(人的あるいは自然)などにも多くの話題が出るようだ。海や町並なども楽しみで、Trieste から Rovinj へのバスのチケットを予約したり準備している。

中村周平

前々回の寄稿で、応用人間科学研究科で家族クラスターの先生方や当時院生をされていた北村さん、同じクラスターの方々を支えていただきながら書き上げることができた修士論文の内容を終えることとなりました。次回からは、「応用を出てから自分が感じたこと、学んだことなどをもとに書き出すんだ」と思ったとき、なんとも言えない不安に襲われました。何か背中を支えてもらっていた大きな板が無くなってしまったような…。団先生に修了後初めてオフィスアワーのお願いをさせていただいたところ、在籍中と何も変わらない、温かいメールをいただきました。そして、いつもの修学館でマガジンのことだけでなく、いろんな話を聞いていただきました。団先生、ほんまにありがとうございます。対人援助学マガジンは、なぜ「対人援助学マガジン」なのか。発刊に至るまでの先生の想いを聞くことができ、何か胸がスツとする思いでした。これからも、頑張ります！

浅田英輔

4月に異動してもうすぐ半年になろうとしています。仕事もだいたい慣れたし、周りの人にも恵まれています。職場が街中にあると、ランチが楽しくて(児童相談所はだいたい街から外れたところにある)、毎日あちこちいってみたいです。8月にはねぶた祭りがすぐ近くで行われました。ねぶたは青森県庁の周辺を回るので、昼休みに外にでると既に場所取りをしている人がいたり。交通規制が始まる前に帰らなければ、ねぶたが終わるまで帰れなくなっ

たりもするので、早く帰る人が多いです。仕事していてもいいのですが、囃子が聞こえてくるので「じゃわめぎ」ますねー！来年は子どもたちと一緒に跳ねよう！

中村正

ノーベル賞の天野先生の妻は大学時代の同じサークルの後輩で、この間かなり取材に応じていてその個性派ぶりは当の本人よりも目立っていた。この姿をみた大学時代の仲間たちは何も変わっていないと思いつつ、久しぶりに彼女に会い、ノーベル賞の前後の話をしてもらおうということになり、五山の送り火の余韻もまだ残る京都で15人ほど集まり、懐かしい話をする事ができた。天野先生が研究に没頭できるほどの時間をつくったのは確かだが、だからといってノーベル賞の裏にはそれほどの内助の功があったのかというくだらない話をここで伝えたいのではなく、彼女の自立した思考と行動が印象に残った。子育てを終えた彼女はさっそくロシアに渡り、かねてから計画していた日本語教育に取り組んだという。すでに大きくなった子どもたちと夫妻が授賞式のストックホルムで久しぶりに再会できたという。現地集合だ。メリハリのよい生き方をしているなと思った。今は天野先生も自活した生活を送り、それぞれが家族でありつつも目標をもって暮らしている。その自由奔放さに敬服した。



坊隆史

20回目を区切りで今号で連載を卒業します。初回は2話掲載だったため4年半ほど続いたこととなります。私にとっては驚くべきロングランです。少しは文章が書けるようになったでしょうか？もしそうだとしたら共著者の松本さんがおられたからです。また連載のきっかけを与えてくださっただけでなく世間話の中でいつも重み

のあるヒントを提供くださった中村正先生、
×切には厳しくも温かくお見守りくださった編集長の団士郎先生、そして対人援助学マガジンに関する全ての方々にお礼申し上げます。

松本健輔

2011年からスタートした連載も今回でようやく終了です。男性援助という視点で続けてきましたが、その中であらためて自分の支援の視点は夫婦なんだということ強く感じました。また機会を頂ければ夫婦の視点で書かせて頂ければと思います。

この連載の場を提供して頂いた団士郎先生をはじめ、対人援助学マガジンの編集の方々、連載を勧めて頂いた中村正先生、執筆と一緒にさせて頂いた坊隆史さんにこの場をお借りして感謝を申し上げます。

<http://www.hummingbird-cr.com>

HummingBird 代表

牛若孝治

6月、久々に盲学校の同窓会に行った。私はもともと、同窓会が好きではない。なぜなら、「あいつは今何をしてるか」とか、「あなたは今どうしてるか」など、方々から聞かれ、それに答えるのが面倒だから。それに、私の頭は、数字やデータならすぐに覚えられるのに、人の噂となると、まるでざるのように聞いたしりからどんどん忘れていく。酷いときには、「この前、あの人についてこういう話をしたのに、もうあなたは忘れてるのですか？」と怒られたり、「あなた、その話前にもしてましたね」と嫌味の一言も言われたり。とにかく私の頭、人の噂となればからつきし弱いのである。

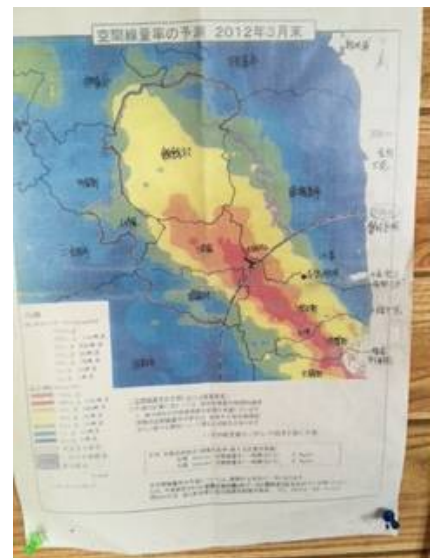
その私が、どんな理由で今年盲学校の同窓会に行くことになったのか。別に、誰かから誘われたわけではないし、「来なければだめだ」と言われたわけでもない。本当に会いたい人に会いたかったからだ。その「本当に会いたい人」が、毎年のように同窓会に顔を出していたことは、毎年盲学校から発想される同窓会誌で知っていたので、よし、今年はその人に会いに行こう、と思って行ったのである。

私自身、自分らしく生きるために氏名変更したり、服装のイメージチェンジをしたり

したのだが、いたって普通に接してくれたので安心した。「おめでとう。自分らしく生きるとはいいことやな」と言ってくれた人もいた。よかった。たまには同窓会行ってみるのもええもんやなあ。

袴田洋子

ようやく書き上げました。時間がかかってしまいました。援助職として、自分が今後、どう成長していけるのか考える、真面目だけど不器用な自分がいます。でも、そんな自分は、嫌ではないなあと思えるので、よしとします。



団遊

うちの妻はヨガをやっています。最近、何気ない雑談の中で「ヨガ・キャンプだったら顔見知りゼロでも一人で海外に行って楽しめると思うなあ」と言いました。趣味が一緒だということで一定の安心があるし、友達ができなくても、ヨガして食事して本読んで、の旅に充実感があると思う、と言います。

妻の趣味はヨガと料理。ぼくの趣味はスキーと競馬。まったく被らない夫婦だし、結婚する前にお互いの趣味を確認したこともありませんでした。ただ、そう言われると、ぼくも確かに海外競馬の旅なら同じように一人でも喜んで行きたくなるな、と思いました。

お見合いや合コンで定番の質問、「ご趣味は？」に、ぼくはこれまで「趣味なんか聞いてどうなんねん」と鼻で笑うようなところがありました。仕事や交流会で出会う

人の中にも「趣味は？」と聞いてくる人がいて、「それ、なんで知りたいねん！」と相手にしないようなところもありました。でも「そうか、趣味が合うとラクなんだ」と40歳にして気が付きました。

きっと世の中の多くの人はすでに重々承知のことなのでしょうが、ぼくの最近の大発見はこれです。

乾明紀

前々号の短信で我慢も出来ないほどの歯の激痛について書き、前号でツボを押したり、口の体操をしたりしたことで少し楽になったことを書きましたが、8月になって、また新たな変化が起きました。歯磨きの際にフロス(糸ようじ)をしたら、痛かった歯に詰めてあった金属が外れたのです。外れたことで神経が剥き出しになり、あの激痛が復活するのではという恐怖が私を襲ったのですが、しばらくしてそれは杞憂に終わりました。詰め物が外れたことで神経にかかる圧迫が弱まり、なんとも言えない開放感が奥歯に訪れました。その後、新たな素材で詰め直してもらいましたが、ようやく奥歯でも少しは噛んで食事ができるようになりました。まだ万全には程遠いですが、改善の方向に進んでいると感じられた8月でした。

大石仁美

ワンちゃんと暮らすようになって、生活がかなり変化してきました。ガサツという物音や、キューンという鳴き声にハッと目が覚めてしまうので、早朝4時にはもう眠れなくて起きてしまうのです。赤ちゃんのいるお母さんみたいで、自分でも可笑しいのですが、仕方がありません。夜型の私が大きく朝型に傾いてしまいました。といっても夜、早く寝られるわけではありません。だから昼間眠くてねむくて…そのうち、自然に生活スタイルが出来てくるだろうと楽観していますが。

早朝5時に散歩に行くようになってから、知らなかったことが見えてきました。バイクで新聞配達をするお兄さんたちの姿がちらほら目につきます。みんなえらいなあ。でも、自転車で静かに回っているおじさんの方が私的には優しくいい感じ。ゴミ収集車(有料の)が凄まじいスピードで走っ

てきて、一瞬ワンがおびえます。業者はこんなに早くからゴミ集めに回っているのかあ。5時半近くになると、お勤めに出かけるらしいおじさんもちらほら。あれ、若い女の子もこんなに早く!? と思っていたら朝帰りの方でした。道路には、前夜から出していたらしい市のゴミ袋にカラスがたかり、手の付けようがないほどの散乱状態。きまっいつも同じ場所です。

最近建てられたマンションは業者委託されているようだけど、ここは違うみたい。ワンは必死になってカラスを追い掛け回そうとするので、私は引っ張られて転びそう。住人たちは話題にしないのかしら? 誰が片づけているのだろう。

犬の目線で街を眺めてみると、意外にも至る所ゴミが落ちているのに気づきます。駄菓子の包み紙、インスタントラーメンの袋、タバコの吸い殻。なんでこんなものが多いもの。とりわけ自動販売機の周辺が多いです。ワンはまだ子どもなので好奇心旺盛で、なんでも口にするので気が気ではありません。特にタバコのポイ捨ては多いです。町のひとたちは、苦々しく、なかば呆れながら、毎朝家の前を掃き清めているのでしょうね。黙々と。夜に捨てられたゴミは、善意の人々によって朝には整理され、こうして一日のサイクルが回っていくのでしょう。

日本の、門ばきという習慣のある京都ならではの朝の始まりです。



村本邦子

この夏は、キューバ&メキシコを旅した。あまりにシステムが違いすぎるから戸惑いも大きかったが、それはそれで面白味

わい深かった。ケセラセラの雰囲気呑まれて、あろうことかキューバ&メキシコの飛行機に乗り遅れてしまった。賄賂を払って次の便にらせてもらったまではよかったが、予定の飛行機に乗らなかったため、機械が勝手にその後の行程をキャンセルしてしまい、復旧に苦労した。

帰ったら、早速、札幌で仕事、そのままこれから福島、秋田と北上して、5年目のむつへ行く。サバティカルというのに、ますます忙しい1年になりそうだ。

國友万裕

先日、ある男性と偶然ばったり会いました。その人のことは15年以上前から知っていて、5年前にお会いしたきり、会う機会もなかったのです。ちょっとだけ立ち話をしたのですが、気づいたことは、話し方や仕草がすっかり女性になってしまっていることでした。その人は携帯を取り出すと、「実は、私、今こうなのよ」と女装した写真をみせてくれました。

いつからこんな趣味に……。昔からそうだったのを隠していらしたのか、それとも、最近になって目覚められたのか。ちなみに、その人はゲイではないですし、同一性障害というでもないはず。単に女装趣味。

「きつと、*さん、男っぽいですね」とぼくは言いました。一般に女装趣味の男性というのは、性格的には男っぽくて、自分の女性的な部分を抑圧しているからこそ、たまに女装を無性にしたくなって、女装をすると解放された気分になるのだということは、本で読んで知っていました。「俺は逆なんです。だいたいムキムキになってきたでしょ?」とぼくは、自分のシャツをめくって腕の筋肉をその人に見せました。「そうだね。昔とイメージ変わって、一瞬、國友さんだと気づかなかった」とその人。ぼくは、男っぽくないから、むしろ、スポーツクラブで筋トレしているときに解放感を味わいます。女装趣味は全然ありません。

性って、本当に不可解です。人によって、様々なとらえこみがあるのです。したがって、ぼくは性的マイノリティという言葉に違和感を感じます。人間のジェンダーやセクシュアリティは千差万別なので、単純に同

性愛・異性愛と分けられるものじゃないし、完全に自分のジェンダーに同一化している人なんているのかと思ってしまうからです。

だけど、性のことで悩んだ経験のない人は、ジェンダーやセクシュアリティの多様性に気づかず、単純な社会の規範を受け入れ、規範に沿わない人を異常視しようとします。いつになったら、ぼくの主張をわかってもらえる日が来るのか。まだまだ道は遠いけれど、この頃、ぼくの周りでは自分の性の独自性をカムアウトする人が多くなってきました。

北村真也

認定フリースクール「アウラ学びの森知誠館」代表。(http://tiseikan.com)

今年の夏休み(1週間)は、どこへも行きません。実は妻も娘たちも、それぞれにいろんなところへと出かけていくので、私が留守番をすることになってしまいました。こんな夏休みを過ごすのは何年振りでしょう。何か新しいことにでも、目覚めるかもしれません。

古川秀明

「スーパースターになって、お金をたくさん儲けて、とびきりの彼女を連れて、でっかい外車に乗るんだ！」

これは私が16歳の時の夢を歌にしたものです。結局夢は叶わなかったのです。「夢は信じれば叶う」なんて、そんな言葉は信用してはいけなかったのです。

人間は夢など見なくても生きていけるのです。目をキラキラ輝かせて明日など語らなくても良いのです。だけど、叶わない夢の方が、自分を強く、そして深くしてくれる力があるようです。叶わない夢の中にキラキラ光るダイヤモンドがあることに50を超えてから気づきました。

シンガーソングライター

西川友理

京都西山短期大学の講師です。

この対人援助マガジンの原稿作成は、大体締め切り1ヶ月くらい前にアイデアを書き散らすところから始めます。

書き足したり、文章の順番を変えたり、調べ物をしたりして、2週間くらい経ったこ

ろに、突然「あ！こういうことか！」と、それまで書いたものの大半をひっくり返すような気があります。そこから大抵、イチから書き直します。残り1~2週間で文章を仕上げ、締め切り日の締め切り時間のギリギリのギリギリに何とか仕上げ、データを送ります。

「あ！こういうことか！」の瞬間が最高に気持ちいいのですが、「あ～またイチから書き直さなきゃならないか。うん。よし、頑張ろう」と覚悟を決めなおす瞬間でもあります。

暗い山道を歩いていて、パッと明るい場所に出ると、一気に目の前に風景が広がる。パッと顔が太陽に照らされて白く輝く。「面白い」の語源はここからきているとのこと。「あ！こういうことか！」の瞬間の面白さは、まさにそんな感じです。

で、今回その瞬間が来たのが締め切り2日前！ちょっとこれはしんどいけど、気づいてしまったからには書き直さなければ、納得いきません。うん、よし、頑張ろう。

坂口伊都

近況を書くと思ったのですが、連載の方に実況中継のような近況を書いたので、今とても困っています。いかに、里親委託のことで気持ちがいっぱいになっていたのかがわかります。それだけ余裕がないということですね。

そのような中で、辻村深月氏の『朝が来る』という本に出会いました。団先生やFさんが薦めていたので、猛烈に読みたくなくて手に取った本です。特別養子縁組の話なのですが、それぞれの立場での想いがあって、物語に引き込まれていきました。読み進めている間、何とも言えない色に包まれているような感じがしました。ここでストーリーを話すと楽しみが減るので書きませんが、朝は来るのだという励ましをもらいました。弱っていたので、気持ちを切り替える手助けになりました。

実子がいる中で養育里親をすると、子どもがいるのにすごいですねと言われることがあります。私からしてみれば、子どもがいてくれるから迎え入れられる部分もあるのです。高校1年生の息子は、面倒くさいと言いながら宿題を見てくれたり、ゲームをしたり、お風呂に入ったたりしています。も

う少しやさしく教えてやってねということもありますが、お兄ちゃんとして貴重な存在になっています。子どもがいるから助けられていることも多いです。

子どもができない夫婦の選択肢としての葛藤と養子を迎えようとするのも「覚悟」なのだと思います。子どもにとって大切なものを子どもと一緒に大切にしていける親になることの優しさと強さを『朝が来る』中にも感じました。当たり前ですが、子どもを迎えるというのは簡単なことではないのです。私も、親として優しさと強さの両面を持ち合わせていけるようになりたいと思います。中途半端な説明で申し訳ありません。気になった方は、どうぞ手に取ってみてください。感動を分かち合いましょ(笑)

河岸由里子

最近、スマホデビューした。ずっとガラ携で過ごしてきたし、今も一台はガラ携である。かかし用の携帯のメール容量が少なく、クライアントさんが長いメールを送って来られるので、一々別の所に移動させるのが大変だった。今度は容量が大きいのでこれで困らないと思う。スマホにするのに、どの機種にするか随分迷ったが、結局Iphone6plusにした。画面が大きいのが気に入った。ついでにipadも買った。一度に二つもおもちゃを手に入れた雰囲気である。取説は全部ネットで見るのだとか、今ウラシマを感じましたが、あれこれいじりながら、その都度悩みながら、或いは皆さんに教えてもらいながら、少しずつ慣れてきている。ガラ携でもその機能を全部使いきれてはなかったが、このスマホの機能、どこまで使い切れるか…。遊びながらやってみたい。

北海道かうんせりんぐるうむ

1かかし主宰 臨床心理士

団士郎

並行して複数の本を読むタイプだ。小説とノンフィクション、専門書とコミックスなど、複数持ち歩いて(kindleも含む)楽しんでいる。描くのも書くのも、話すのも訓練するのも、みな並行である。

ダラダラと終わらないのが得意だから、新しいことを始めようとする、たいてい従

来のものと同様に並行になる。

今回からまた、新連載である。「蠅螂の斧 第二部」はどうなるのかと思う方があられるかもしれないが、あれはあれで継続中だが、当分はお休み。又、十数年前の日々を振り返る時がやってくるだろう。



執筆の同時並行。しかも一つの誌面で突然チェンジという身勝手さである。今回ははじめのところで書いているように、新連載は「家族理解入門」中央法規刊の「続」編である。

厳密な計画性は持たないが、結果として成果が積み上がっていくのが好きだ。目標を設定するのではなく、日々の実践の蓄積には結果が出ることを疑わないのである。あちこちに書いたものや新たに書き加えたものをアレンジして、一つにしていけるのが楽しい。良いものになるかどうか、やってみなければ分からない。飽きてしまうかも知れないし、続くかも知れない。それも楽しみだ。自由という無責任は、簡単に手に入るものではないから、それを堪能することにしよう。

岡崎正明

何年か前に若い歌舞伎役者が酔って喧嘩沙汰を起こした事件が話題になった。「俺は人間国宝だぞ！」というセリフにはウケたが、批判や擁護を繰り返すテレビに、正直「何を今さら」というのが率直な感想だった。

猿楽や傀儡子などの古来より、芸人というのは通常の枠にはまらない、もしくはその中では生きられない人達の集団である。その型にはまらない自由さが、新たな芸術を生み、ときには政府批判で市民の喝采を得たり、ときには権力者のパトロンにより大いに隆盛したりした。その「自由

さ」とは言い換えれば「一般の安定の外」にあるという魅力であり、人々から羨望のまなざしを向けられると同時に、「芸人になるなど許さん！」と、外道な存在として忌み嫌われた存在でもあった。

考えてみると「もうパンツはかない」といったおじさんや、「芸術は爆発だ！」といったおじさんとは、正直友達になれそうもない。なんかすげーなあとは思いますが、言うてることの半分以上、こっちの常識の範囲外なわけで。『異能の人』というのは、やはりそういう品行方正とか、世のマナーとかとは別次元の所にいるからこそ、激しく輝いているのだ。芸は一級だが、素行や性格は最悪なんて話は、昔から掃いて捨てるほどある。そうでなければ、新たな価値なんて生み出せないのかもしれない。

相変わらず世の中は16、7歳の若手女優(つーか、子ども)が職業軽視発言をしたのだと騒いだりしている。10代の子が軽率に発言しなかったら、挨拶くらいしかできないじゃないか。

おまけに最近ではインターネットの普及で、これまでなら近所の話題で済んでいた話が、あっという間に世界の端まで届いてしまう。ちょっと変わった素振りや打席に立った高校球児まで、知らない評論家に怒られる始末だ。

こんなことしてたらどうことが起こるかという、異能の人が才能の芽を出す前につぶされ、イノベーションのチャンスが遠のくということと、誰もが通り一遍の建前しか言わなくなる、見え透いた嘘の社会ができていくということくらいだろう。

そこから抜け出すために、私たちはもっと「寛容さ」を大事にしたい。難しいことではない。自分にしているように、相手にも、もう少しいい加減でいればいだけである。buimen0412@yahoo.co.jp

鶴谷圭一

今回はちょっとしたアクシデントがあったので休載させて頂きました。

実は、お盆前に台風12号のうねりが押し寄せる御前崎でサーフィンをしていて左膝の内側副靭帯をのばしてしまい、激痛のため歩くこともままならず思考停止になってしまったためであります。(なんだあ〜そんなことかあ、ですよ。スミマセン)

マガジン本編は無いのに短信だけでもという編集長の計らいでちょっとしたアクシデントの顛末を報告をさせて頂きます。

整形外科に行くか迷いましたが、行きつけの整体師さんに治療を懇願、全身をみほぐし、問題の膝もグイグイと揉んで伸ばして、激痛で悶絶しながら耐えていましたら、ある瞬間スポッとハマって「おお！魔法のように歩けるように！」なったのですよ。ほんとに整体ってすごいなあ、と感動！

整体師さん曰く「整体は国家資格じゃないから患者さんの本当に必要な治療ができる。技術は奥義みたいなもので先代から受け継いで、自分の指をセンサーにして何年もかけて体得していくんだ。」と仰っていました。一日揉んでいて疲れませんか？と聞いたところ、「むしろ初めての患者さんが来て、どうやったら筋肉がほぐれるか、どこがツボか指先に神経を集中して探していくのがいちばん疲れる」とも話されていました。

その日は、激痛も治まり安堵のうちに帰宅できたのですが、バカですわねえ、ちょうど一週間後に再発させてしまいました！思い起こすのもつらいその日は、幼稚園協会の会議に出席するため、電車で1時間かかる静岡市まで行かなくてはなりません。電車で遅れそうになった僕は駅に向かって小走り…そのとたんガクンと激痛が走りあの悪夢が再来！左足をほとんどつけない状態に陥ってしまいました。あと10m…なんと駅まで長い距離か…そして階段、電車は入ってくる、びっこを引きながら無理矢理跳び乗る…これがアウトでした。そのまま静岡駅へ。

電車で降りるときは、車内の人が出終わって人波が引いてから出ようとタイミングを見計らいますが、乗り込んでくる人がすぐ来るんですねえ、焦りました。…焦って動くとズキン！痛い！ホームに出たら次は階段！改札まではまだまだ！ベンチはないかと、「ズキンズキン」が頭のほとんどを埋め尽くし、歩くとたびに痛みが増す足を引きずりながら駅をさまよいました。いや、さまよったのではなく、いつものコースをたどって改札を出ただけですが、かかった時間も景色もまったく違うものに映りました。

やっとのことで駅前広場にベンチを見つけ、途方に暮れて膝をさすっておりました。会議開始まではあと40分、昼飯を食べねばと意を決して目の前にあったSUBWAYというサンドイッチ屋さんのショーウィンドウ越しに客の流れをじーっと観察し、すいた時を見計らってカウンターに突入！店員さんが満面の笑みで「パンの種類は何になさいますかー？ホワイト、ウイト、セサミ……」『こっちは立ってるのつらいんだよ！早くして！』と言いたくなるのを押し殺し『…じゃ、セサミで…』『レギュラーですかロングですか？』『お野菜は全部入れて良いですか？』『お飲み物は？』…『ハヤク、あ、いやアイスコーヒー』『ご一緒にポテトは？』『イ、イタイ』『は？』『い、いりません！』注文するのにこんなに手続きがあったとは、普段なら気にもしないところ…冷や汗がシャツの内側を伝って落ちました。

片足を引きずりながら、サンドイッチとコーヒーを載せたトレイを持つのがなんと難しいことか。ターゲットにした座席を目指し精一杯の我慢力を使ってギクシャク歩み寄る哀れな男一人…誰も助けは来ない。

その後の長い話は割愛しますが、街ってこんなに不便だったんだ！やさしくなかったんだ！と不自由な身になってはじめて実感したのであります。痛かったけど自分の視野を広げる良い経験だったともいえます(〇_〇)

地元に戻って休診日の整体の門を叩き、2回目の治療をお願いしましたがこんどは「スポッ」がくるまでに前回の3倍90分かかりました。なんと長かったこと、背中は冷や汗でびしょりでした。

それなのに、そんなにつらい思いをしたのに夏休み明けの幼稚園で仕事していて、また再発！この日がマガジンの締切日でした(T-T)。3回目はいくら揉んでも治らず痛い足を引きずりながら帰宅し、寝ているしかありませんでした。バカバカバカ！なんてバカなんだ！あしたは医者だな…』と思いつつ。ところが不思議なことに風呂に入っただけで「スポッ」が来てくれました。

それから2週間経ち、現在は抱えた爆弾をこんどこそ爆発させないように慎重に過ごしているこの頃でございます。ここまで

読んで頂いた皆さん、疑問を持たれたのではありませんか？

「なぜ真っ先に医者に行かない?!」ホントに腕の良い整体にかかると、病院に行かなくてはならないか整体で治るものか判断してもらえます。今回は後者という判断なのです。

お陰様で整形外科で膝をガチガチに固めることもせず、痛み止めも服用せず動いていることに感謝！今回の教訓。持つべきものは、名人の整体院なのです。チガウダロ!(-.-#)

原町幼稚園ホームページ

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

千葉晃央

京都造形芸術大学こども芸術学科で非常勤講師をさせていただいた前期。壁にある予定表をちらっと見たときに見つけました。「tupera tuperaさん特別講義」の文字。tupera tuperaさんといえば！



「しろくまのパンツ」「ぼうしとったら」の2冊は本屋で衝撃的出会いで購入！「パンダ銭湯」はまた異なったタッチで、衝撃の展開！他にも…な先生がここに来るんや！ということでちょうど授業日が一緒だったので、講師控室で「出待ち」ならぬ「帰り待ち」。tupera tupera (ツペラツペラ)の亀山達矢先生にお会いできました。ご夫婦で

tupera tuperaというユニットですので「役割分担は?」「どういう媒体を使って試作をするんですか?」「どういうスタートで作品が生まれるんですか?」などなど、話を伺ってしまいました！自宅から持っていった「しろくまのパンツ」「ぼうしとったら」にサインをお願いしたら、こんなに丁寧な名前まで入れてくださいました！感激！亀山先生は「これ初版本ですね！表紙裏の紙の色がこれだけ違うんですよ」とにわかフ

アンではないことを認めてくださいました。「ワークショップで大切にしていること」「紙質の選定の大切さと紙の加工コスト」などたくさん話を教えていただけました。私の勤める京都国際社会福祉センター療育相談室の支援場面でもtupera tuperaさんの本は大人気！そんな方にお会いできてうれしかったです。ちなみに「しろくまのパンツ」のパンツの替えは80円で販売しています！



大川聡子

告知です★11/26(木)13:30～16:30に、あべのハルカス25階会議室にて「支援が必要な母親への妊娠期からの関わりを考える国際シンポジウム」を開催することになりました。

昨年知り合ったニュージーランドのPlunket Nurse(母子の家庭訪問を中心的に担当看護師)Nicky Skerman氏の「支援が必要な母親と妊娠期からどのように信頼関係を構築するか」と題したご講演と、支援が必要な母親への関わりを研究・実践されている保健医療専門家のパネルディスカッションの二部構成です。対象は保健・医療・福祉関係者の皆様です。通訳あり、参加費無料です。お申し込みは、件名を「11月26日シンポジウム申込み」として①お名前 ②ご所属 ③職種 ④電話番号をご記入の上メールをお送りください。宛先: phn-nz@nursing.osakafu-u.ac.jp 定員に達し次第受付を締め切ります。たくさんの方のご参加お待ちしております。

大谷多加志

ここ数ヶ月で、仕事が質的に変化しました。まず職場にいる時間が減り、移動が増えました。時には電車で、時には徒歩で、時には車で、近隣府県を動き回っています。

もう1点、質的な変化を感じるの、人

に動いてもらう場面が増えたことです。これまで忙しと言ってもあくまで自分の手元にある仕事の範疇だったのですが、今は何かを依頼したり、実際に動いてもらったり、後のフォローをしたりという連絡調整の仕事の割合がかなり増加しました。検査の改訂という大きなプロジェクトに取り組む中で、多くの人の力が必要となり、結果として今の状況に至ったと思っています。人と人の中で起こることなので、色々ややこしいこともあります。多くの人と共に仕事ができること、利害ではないところで支えて下さる人と出会う経験は、何事にも代えがたく貴重です。

今回、2本の連載のうち「K式」をテーマとしたものはお休みしました。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

8月10日、山田明爾先生が亡くなった。私が龍谷大学に入学して間もない頃、学内でアフガニスタンの発掘から帰国したばかりの先生の講演があるというので、聞きに行った。あれから40年、昨年末にある学会発表で山田先生の名前を見かけた。聴きに行って、80歳にしてこれほども前向きな研究をされる心に驚いた。◆私は、山田先生に研究方法から生き方まで習ったように思う。それは、ちょうど“Tuesdays with Morrie” Mitch Albom(邦訳『モリー先生との火曜日』NHK出版)のモリー先生とミッチの関係のようでもあった。私がこの本を買ったのは2000年頃、全米でベストセラーになっていたのでカリフォルニアのパークレーの書店で買った。先月、偶然にパークレーから来た高校生と話すことがあった。本の話しになって、この本屋の話しをした。彼女は知らないと言う。大学の正門を出てしばらく歩いた角にあると説明しても、彼女は首を捻る。後で、ストリートビューをみたら、その本屋は閉店をして取り壊し寸前であった。◆専門書も充実していて、大学生や教員かと思われる人たちが賑わっていた書店がなくなっていた。書店がドンドン閉める時代である。それでも本を使うことを本務とする人たちに支持させる書店が閉じるなどと予想もなかった。時は流れる。時間の経過と共に社会も変容する。命も含めた存在が、消えていく。

それが摂理であると分かっている、悲しい。でも、消えていく前に会えたことに喜びがある。いのちに出会えたところに喜びと感謝がある。ありがとう 合掌

川崎二三彦

ホテル暮らし

この3月、8年間の単身赴任を終えてようやく京都の自宅に戻り着いたこと、新年度からは、かわって週2日だけの勤務となり、京都-横浜を1泊2日で往復すればよくなったこと、週のうち残り5日はフリーの気ままな生活、といういささか気が引けるので、自営業の看板を出そうと「Guan」という名前まで考えたこと、などを前号で紹介した記憶があるが、今号はその後の近況報告である。

*

なんと言っても予定外なのは、週1泊ではすまされなかったことだ。数えてみると、業務外の個人的な都合も数泊加え、新年度に入って4月は10泊、5月は11泊、6月は11泊、7月10泊、8月は9泊という数をホテルで宿泊したことになる。



新幹線は、JRエクスプレスで常時10本ぐらいはネット予約をしているし、飛行機は、ついにダブルブッキングしてしまった。あるとき、ANAから「ご搭乗前日になりましたので搭乗口と搭乗方法をご案内いたします」という案内メールが届いたのはよいとして、気づくとそれが2本続けて着信している。

「なんとまあご親切なことか」

などと感心しつつよく見たら、行き先が違っている！同日同時刻に、高知と大分の両方に出発することになっていたのである。

大いに慌てたのは愛嬌だとしても、苦労するのは、ホテル暮らしの煩わしさである。何しろ、どこへ行くにもお泊まりパックを持ち運ばなければならないので、やたら

と荷物が多くなる。ホテル備え付けのコインランドリーも利用したが、いささか疲れ気味というしかない。

ついでに言うと、ホテルに新幹線、飛行機代などが加わりカード支払額も大幅にアップ。時として、店舗窓口で、「このカード、使えませんけど」などと言われてしまうことも出てきた。限度額を超えているため、カード会社が使用を差し止めているのである。

*

それからこれは、ホテル暮らしとはたぶん関係ないだろうが、ここに来て大いに困っていることがある。それは、「右上腕二頭筋長頭腱炎」を発症したことである。原因は、ほぼ間違いなく長時間のパソコン使用である。我慢できない痛みではないが、パソコンに向かえば常時痛みを伴う症状に意欲をそがれ、業務は大幅停滞。ついには鍼灸治療を始めてみたところ、何となく調子はよいように思えたのだけれど、帰宅して右肩をみると内出血して青くなっている。針治療って、こんなことになるの？と思うと治療意欲減退、未だ方針立たず、業務に支障甚だしく、苦慮している最中である。などと書き散らしているうちに、またしても右肩痛が悪化してきた感じ。近況報告も、もはやここまでとすしかない。(2015/08/30記)

荒木晃子

新連載から7稿目にして、やっと本文に突入した感がある。少々長いプロローグではあったが、生殖のテーマを語る際には、いずれも欠かせない領域だと(自分なりに)納得する。ただ一点、20・21号と続く「島根モデル」の取り組みの報告が、途中でとん挫したままなのが気がかりだが、こちらは島根県内で医学官民の援助者の連携ができつつあり、現在も島根県人のペースで継続中。信頼のおける連携とは、なんとありがたいものだ改めて実感する。いずれ、どこかで吉報をお届けできることだろう。

先日、民間NPO団体と一部の医療機関が連携し、国内の法整備を待たずして、夫婦以外の第三者からの提供卵子による受精卵が作製した旨報告があった。それを耳にし、筆者のおしりに火が付いた。「こ

れは先を急がねば！」。折しもタイミングよく、D 先生ご推薦の辻村深月著「朝が来る」(文藝春秋,2015)を読破し、何かしら“もぞもぞ”していた頃だったので、一気にアウトプット作業に移り、本稿の執筆に至る。手元にある、既に完成間近の「島根モデルの続編」は、今後の出番を待ちながら保留することにした。

突然ですが、ここで、クイズ。

Q:今回、受精卵は、レシピエント夫婦子と、ドナー女性の提供卵子で作製されたが、果たして、現時点で「受精卵の所有権」は誰にあるのでしょうか？

さて、みなさんはどうお考えだろうか。

サトウタツヤ

対人援助学の縦横無尽、は今回もお休み。せめて、近況報告だけでも参加しないと消えていってしまいそう。。。

9/8現在、欧州発達心理学会出席のためポルトガルの Braga という街に来ています。

来る直前に『コミュニティ心理学研究』が届いたので見てみましたが、それは、昨年度の大会@立命館大学の特集でした。団編集長のマンガが掲載されていてびっくり。

学会誌の数ページにわたってマンガのみというのは珍しいのではないのでしょうか？

浅野貴博

1年ぶりの掲載になります。7月下旬に博士論文を無事提出しました。この短信を書いている時点では、Viva と呼ばれる口頭試問の日程は決まっていますが、Viva を経て必要な訂正が済んだ後に、正式な学位授与というプロセスになります(*博士課程のプログラムの概要については、第15号で触れていますので、よければご参照下さい)。何とか予定の4年以内に提出することができ、ほっとしたというのが正直なところ。この4年間を振り返ると、博士論文に取り組む中で、研究者として研究を続けていくことの厳しさを実感し、当初は大きな目標(goal)だった PhD の取得が、これからの長いキャリアの中での大きなステップというふう捉え方が変化しました。アカデミックの世界は、

いわゆる「Publish or Perish(発表せよ、さもなくば滅びよ)」という言葉が示す通り、分野を問わず、研究者は研究論文を出し続けることが必須です。博士論文を元に、海外及び日本の Journal に数本の論文を投稿すべく、気分を新たに次の課題に取り掛かっています。

また、今年の1月に第4子である次男が生まれ、二男二女の父親になりました。3人目の次女がこちらで生まれており、出産の一通りの流れや手続きを把握していたため、こちらでの出産に対する不安はありませんでしたが、上の3人の子供達の世話をしながらでしたから大変でした(今も大変ですが)。1ヶ月程研究を中断し、友人達のサポートを受けながら、何とか乗り切りました。少子社会の日本で、4人の子供を持つというのは色々な意味で大いなるチャレンジですが、縁あって私達の家族に来てくれた子供達とのにぎやかな生活を enjoy(私が好きな言葉です)したいと思います。

見野 大介 みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

朝晩は涼しくなり、秋らしくなってきました。今年は暦どおりに季節が変わっている気がします。一日でも長く、秋を楽しみたいですね。

秋のイベントラッシュに向けて、日々制作を重ねております。ちょっと予定を詰め込みすぎたかとビビっておりますが…。それらが終わると、もう12月。12月は餅つきのお誘いが多いので、これまた大忙し。いっぱい餅ついて貢献したいと思いません。

この様子だと、今年もあつという間に終わりそうです。来年の3月には京都高島屋での個展が決まっていますので、気が抜けないうです。高島屋…、正直ビビってますが、楽しみです。

- 年内の出展イベント -

9/19-28 味百選×器百選(京都・高島屋)

10/3.4 アートクラフトフェスティバル in たんば(兵庫・丹波年輪の里)

10/10-12 信楽セラミックアートマーケット

(滋賀・陶芸の森)

10/20-27 京都展おこしやすもみじの京都(三重・津松菱)

11/7.8 陶の作家展 in 明治村(愛知・明治村)

11/19-23 見野大介陶芸展(奈良・ギャラリーカフェタケノ)

**執筆者自身による挿入写真
以外は、2015年8月、福島
県飯舘村の「希望の牧場」
並びにその近辺で、編集長
が撮ったものです。**

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

22: におい

千葉 晃央

1960年代、アメリカ

「北部中央のM州にある施設NO.1の建物に入ってみると、長さ20ヤード(約18.3メートル)、幅10ヤード(約9.1メートル)くらいのウイングからなる巨大なL字型のデイルームを職員がガラス越しに監視できるようになっていた。(中略)このデイルームには玩具が一つもなかった。何人かの子どもたちは頭をテーブルにつけており、他の子どもたちは壁際の床にうずくまり、あるいはあろうことか、一番暗い片隅にうずくまっていた。ここはこの建物にある重度の知的障害児のための唯一のデイルームであった。その隣の部屋から彼らのベッドルームで87床隙間なく置かれていた。10人くらいの子もたちがベッドに横になり、手と口のまわりを排泄物で汚していた。この子どもたちの世話をしているのはたった一人で、しかも16歳くらいの知的障害を持つ少女であった」

障害を持つ方々の生活をよりノーマルな生活にする、障害者をノーマルにするのではなく、社会をノーマルにするという「ノ

ーマライゼーション」という考え方がある。今では社会福祉の原理の一つとされるが、この考え方を発展させ、世界に広めたのがニリエといわれている。冒頭の文章は彼が1960年代にアメリカの知的障害者施設を訪れた時の報告である(ベクト・ニリエ著 河東田博・橋本由紀子・杉田穂子訳編『ノーマライゼーションの原理—普遍化と社会変革を求めて』現代書館、1998)。この約20年後にアメリカの知的障害者施設を訪れた方にも同じような体験をしたことをきいている。

鍵と格子

福祉施設は、常に「におい」と共に語られてきた。施設を訪れたときの「におい」。アンモニア臭は排泄物等が原因によるものと思われる。それが福祉施設の特有のにおいになっていることも多かった。

昔のある場面を思い出すと一緒に「におい」も甦ることも多い。私が初めて訪れた福祉施設の「におい」は今も忘れない。学生の頃、重度の方が多く入所している知的障害者福祉施設にボランティアにいった。

時代は1990年代。その施設では、居室に入るのにも鍵を開け、外に面している窓には格子がはめられていた。私がこの連載で取り上げている「就労」を目的にした施設とは異なり、「生活」を目的にした、より障害の重い方が利用する入所施設だった。

現在、私は国家資格社会福祉士の養成等の業務にも携わっている。その業務の中で高齢者施設、障害者施設、児童福祉施設、生活困窮者支援施設…等、福祉施設には年間に複数個所、お邪魔する。年に複数か所新しい福祉施設にも訪れている。しかし、こうした「におい」を感じることはほぼないといっている。世間では、時折、福祉施設やその職員による不適切な処遇がニュースになっている。しかし、確実に全体としての福祉や支援の内容はよくなっているというのが現在の実感である（もちろん十分ではないし、徐々にではあるともいえる）。ただ、においに関して、仕事をする施設では仕事で扱っているモノのにおいだけはあ

体に染みつく仕事のにおい

私が働くような福祉的就労の施設では、どんな作業をしているかによって、その施設のにおいがある。金属製品の作業をしているところは、油のにおいがする。服に油がついたり、手の爪に油汚れが入り込んだりする。職員も、利用者さんも同様である。油汚れがよく落ちる特別な手洗い石鹸もあり、活用されている。お線香を扱っている施設では、線香のにおいがする。リサイク

ルの仕事をしているところは、その扱っているもののおいがする。そのにおいが作業着や体に染みつくことも多い。私は仕事の後、清拭等をおこない、仕事帰りに研修等に出かけることも多い。そこでは、まだ「においがついているよ!」と言われたことも過去にあった。そのぐらい染みつくのである。

そのようなにおいを放置しているわけではない。換気はもちろん、オゾン消臭器、空気清浄器が設置されているところもある。カテキン入りの消臭剤も完備し、作業で使う設備自体にその噴霧器を完備しているところもある。エアコンプレッサーを使った作業着へのエアの吹き付けもしてきた。エアシャワーまではいかなくとも、「におい」の元を少しでも減らそうという努力である。それでも施設見学に来た人が作業場に入ると同時に鼻をつまむことがある。



↑エアシャワー

人間が「におい」を感じる仕組みは、鼻の粘膜に「におい」のもとになる分子が付

着して「におい」を感じるという。それを知ってしまうとマスクはやはり欠かせないようにも感じられる。もちろんリサイクルに関する仕事ではマスクをする。

アルミ缶のリサイクル等、飲食物の容器を扱うリサイクルの現場では、さまざまな飲料や食品の混ざった「におい」がある。にたようなにおいは私は阪神淡路大震災で被災した時に感じたことがあった。冷蔵庫や食糧庫ではガラス容器が破損し、いろいろな飲料、食料が散らばり混ざり合った。そのときでも十分な「におい」だった。それプラス腐敗臭がリサイクルのにおいのように思う。また食品に関する仕事でも、もちろん衛生的に作業を行うためマスクを着用する。真夏もちろん季節を問わずである。



誰かがしているという想像力

先にも触れたように施設見学者から「におい」に関して対処をした方がよいと指摘を受けることもある。もちろん最大限は対処をおこなう。ただ、作業をする際に一定の「におい」は残ってしまうこともある。そのため、一方である程度は「こういう環境で物を作ったり、リサイクルをしていたりするのが現実であること」、「こうして社会が現在成り立った上で、あなたも生活しています！」ということを知ってください！と対応してきた。病院で働けば薬の「におい」がつくこともあるし、プールで働けば塩素の「におい」がつくし、農作業をして働けば土の「におい」や肥料の「におい」がつくのと同様である。障害者であろうと健常者であろうと、ある程度は同じである。

知的障害者の方の場合は、もし困っていることがあってもそのことを周りにいる人に伝えることが苦手である。その点は、われわれが配慮しなくてはならない。声もかけるし、観察の中で汚れの発見や動作などの視覚的情報から不適切な状況がないか確認を常に繰り返している。

五感をフル活用！

作業で使う機械の調子に関しても、摩擦による焦げ臭さ、火災等の災害に結びつくような異臭がしないか？等は、常に注意を払っている。企業が我々のような仕事をする福祉施設（事業所）と取引する時、商品の在庫置き場的機能を含めて、パートナー

シップを持つこともある。倉庫料、在庫管理代として、お金をいただいていたことも実際ある。取引先でも「〇〇倉庫」という取引先も多い。こういった会社は置き場、物流の拠点として利用してもらいながら、置いておくだけでなく、声をかけてもらうと組み立てますよ、袋入れもしますよ、検品作業もしますよ、という形で現在に至っていることが多い。そのため、直接パートさんを雇ったり、家庭での内職方式を採用したりしている。そういった業者さんから、お仕事をいただくことも多かった。封筒セット、景品の袋入れ、カレンダーセット、エコバック検品…。当然その在庫のにおいもつきものである。インクのにおい、紙のにおい。ほこり…。

「いいにおい！おなかすいたね～」

お昼になると厨房からお昼ごはんの「におい」がしてくるのも日々の楽しみである。厨房がある、台所がある施設では調理時のにおいや調理の時の音も毎日の大事な「彩り」である。「おなかすいたね」「おいしそうなおい！今日のごはんなんだっけ？朝は何食べたん？」「昨日の晩もカレーやったあ～！」など、自然と会話が始まる。こうした何気ない日常の共有が信頼関係の構築をもたらしてくれる。

福祉領域では、社会福祉法人に限らず、民間事業体、NPOが運営する福祉事業所がすっかり当たり前になった。これら後発の施設では、お弁当を外部のお弁当屋から買っていることもある（前々回の連載「食べる」でも触れた）。他にも現場の職員が施設

の日中プログラムの一環として利用者さんと自分たちの昼食を一緒に調理することを設定しているところもある。調理をすることがリハビリテーション機能、能力開発的機能がある。においなどを五感で感じるものがそういった機能を可能にさせている側面があることは想像に難くない。

「めっちゃ汗かいたで。頑張ったわ」

汗の「におい」。作業での汗は働いた証。仕事の際に着ている服も、しばらくすると汗のにおいが染みつく。その時には洗濯しても取れないので処分をする、というのが働く職員にとっての日常である。支援の場面でも洗濯ができていますか？おトイレ関係のケアは大丈夫か？など、においが支援で大事な時も多い。

雨の「におい」。雨の時は様々な心配をする。例えば、朝の豪雨。そんな中、うまく通園途上で、交通機関が混乱する中で施設に辿り着けなかった人をお迎えに行くこともある。登園時には靴下、カバン、服が濡れていないかな？…、濡れていたら、洗濯や干して乾かす、時には乾燥機も使っている。乾かしたものを忘れないようにもしなくてはならない。靴下は濡れていても言わない方、言えない方もおられる。そのため雨の時は確認もしている。

また、雨が降ると野球を愛する人たちがざわざわする。それはシーズン中でペナントレースの終盤では特にである。自分のひいきの球団の試合がないのでは？と試合があるか？ないか？そのことを気にされる。

「雨は降りません！」と繰り返す方もおられる。雨による予定変更の場面から、予定の変更は苦手という知的障害（特に自閉症）の方の特徴を感じられることもある。

雨のにおい

帰りに雨が降る。雨合羽や傘の用意が必要になってくる。傘を忘れた人が使えるよう施設が所有する傘の貸し出しも行っている。場合によっては悪天候のため、帰宅できなくならないように、はやめの帰宅ができるよう一日のプログラムを切り上げる判断をする時もある。状況によっては最寄りの駅、バス停、あるいは自宅まで、車で送ることもある。こうした場合、帰りに迎え

に来ているご家族、他の支援スタッフとの連絡も必要になる。自転車で来られている方は、公共交通機関の利用に変更をするよう提案する。その提案で変更されることもあるし、変更を望まずに雨合羽で帰ろうとされ、小降りになってから出発するよう働きかけることもある。

「音」「空気の流れ」「光り」

住居や建物を作る時、事前にシュミレーションをしても、なかなか実際にはわからないこと、つまり建ってから、やっとわかることとして、「音」、「ひかり」、「空気の流れ」ときいたことがある。数年前、施設の改築工事に関わった時には、このこと



に随分苦慮した。「わからない」ながらも、空気の流れ、つまり「におい」を含めて考え、対策を立てた。それでもやはり「できからわかること」の3つに関しては、「そうだなあ」と思う点がある。だからこそ、日々の中で発見し、対処をしていくことが大事な要素だろう。

…今日も勤務が終わった。秋雨前線の影響から、今日も雨が降った。「巨人戦が中止やし、その間にタイガースが勝たしてもらいます!」「中止にならへんわ!巨人が勝ちます!」「雨降るで!」「降らへんわ!」…ある意味平和でにぎやかな日でした。

(写真:橋本総子)

BACK ISSUES

- 作業着 21 2015年6月
- 食べる 20 2015年4月
- 通勤 19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用 18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月
- 触れる 16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」 2014年3月
- 情報の格差 15 2013年12月
- 20年前のノートから 14 2013年9月
- そうじのねらい 13 2013年6月
- 個別化の暗部 12 2013年3月
- グループワークの視点 11 2012年12月
- 実習生がやってきた! 10 2012年9月
- 月曜日のせいやな 9 2012年6月
- 所得を決める福祉職? 8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方 6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会
2011年9月
- 旅行がない! 5 2011年6月
- 職員の脳内回路 4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に!? 1 2010年6月

臨床社会学の方法

(10) サイレンシング (沈黙化作用)

—語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮—

中村 正

1. 語られたことの外部

児童自立・児童養護にかかわり子どもたちが自らの生育歴を把握し、物語ることでできる作業としてライフストーリーワークがあり、そのことから学ぶことが多かった。どんな施設や制度であれ、本人情報の記録の保存と所有の保障が基本である。それをもとに自己物語として編み上げ、一貫した自分の人生として意味づけていくことができるかどうかが大切となる。社会的養護の子どもだけではなく、たとえば不妊治療の進展、養子縁組の事例、離婚や再婚による親子関係の変化、何らかの事情で血縁的な親子関係が切れていく場合等として、ライフストーリーワークの応用範囲は拡大しているが、基礎は個人情報とは何か、それが相当の期間、保持され、それへのアクセスがきちんと保障されているかどうかである。これらの課題について不妊

治療について日本は匿名主義という別の原則があり、自らにかかわる情報にアクセスできない社会のあり方が再編すべき課題となっている。

ライフストーリーワークは事実としての情報の保存だけではなく、人生の意味づけをも含む広い作業を意味する。意味づける作業はその人独自のものである。多くの場合、既製の言葉や定義からこぼれ落ちる現実を生きていて、時には言葉にならないから問題行動化する。そうした経験の総体を説明できないこともあり、語られていないことや語りがたいこと、語る側のいろんな躊躇や隠蔽もあることに思いを馳せておく必要がある。

また、聴く側の了解の幅が狭いかも知れないこと（聴く力が及ばないこと）、そして社会の側がつくるあるいは期待する物語化の文脈があること等、ナラティブにまつわるこれらの「せめぎ合い」があることを意識しておく

べきだろう。

そうしないと、語られた事以外を排除することになる。相互の了解の世界だけでは閉じた対話となり、理解しあったようにみえる、つまり何かを排除した上で成り立つ、「共謀するモノログ世界」に陥るかも知れないという不安が常につきまとう。ナラティブアプローチへの関心は「複数の声(多声的なもの)」を大切にすることを意味するので、沈黙の考慮は必然的な要請でもある。ナラティブ研究はこうした外部への、つまり語られていないこと、語りにくいことがあることを前提にする。もちろん言語化の外部ははかり知れない面もあるが、少なくともここで扱うサイレンシングを視野に入れ、社会が用意している物語化の文脈について承知しておくことは大切だと考える。その語りの言葉で用いられる言葉や概念それ自体がすでにそうであり、すでに社会の手垢にまみれた既製品でしかないと思うことも必要だと考える。

可視化されているライフストーリーワークは以下に述べていくサイレンシングの渦をとおして表面化したものだと考えると、問題にまみれた物語をとおして、問題と解決の歴史(これをシステム療法論では「問題トーク」という)だけを見るのではなく、活性化できていないものがあるとも考えることもできる。相互作用をとおしてみえるようになっただけのことであり、埋もれた歴史が自分のなかにあると気づくこともストレンクス(強み)の発見になる。沈黙は豊穡さでもある。とりわけ逸脱行動や問題行動の渦中にいた人たちとの対話からはそうしたことがみえてくる。「悪

のドラマ化、逸脱の可視化」という作用のなかにあるのが社会病理の対象者なので、そうではない面が、語られていないこと、語りにくいことに注目することで見いだされる。ナラティブとサイレンス・サイレンシングは相補的な関係にあり、可能なかぎり沈黙のなかにあることを言葉にしていく協働作業として臨床や対人援助が成立する。

2. 不登校経験者の発言を聴いて

たとえば不登校問題がある。本マガジンの執筆者でもあり、認定フリースクール「アウラ学びの森」を主宰されている北村さんに招かれて不登校の生徒たちが発言した公開ラウンドテーブルに出席したことがある(その模様は同スクールのホームページにリンクされていて概要を視聴できる)。そこで感じたことはたくさんあったがそのうちの一つがこのサイレンスとサイレンシングにかかわるものだ。端的にいえばその言葉である。不登校という言葉は幾多の変遷の結果たどり着いた包括的なものである。長期欠席・不就学、学校恐怖症、登校拒否、不登校へと定義は変容してきた。共通していることは、再登校を目指している点である。行きたくても行けない事態があるのだからそうした因果において「問題定義と解決方法」をセットにすることも理解はできる。

しかし同時に、学習を持続させる方策が講じられて、学習者としての主体が構成されていき、そのための場、機会そして資源の保障が大切だという点に着目すると、児童・生徒

中心の見方ができるはずだ。換言すれば、「不登校児童・生徒」は現実の総体を把握した言葉ではなく、学習者としてみればまた別様のアプローチもできることになる。不登校経験も含めてその子らは学び続けている。そうするとまた異なる名付けがある。不登校という言葉では語られていないことの方が多いことを生徒たちは語った。その意味づけの外部の世界は豊かである。

この「問題定義と解決方法のセット」のあり方を再検討することはシステム変更を意味する。再登校・再適応だけに収斂させない解法を社会が有するべきだと思う。確かに学校に行かないことは少数派であり、逸脱的である。しかしそれを問題としてとらえ、矯正・更正の対象とするのではなく、その逸脱性にあわせてシステムの更新を行うアプローチを採ると、選択肢の拡大、定義の再構築、制度の更新・革新へと至る。具体的には、学校だけではない学びの場の創出や持続的な学習者としての成長の保障を検討していけば、システムは寛容になる。たとえば認定フリースクールの整備、個人別学習支援、ホームエデュケーションの認知と活用、学びのバウチャー制度（学習者が自由に機会と場所を選択して教育サービスを購入できる仕組み）、到達度検証試験制度によるアクセス保障等を創出し、主流の学校システムに接ぎ木する。これはシステムの柔軟化となり、学習者主体の多様な学びのニーズに応答できる。

何かを問題だと定義して当該のシステムの内部で解法を求めるだけだとそれは単なる適応や順応でしかない。社会臨床論としてはそ

のシステムの更新を考える。まずはそれを語る語彙、文脈、定義の再検討を行う。言葉や定義も枠を広げないと解法や実践も豊かにならないからである。主流となった問題の定義や逸脱を語る言葉だけではなお語り得ない、語りにくい、語られないこと、つまりそこには外部、沈黙がある。さらに語り方も既製品のように主流となっているモードに依拠するとその沈黙のなかにある可能性を切り捨ててしまうことになる。

3. DV におけるサイレンシングについての研究

1) 暴力とサイレンシング

対人暴力の多くは以前からあったが、社会問題としての公的な関心や認知が遅くなるのはサイレンシングの効果である。具体的には、加害者が暴力の一環として押しつける被害の縮小や否定、社会の側がそれに荷担することになる DV への無理解、さらに常識あるいは既存の制度がもつ二次加害的側面もある。夫婦間、親子間の暴力について、加害が自らの行為を否認するだけではなく逆に被害を非難し、沈黙させようとして動員する社会の意識や制度の総体を把握しようとする言葉が暴力にかかわるサイレンシングである。

暴力や虐待を振るう加害男性の話を聴いていると、暴力の中和化・正当化、女性が怒らせたという被害者非難、家族は私的領域であるので介入すべきでないという意識等がでてくる。さらに被害者もそこに巻き込まれて同調することがある。その過程の総体がサイ

レンシングである。その結果、親密な関係性や家庭内での暴力は見えにくくなる。暴力が広がっているにもかかわらず被害女性からの報告が少ないことにもその効果が示されている。

暴力には初期介入が効果的であるが、それが萌芽的であればあるほど公的機関も含めて気づきが欠如し、サイレンシングが効果を發揮して隠蔽されていく。しかし友人や家族は暴力に気づいているし、相談することもある。警察には被害者は連絡していない。相談するのが公的機関ではなく身近な人たちなので周囲の理解、つまり聴く力が大切となる。逆に言えば、サイレンシングの対象は周囲の人たちにも拡大されていくことになる。

こうしたサイレンシングに注目すると、単に被害者が声を出しにくいということだけではなく、社会の無理解がその沈黙を加速させる面がみえてくる。友人関係、親子関係、夫婦関係、恋人関係等、問題をはらむ関係性から離脱しにくいこともサイレンシングに荷担する。暴力を秘密にしておくように強いられるという性質がこれらの暴力の一つの特徴となる。被害者が声を出しにくいことと周囲の者へシグナルを出していることを重ねると、無関心や無理解をなくすこともサイレンシングへの対抗となる。

この周囲の者とかかわるサイレンシングは「沈黙する傍観者」として議論されてきた論点である。この定式化のもととなった事件はニューヨークで起こった。複数の近隣住民が目撃していた殺人事件だが、救出するどころか誰も通報さえしなかったという。誰かがや

るだろうという判断を相互にしたので冷淡な傍観者ともいわれた(A.ローゼンタール著『38人の沈黙する傍観者-キティ・ジェノヴィーズ事件の真相』青土社、2011年)。同じようにしていじめ事件でも傍観者の存在は指摘されてきた。被害者が声をだしやすくするために周囲の者のサイレンスをどうしていくのかは重要な課題となる意味がわかる。

2) 暴力の沈黙についての矛盾

しかし徐々に事態は変化し、親密な関係性における暴力が社会問題とされつつある。家族に暴力を振るう男性への批判が高まる社会のなかでいかにしてそれを隠蔽し続けるのか。より巧妙になるのだろうか。それを隠し続ける努力としてのサイレンシングの詳細を観察することをとおして脱暴力のための資源として活かすことができる。犯罪に否認はつきものだが、この種の対人暴力は一定の関係性において発生するので、そこに根ざした正当化や中和化の微細な語彙と文脈を採取し、更生に役立てることができるだろう。そして何よりも社会のもつ暴力の容認や寛容さがそのサイレンシング過程に透視されることになるので、啓発・防止にも資する。

3) 男性が沈黙をおしつける過程の詳細

18人のDV男性のインタビュー調査をサイレンシングの観点からまとめた調査研究がある (Silencing talk of men's violence towards women, by Alison Towns, Peter Adams, Nicoka Gabey in *Discourse and*

Silencing, edited by Lynn Thiesmeyer, John Benjamine Publishing Company, 2003) 。これを簡単に紹介しておこう。

暴力を振るう男性は自らが暴力夫だといわれるのを回避するためにその暴力を否定する努力を重ねる。まず男性の暴力の定義が異なる。平手打ちすることと拳骨で殴ることは違うといい、平手打ち程度は限度内だと考えている。他の男性と比べてまだましな方だと暴力を否定する。そして、ろくでなしの奴らの暴力と自分の暴力は違うと言い訳する。自分の暴力は常態ではないこと、たまたまその日はコントロールできなかったという。どうしてそうなったのだろうかと問い、そうさせた妻にも原因があると責任転嫁する。そして殴ったのは数回程度の暴力だったと過小評価する。個人のなかで勝手につくった暴力のヒエラルヒーをもとに判断している。この一覧表は男性同士の暴力をもとにしていてと筆者は想定する。殺人に至るような暴力的な男性と比べての独断的な一覧表だろう。そしてこれ以上、暴力を語らないし、暴力を説明する言葉も欠如している。思考停止状態だといえるだろう。

4) サイレンシングの特徴として

男性の側の暴力のサイレンシング過程をまとめると、第 1 に、サイレンシングには相当な努力があるので主体的で意図的であるといえる。親密な関係性における暴力を社会問題として扱う社会なのでそれを隠し、否認するには決意がある。

また、サイレンシング過程に妻も同意して

いるという幻想を保持している。「家のなかのことは絶対に他には話さないものさ」という。しかも外ではいい顔をする。だからその内外の落差を埋めるためにサイレンシング行動は能動的となる。

第 2 に、暴力を振るう男性は自身を「合理的な男」だと思っている。妻がいつもヒステリックだといい、感情に生きているが自分は異なると言い張る。私はそれに対処してきたのだと暴力夫は言い張り、事件はいつも彼女が感情的になるから起こるのだと説明する。警察の前では理路整然と説明し、自分は理性的で合理的だと印象づける。感情的になるのは女性の方であり、暴力へと昂じていくが、その暴力は家庭内の論争の延長線上にあり、自分はそうした事態になることは理性的によくわっているつもりだが、妻がヒステリックに騒ぐからそうせざるを得ない面があるのだと言う。

第 3 に、説明がつかないことを覆い隠すという矛盾がある。一方では、彼女が怒りを増幅させたといいながら、他方では、暴力を振るうことは恥ずかしいことだと思っている。恥ずかしいことだから隠す。男性として強はずの自分が暴力を振るってしまったという意識である。弱い者へのいじめと変わらないと内心では思っている。社会的にも受け入れられないことだ。こんな男性は男らしくない。男らしいと思って振るう暴力が男性の自己否定につながっている。暴力をふるってしまったことと社会的な言い訳の説明と矛盾する。そこで用いられるのが自己にむかうサイレンシング、つまり自ら押し黙ることである。

根本の矛盾を覆い隠すためであり、アイデンティティを保つためである。この矛盾した意識を支えているのが、強さとしての沈黙の文化である。男らしさが寡黙さと重なる。暴力のことを誰かに相談するとそれは弱さの証明になってしまい、マッチョ・イメージに傷がつくと考えている。暴力は男性の特性でもあるが、それが親密な関係性における暴力としては弱さの証明ともなる。このセルフサイレンシングという選択は余計に都合がいい。こうして言葉が欠如していく。そうするとますます感情が鈍磨していく。言葉がないと感情が構成されないからである。失感情症的な男性の心理と重なる。

さらに被害者もまたサイレンシングに巻き込まれる。暴力で悩んでいると第三者に話すのは裏切りであると思わされている。そして女性の罪意識に訴える。これは沈黙を強いることでもあり、暴力の原因についての曖昧化として機能する。背景にあるのはジェンダー意識だ。「女性は癒す人、男性は傷ついた王子様」という調子である。暴力はその癒やし方が足りないからだといわれる。さらに男性が暴力で受ける社会的な制裁の弱さが暴力の曖昧さを構成する。

この被害者へのサイレンシングは巧妙だ。彼女が暴力を促進させたといい、それは挑発であり、誘発のボタンを押したのは妻であるという。そこで動員されているのは、「男性は機械」というメタファーである。瞬間湯沸かし器にたとえることも同じような男性機械論である。本来は自らの意思をもって関係性に臨んでいるのだから、暴力への責任は自己

に帰属するはずだが、関係性に帰責させるとそれは両方の責任となってしまう。この関係性意識を変えるには社会のジェンダー意識や役割意識の変更が必要になる。社会臨床的なテーマであるゆえんである。

さらに、命題風の言明をもちだす「打ち切り」というサイレンシング行動がある。たとえば、そうした暴力は「自明で、あたりまえのことさ。それはそういうもんだ、そうに決まっている」等の言葉で会話をしない方策をとる。これもサイレンシング作用である。

また、「コップのなかの嵐」であるとし、暴力への相手の関心を矮小化し、些細なことだとする。些細なことにこだわる女性が問題だという。女性への侮辱でもある。妻の行動は子どもじみているという言い方となる。そんな細かなことにこだわり、文句をいうのは成熟していない、非合理的な、メンタルにおかしい証拠であるという言い方もある。

そして、友人や家族をサイレンシングに駆り立てることもある。たとえば、暴力についての「曖昧な会話」というのがある。暴力を振るう男性はもっともらしいことをいう。妻の目の周囲にアザがあり、時には骨を折っていることもあるが、そのことを第三者に説明する時、「転んだ」と言うだけである。あまり詳細を説明せずに聞き手の質問をひきだすのだ。あいまいにこたえながら自分相手の推測に依拠し、頭が真っ白でよくわからなかったと逃げてしまい、何が起こったのかと聴き手に意識させる。まるで酔っ払っての悪態と同じで無意識下の過失だといわんばかりである。

他にも、これは関係性の問題だ、男性の家は城だ（私的な領域という意識の表現）、家の恥を外に出すな等というサイレンシングのやり方が指摘されている。

4. 関係性の病理

ここでの対人暴力は、怒り、恨み、嫉み、鬱憤、甘え、依存をもとにした親密な関係性における暴力である。サイレンシングを加速させるのは「関係性の病理」である。それは多様なかたちをとる。バータードウーマン症候群（DVを受け続け来た女性の心理的特徴嗜癖的な関係性）、バタードチャイルド症候群、特定の事項への反応としての激怒型暴力（思うようにならない道路事情や周囲のドライバーへの運転中の激怒が典型的。さらにヘイトスピーチにみられる憎悪的激怒も同型的だろう）、抑制不能な性的ファンタジーとその行動化としての性犯罪（同様に性的存在としてのみ女性を意味づける意図的な行動）、代理ミュンヒハウゼン症候群（母性の歪み）、嬰兒殺しの心理（産後うつが悪化による破壊的衝動等）、性的虐待を受けてきた人に見られる性化問題行動、歪められた愛着とトラウマ的な絆の形成、長く監禁された心理としてのストックホルム症候群、相手を貶めていくモラルハラスメント（ガスライティングともいう）等として散見される事態である。加害者臨床はこうした関係性の病理を見据えつつも、当の個人の内的問題に対応することになるが、動機付けからはじめなければならず、関係性の歴史や連鎖もあり、長期にわた

る変化を見通さなければならない。

さらに社会臨床的な課題も加わる「構造的暴力」という面もあり、特定の相互作用を生み出す基盤として社会構造がある。また、暴力は相手が悪いのでそれを糺すための正義であり、愛情の証しでもあるし、コミュニケーションの一手段であるにとらえているのは加害者だけではなく社会そのものである。加害者はそれを濃縮し、養分のように吸収して暴力をふるうことを正当化している。暴力加害はそうした社会の暴力を可視化させた象徴でもある。暴力を振るう人たちは、否認的であり、他罰的であり、許容できる暴力だという。

そして認知の仕方が独特である。その行動の特性は、親密な家族関係をとおして構成されていく。とくに夫婦、親子、恋人という非対称な関係性に根ざしている。互いに訴求する関係性、生活を維持しようとする特性、対になって生き延びる戦略をつくる間柄である。その特性に相応しい形態で暴力が懐胎する。

もちろん非対称な関係性はアタッチメントの基礎ともなるが、被害-加害をも宿らせるという両義性をもつ。間歇的に暴力が発生し、関係性の壁に入り込み、時には被害者が自己を責めることもある。こうした関係性であることを踏まえて加害者臨床を行う。認知行動面の変容を促し、暴力へと至る人生の経過を聴き、贖罪のための語彙と文脈を構成することに寄り添い、更生と規範の確立を支援する。脱暴力のための加害者臨床に有効なものはずべて用いるしかない。

5. 抑うつとサイレンシングの関係について

さらにサイレンシング研究は疾病のジェンダーの領域でも議論されている。性差医学という領域があり、性差のある病気を扱う。うつ病相しか示さない単極性うつ病と躁うつ両方を示す双極性障害(躁うつ病)のなかでも男女差がはっきりしている単極性にこの性差が確認できる。概ね女性は男性の2倍程度の罹患率とされる。自己を沈黙させる病と位置づけた医療の人類学的、社会学的な研究がある。サイレンシングの研究として対象となってきた。他にも、病と沈黙の関係について、抑うつと自己沈黙等が扱われる。予防、セルフケア、病からの回復、HIV/AIDS、がん、摂食障害、心疾患との関連等も指摘されている。たとえば世界各地のうつ病についての医療人類学、社会学研究者が著した *Silencing the self across cultures: depression and gender in the social world*(Oxford University press,2010)。編者であるDana C.JackとAlisha Aliは、ネパールの精神科外来での経験をもとにしたアプローチを紹介しているので要約して紹介しておく(以下はこの書物のイントロダクション、Culture, Self-silencing, and Depression: A Contextual-Relational Perspectiveの紹介である)。ネパールでは、家族関係への拘束、伝統的な義務への拘束、スピリチュアルなものへの強いつながり、罣や自己欺瞞との闘い、恥・怒りの感情と自暴自棄の傾向が重なる文化拘束的な病という側

面を無視できないとし、その中核にサイレンシングを位置づけている。

男性中心社会において感じる女性の感情でもあり、ジェンダー作用でもあるという。さらに筆者の社会臨床論とも近似しており、ジェンダーの非対称性のラインに即して女性性と不可分に発現する。ジェンダー作用からすると、サイレンシングの結果の自己沈黙は、あらかじめ規範、価値、イメージによって処方されているという。気持ちよさ、利己的ではないこと、愛情を抱いていることなどの女性像に束縛されるとする。自己モニタリングによる否定的な自己評価、文化が期待すべき像と自己実現との葛藤が女性のうつ病にはみられるという。これらは女性患者のナラティブをとおしてデータが採取されている。別言すれば、他者のニーズにあわせて自己をみること、自己表出を監視する、怒りを抑制する、自立的な行動を控える、文化が期待する女性像に抗した判断をしない特性の分析が取り出されている。これらの女性性は抑うつへの脆弱性をつくる。

さらに社会的不平等がかさなり自己非難的なことも加速し、抑うつへとかりたてられる。自己沈黙についての現象学的で行動的な局面の定式化を展開したスケールを開発して尺度化して研究と臨床をすすめている。

これらをまとめると、第1に、外在化された自己認知・自己知覚がある。外的な基準によって自己をみるスキーマができています。他者が私をどうみているのかという視点から自分を見る傾向である。サイレンシング尺度では自らの基準では自分を評価しないことやそ

の基準を取り出している。

第 2 に、自己犠牲としてのケアの視点がある。自己よりも他者のニーズを前景化させる傾向をおしはかる。愛する人たちのニーズと同じほど自らのニーズを考えることは利己的だと思ふという質問である。関係のなかのヒエラルヒーとしてのニーズの優劣をつける。そうすることが自らの道徳だと言い聞かせ、怒りを抑圧する。他者と同じようにそれ自体で価値があるというのではない低い自己評価のもととなる。自己犠牲と母性の密接さをはかる質問もある。

第 3 に、自己沈黙（セルフ・サイレンシング）である。関係を維持するために、喪失や報復を回避しようとして、自己表出や行動を抑制する様相をとりだしている。相方のニーズや感情と私のそれらが衝突するときにはひきさがる。身近なひととのトラブルの原因となるので自らの感情を葬ることがある。

第 4 に、分裂した自己がある。外部にみせる偽りの自己と隠された感情と思考をもつ内なる自己の分裂である。前者は相方の希望に即したものである。

さらにこうした特性をいくつかの女性サブグループで検証している。たとえば、女子大学生、薬物依存の母親、DV 被害女性の各集団である。最後の集団がもっとも高いサイレンシングの効果を示したと報告している。こうしたサイレンシング研究は、性差というよりもジェンダー差を示している。サイレンシングの応用である。

そうすると、男性の沈黙の研究も必要ではないかと筆者は思う。ジェンダー差の他方の

極にあるテーマである。男性のもつ集団としての特権とかかわり沈黙することの意味が男性では異なると思う。サイレンシング研究で男性の沈黙は、他者との距離化、相互作用のコントロール目的、自律を防御することの意味が強いと指摘されている。先述したセルフサイレンシングの選択と男性性の防御との関連に近いものだろう。別に紹介するが、男性性ととうつの研究、男性の暴力の背後にある言語化の貧しさと感情の麻痺、そこから派生する行動化としての暴力等はサイレンシングとかかわるテーマ群である。

6. 社会が用意し、期待する「悪のドラマ化、選択の賛美、不幸の逆恨み」という物語化を超えて「複数の声を聴く」

インタビュー調査であれ、自己語りであれ、ナラティブとして表出されるのは物語として編集されたものである。現在を起点にして未来へと向かうために過去が編纂される面がある。やはり人は選択したことの肯定的な意味づけをしたがる傾向（選択の賛美）もそのナラティブには反映される。物語のもつ構成的側面である。

選択しなかったこと、想像しえなかったことがたくさんあり、また、ある言葉を選択した段階で、文脈にその言葉をおいた段階で、ある外部が作りだされる。たとえば不登校やひきこもり、非行や犯罪、暴力の経過等に焦点をあてればその物語は逸脱の物語となる。これを悪のドラマ化という。現在の不満は過

去との因果関係の連鎖におかれる。これは犯人捜しの物語、不幸の逆恨みである。

ナラティブが複数の声として主流の物語化を相対化することとは別に、こうした物語化のコードがあり、そのラインに即してナラティブ化されていくこともある。

また、ナラティブの基盤にかかわり、自分についての情報は自己所有すべきだというのがライフストーリーワークの基本視点である。出自についての情報が断片化しやすいとそれは脆弱さとなり自己物語においてはハンディとなる。社会的養護、不妊治療の結果、養子縁組の子どもたち等は自己についての情報が断片化されやすい。制度がつくり出すサイレンシングといえる。匿名のなかへと沈黙させられていく。精子や卵子の提供による不妊治療、産みの親の関係を匿名にする養子等がサイレンシングを促進させる。児童養護・児童自立における情報保存も整備が遅れている。

これらは自己とは誰なのかについて基本的情報のことなので、文字通りの意味での権利擁護(アドボカシー)、民主主義や価値の実現ともいえる。

また、暴力にまつわるサイレンシングは沈黙を強いる面をとらえようとしたものだ。対人暴力が被害者をいかにして服従させていくメカニズムを把握できる。いじめ、ハラスメントへと広がる暴力や社会的差別にも応用していくとその非抑圧性がみえてくる。そのことを教えてくれたのは非識字運動の理論化を基礎づけた「沈黙の文化」論(パウロ・フレイレ)である(『被抑圧者の教育学』亜紀書房、2011年)。非識字者の生きる世界は文字を持

たないがゆえに体験する苦痛であり、沈黙のなかにあるという。非識字という事態は自らの置かれた事態を表現し、理解しにくくさせる効果をもつ。ということは、識字をとおして自己への理解や自己の現状への意味が理解できていくようにする必要がある。このフレイレのアプローチは、識字を運動として把握し、その概念を一新させた。識字は文字を学ぶことをとおして文字を奪われた人たちが自己を表現する手段を身につけていくこと、教える者がそれを聴くことが識字に他ならないことを説いた。文字を学ぶことをとおして文字を持たない生活がどんなものなのかを社会に伝えることを識字運動として理論化した。識字は沈黙の文化に学ぶ活動としてみるべきだという。そうしないと文字を持つ者と持たない者の関係に優劣が生じ、識字のもつダイナミズムが喪失すると考えたのである。

サイレンシングはこうしてマクロに語られてきた諸課題と重なりながら、ミクロな関係性におけるこれらの過程を明らかにしていく概念なのである。いずれにしても暴力が対人関係へと浸透していく様を取り出すためには有益な言葉である。

なかむらただし(社会病理学/臨床社会学)

2015年8月25日受理

ケアマネだから できること

22

ケアマネ、あの眼、この眼 ～誰の困りごと？～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

ケアマネジメントの質の向上が言われるようになってから、しばらく経ちますが、相談事に対してすぐにサービスを繋げたがる相談援助職が少なくないのが気になります。

困り事を訴える人の話を十分に聞く前に、サービスの提案を強調しすぎるために、相談者は、どのサービスをどの程度使ったら良いか、ということに頭を悩ませていることも、しばしばあります。

聴く、というのは、主訴だけではなく、背景も含めて聴く、ということが重要です。

～一人暮らしのAさん～

Aさんは、一人暮らしです。ある時、自身の通院について疑問が生じ、相談機関に一本の電話を入れました。電話を受けた専門職は、Aさんの訴えを聞きながら、介護の必要性を

感じ、高齢者の担当に繋がりました。繋がった担当者は、早速、Aさんの自宅に、状況調査として訪問します。訪問し、受け入れの良いAさんから、日頃の話を聞きました。順不同に話題が飛ぶ様子から、認知症を疑いました。一人暮らしでもあり、何らかの見守りや支援が必要だと判断したようです。定期的にAさんに関わることができる担当者を固定するには、介護保険サービスの利用を勧めなくてはなりません。Aさんの話を聞きながら、健康状態の観察や管理、現在一人で行っている家事についてサービスを勧めました。

Aさんは、自分のペースでありながらも、日常生活は概ね自立していました。時々物忘れがあり、買い物に出かけても肝心の物を買って忘れることがありました。また、体調の悪い時には、家事もままならず、助けて欲しい

と思うこともあるようです。

この、A さんの話を聞きながら、相談を受けていた専門職は、介護サービスの利用をするためには、担当するケアマネジャーを決めなければならない、と説明します。そして、近所に事務所のある事業所のケアマネジャーへと相談は繋がりました。

～そのサービスは必要なのか？～

紹介した専門職と同行する形で、ケアマネジャーがAさん宅へ訪問しました。案内した専門職がケアマネジャーを紹介しますが、話はAさん主導で、話題が錯綜しながら時間が過ぎていきます。何が問題で、どうしたいのか、インテークすべき話にたどり着きません。小一時間ほど、Aさんの話を聞きながら、初回訪問は終了することにしました。改めて、別の日に訪問させていただくことを約束しました。別日の約束について、**Aさんが、約束を覚えていることができるのか、というアセスメント**でもありました。

約束した日に再度訪問すると、ケアマネジャーの顔も、約束の日時もしっかり覚え、出迎えてくれました。Aさんの口からは、「ヘルパーさんに来てもらうとしたら、頼みたいことは・・・」と、サービス利用の話から始まりました。室内の様子を見ても、ヘルパーが支援に入らなければならない緊急性を全く感じないケアマネは、「まだ、お会いしたばかりですから、今日は、少しAさんのこれまでの

ことについて、お話を聞きたいのですが・・・」と声をかけました。Aさんは、「何から話したら良いですか。」と戸惑ったような顔をしました。「そうですね、まず、Aさんが、どこで生まれて育ったのか、ご両親や、ごきょうだい、などご家族について教えていただきたいのですが。」とお願いすると、ご自分の生まれた年月日や出生地について教えてくれました。その情報は、引き継ぎを受けていた情報と一致しています。ここからは、ジェノグラムを描きながらの面接です。Aさんの生まれや、育ち、結婚前や結婚後のこと、子育て、子の巣立ち、夫婦の暮らしと、夫の最期の時の話しなど一時間程度の中で、Aさんの生きてきた様子を教えていただくことができました。忙しい子育てをしながら、趣味の教室に通ったり、自営業の夫を手伝ったり。地域の活動参加もしていたAさんには、今でも付き合いの続いている人たちがいます。ジェノグラム同様、Aさんを中心に、エコマップも描いていきます。すると、独居ではありながら、たくさんの地域の人の目が行き届いている状況がわかりました。エコマップを眺めながら、こんな時は、この人に相談する、この人はよく訪ねてくれる・・・などと、自分の周辺の人と自分自身のことを教えてくれます。ひとり暮らしとは言っても、自宅の近所へ通勤する息子夫婦が毎日Aさんの様子も見ているようです。

紹介機関からは、息子の妻を信用していな

いような雰囲気があると引き継ぎされ、**面談の際は、Aさんと息子夫婦は同席しないほうが良い**、などと伝えられていました。

Aさんと、息子夫婦の關係に、葛藤があるようには見受けられません。「息子さんやお嫁さんには、今回のような、生活の中の困り事などを相談することはあるのですか。」と質問してみました。「そうね、時々、買い物を頼んだり、自分でできないことがある時には、ちょっとお願いすることもあるけれど、仕事をしているから、あまり頼るのも悪いと思ってね・・・」などと教えてくれました。

さほど、關係性が悪い様子は感じられないため、「一度、今後のことを息子さんか、ご夫婦と一緒に話をしたいと思うのですが、お嫁さんに連絡を取らせていただいても良いですか。」と確認してみました。すると、Aさんからは、一つ返事で了解が返ってきました。ななだが、**引き継ぎの情報が呆気ないほど信憑性に欠けている感じがしました。**

その後、Aさんの息子の妻へ連絡し、Aさんの状況について確認すると、Aさんの説明通りの關係が保たれていることがわかりました。また、困りごとの訴えはできているけれど、「一人で話し相手がなくて寂しくなると、あちらこちらに電話をかけてしまうので、相手の方に迷惑をかけてしまっていることはあると思うのです。」と言葉を付け加えました。物寂しさから、人との会話や交流を求めているものの、サロンやディサービスなどへの

参加は、規則的過ぎて好まない、とのAさんの気持ちがありました。エコマップを見ても、Aさん宅に訪問してくれる人が幾人かいるのです。介護サービスに繋がなくても、当分の間、Aさんは、自分の力と周囲との關係の中で、現状維持していくことはできると判断しました。お嫁さんとの話の中でも、「今後、状況が変わった時に、相談させてもらいたい。今は、特に、介護サービスを利用しなくても良さそうなので、何かあれば、ご相談の連絡をします。」ということになり、Aさんについては、相談があった時に対応する、という方針になりました。

何よりも、Aさん自信が「今は、お世話にならなくても大丈夫だから。」とっています。

～誰の困りごと？～

さて、一体Aさんには、何が必要だったのでしょうか。Aさんがかけた電話を受けた専門職が、Aさんの訴えを十分に受け止めることができなかつたために、専門職の不安（一人暮らしのAさんに何かあつては大変だ。）が、高齢者担当に繋がれ、その担当者もまた、脈絡のない、首尾一貫しないAさんとの会話に、「認知症、一人暮らし」のラベルを貼り、「見守り」も含めて、介護サービスを利用したほうが良い、という見解で、ケアマネジャーに繋がれた訳です。「何かあつたら大変。」と感じたのは、**専門職**でした。

一人暮らしのAさんが、今、若干の支離滅裂

な相談電話をしてきたことのみ注目して、Aさんがどのような環境に、どのような周辺関係の人達と関わりを持ちながら生活してきたのか、生活しているのか、ということのアセスメントできていない段階での、「**転ばぬ先の杖**」的な、**サービス提案**となったのです。しきりに、介護サービスの利用を促されていた為か、ケアマネに会った時から、Aさんは、サービスを利用すること、ヘルパーに頼むことを一生懸命探していました。けれども、どれも、介護保険のサービスとして提供できる内容ではありませんでした。例え、提供できる内容だとしても、**ニーズではなく、それはデマンド、なのです。**

相談援助を担当する専門職は、相談をしてきた人の主訴ばかりに気を取られると、**どのような環境、関係性、システムの中に、その主訴が存在しているのか見失ってしまいます。**高齢者に限らず、何か相談したいと思った人が、自分の相談事を適切に表現できるとは限りません。また、寂しさを覚えた人が、誰かと繋がりをもちたいと考えた時、しばしば「相談事。困り事がある。」という形で、人との交流を持とうとすることもあります。そのような場合には、話題が「困り事」の羅列になる懸念があります。自分でできていること、自分の持っている資源（人との関係性も含む）について自覚することで、今までできてきたこと、今、できていることが理解できます。「まだ大丈夫。困った時には、自分で連

絡します。」というには、セルフマネジメントです。多少の認知理解力が低下していた場合でも、親しい人のサポートも含めながら、自己決定を支えていくことが本来の支援なのです。

Aさんの場合には、アウトリーチが必要な状況ではありませんでした。多数の目がAさんに向けられ、訪問者もあり、孤立してはいないからです。ただし、認知理解力、判断力の低下は否めない状況であることは確かではありません。このような場合には、定期的にAさんの状況を継続して観察できる人がいることが必要です。今よりも、更に、**介護や何らかの支援が必要な段階になるその変化の兆しをできるだけ逃さずに、適切なタイミングで介入していくことが、地域の関係機関の役割になるでしょう。**この場合には、誰が（どの機関）継続的に定点観測していくことができるのでしょうか。

何かあったら大変、という専門職の心配を解決するために、とりあえず、介護保険サービスの利用を勧め、担当ケアマネジャーに任せおけば安心、というのは、誰の困り事で、誰のための介護保険サービスなのでしょう？相談援助の力量が問われます。

*事例のプライバシー保護のため、事実を若干加工しています。

街場の就活論 vol.22

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

「障がい者枠なら採用できるけど…」

先日、とある学生が「先生少し相談があります」と言ってきました。

聞けば、就職選考中の企業から「障がい者枠であれば採用できるがどうですか？」と聞かれたと言います。それまで授業で見ていた彼に障がいがあることは、ぼくには分かりませんでした。本人も「日常生活にはほとんど支障がない程度」なのだと言います。また「手帳も今は持っていない」とのこと。ただ、選考の過程でそのことが話題にのぼり、過去の事実を受けて、後日軽く打診されたいらしいのです。

本人は「どうしても行きたい企業だから、一般枠で落ちるのだとすれば、例え障がい者枠でも入りたい気持ちがあります」と言います。ただ、障がい者枠で入って、

「自分がしたいような仕事ができるのか？」

「障がい者枠でも出世できるのか？」

その点が不安だという相談でした。その後、彼は結局その企業には入社しなかったのですが、障がい者雇用に関する現状が垣間見られる出来事だと思いました。

2.0%のあつい壁

障がい者の雇用については、関連する法律が整備され、現在は一定規模以上の企業に法定雇用率2.0%が課せられています。つまり、100人社員がいる会社の場合は、2人以上雇ってください、ということです。この数字は段階的に引き上げられており、障がい者手帳の発行数とある程度連動しているのだと思います。「すべての人に雇用機会を担保する」という意図からの逆算でしょう。特に経団連加盟企業や上場しているような企業は、達成度を厳しく見られるため、各社の人事担当者は、この問題について日頃から頭を悩ませています。

ご存じのとおり、障がいを持つ方は、その状況に応じ、身体、知的、精神に分けられます。遠くない未来に、現在は精神に含まれる発達も分けられ4区分になるのではないかとされています。

障がい者雇用を、企業の人事担当者目線で書くと、このうちもっとも雇用歓迎なのは身体です。身体の方は、働くことに関して、障がいのない方とほとんど何も変わりません。当たり前ですが、仕事が普通以上にできる身体の方もたくさんいます。次に歓迎なのが、知的。そして法律上雇用義務が

あるのは、身体と知的だけです。

しかし、現在障がい者雇用の問題について意見交換されるときに必ず話題にのぼるのは、精神の方です。雇用義務はありませんが、法定雇用率 2.0 は守らなければならないため、精神の方を雇い入れる以外に達成する方法がないからです。

事業主区分	法定雇用率	
	現行	平成25年4月1日以降
民間企業	1.8% ⇒	2.0%
国、地方公共団体等	2.1% ⇒	2.3%
都道府県等の教育委員会	2.0% ⇒	2.2%

人口は減るのに障がい者は増える一方

身体と知的の方の出現率は出生数に対してほぼ一定だとされています。日本の出生数が下がっていることもあり、その人数が爆発的に増えるということはありません。ところがそんな中、法定雇用率が上昇を続けるということは、増加分はほぼ精神だということになります。つまり、現在、障がい者雇用について考えるというのは、実際は精神の方をどう雇用するかという議論とほぼイコールなのです。

身体と知的の方に関しては、これまでも雇用経験のある企業が多く、マネジメントの方法が企業内にある程度蓄積されています。ところが、精神はそうではありません。企業が精神の方の雇用を躊躇する大きな理由が、この「マネジメントの方法がわからない」ということにあります。

障がい者を戦力に

一方で、企業間の競争が厳しくなる中、障がい者

雇用を社会貢献的な活動として継続する力がある企業はほんの一握りです。そのため、求められるのは障がい別の特性をよく理解した上で仕事を割り振り、企業活動の戦力にするマネジメントです。これは、言うが易しですが、相当に難しい課題です。そして、そんな中あらわれたのが、冒頭の新卒学生だったのでしょう。

こんなにマネジメントがラクそうな障がい者は見当たらない——。

なんとか障がい者枠でこの子を取れないか——。

軽く打診をした人事担当者には、きっとそんな考えがあったと思います。そこに、彼の人生のキャリアマネジメントという観点はありません。

精神障がいや発達障がいを数多く生み出してきた社会のひずみによる被害を、彼が被るところだったと、ぼくには思えました。

文／だん・あそぶ

「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸(実習)にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。



カウンセリングのお作法 第四回

CON(こん) カウンセリングオフィス中島 中島みづとり 弘美

カウンセラーの言葉かけ

「なんで、どうして」「ってたずねない

「なんで、片づけられないのー!」

「なんで、勉強しないの?」

「なんで、何回も同じことを言わせるのー!」

お母さんが子どもに怒鳴っている様子が目に浮かびます。いうことをきかない子どもに対して、言い訳は許しませんとばかりに叱ります。「ひゃく怖いよ。お母さん、今日は、かなり機嫌が悪い」と、子どもは思いながら、何も言えず、なんでの嵐が過ぎ去るのを待つしかありません。

「」で注目したいのは、『母親のセリフ』「なんで」という言葉です。なんで言葉は、ときに相手を攻撃します。日常生活では、自然に使いま

すが、カウンセリングでは、できるだけ使わないように心がけています。「なんで、登校しないのですか」とか、「なんで、うつ状態になったのですか」とたずねると、そうやってしまった本人に問題があると問いただしているようになるからです。そうなりたくて、なっているわけではなく、また、言葉で表現できるほどの明確な理由は本人もわからないのでこたえられません。なんでと、責めるのではなく受け止めるのがカウンセラーの役目です。追及につながるような言葉は使いません。

ねます。クライアントさんの心境を把握する必要があります。クライアントさんの心境を把握する必要があります。クライアントさんの心境を把握する必要があります。

でも・しかも要注意な言葉

また、そのほかの要注意ワードは、「でも」「しかし」です。

でも、しかし、けど、けれど、という言葉から話をはじめると、次に続く言葉は、相手を言いくめるような表現になり、受け止めていない印象になり、これらの接続詞を耳にした瞬間、わかってもらえていないと感じ、肩を落とします。受けとめることを大切にするために「なんで」「でも・しかし」のような、クライアントさんの気持ちや考えを認めない雰囲気になる言葉は、カウンセリングの中では登場しません。

なんで、できないの！



はてな子さん「なんで、という言葉は、日常生活でよく使いますがカウンセリングではできるだけ避けているのですね。どんな理由からですか？」

CON 子さん「それは、クライアントさんが追及され、責められている気持ちになるからです。たとえば、なんで登校しないの？とたずねられると、できないあなたに問題あり！というノンバーバルメッセージになる可能性があります。そのためできるだけ、なんでという言葉はかけないのです。そのほかには、『でも』や『しかし』もあまり、使いません。反論するときに使う言葉だからです。」



状況を知り理解するには、

出来事そのものと、それに対してどう感じているかを把握する

事実と感情を通して状況を理解する

では、クライエントさんに、どのような言葉をかけて、どのようなことを把握する必要があるのでしょうか。

ポイントは、事実と感情、それらをバランスよく聴くことです。実際、何があったのかの事実そのものと、本人の思い、かかわっている人のそれぞれの感情を把握します。特に家族カウンセリングでは、関係者理解が大切になります。

判断や解釈は後まわしにして情報共有

ある出来事について、たとえば、子どもが二学期から欠席しているという事実があると思います。それに対して、本人、父親、母親、クラ

ス担任の先生など、かかわっている人はどう感じているのかを把握します。

反省の言葉を連ねる人、〇〇が悪いと他への批判を口にする人、カウンセラーにどうしたらいいですかと方法や答えをすぐに求める人など、困難な出来事に対しての反応があります。

事実に対して、さまざまな思いがあると、また次の感情があらわれて、周囲に影響します。先が見えにくくなると、そのときに、誰の考え方や対応が正しいのか、間違っているのかの犯人探しをしがちですが、判断や解釈は後回しにして、まず、現状を把握し、家族やかかわっている人がその事実を正確に共有し、今後焦点を合わせて協力して動けるように体制を整えます。

目標、方向の確認

「これから、どのようになりたい、どうなったらいいなお考えですか」

できる、できないは別にして、関わっている人がこれからどうなったらよいのか、本人の希望も含めて、方向性を確認する問いを投げかけます。できることややれることが少ない場合は、今よりもマイナスにならないようにするには、どんなことができるのか、現状維持のためにできることについて、話し合いをします。そして、目標や方向性を確認できたら、その次に、

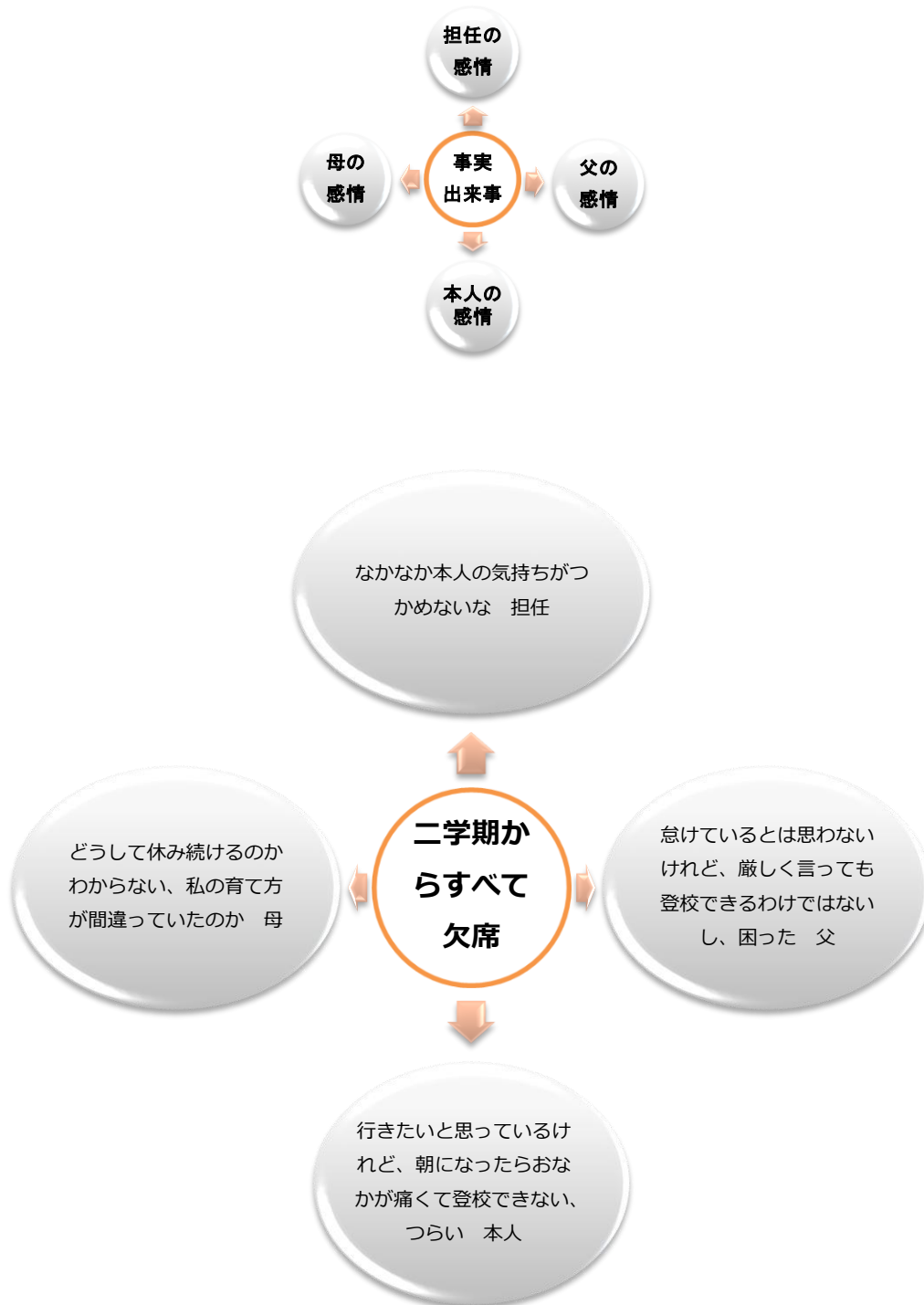
「そのために、ほんの少しでもできることがあるとしたら、どんなことですか？」と小さな目標、達成可能なステップについてたずねます。

カウンセリングではどのような言葉をかけるのか「未来を描くための9質問」をこのあとのページに加えました。

事実と感情

だれがどのように感じているのかを区別して

状況を理解する



未来を描く問いかけ

どうなったらいいと思いますか？ できることがあるとしたら何ですか？

カウンセリング体験 次ページ参照

すべてにお答えいただいたあとに解説をお読みください。

解説 質問の意図

- 1 あなたが希望する就職先や職種は何ですか？
 - 2 将来、就職することを考えたときの今の心境はどのようなものですか？楽しみにしていることや気になっていることなど、おまかせください。
 - 3 働くなかで、どんな体験ができればいいかと考えていますか？
 - 1から3の問いは、これからの方向性の確認及びどうなりたいと願い、そのことを考えることのような心境なのかの質問です。
 - 4 就職するまでに学びたいことや身に付けておくべきことがあるとすれば、今どれくらいのことかできていると思いますか。だいたいできている状態を数字の10.で表わさない状態を1.とすると、今のあなたは1から10.の数のどれくらいですか。
 - 4は、スケーリングクエスチョンです。尺度の質問です。状況を数字に置き換えて答えもろつことで、異なる視点からいまの状況を把握するという意味があります。
 - 5 どのなところからその数だと思ったのですか？できているところを具体的におまかせ下さい。
 - 5は、うまくできているところに注目します。ここでは、できていない点ではなく、できていることをピックアップして、いかに具体的に認識できるかがポイントです。
 - 6 5で示した内容ができるために、これまでどんな工夫や努力をしたのですか？
 - 6は、対処の質問です。うまく対応している点を認識し、どのようにそれをやったのかと問います。答えていくうちにパワーアップします。
 - 7 4で答えたその数字よりも、ひとつカウントをあげるとしたら新たにどんなことができるかよいかと思いますか？
 - 7は、小さな目標設定です。これからどんなことをしていけばよいか未来が描けます。
 - 8 それを実行に移すためにあなたにはあと何が必要ですか。
 - 8は、どうやったら確実に実行できるか、後押しのことです。
 - 9 卒業するまでにどのように過ごすことができれば、充実した期間だと感じるでしょうか？
 - 9の質問は123と同じ意味です。これで一巡しました。4以降につながります。
- これらの言葉かけや質問のながれは、どのような内容についても応用が可能です。いまの困難な状況からどうなったらいいと思うか、さっそく、描いてみてください。

就職を希望する学生さんへ 未来を描くための9質問

～カウンセラーがあなたに質問しますので、順序にしたがってお答えください～

- 1 あなたが希望する就職先や職種は何ですか？
- 2 将来、就職することを考えたときの今の心境はどのようなものですか？
楽しみにしていることや気になっていることなど、おきかせください。
- 3 働くなかで、どんな体験ができればいいかと考えていますか？
- 4 就職するまでに学ぶべきことや身に付けておくべきことがあるとすれば、今どれぐらいのことができていると思いますか。だいたいできている状態を数字の10、できていない状態を1とすると、今のあなたは1から10の数のどれぐらいですか。
- 5 どんなところからその数だと思ったのですか？できているところを具体的におきかせ下さい。
- 6 5で示した内容ができるために、これまでどんな工夫や努力をしたのですか？
- 7 4で答えたその数字よりも、ひとつカウントをあげるとしたら新たにどんなことができるかと思いませんか？
- 8 それを実行に移すために、あなたにはあと何が必要ですか。
- 9 卒業するまでにどのように過ごすことができれば、充実した期間だと感じるでしょうか？

それぞれの質問は、なんとなくたずねているのではなく、それぞれに意味があります。

今回は、就職希望者への問いかけでしたが、困っている状況があるとしたら、どのようなことについても、応用が可能です。



の中の

子どもたち

第21回 きみはいい子

— 供養の映画 —

川崎 二三彦

ある子ども

性懲りもなくというべきか、仕事柄というべきか、児童虐待が扱われているらしいと聞かされ、気がつく足が自然に映画館に向かっていった。だからこういう映画は、座席シートに座ってもあまりわくわく感がない。むしろ、いささか食傷気味というのが偽らざるところだ。

が、上映開始しばらくして、俄然目が覚めてきた。いくつかの物語が絡み合うオムニバス映画の一コマ。雨の中、小学校の校庭で雨宿りしている子どもを見つけて、担任が声をかけるシーンだ。

「まだ帰ってないのかい？」

「お父さんが、5 時までは帰ってくるなというから……」

様子が変わってくるのはこのあたりからだ。「あれ、この子、私の知^{いぶか}っている子とよく似ているな」と訝りながら、次の展開に目を凝らしていると、担任が「家まで送っていくよ」と声をかける。なぜかためらう子どもを説得して自宅にたどり着くと、玄関先にいた男が気づいて子どもを問い詰める。

「誰？ こいつ」

「先生」

「私、担任の岡野です」

「おまえ、なんかしたの？」

「……」

「あっ、いえ、雨だったもので、私が送ってあげようと言ったんです」

こんなやりとりの後、担任が、「5 時にならないと帰ってはいけないとのことですが……」と言いかけた途端、男は「うるせー」と怒鳴って子どもを連れ、家の中に入ってしまう。

ここまで何気なく見ていたのだが、はっと気づくと、視点が 180 度転回していた。すなわち、この子は映画の中で純粹に造り上げられた架空の人物ではなく、私が知っている実在の子ども

をモデルに形象化されたのではないかということだ。

とはいえ、たまたま見た映画でそんなことが起こり得るものだろうか。半信半疑で続きを見ていたら……。

「おまえ、あいつに何言った？」

外に佇む教師には、こんな声とともに、家の中からどすんどすんという鈍い音が聞こえてくる。だからといってドアをノックすることもできず、担任はそのまま引き返す。



これで私は確信した。全く同じなのである。いくらなんでもここまで一致するはずがない、と思ってこの映画の原作小説を探して読んでみると、小説の作者・中脇初枝の出身地が、私の知っている子どもとその家族が住む地と重なっている。

この子は本当は……

これで映画の見方が変わってしまった。映画のストーリーと実在していた子どもの経過を比べながら、固唾をのんで見入ったのである。

では、私の知る子どもは、どのような子どもで、どんな事例だったのか。先にその点について述べておこう。

やはり小学生の彼は、映画と同じく実母と内縁男性と 3 人で生活していたが、映画と同様「5 時まで帰ってくるな」と言われていた。

「おまえは友だちが少ないから、5時までは友だちと遊んで来い」

こう言われて、彼は雨の日も風の日も、夏休みも土曜や日曜も学校の校庭で過ごし、お腹をすかせ、教師にラーメンを食べさせてもらう。



そしてある日、やはり雨の中にいる彼を見かねた教師が付き添い、家まで送って行くのである。

男性は無職で一日中ゲームなどで過ごしていたのだが、子どもが家の中に入った途端、「遊んでこいと言っただけで、帰るなど言っていない。おまえは教師に嘘ついた」と激昂し、子どもを持ち上げて畳に落としてしまう。

教師がどすんどすんという音を聞くところも映画と寸分違わないが、実在の子どもは、この後さらに責められ、1か月もしないうちに、虐待によって死亡するのである。

時計

私がなぜこの子どもを知っているのかということ、この事例について、当該自治体が行った死亡事例検証委員会に委員として参加し、詳細な検討を行ったからである。

それはさておき、幸いにしてというべきかどうか、フィクションである映画では、希望の灯が仄見える結末となっている。

というのも、当の子どもがいつも佇んでいた校庭で、担任教師がふと見上げると、視線の先には校舎に備え付けられた時計があり、担任は、そのとき初めて気づくのである。

「そうだったんだ。あの子はいつもこの時計を見て、帰宅できる時刻を計っていたんだ」

実際の事例では、彼の死後、やはり教師が校庭のその場所に立ち、子どもと同じ目線で時計を見上げ、彼を救えなかったことを悔やむのだが、映画では、時計を見た担任が、息せき切って彼の家まで走り続け、やがて歩を緩め、玄関先に到達すると大きく深呼吸し、力強くドアをノックする。映画はここでエンディングを迎えるのである。

現実とフィクションと

ただし、映画を見終わった私には複雑な思いが残った。なぜとって、映画の中の子どもは、もはや私の目には、フィクションではなく死亡した実在の子どもにしか見えなくなっていたからだ。

死亡事例の検証では、亡くなった子どもの命を無駄にしないため、そこから何を学ぶかが問われていたが、映画は、(私に言わせれば)過去に遡って子どもを死の淵から救い出し、生かすことで希望を語ろうとしているように思える。つまり、ラストシーンは、生前の彼が、今を生きる私たちに託した未来の姿として描かれたものではなかったのだろうか。

現実とフィクションとはもちろん違うのだけれど、両者が混然一体となってしまった私には、この映画が、亡くなった彼を供養する作品に思えてならないのであった。

* 2015 / 日本

* 鑑賞データ 2015/07/21 京都シネマ

* 公式 HP <http://www.iiko-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/38297>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジーの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	思い出のマーニー	
第19回	ショートターム	
第20回	真夜中のゆりかご	

コミュニティと**集団精神療法**

(2)

藤 信子

20年近く、メンタルヘルス従事者のためのグループ体験を続けている。月1回の開催で、1年間10回継続するクローズド（メンバー固定）のグループである。ちなみに、集団精神療法になじみの無い方のために、付け加えると、集団精神療法の教育は、文献を読み講義を聞く理論を学習することと、実際にグループのメンバーとなる体験を積み重ねること、そして自らが実践しているグループのスーパーヴィジョンを受けることによって成り立っている。このグループは、自らがグルー

プを体験するトレーニングの機会となっている。20年近く続けていると、10年以上継続して参加するメンバーも、初めての参加だというメンバーもいる。

このグループで、ここ数年時々話題になることが、所属機関（精神科等の病院が多い）から臨床心理士にカウンセリングの件数を増やすようにとか、精神科医や看護師に入院の病床数を減らさないようにというような、経営上の要請が目立つようになったことがある。もちろん、経営上の要請は以前からあったこ

とであるが、最近では病院の上司ではなく、経営コンサルタントとの面接の中で、そのようなことを言われることもあり、クライアントと大事に育てている関係を、どれも一律に数字として計算する考え方に馴染めず、困惑するということである。また、医師や看護師にしてみると、治療の結果、病気が良くなったので患者は退院したのに、病床数が減ったので、満たすようにと言われるのは、「患者さんが良くなってよかった」という自分の仕事への満足を認められていないという感じになる。ある総合病院で病床回転率が良い（入院期間が短い）病棟に対して、病院経営に貢献したという表彰があると聞いて、そこまでするたかと愕然としたことがある。疾病の種類によって、入院期間は様々だろう、よく言われるのが産科は短いという事実、そのような事情を考慮しない単純化する思考を、問題だと思ふ病院の責任者がいないことを心配してしまう。

このような病院の経営の問題は、国家予算に対して、社会保障費、特に医療や介護保険の占める割合が年々高くなっていることもあり、医療費が抑制され、病院経営が困難になっているためだということはある。しかし、現在の日本の医療体制をそのままにして、医療従事者の職業意欲を痛めつけるようなこととするのかという問題である。対人援助職にとって、いろんな知識や技法は大事だけれど、働く場で安心して自らの仕事に誇りを持てる

ことが、援助の当事者との関係を大事にできることにつながると私は考えているので、今の状況のままでは対人援助の場が貧困になっていくという問題を感じる。

私は民間の単科精神科病院に勤務していた時から、医療がその経営体だけで成り立たせようとするのは、行政の怠慢だと考えている。日本の民間の精神科病院は、他の診療科に比べて圧倒的に民間が多く（90%）、本来国が作るべきである病棟を作ってきている。そこから収容主義から脱しきれない状態も起きてきているが、病院の経営主体との意見の調整では、なかなか解決できていない。

日本の国民皆保険制度は、よくできていると言われるが、それは医療費の社会化はできているが、医療供給の社会化はできていないため、それぞれの病院がMRIや最新の医療器械を競って購入するため、医療費が高くなる（田原 2002）こととなっている。そしてこのような医療器械、薬剤の使用量は他の先進諸国よりも高くなっている。健康の為なら、それでよいのではないかとは言い難いところもあるようだ。例えば腎臓透析は、食事指導への丁寧な医師、栄養士などの取り組みがあると減らせるが、それでは病院としては一人当たりの患者の診療に時間を取られるし、透析をした方が医療費は高く病院に入ることになるために、透析を勧めることになるという話は、ずいぶん前から言われている。人々の健康的な生活の為に、作られている医療器械や

薬品が、市場競争の世界で無駄な量を消費することになってしまっている。医療費の抑制ということでは、その点には触れられない。政策に置いて、利用者や医療機関に雇用されている人には、いろんな我慢を強いるけれど、過剰に競争している医療器械の会社や薬品会社の無駄には触れられない。私たちが単に消費者だからだろうか。

確かに対人援助職は、何かを生産するわけではないために、利益を生み出さない。しかし、利益を生み出すことだけを追求する論理に、皆が巻き込まれるのはおかしいと思う。現在の新自由主義経済の中で、誰もが同じように利益を考えることが大事だという発想になりかねない現状は、市民の権利を弱めることになるのではないと思う、それよりまして、私は対人援助の成果を数だけで見るという貧しい発想は、対人援助の場だけでなく、他の場面も貧しくしていくと考えている。人は複数の観点から見ることを通して、理解が豊かになると思うからである。

対人援助の場を経済の問題として考える時に、「市民の基本的権利に重要な関わりを持つ」サービスを「社会的共通資本として、私的所有ないし管理を認めず、社会的に管理され、そこから生み出されるサービスは、社会的な観点から公正という基準によって配分される」（宇沢 1999）という考え方を、参考にして考えていけないかと思っている。

トレーニングのグループの1事例は、メンバーの悩みを一緒に考える時に、また私たちがとりまく社会の特徴も考える機会となっている。

文献

田原 明夫 (2002) コミュニティと対人援助—支えあいとは—, 学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ2, 対人援助ための「人間環境デザイン」に関する総合プロジェクト, 立命館大学人間科学研究所, 60 - 88

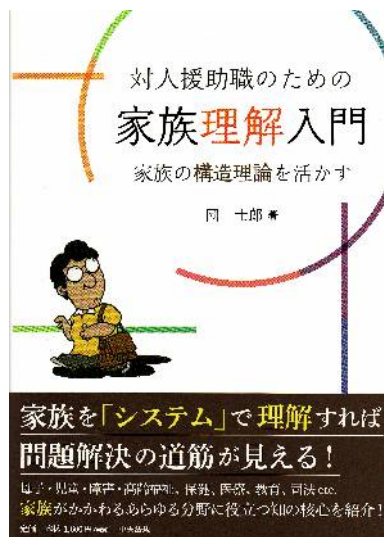
宇沢 弘文 (199) 社会的共通資本と社会的費用、宇沢弘文著作集1、岩波書店

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院



三刷発売中

ぼつぼつ始めなければと思っていたことを開始する。「家族理解入門～家族の構造理論を活かす～」(中央法規出版)の続編である。

一冊目(上の表紙)では実際の家族を提示して、どこに構造的特徴が見られるかを解説した。「構造理論」のキーワード理解のために家族に登場して貰った。

今回の意図としては、様々な家族に登場してもらい、その課題解決に向かうにあたって、焦点になる(なった)と思われる家族の構造的特徴を見いだしながら、取り組みをプランする。そして関わったケースに関しては、実際にやってみた結果も記述する。

当然のことだが、『その後、家族には何も起きませんでしたとさ・・・』等という、おとぎ話はない。何かが付けば、又次の何かがやってくるのは人生の必然である。ただその時、初めての時よりも不安が小さく、自分たちで何とかできるかもしれないと希望が持てるようになっていたら、その前に起きた問題は困っただけの事ではなくなる。

近年、日本の家族は「もし、なにかあったら・・・」と思い過ぎる余り、保険にエネルギーを使い果たしているように思う。人生は長い。家族で居る時間には様々なことが待ち受けている。それを否定する必要も、恐れる必要もない。さて我が家には、何が待っているのかな?と、ドラマを楽しむように自身の暮らしを楽しめばよい。

家族は千差万別で、同じケースなど一つもない。だから処方箋もみんな異なっていて当然である。だが一方で、家族は時代(社会システム)と構成(家族システム)によって、かなり似通っているとも言える。そこが家族の面白いところでもあり、生活のヤレヤレ(懲りないで繰り返す)なところでもある。だから、楽しんだ者勝ちだと思って暮らせばいい。

★「続」と銘打ってはいますが、一冊の本として原稿が完成しているわけではなく、むしろ二冊目に向けた素材として、手持ちの過去に既発表のものと、今考えていることを混ぜ合わせての記述を続けます。
【書き下ろし以外の初出誌は、季刊「そだちと援助」(明石書店)、家族療法学会誌連載(金剛出版)】

構造理論で読み解く現代家族

症状、問題、事件、障害、疾病・・・等、こういうキーワードで専門分野のことを語る人はたくさんいる。

しかし、人が暮らす世の中で起きている多くのことは、細分化された専門領域毎のの出来事ではない。大半は、最先端のハイテク対応事象ではなく、これまでも繰り返されてきた、ローテク現象である。更に問題(疾病や事件)が起きている場所に、複合的問題(貧困や無知など)が存在することも少なくない。その一方で、なぜこんな事ぐらいで大騒ぎするのか・・・と思うようなことも、世の中にはたくさんある。

家族の問題は診断名や分類名の付いた症状より、それを扱う人々の関係の中で起きていることが多い。だから私達は今、専門細分化しないところで、家族のことを考える必然に向き合わされている。

そうしないと、専門家ばかりが揃ったと思っっている世界で、誰にもどうにも出来ない複合問題を抱えた家族の今を生きなければならぬことになる。

ここで扱いたいのは、どちらかと言えば大問題より小問題。ささやかそうでやっかいな問題を、どう解決するのか。そこに道筋はあるのかということを中心に考えたい。

これは都市の治安問題を考える時、しばしば話題になることに似ているように思う。専門家が大事件ばかりを追いかけている都市の治安は、けっして良くなる。落書きや、痴漢などの軽犯罪を、丁寧に対応してゆく活動が、街の治安向上に繋がる。

みんなが大好きなコンビニ刑事や、名探偵が大活躍する街は、けっして良い社会とは言えない。

ケース

藍子さんは三十代前半の公務員。大学卒業後、いったん民間企業に就職したが、やはり元々やりたかった専門技術を活かして働きたいと転職した。年齢を考え、結婚もしたいと思っっているが、なかなか交際が長続きしないと語る。年子の妹は、実家で両親と暮らす同業の資格専門職だそう。

彼女の訴えは、男性との関係が上手くいかな

いのは、両親の夫婦関係を見て育ったせいだと思っようになっていることだった。

藍子さんが小学校時代、父には母へのDVがあった。子どもに手を挙げることはなかったが、母はかなり酷い暴力を受けていて、肋骨が折れたこともあった。事が起けると、妹は怖くて自室に逃げ込んでしまっていたが、自分は止めなければと思っ随分苦しい思いをした。

近年それを思い出すと押さえられなくなり、最近も実家に帰った時、母になぜあの時離婚しなかったのかと問い詰めた。すると母は今でも離婚したいと言った。

それならと藍子さんは母親と一緒に、マンションを探しに不動産屋に出かけた。手頃な物件が見つかり、手付けも打って帰宅し、妹にこの話をしたところ、妹は「私はここに残る」と言ったという。

読者への質問

藍子さんはこの先、どうするつもりなのだろう。一人暮らしの現状を引き払って、母と同居するのだろうか？妹の返事をどう聞いて、今後どう扱うのだろうか。

あなたならこの話を聞いて、どこからどのように手をつけるだろう。少し考えてみてから、先に進んで貰いたい。

彼女の心の中には様々な葛藤や言葉が溢れていたに違いない。しかし多くは独り言である。彼女は妹とも、父親とも、今回の件について何も話しあっていない。

訴えに急性の症状はない。藍子さんの思いもまったく理解しないわけではないが、診断・分類名を付けて処遇するようなものではない。

だが、この問題を家族の構造的視点からとらえて整理すると、とても特徴的なことが見える。

一つ目は親世代の夫婦問題に子ども(藍子さん)が口を挟んでいる世代間境界の侵犯である。理由がどうあろうと、子どもが両親夫婦の婚姻関係の今後に影響力など持つべきではない。

そんなところに拘り続けること(かかわり続けさせられること)自体不健全である。夫婦の三

組に一組は離婚をする時代に入っている。カップルのトラブルもますます増加することだろう。その一つ一つに子どもや親族が巻き込まれていると、紛争ばかり増大する。

そんな時には、誰が直面すべき課題なのかの原点に戻って考えることが大切だ。子どもや上世代が夫婦問題に参入するのは、しばしば問題を更に紛糾させるだけである。

二つ目は、同胞サブシステムの一員である妹に、家探しの経過は何も話さず、結果だけを伝えて断られている件である。これは「姉妹サブシステム」の形成し損ないの結果だと考えられる。

ここまでの生育史に事情はあったのだろうが、姉妹はコミュニケーションが上手くとれていない。姉妹のこれからの人生を考えると、不確定要素は一杯だが、「同胞サブシステム」の修復は、今の問題と関わりなく大切になってくる。

両親の加齢が進み、病に倒れたり、寝たきりになったりした時のことを考えてみよう。彼女たちの人生がどう変化しているかは予測できないが、その時、姉妹で向き合って話し合うことが出来なければ、その後の関係は決定的に壊れるだろう。

現在、藍子さんは父親も受け入れることができていないようである。だから母親だけを救い出し、父親は放棄するような提案をしてしまったのだろう。

構造的視点で考えると、今回の問題をきっかけに、姉妹サブシステムの再構築を図っておくのが、家族の今後にメリットが大きい。

そこで藍子さんに、妹と一度話し合う機会を持つ努力を、次回面接までにしてもらうよう勧めてみた。



次の面接の冒頭、彼女が嬉しそうにこんな報告をした。

「前回のお話の後、すぐやってみました。妹に電話して、一度二人で会いたいと言うと、意

外なことに妹は快諾しました。そしてその週末に会ったのですが、嬉しい驚きの連続でした。」

「妹は大人になっていました。私よりしっかりしてるかも…」

以前、藍子さんが話していた、「妹は私と二人になると、ほとんど何も話さない」という彼女ではなかった。よく考え、行動を決める大人になっていたと思ったという。

「いつまでも妹だと思っていた私の方が、彼女のことが見えていなかった…」と語った。

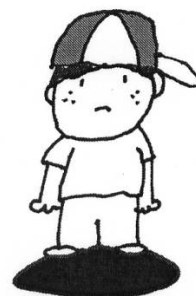
構造再編

藍子さんの訴えのような問題を、今だけの事にして論じても、過去の傷つきだと定義して論じても、得られるものは多くない。ドライなことを言えば、両親はそのうち亡くなる。一緒にという事はないから、どちらかが残る。その後の一家の暮らしは否応なくリセットされなければならない。

その時に、姉妹が話し合うことが出来ない関係だったら、やっかいなことになるのは当然だ。何もなくはいられないことが分かったら、何かあった時の対策を協議できる関係に自分たちを整えておくのが、未来を見据えた賢明さというものである。

五年余り関わった家庭裁判所の調停委員時代、最悪の状況で財産分与の話をしなければならない人達と会った。当然、事態は紛糾し、決着後も二度と交流しない兄弟姉妹になっていった。あそこには明らかに、親世代にも子世代にも、家族の構造の持つ一般性への知恵が足りなかった。

家族の境界と社会



子どもの頃、私は自分の暮らしている場所の他に、どこかに居場所があるなんて考えられなかった

たまに、悔しいことや悲しいことがあると、家出したくなったりはしたが、行き場所を想像することはできなかった



気楽な人たちが言う



内と外

もつともそれは大した不幸もなかったせいかもしれない



家族には内外の境界というものがあって、これが各家庭においてどのように形成されているかは興味深い。

昨今のプライバシー感覚からすると、一般的には閉ざし気味、防衛的であるのが通常感覚だろう。戸締まりもせず、近隣の住民が、気の向くままにズカズカ立ち入ってくるような昭和30年代の日本家族は今では想像しにくい。

昼間、家族は出払っていて、施錠の留守宅というのが一つのパターンである。こういう家の子達が増えてきた時期に、「鍵っ子」なる言葉が流行した。

かつて、少しゆとりのある都市部の一家では、知人の子を居候させたり、親戚の子を預かったりすることもあった。

日本の家庭のオープン度合いは、核家族化、都市生活化に伴った家屋の手狭さや共働きによって、急速に低くなったのだろう。それは善し悪しの問題ではなく、これが平均的で今日的な日本の家族の内外感覚ということである。少し融通しあうような他家族との相互浸透性は弱くなる一方の今だといえよう。

児童虐待が話題になって、児童相談所の対応が甘いとかが、不十分とか、そんな話が世の中をにぎわす



境界設定

だからかも知れないが、対人援助場面において、この内外境界感覚に違和感を覚える人達と出会うことが少なくない。思わず、「内外のけじめはないの?」とか、「他人と身内の区別

はすれば！」と思わされる事態に遭遇する。

家庭事情にやたらに他人が関わってきていたり、金銭管理や所有感のズレが目につく暮らしなどである。

子どもの生活に目を向けてみると、圧倒的多数の子は夜になると家に帰る。かくも多様に家族はあり得るものか・・・と絶句するような事情を抱えた家もあるが、そこにも子どもは帰る。他に行き場がないからだという人もある。無論、そういう側面もないことはない。しかし他にいくところがあったら自宅には戻らないかといえはそうでもない。家出している子も結局、家に帰る。いろいろあるだろうが、圧倒的多数の子ども達は家を捨てない。

日本社会の子育てテーマが、自宅から離れない子どもと離せない親問題になって久しい。

今まで持続されてきた内の世界と、「こっちの水は甘いぞ」と誘う外の世界。思春期になると、日々どちらを選ぶか、悩ましいのが当然であった。むろん、実績は圧倒的に内の世界にある。

にもかかわらず、魅力と誘惑に溢れた世界が外だった。海外留学や世界一周は簡単には叶わない夢だったからこそ誘引力が強かった。それに青年期の原則、「遠くない時期の家族からの分離独立」があった。

このメカニズムの中で、子ども達は皆、自立していった。時期は個別的で、各家庭事情が重なっていた。

ところが現在、被虐待などの厳しい家族状況下の子には、早期の分離を促す。そして、中流小市民の安定した家庭の子達は、長々と実家に居座ることになっている。

こんな現実だと認識するが故に、家族にいくら重篤な問題があろうとも、子どもに家族を捨てるなどと、軽々しく言いたくない。誰の人生デザインにも組み込まれている自立を、「心理的虐待」などのラベリングで、早々と親子分離を推し進めることに不安を感じない人たちへの疑念が拭えない。自立は古典的で、大きな人間成長のテーマであって、行政の児童福祉対策などではないのだと思う。

かつて、家族が諸悪の根元だ！家を捨てるという論調が流行った時代があった。

そして近年のように、少子化や非婚化の話が出てくると、反動で家族は大事、不妊治療を応援して、人口を増やせ等という論調が台頭して

くる。

私はそのどれにも与するつもりがない。家族に追い風が来たからといって、それ程家族第一主義者になりたいと思わない。

家族は面白いものだと思うが、結婚式の紋切り型スピーチのように、「夫婦というものは・・・家族とは・・・」などと結論に至れるようなものではない。夫婦関係と親子関係という二つの親密性の難題を抱えた、ややこしいものなのだ。

世界に目を向けて家族の有様を見れば、この地球上、同時代でありながら、なんとバラバラである事よ・・・とため息の出そうな国家間、民族間、宗教間の較差である。

そんな中で、たまたま日本で生まれ、今の時代に思春期、青年期を迎えた者が多数、同様な症状を抱えている問題は、どう捉えるのが賢明だろう(たとえば不登校、ひきこもり、うつ、発達障害etc.)。

日本でだけ、あるいは類似の先進国だけで起きている現象など、どう考えても社会的要因故の流行病だ。

たまたまかかったインフルエンザは、速く治すことを考えればいいだけで、インフルエンザとは何かを患者全員が理解する必然などない。多くの人たちは無関心であってかまわないし、ごく少数の評論家や研究者がいれば十分である。

そういう話を耳にすると、いつも思いつくことがある



「当たり屋」の少年のことだ



やがて事件は発覚し、
両親は逮捕された



大島渚監督が「少年」というタイ
トルで映画にもした実話である



しかし
息子はそこで、
家族を
守ろうとした



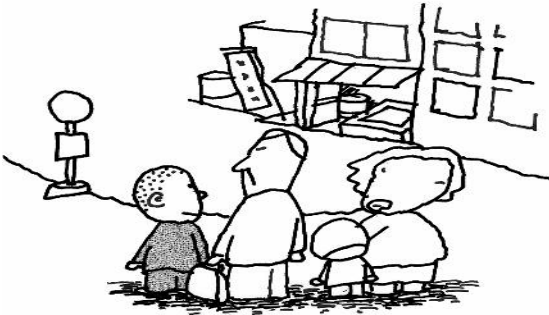
両親と弟がいたのだったか



子どもに
当たり屋を
やらせていた
親である



一家で
放浪しながら
暮らしていた



彼に同情し、
ひどい親が
あったものだ
世間は大きい憤慨し、
やがて忘れた



車の前に飛び出して、
ドライバーからせしめる
示談金が生活費だった



最初は母が、やがて息子も
生活のために、走ってくる
車の前に飛び出すようになった

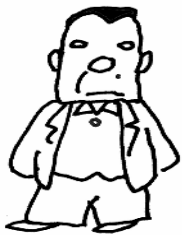


彼らの10年後、
20年後を
知る人は少ない

この言いくさは今も生きていて、
世間はいつも健忘症



当事者だけが忘れることも、
消すこともできない現実を生きる



当たり屋の少年の両親はとんでもない奴だろう。しかしそこで育った子どもがいる。あの少年を、酷い親に強要されて、当たり屋をさせられていた可哀想な子だと語るのは簡単だ。しかしそんなものは語る側の一時の同情気分の発露に過ぎない。なぜ子どもはそんな状況でも、家族や親の味方をしようとするのだろう。これを考えておかないと、結局家族のことなど何も分かっていないことになる。

これについては企業人が内部告発する時の例を考えてみるのが近いのではないかと思う。我々は内部告発者の語ることを自動的に正義だなどと認定しない。組織内不適應を起こし、個人的恨みを抱えた人間が告発的行動に出たりするのはよくあることだ。

だが、内部告発をみなそうであるなどとも考

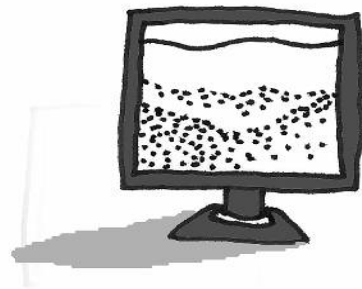
えたりもしない。動機の形成のきっかけがどのようであろうと、社会にとっての不利益がそこで明らかにされているならば、それを理由に、その内部告発を採る。けっして告発者が正義のための行動を採っている等とだけ考えているのではない。

同じように家族において、組織内構成員である子どもが訴えることを、このスタンスで受けとめるとよい。子どもも大人も家族の一員として、自分の出来ることや使える手段を駆使して生存を確保しようとしている。ならば、外からの判断は結果として、より良い生き残りが、中長期的に達成されるものであればよいことになる。

通りすがりの他人から、「お前の親は酷いことをさせる奴だ」と同情されるたびに、彼は家族への忠誠心に燃えただろう。自分の家族を他者から批判されて平気な子どもは少ない。そこで子どもの中に生まれた世間に対する感情は、長く心の内に沈んで消えないだろう。

「けしからん！」と憤慨した世間は、さっさと忘却してしまう。人の生きていく時間は三年や四年で終了はしない。七十五日で忘却モードに入るのはいつも、世間とニュースショーだけである。

「お前の育った酷い家や、親のことなど忘れる。そしてこっちのまともな世界に來い！」と善意の他人は強く勧める。だが、そちら側に行った途端、平凡な家に育った子どもと同様の適應を求め。そしてそれが難しいと、「酷い環境で育った子は、そんなことになる」と批判的な解説をする。



不朽の名作「砂の器」が今、
「DVDドラママ化」されて
放映されている

世界のどこでも自分は生きてい
いんだ!



タイトルバックで
父と子が
山陰海岸を
巡礼する



それを見ながら私にも
思い出す息子との情景はある



そんな風に思えたら、
人は楽になれるのだろうか



誰の人生にも悲しい思い出や
苦しい記憶は刻まれているものだ



子どもが
そう思えるように
なるためには、
親を捨てればいいのか



「砂の器」の主人公は、
逃れて逃れて、
結局
逃れきれなかった
ものに破れる



自分が確保した
幸運はすっかり抱えながら、
まだ幼い他人に
そう言い切る大人が
信用できない



砂の器

2004年、TVドラマ「砂の器」(原作・松本清張)が放映されていた時期に、このマンガは描いた。不朽の名作・映画「砂の器」(1974)ではドラマの根幹に、原作通り主人公の父の病(ハンセン病)が存在する。社会的(法なども含めて)に構築されたこの病への無理解と偏見が、主人公のその後を形作る大きな動機になっていた。しかしその後のドラマ化では、この時も含め、原作の設定そのものに改変が加えられることになった。

「砂の器」の主人公、和賀英了は出自を隠し通すことで、この世界に居場所を見つけようとした。それは自分の生まれ育った家族の消去であった。深い深い心の奥に、父親に対する愛着はあったに違いない。しかしそれを封じ切ることが、この世界で生き延びてゆく彼の戦略だった。

「内と外」の理屈で言えば、捨てられるはずのない内を切り捨てて生きる決心をしたのである。しかし善意の駐在おまわりさん(一時期の育ての親だった)は、懐かしさから不用意に近づくことで、孤独に生きる辛さを乗り越えてきた青年を殺人者にしてしまった。

過去など要らないと思って生きている人間があることに、想像の及ばない善人の鈍感さは、しばしば厳しく生きてきた人の砦を、我知らず崩しにかかる。

彼に家族を捨てさせたのは「これが普通だ！」と認めさせている世間だったろう。他の家族とは違っていても、自分の中には持っていたい家族への忠誠心を捨てることを世間が強要したのである。

子どもが家族を好きなのは、そこが素晴らしいところだからだけではない。困った一家や、あり得ないと思われるような事情の人たちも少なくない。それでもやっぱり家族だと思って生きてゆくのは、諦めや負け惜しみだけではあるまい。

それが何かと問われても、答を知っているわけではないが少なくとも、経験の浅い教育・福祉関係者の語るありきたりの善意もどきの言葉で捉えられるものではない。

まだ日本が貧しかった時代に、道ばたに捨てられ、保護されて施設で育った青年がいた。長じて立派に家庭を持った。そんな彼がある時、児童相談所を訪れた。

「自分の捨てられていた時の記録がここにありますか?」。実親を捜し求めて児童相談所

を訪ねてくる人が、少数だが私の児童相談所在勤中には存在した。

「育ててもらっていない親をなぜ?」とは思わなかったし、彼らが恨みの一つも言ってやりたいと思って探しているとも思わなかった。

とはいうものの、「やっぱり親子は血のつながりやねえ・・・」などと語って納得する通俗性にもうなずけないところがあった。

自分は無事生まれたのだ。そして死なずに今存在しているのだ。その巡り合わせに、産んだ人が何もしていないわけがない。会えるものなら会ってみたい。せめて経過痕跡をたどりたいたいと思うのは、自分の存在そのものの確認であり、感謝だろう。

アーキヴィスト

しかし一方では、こんな経験もしている。だから一面的に、産みの親家族が大切だなどと言いたいのではない。

人間は家族と呼ばれる多様性を、時代を超えて持ち続けてきた。だからその、どの部分を取り上げて語っても、不十分感拭えない面があるのではないかと思う。

記録と記憶

2014年の初夏、ある関心から関東の児童養護施設を訪問した。これのそもそもは、春に英国のナショナルアーカイヴスを訪問したことと関わっている。私自身、それほど学究的な動機があったわけではないが、巡り合わせの結果として、子どもの記録保管というテーマが、英国でのフィールドワークに含まれていた。そして、同僚の中村正を通して、アーキヴィスト(Archivist・永久保存価値のある情報を、査定、収集、保存、管理し、閲覧できるよう整える専門家)という存在について、少し目を開かれるところがあった。

というのは、私自身の公務員時代の経験から、児童記録、公文書保管、当事者からの開示請求などは、馴染みのないテーマではなかった。だが一方で、保管年限の短さや、行政機関としての自己防衛的な開示対応など、「記録」そのものが中心ではなく、扱う側の社会的諸要因が、事実を加工している面が否定できないと思っていた。

そんな状況で、アーキヴィストという資格職

の存在を知り、日本では唯一、学習院大学にある専門家養成のカリキュラムで学んだ女性が現場で働いていることを知った。

複数力所で働く彼女から、戦後日本社会の児童福祉の大きな課題だった混血孤児の問題とその対応、そして記録と記憶のテーマを知らされた。

当事者Mさんとママちゃま

そんな縁があって、湘南にあるエリザベスサンダースホームを訪問することになった。ここは戦後直ぐ、街に溢れる混血児（浮浪児や遺棄児童）達を助けるために作られた施設だった。ここで初期の卒園生との面談が叶った。

ハーフの風貌をした中年男性が話してくれた昔話は、私の中にあった思い込みを少し変えてくれた。

彼は乳児期に、この施設の前に置き去りにされていた。一般論としては、自分を捨てた母を恨み、それでも生みの母を慕う気持ちは拭えず、子どもは産みの親と育ての親の間で苦しむ。通俗的な社会の認識は、私も含めて、こんな所ではないかと思う。しかし、ここでMさんが語ったのはこんな話だった。

*

私は母に捨てられたと思っていた。しかし園長は私にこういった。「M、あなたが今元気でここにいるのは、お母さんがあなたをここに置いてってくれたおかげだよ。ここなら大丈夫だと思える場所まで、列車に乗ってやってきたんだよ。そして、おっぱいをお腹いっぱい飲ませて、よく眠ったMを置いて、立ち去ったのだよ。あなたが目覚めて泣き出せば、必ず私達が気づくと信じられるところにね」

こうして園長に育てられ、この人を母だと思って義務教育を終えた。当時の児童養護施設は、中学を卒業すると退所して自活することを求めている。一般家庭ではもう中卒で就労する子は希になっていたが、施設の子にはまだこういう時期が続いた。Mさんは住み込みで就労を始め、施設を離れた。

私のこれまでの経験から想像すると、この段階で子どもは、実の母親を捜すのだろうと思っていた。やはり血のつながりは特別なものだ。しかしMさんは実母を探さなかった。恨んでいたわけではなく、それが自然だった。

初めて数日間の夏期休暇がもたらされた時、懐かしくて園長の所に顔を出した。すると「どうしたの？」と聞き、休暇だと知らせると、「何日間？」と聞かれた。答えると直ぐ電話で知り合いに問い合わせ、数日間のアルバイトの口を探し、「明日からここに行きなさい」と言われた。

その時は、「懐かしくて尋ねて行ったのに…」と思ったが、考えてみると、中卒直ぐの身寄りのない自分に蓄えはない。少しでも暮らしの安定に繋がるようにと園長は厳しさを突きつけた。今なら笑って話せますが「厳しい人だった…」と朗らかに語った。

実母

こうして暮らしていた十代後半のMさんにある日、Y市から郵便物が届いた。あけてみると、『貴方の母親が亡くなったが、その整理について希望があるか？』という問い合わせだった。その時初めて、母がまだ生きていたんだと知った。何となく、ずっと前にもう亡くなっているだろうと思っていた。

役所の窓口に向き、そこで母の遺品から写真を貰った。初めて母の姿を見た。母はY市で生活保護を受けながら一人暮らしを続け、病気で亡くなったのだった。

遺体の確認をと言われて、写真を頼りに見たが、年取ってやつれた母を、元気な頃の写真と比べてみても何とも言えず、係の人と、「面影がありますね…」などと話したという。

私は話を聞きながら驚いていた。そして、人はこんなに強くなれるのだと思っていた。誰かにしっかり愛されて、鍛えられることで、軟弱で傷つきやすいばかりの小市民でいなくても、自分の人生を立派に生きることができる。

去らざるを得なかった人を追いかけたり、恨んだりせずとも、新しい出会いの中から、未来を築いていけるのだ。そのきっかけを作った園長・澤田美喜さんの強い愛情に、感服する思いだった。

そして更に続いた話には仰天した。Mさんは遺体確認の場で、自分より年配の男性から声をかけられる。その人は、「私は君の兄だ」と言ったという。そして彼は当然、Mさんより年上だから、母の面影も、事情もより詳しく知っていた。そこでMさんはそれぞれ父親の異なる二

人の兄の存在と、母の物語を聞くことになった。



人は孤独なまま一生を
生きてはゆけないだろう



私は、捨てきれないもの、
捨てさせたくない
もののために
苦労する人を
信じたいと思う

この世界には選べないものがある



選べないから、
豊かにする努力を
するしかないもの

それが家族だったり、
生まれ落ちた場所だったり
するのではないかと思う



孤独

所詮人間は一人だ、という言い方がある。生まれるのも、死ぬのも一人だという。その通りだろう。だから人は誰かと生きたいと思うのだ。

恋愛をしたり、結婚をしたり、家族を作ったりしないで生きる人は、人間を孤独だとは思っていないのかもしれない。いや、あるいは、深い孤独の中から抜け出すことが出来ずに、時を過ごしてしまっているのかもしれない。

歳取ったら一緒に住もうね・・・とかいう独身者のグループのドラマや話を時々耳にする。そのたびに1970年代に流行って瓦解したコミュニオン話を思い出す。

利潤追求型の競争社会の中で、疲れた若者達が、もっと平和に、分かち合った暮らしを考えてスタートした集団生活(コミュニオン)が世界各地に存在した。

しかしその多くは崩れ去った。理由はひとつ、人間(己も他者も)を知らなかったからだ。

ピースサインを重ね合っていたら、何とかなると思ってしまう単純さが、現実の前に敗北したのである。

所有欲を捨てる、功名心を捨てる、嫉妬心を捨てる、独占欲を捨てる、等のいろいろなお題目を、結局自らの手で一つずつ踏みつぶしてしまうことになった。

今日の心のケア論や家族支援の発想に同調している人々の心根が、こういった不用意な自明性を背景にしてはいないかと心配である。いつ、誰が、どこで言っても正しいことなど、正しい以外に力はないかもしれない。

むしろ、私達の家族行動への理解は、多くの「分かっちゃいるけど止められない」事から始まらなければならない。

*

人が天涯孤独に生きられるものだとは思えない。いっそなければ気楽、そう思う人間関係もある。しかし、本当になれば楽なのではない。そこは無である。あるから苦しいが、ない方が楽だと感じられる前提には、あることが横たわっている。

ロビンソンクルーソーは、一人は寂しいが、誰か居たらそれはそれで気詰まりなことだろうなどと言いはしないだろう。

児童虐待対応の議論の中で、「親の言うことを真に受けて、もし子どもに何かあった時、あなたは責任がとれるのか！」は、古い恫喝である。とれるはずなどない。しかしその責任の持てなさは、親子分離した後の、子どもの長い人生に責任など持てないのと同じである。

家族再統合などと、後出しジャンケンのような文言で、納得できるのは無知故である。大昔から、分離させた家族の再会には、多大なエネルギーが求められた。それ故、結果的に多くの子達を、児童施設に措置しっぱなしになる結果に至ってしまったのだ。

起こってしまった事柄に対応する専門家や世論の活性は、いつもこういう空しさを内包してきた。今、更に通報を迅速にと、中央官庁の役人発想だと思われる三桁ナンバー「189」化が動き始めた。

この対策で虐待通報はさらに増えるのだろうか。いや、ひょっとすると、国民はもうこの話題にはぼつぼつ飽和していて、興味がないかもしれない・・・。

それはともかく、通報数が上がればまたその

数字に、ますます・・・という論調も飛び交うのだろう。こんな数を拾い集めてきて、ゆゆしき問題だと語り合うことが仕事になってしまっている。

わが事を差し置いて一般を語るな。我が子にしないことを人に強いるな。自分が分からないからといって、人も分からないに違いないなんて思うな。中流サラリーマン小市民役人の想像できる人間の暮らしなど、人間のごく一部分にすぎない。

求められているのはいつも、予防である。私達の一人ひとりに悪意や犯意があるとは思わないが、専門家のマッチポンプ(自分で起こしため事を、鎮めてやると持ちかけて、利益を得ること)は社会の常なのだという事は忘れてはならない。

学校臨床の新展開

— ②① 此処じゃない何処かへ I —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

助けてください

信号待ちをしていると、助手席側のドアが急にあいて、女性が乗ってこられました。物騒ですから、鍵はかけておかないといけませんね。「とにかく、まっすぐ行ってください」と、その女性は言いました。タクシーではないのですが、信号も変わりそうだったので、とりあえず少し走り出しました。女性と言っても年配の女性。おばあちゃんです。「追いかけています、早く行ってください」と言われます。確かに、ミラーには、ジ

ャージを着た若い男性が困った顔をして必死に追いかけてきています。どこかの施設から出て来られたのかな？と思い車を降りて、その男性と話しました。やはり男性は施設職員で、おばあちゃんは認知症の方のようでした。少し、おばあちゃんのお話を聞きながら、職員の方にバトンタッチしました。再びハンドルを握りながら、ふと、おばあちゃんはどこへ行きたかったのかなと思いました。夜の街を走っていると、やはりときどき、高齢の方が、手押し車を押しながら歩いておられることがあります。また施設などでも居室を抜けてふらふらと歩く方もお

られます。それは「徘徊」と言われますが、皆さん、どこへ行きたいのでしょうか。「此処じゃない何処かへ」中島みゆきの歌にそんな歌詞がありました。「此処じゃない何処かへ」。

夏休みのできごと

大変残念な話題を取り上げざるを得ませんが、ご承知のように、この夏休み大阪の中学1年生の男女が殺害されました。同世代の子を持つ親や学校関係者ばかりではなく、社会的にもこの事件に対する関心が高まっています。ネット上では、逮捕された容疑者だけではなく、被害者の親へのバッシングも相当に行われています。「夜中に子どもが家を出ていってもほったらかしにしている」、「どうしようもない親だからこのような事件が起きた」「親の責任だ」と。

私が児童養護施設などで子どもたちと関わって一番感じたことは、他者からどのように見られる親だとしても、子どもたちはその親のことを大切な存在だと思っているということです。ですから、ひどい殺され方をし、さらに自身の親の悪口まで言われたら彼らは辛いだろうと思います。

さて、夏休みも終わり、学校が始まっていますが、彼らの友人や学校関係者は心のケアはもちろんのこと、家庭、学校、地域、社会で子どもたちを取り巻く状況の変化と子どもへの向き合い方について考えていく契機です。

「家出」

さて、「家出」をするということは、その反対の自室に「ひきこもる」と同様に、何らかのメッセージ性のある行動です。被害者の親を批判する意味はまったくありませんが、実際的には何らかの理由で彼らにとって「家」が安心できる場として感じられなかったのかもしれませんが。中学1年生の彼らは、その安らぎを求めて彷徨っていたのでしょうか。「此処じゃない何処かへ」残念ながら、地域のなかにも彼らにとって安らげる場所はなかったようです。そして、あまりにも無防備な徘徊でした。

野生動物の親は生死をかけて子どもたちに自分たちのテリトリーや身の守り方、生き方を教えます。人間社会のコンビニエンスな世界では、夜の何が危険なのか親も子も感覚が鈍ります。また、親子がスマホなどで繋がっているという安心感もあるのかもしれません。実際、「家出」をしても、メールやSNSでは繋がっていたり、自身の状況をブログなどで発信し続ける子どもたちもいます。従来のもっとも連絡が取れないという状況ではなくなってきています。そのため、これまで非行傾向のあった子どもたちだけではなく、一見「フツーの子ども」も夜間に家を出たり、無断外泊するということが出てきているのではないかといわれます。

背景に

児童虐待がうかがわれる家出

家出の背景には、さまざまな理由があるかと思いますが、児童虐待が疑われる家出について、2013年に改訂された厚生労働省「児童虐待対応の手引き」では、児童相談所と警察との連携の在り方について以下のような記載があります。

「(略) 小・中学生で公園等に寝泊まりしたり、『家に帰りたくない』などと言いつつ頻りに家出を繰り返す子どもがいる。この年齢の子どもが家出する場合には、夜間に1人で放置されている、身体的虐待を受けている、家庭内でDVが起きているなど、子どもにとって不適切な家庭環境であることも考えられる。児童相談所は迷子や家出で警察から要保護児童の通告を受けた場合には、警察から状況を十分に聴き取り、一時保護した後に保護者が判明した場合でも、虐待の疑いを念頭に置いて調査する必要がある。」

「(略) 迷子や家出等の事例であって、通告を受けて調査した結果、直ちに一時保護等の必要がない場合においても、このような状況が継続する場合には、深刻な虐待に発展することも考えられる。こうした事例については、要保護児童対策地域協議会の個別ケース検討会議を活用するなどして警察との情報共有を図り、警察が子どもを発見、保護した場合には通告してもらうよう、事前に警察に伝えておくことも必要である。」とある。

くり返しますが、今回の事件の背景に虐待があると言っているのではありません。あくまでも一般的な家出の背景についてのひとつの理由です。

さて、児童福祉法第25条では、「要保護児童を発見した者は、これを市町村、都道府県の設置する福祉事務所若しくは児童相談所に通告しなければならない旨を規定しています。家出や深夜はいかひをする子どもは、「要保護児童」です。保護されるべき児童なのです。国民全員に課せられた義務として。

Ⅲ. 社会への回帰

学びの森の住人たち（17）

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



5. もう一つのラウンドテーブル

ラウンドテーブルでは、アウラの森の子どもたちの変容の物語が、エピソードというカタチで毎回紹介されていきます。それは、ただ単に紹介されるというだけでなく、そこに、私たちなりの視点の捻りが加わります。例えば、みんなから孤立した生徒に対して、一般的には「集団の中いかに適応させていくか?」、あるいは、「いかにその子の社会性を育てていくか?」ということが支援の焦点になるように思いますが、私たちはあえて、「一人で生きていこうとすることが、果たして問題なのだろうか?」と問いを立ててみるのです。するとそこから、「〈一人で生きていける能力〉というものもあるのではないか?」という新たな問いが生まれたりするわけです。

つまり、不登校の子どもたちへの支援を考えることが、私たち支援する側の新たな気づきになったり、学びになったりするわけです。実は、このことが支援のあり方の多様性を拓いていくためにはとても大事な過程であるということ、私たちはアウラ

の森の実践を通して知ったのです。あらかじめ、どこかに正解としての支援のカタチがあるということではなく、みんなに同じような対応をするということでもない、「その子自身にとっての支援のカタチとは何か?」を考えることの大事さを、私たちはこれまでに学んできたように思うのです。

そしてさらに、私たちはこの経験をラウンドテーブルという仕掛けを通して、他の支援者とも共有化できることを確かめてきました。ラウンドテーブルでは、それぞれの支援者が、アウラの森の子どもたちの物語をきっかけとして、今まで当たり前のおこなってきた自分たちの活動や自分自身の個人的な経験などを、省察的に振り返ります。そしてその過程で、新しい何かに気づいたり、その意味を見出したりして表現されていったように思います。

私たちは、このラウンドテーブルを年4回開催しながら、もう一つのラウンドテーブルとして「ラウンドテーブル運営協議会」を4回にわたって実施してきました。この協議会では、私たちアウラの森のスタッフ

と京都学園大学の川畑隆先生の他に立命館大学大学院応用人間科学研究科教授の中村正先生にも加わっていただきながら、ラウンドテーブルそのもののあり方やそのテーマ設定、あるいはそのラウンドテーブルの記録から読み取れるセッションの文脈等についての検証をおこなってきました。

G. ベイトソンが定義したコトバの中に〈メタログ〉という概念があります。この〈メタログ〉は、〈メタ・ダイアログ〉（上位の対話）から来る造語で、目の前で交わされている対話の内容が、その対話を生み出している状況（上位の対話）としても表現されていく二重性を指すコトバです。メタログが交わされる環境の中では、参加者はその対話の内容を頭で理解しつつ、その状況からも身体を通してその内容を理解することになるのです。ここでは、二重の層の学びの世界が広がることになるのです。

私は、このメタログの概念をラウンドテーブルに取り入れようと思いました。ラウンドテーブルでは、このようなメタログがあらかじめ意図されていたわけです。アウラの森の子どもたちを、アウラの森の教師たちが振り返り、今度はそれを、ラウンドテーブルに参加する支援者たちが振り返り、さらにはそのラウンドテーブルそのものを、運営委員たちが振り返り、次回のラウンドテーブルのテーマへと落とし込んでいく。まさにそこには、そういった省察的な思考を前提とした循環構造があるのです。そしてこの循環構造こそが、多様な支援のあり方の模索へとつながり、多様な実

態を表現する不登校の子どもたちのキャリア形成の支えになっていくように思うのです。



6. リアリティの中で

今年度最後のラウンドテーブルの冒頭で「イジメ」の問題が取り上げられました。

「イジメの全くない学校は、本当にいい学校なんだろうか？ 問題の起こらない学校は本当に理想の学校なんだろうか？ 私は、学校を無菌状態にしたいいけないような気がする。問題があるから、進歩がある。問題があるから、それを克服しようという気持ちが起こってくるんじゃないだろうか？」

そう問題提起をしたのは、学校の管理職の先生でした。これはとても大事な論点です。私も普段から考えているように、問題の持つ意味というものが必ずそこにあるからです。

そしてその日のラウンドテーブルでも、さまざまな議論が交わされていったわけで

すが、その最後にいじめられた経験を持ったある女性の参加者が意見を述べました。

「社会の中のさまざまな問題や葛藤が必要なのはよくわかるし、理解できます。でも、学校のイジメはどんな小さなことでもなくなってほしい。私は中学生の時にイジメにあいました。それは、本当につらい出来事でした。途中で学校へ行けなくなり、しばらく家でひきこもったのち、関東にある全寮制の学校へ転校することになりました。でも結局、そこでもうまくなじめず、また地元へ戻ってきました。私は、そんな経験を持っている当事者ですから、いじめられた時の、どうしようもない辛さがわかります。だから、たとえ学校が無菌になったとしても、私はいじめをなくしてほしい。でもそう言いつつも、仕事でいろんなアーティストに会うと彼らの多くは、その辛さを原動力にして活動をしていることもまた事実です。葛藤がまた新たな作品を生んでいくのです。だから問題や葛藤は、必要なかもしれないとも思うのです。これは簡単に答えを出せないことかもしれないと…。でも、私はやっぱりイジメはなくしてほしい。無菌でも何でもいいからなくしてほしい」

彼女は、私たちにそう語ってくれたのです。

私は彼女の語りを聞きながら、そのコトバの持つ重さを感じていました。彼女の中では、中学の時のイジメの経験に端を發す

る葛藤がいまだに続いているのです。そう簡単に答えが出せないという、彼女の途切れ途切れのコトバこそが、彼女自身の持つ「リアリティ」を表現しているのです。

私は、彼女の話聞いていて、理論や制度、あるいはシステムの中に埋没してしまっているリアリティがあるように思いました。多様化する社会をある特定のフレームで括ってしまうと、どうしてもそこにリアリティがそぎ落とされてしまいます。彼女は、かつての自分自身を「地に足がついていない状態で毎日を生きていた」と表現していましたが、彼女に限らず、生きている確かな実感が持てないまま毎日がただ通り過ぎていくような感覚を持っている人は意外と多いのかもしれない。そこにもまたリアリティがそぎ落とされた世界が広がっているのかもしれない。

物語はリアリティを運びます。子どもたちのエピソードの中のリアリティが、ラウンドテーブルに参加している支援者たちのリアリティを誘発させているのかもしれない。ここでは、それぞれのリアリティが交差していきます。

このラウンドテーブルの中で、ある一人の臨床心理士が「私は今回、臨床心理士の資格を更新しません」と宣言をされました。みんなは、驚くわけですが、彼女はその行為を通して、資格という枠の中に見失われていくリアリティを見つめていたのかもしれない。とても興味深い出来事でした。

支援者の学びの場としてスタートした、

ラウンドテーブル。そこには、自分とは違った視点で意見を述べてくれる参加者がいます。自分自身のあたりまえに問いを投げかけてくれる人がいるのです。そして、そのあたりまえを問い直すことで、自らの経験が、問い直されたあたりまえと統合されていきます。そしてその統合の過程の中で、リアリティを含んだコトバが生まれ、それが物語となって表れていくように思います。

私は、制度やシステムを否定しようとは思いません。多様な社会においては、それらを整理し有効に機能させることは、とても必要なことです。しかし、その一方で私たちの持つ豊かなリアリティの世界がそぎ落とされていこうとしていることも、また事実です。だからこそ、そのリアリティを拾い上げ、それを制度やシステムに還元させ、それらが再び更新されていくような大きな循環構造を実現することが大事だと考えています。ラウンドテーブルは、まさにこの循環構造を想起させるひとつの社会的装置だと考えられるのです。



福祉系 対人援助職養成の 現場から²²

西川 友理

地域のこども祭りにて

学校近くの自治会主催のこども祭りで、学生たちが、一つのブースを担当させていただくことになりました。

あれこれ考えて、古新聞を使い紙鉄砲や帽子を折る折り紙コーナーを運営することにした学生たちは、当日までに折り紙の練習をしたり、教え方を考えたり、看板を作ったり、色々と準備を重ねました。

「小学生が新聞折り紙を喜んでくれるかなあ、大丈夫かなあ」と、実は少し不安だったのです。

が、いざ当日になると大盛況。

1時間半の間に約150人もの子どもが集まり、

「帽子出来たー！」

「どう、かっこいい？」

「おお、紙鉄砲鳴ったー！」

「鳴らへん！なんでっ？どうしたら鳴るの、これっ？！なあ、おーしーえーてーっ！！」

と、ワイワイ楽しんでくれました。

学生たちは子どもの年齢や理解度を勘案して、時には折り方を教え、時には目の前で作ってプレゼントし、時にはどっちが大きい音が鳴るか子どもと本気で勝負し…と、てんてこ舞いの忙しさでした。

大きな声を張り上げる学生A君。

「はいどうぞー！紙鉄砲つくるんやったらこっちやでーっ！」

その声に驚き、

「A君のそんな大きな声、初めて聞いたわ！授業中当ててもぼそぼそっ…と喋るのに！」と私が言うと、

「だってお祭りやもの。声出さないと聞こえないでしょう！」とニコニコしているA君。

折り紙コーナーに訪れた証明として、子どもが持っているカードにハンコを押す係りの学生Bさん。

ハンコを押す時に「どんなのを作ったの？」「やあ、かわいいのが出来たねえ！」等、子どもに色々話しかけていました。

「何かいいね、そうやって話すの」と声をかけると、

「だって、ハンコ押すだけなんて寂しいですもん。ちゃんとコミュニケーションしたい。せっかく来たんやから、このちょっとした時間だけでも、楽しい気持ちになってもらいたいな、って。」

普段はおしゃれなギャル系の服を着ているCさんも、今日はジャージ。躊躇なく地面に膝をつき、泥だらけ。子どもに話しかけつつ、子どもを連れてきた親御さんにも上手に説明し、人員整理をしています。

担当時間が終了し、学生撤収まであと数分、という時。

幼稚園くらいの女の子が、学生Dさんに「帽子、作りたい」と言いに来ました。

Dさんは一瞬悩みました。もう周りの学生は片付け始めている。でも、作りたいとわざわざ言いに来た子どもがいる。

この年齢の子に教えるとなると、結構時間がかかる。しかし、作る時間はない。

その時、その子どもの持っているバッグにピ○チュウのキャラクターを発見したDさん。

「ピカチュ○、好き？」「うん！」

○カチュウなら折れる！と判断したDさんは手元にあった黄色い折り紙で急いでピカチ○ウを折り、

「じゃあ、このピ○チュウのお顔、描いてくれるかな」とペンを渡しました。

顔を描くくらいなら、子どもでも、ものの10秒で描けます。

そしてストックしてあった帽子の完成品に、ピカチュ○をホチキスで留めて、「出来たよ、ピカチュ○帽！」と、子どもにかぶせました。

「かわいい！ありがとう！」その子は満面の笑顔を見せてくれました。

社会人には、 主体性が求められている

社会人には主体性が必要、という言葉は、テレビや新聞、あるいは経済雑誌などで、日頃からよく目にします。

「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力」を構成する12の能力要素の中でも、特に仕事全体に関わってくると言われているのが主体性です。

株式会社AIDEMが、2015年3月に、企業の新卒採用業務担当者1000名を対象に行ったアンケートでは、新入社員に求

める能力として、社会人基礎力の中でも特に「実行力」と「主体性」が突出して求められていました。

では改めて、「主体性」とは何なのでしょう。

主体性に似た言葉で、自主性や自発性があります。

今回この文章を書くにあたり、改めて辞書で言葉の意味を確認しました。

それによると、自主性は「自分の判断で行動する態度」となっています。また、自発性は「他からの影響・教示などによるのではなく、自分から進んで事を行おうとすること」となっています。

これに対して、主体性は「自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動する態度や性質」となっています。

主体性という言葉には、自主性や自発性と比して、「自ら責任をもって」行うという点が重要なようです。

主体性に基づく行動には、大なり小なり、責任がともなう事を自覚する必要があると確かに私も考えます。

しかし、社会人に求められている「主体性」には、上記の辞書に記載されている言葉だけでは足りないと思うのです。

社会人に 求められている主体性とは

例えば、先ほどのDさんについて。

彼女はその時、皆と一緒にその場を片付けている真っ最中でした。しかし、その場に来た女の子の言葉を聞いて「私は子どもたちを楽しませるために、今日こ

こに来ているのだ」という自分の役割、自分が今そこにいる「目的」を果たそうとしました。と同時に、周りの「状況」を見て、「いや、今から帽子は作れない」と判断しました。では何が出来るのか、と、とっさに考え、その考えに基づいて、行動しました。

この女の子は、「帽子作りたい」と言ってきました。しかし、結局帽子は自分で作っていません。Dさんが作ったピカチュウに顔を描き、Dさんに渡しただけです。

もしかすると女の子は、帽子の作り方を知りたかったのかもしれませんが。あるいは、自分で作った帽子が欲しかったのであって、人からもらうのは嫌だったのかもしれませんが。どちらの場合も、女の子は帽子を渡されても、不満を持ったことでしょう。

しかし、Dさんは実際に女の子から笑顔をもたらせたのです。

「大改造！！劇的ビフォーアフター」という番組があります。

古くなったり、家族の状況にあわなくなったりといった、その家族が住むには何らかの問題がある家を、匠と呼ばれる建築士や大工がリフォームする過程を流す、ドキュメンタリータッチのバラエティ番組です。かなり有名な番組なので、見た事がある方も多いと思います。

匠は毎回変わりますが、どの匠も依頼主の今抱えている問題を解決しようと奮闘します。リフォーム後、依頼主が新しい家を見ると大抵、思ってもみなかったいいリフォームだ、と驚き、感動して

いるように見えます。当初の問題の解決だけではなく、いつも何かのプラスαがあります。

番組ホームページには「ただ見た目を改造するだけが匠じゃない。大改造というテーマを通して、家族の絆が生まれたり、新しい発見や感動があったり。そんな『心の中の改造』までやってしまう、それが『大改造！！劇的ビフォーアフター』の本当のテーマなのです。」と書いてありました。

この番組におけるリフォームは、単に依頼主の家に関する問題を解決する事ではなく、リフォームを通じて「家族の絆」「新しい発見や感動」を生み出し、その過程を見せるという「目的」を持ち、TV番組という制約、リフォーム予算、依頼主の思い、そして建築に関する法制度などの様々な「状況」を踏まえて、行われているものなのです。

このように、主体性には、「自分が何をすべきか考え、その考えに基づいて責任ある行動をとる」前に、「その目的は何か」「今どういう状況か」を把握するプロセスが欠かせないと私は考えるのです。

単に「自分の意志・判断によって、自らから責任をもって行動」するのは、ただ自分勝手に独りよがりな行動になりやすいのではないのでしょうか。特に仕事において、その目的を見失い、どういう状況にあるのかよくわかっていない状況で「自分で責任をとる！」と行動されると、かなりの確率で、周囲に迷惑を及ぼす結果になってしまうと思うのです。

Dさんの例は、単に女の子の言葉に振り回されるのではなく、女の子と周囲の状況をよく見て、「その目的と、その状況において、自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動」した結果、女の子が満足する結果を引き出すことが出来ました。

「ビフォーアフター」は、匠の皆さんがその時々で状況を見失わず、リフォームをしているところを映している番組だから、2002年から今日まで、長く愛されているのだと思います。

ですから、主体性とは「その目的と、その状況において、自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動する態度や性質」と考えられるのです。

利用者主体と、 対人援助職の主体性

福祉系対人援助職として働く時にも、主体性が重要だと私は考えています。

…と、このように言うと、社会福祉分野の人には、違和感があるかもしれません。なぜなら、社会福祉には「利用者主体」という言葉があるためです。

この言葉をそのまま受け取ると、支援における主体は利用者にある、という考え方に見えます。そうすると対人援助職の主体性、という言葉には、なんとなく後ろめたさを感じるのではないかなと思います。

雑誌で、こんなエピソードを読んだことがあります。

ある和風旅館で、お客様がワインを注

文しました。従業員が「あいにくワインは置いておりません」というと、お客さんは怒ってしまいました。そこでその従業員は町内を走り回って、ワインを探しました。

あいにくお盆休みの真っ最中、懇意にしている老舗の酒屋さんはお休みです。やっとワインを見つけたのはコンビニでした。早速そのコンビニでワインを購入し、急いで帰ってお客様に提供しました。

するとお客様は「何だよ、あるんだったら早く持って来いよ」と不満そうに言いました…。

こういったことは、福祉業界でもよくあるのではないかと思います。

利用者主体とは、単純に利用者がそうしたいと言ったから、支援者が従者となり、その通りにする事ではありません。

また、支援者が自分の価値観・価値基準に基づいて援助する事はありません。

利用者の立場や視点に立って、利用者の自己決定を尊重する態度の事です。

お客様の言葉に従って行動をしたのに、お客様を不愉快にさせてしまった旅館の従業員は、お客様の「ワインが欲しい」という言葉に対応せんがため、その旅館のサービスの「目的」を見失ってしまい、主体性のない行動になってしまったのです。

この旅館がどのようなサービスをすることが「目的」かきちんと見据え、出来る事出来ない事は何か、「状況」を把握して対応することが、大事だったので

はないでしょうか。

福祉サービスも同じです。「目的」は何か、福祉制度に出来る事、出来ない事、そしてその利用者は何をどうしたいと考えているのか、それらの「状況」を踏まえた上で、対人援助職の私が今出来る支援は何だろうかと考え、利用者へ介入する。対人援助職の主体性とは、こういった態度や性質の事です。

それはまさに、利用者の思いや考えを踏まえた、利用者主体の支援になります。

つまり、支援者が主体性を発揮することで、利用者主体の支援ができるのです。

だからこそ、福祉系対人援助職にも、主体性が必要と考えるのです。

このように、目に見える「主体」という字面が同じなので、間違えそうになりますが、「支援者の主体性」と「利用者主体」にそれぞれ使われている「主体」は、全く別の意味なのです。

よりよい支援のために、 主体性を身につける。

児童養護施設の職員だった頃、ある中学生への支援がどうしてもわからなくて、困りに困って、上司の前で、絞り出すように、

「結局、何が正しいやり方なんですか。答えを下さい！」

と言ってしまった事があります。

とにかく前が見えなくて、どうすれば良いのかわかりませんでした。頭では「答えはない」という事がわかっていました。また、仮に上司がその時「こうす

るといい」と何かの手段を伝授して下さったとして、その方法が自分に出来るのかというと、そうとは限らないこともわかっていました。

これでいいよ、というマニュアルのような、何も考えずに「こうするといいと言われたからそうする」というような“答え”が、その時は本当に本当に欲しかったのです。

それは、主体性を放棄した、無責任な態度であったと今さらながら思います。

また、同じ職場で、ある先輩が退職する時に、「あなたは、もっと自分を出してごらん。そしたら、もっと仕事が楽しくなるよ」というメッセージを下さったことがありました。

その時は、自分を出すとはどういうことなのか、全く意味が解りませんでした。

今考えると、自信のなさから回りの様子や顔色ばかり見て、仕事の「目的」を見失い、「状況」に振り回されがちだった自分に対して、「そんなにビビらなくてもいい、もっと主体性を発揮していいんだよ」という事を伝えてくださっていたのだとわかります。

対人援助の現場では、目の前の事に手いっぱいになり、他人に責任をなすりつけてしまったり、「目的」や「状況」を把握することを忘れてしまったり、といった事もあると、私自身の経験からも感じます。

近視眼的な、対処療法的な、マニュアル的な支援では、利用者主体の支援をすることは難しいのに、それを求めて誤ってしまうのです。

だからこそ対人援助職は、利用者により良い支援をするために、主体性を身につける事が必要だと思うのです。

対人援助職を目指す学生が主体性を身につけるために、養成校の教員が出来る事は、

- ①安心できる状況か、安全な状況か、学生自身を含めた状況を見極める事
- ②見極めた上で、可能ならば、それぞれの在りようを認め、信じ、任せる事
- ③学生が発揮した主体性にプラス評価をする事

この3つではないかと考えています。

安心と安全と自己肯定感

安心・安全とは、学生の周囲の環境や社会関係を指すだけではなく、学生の心身の安心・安全をも指します

つまりその学生に、自らの置かれている環境に対する信頼と、自身に対する信頼が、一定程度保たれている必要があるのです。

そのため、教員は、学生が安心・安全でいられる学習環境を整えるように配慮します。

「いつも」

それは、日々学生をよく見て、学生の意見をよく聞き、不安定な状況に陥っていないかと確認することです。

不安定な状況に陥っていない、安定しているという判断が出来るならば、学生それぞれの在りようを認め、信じて任せます。

学習環境や、学生の心身に不安定な状

況があるように見受けられるならば、授業の方法を改善したり、スクールカウンセラーと連携して対応したりと、その学生が本来の在りようを取り戻せるように働きかけます。

学生の日々の経験の積み重ねを大切にし、評価することが、その学生の自己肯定感を育てる事になると実感しています。

自己肯定感とは、いわゆる自尊心のことです。自分が価値ある存在だと感じられる事です。無条件に愛され、認められることで育ちやすいといわれています。生育暦に大きく影響されるものですが、成長してからでも育てる事は出来ます。

自己肯定感が育つことは、主体性の醸成に大きな影響を与えます。主体性を発揮し行動する時の勇気という、根源的な力になります。

教員が気をつけること

ただし、何度も書いた通り、学生が「目的」を見失ったり、「状況」を把握できなかったり、自己満足的な自己肯定感にならないように、教員は2つの事に気を付けなければなりません。

ひとつは、その学生のこれまでの人生経験に敬意を払い、考え方を尊重するという事です。

誰にでも、それまでの人生の中で得てきた経験に基づき自ら培った判断基準があります。わずか5歳の子にも、判断基準があります。ましてや20歳前後に

もなればなおさらです。

知識、スキル、良心、善意、公共心、正義、自分を大切にすること、他人を尊重すること、ルール、モラル。また、これらを破っても大切にされた方が良いと思う事…それらは個々人が培ってきた、いわばこの世の中を計る時の“物差し”のようなものです。また、それまでの授業で教員らが教えたことも、その学生の物差しのひとつの目盛りとして刻まれています。

その物差しを信じて任せてしまうほうが、「こう考えて、こうしなさい」と押し付けるより、長い目で見ると、学生にとって得る物が多いように感じています。学生自身が考え、行動した経験からは、学び取るものが多いと思います。

さすがに自傷行為や、公共の福祉に反する行動に対しては、抑制する必要がありますが、単純に、成功すれば良い、失敗すれば悪い、という話ではありません。大失敗したことで「あれは、勉強になった」としみじみ学生が語った事も多々ありました。

もうひとつは、豊かな対人関係を築けるような環境にする事です。

判断基準のという物差しは、他の人の物差しと出会い、相互作用することで、新たな物差しのあり方に気づき、学び、伸長していきます。

様々な物差しを持った、あらゆる世代の人と、お互いを尊重しあい、交流する。

それはその学生にとって支持的なものばかりではなく、うるさい人も嫌な人も面倒な事柄もあるでしょうが、その相互作用を積み重ねることによって、個々

が持つ物差しは、より伸長され、多様に変化します。

するとまた、お互いの物差しの存在を認めやすくなると同時に、自らの変化を受け入れる姿勢が生まれていくのです。これにより、変化への恐れが低減し、変化のよさにも気づき、さらに主体性も培われていきます。

この2つは、対人援助職としてクライアントに対応する時にも必要な事です。

教員がこの2つを大切に学生と関わっていると、やがて学生達もお互いを信じて動き、人ととのつながりを活かしていくようになります。さらには、お互いを尊重していくようになると感じています。

どんどん主体性を発揮する学生

「紙鉄砲」のサンドイッチマンになったE君は、次々来る子ども達と紙鉄砲を作り、変な格好で鳴らしたり、子どもに勝負を挑んだり…。

子どもと一緒に作り上げた紙鉄砲を、力を込めて、パーン！と鳴らすE君。

それを見た子ども達も、思いっきり、パーン！！子ども達を連れてきたお父さんも、パーン！！

お互いにえへへ、と笑っています。

後日E君は、この経験を振り返り、語って聞かせてくれました。

「最初、準備段階では紙鉄砲なんてしようもない…とっていたけれど、やってみたら面白かった。面白いと思ったら、子どもにもしてもらいたくなっただけで

す。今の子、知らないんですよ、紙鉄砲の作り方。ビックリしました。」

「紙鉄砲をたくさん持って、歩き回って…まずは会場のいろんなところで、子どもたちにやってもらったんです。面白さを目の当たりにしないと、面白いと思わないでしょ？」

「面白いと思ってもらうためには、自分が楽しい姿を見せることが、一番いいかなと思って。子どものお父さんも巻き込んだり、一緒にはしゃいで見せたり…。」

「子どもら、めっちゃ喜んでくれました。よかったですわ！！」

このE君も、「目的」を認識して、子どもをよく見て、「状況」を踏まえて、何をどうするか考えて動く。主体性を発揮していました。

「何やねん、君らすごいやん！」

学生は自分でどんどん新たな行動を見せてくれます。その場に来た人々との相互の関係性の中から、どんどん新たな主体性が発揮されているのです。

お互いのやり取りができる社会関係の中で、この人たちはどんどん自分の主体性を磨いていくんだな、と改めて感じた経験でした。

先人の知恵から

10

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回で 10 回目。やっと「う行」が終わる。この 10 回を振り返ると、さまざまな諺を見直した。このように諺を意識すると、使うことが増えることに気がついた。もっともっと諺を大事にしていきたいと、この 10 回の節目に思った。

今回の諺は次の 8 つ。

- 馬の耳に念仏
- 馬を水辺に連れて行けても、
水を飲ませることはできない
- 生みの親より育ての親
- 海の物とも山の物ともつかぬ
- 裏目うらめにでる
- 噂うわさをすれば影がさす
- 生んだ子より抱いた子
- 運を天に任せる

<馬の耳に念仏>

人の意見や忠告に耳を貸さず、少しも効果が無いことの例え。「馬耳東風」、かえる「蛙の面に水」、つら「どこ吹く風」も同様の意味。

この諺は一般的に良く知られていると思う。親子の間で聞かれるのは、思春期の子が親の言うことを全く聞かない時などに使われる。又支援者も度々使っていると思う。入院したほうが良いと言っても「それほど悪くは無い」と言って入院に繋がらないとか、「特別支援の方がお子さんには合っていると思う」と伝えても、「うちの子はそんなに馬鹿じゃない!」とか、どんなに一生懸命理解して貰おうと説明しても、全く拒否されてしまったり、分かってもらえなかったりなどという場合にも使ったりする。

しかし、筆者としてはこの言葉を支援者

に贈りたい。支援者にも、人の意見や話をきちんと聴けない人、自分は正しいと思い込んでいる人がいる。

「おごり」程醜いものはない。すべてを知ったと思い込んで人の話など聞こうともしない人がいる。意見を言ってくれる人の話をきちんと聴く事が出来ない人は支援者としての資質に欠けると思う。

自分と違う意見を持っている人は、自分にとって役に立つことも多いのに、みすみすそのチャンスを生かせないとしたら、自分は成長することも変化することも無いだろう。自分にとって心地よい事だけを聴こうとしていないだろうか？自分におごりは無いだろうか？支援者は常に自分を振り返り、念仏を聴ける耳を持っていたいものだ。

英語では・・・

A nod is as good as a wink to a blind horse. (目の見えない馬に頷いても目くばせをしても、同じことだ。)

＜馬を水辺に連れて行けても、水を飲ませることはできない＞

本人が気が進まないのに、周囲の人が無理にさせようとしても、無駄だということ。元々英国の諺。

子育てのところでこの諺を使うのは、「学校で勉強に身が入らない」とか、「塾に行かせているのに宿題もやらない」とか、「ピアノを習わせているけど家で全く練習をしない」とか、そんな言葉を聴いたときである。

本人のやる気を出させることが何よりも大事である。どうすれば、やる気が出るのかを考え、工夫することを勧め、それでもだめなら放っておくしかない。代わりに学校に行く事も出来なければ、代わりにピアノの練習をしても何にもならないのだから。

何のために、或いは何故、学校や塾に行っているのか、ピアノを習っているのか、について、じっくり話し合う事も無く、義務だからとか、皆が行っているからとか、親の希望の押しつけであれば、行く気ややる気が無くても不思議はない。子どもの気持ち聴きながら、考えてもらいたいときに、この諺は分かりやすいと思う。

英語では・・・

You may take a horse to the water, but you cannot make him drink.

＜生みの親より育ての親＞

生んでくれただけの実の親よりも、長い間苦勞して養育してくれた親（養父母）のほうに、愛情がわき、恩義も感じるということ。

最近、産みっぱなしの親に出会うことが増えた。実家に預けてそのままいなくなってしまった母親もいた。子育ては祖父母に任せて、仕事のため、遠くに住んでいるという両親もいた。捨て子や乳児院に預けられた子ども達。施設で育てられた子ども達。或いは養子縁組をして、大事に育ててもらって居る子もいる。施設の職員や養父母は

その子にとって実の親も同然で愛着も育っている。

この子たちの生みの親を親と呼べるだろうか？生物学的には確かに産んだことは事実で、生みの親は親である。だからと言って、育てもせずに親だと主張したらどうなるか。

子どもを祖父母に預けて何年も遠くに行っていた母親がいた。ある日その母親が再婚し、子どもを引き取りたいと祖父母に言ってきた。子どもはどうすべきか？母親に対する思いは当然ある。しかし、見ず知らずの男性を父親として受け入れ、しかも慣れない土地へ行く事にはかなりの抵抗があった。悩んだ末に、その子は祖父母を選んだ。母親は怒り、祖父母との関係性も悪くなった。

母親には母親の言い分もあただろうが、長年育ててくれた祖父母との関係性はそう簡単に引き離せるものではない。この諺をそのまま表した事例であった。

子どもは育ててもらっている人に愛着を感じる。愛情を持って大事に育ててくれる人とは猶更深い愛着を形成して行く。保育所の保母さんに愛着を持ちすぎないのは、他にも子どもがいるからで、一対一ですと見てもらったら、母親よりも愛着を持ってしまう可能性がある。長時間世話をしてもらってれば、そう言うことも起こりうるのだ。だからこそ、生みの親より育ての親ということになるのである。

<海の物とも山の物ともつかぬ>

物事の見通しについて、将来どうなるか見当がつかず、何とも言えないことの例え。その人が将来出世するかどうか、期待できるかどうか分からない若者について言うことが多い。「海とも川ともつかぬ」とも言う。

母親の相談にのっていると、よく「この子は将来父親のように理系に行かせた方が良いでしょうか？」などと訊かれる。子どもが、中高生ならいざ知らず、まだ幼稚園児だったりすると答えようがない。恐竜好きや昆虫好きが必ずしも理系に行くとは限らない。そんな時にこの諺を使っている。母親たちは、早くに子どもの行く末を決めて、一方向に伸ばしたいという思いを持っているようだ。子どもの能力や特性に気付き、得意分野を伸ばしたいという気持ちも分かるし、特に発達障がいがあるお子さんでは、それも必要な手立てかも知れない。しかし、余り早々に「この子は国語は苦手だ」などと決めてしまい、努力させないでいけば、その子は国語が得意にはならないだろう。

海の物とも山の物ともつかない間は、色々なことにチャレンジさせてみるのが大事ではなかろうか？

<裏目に出る>

良かれと思ってしたことが、逆に悪い結果となって現れることの例え。

こういうことは度々経験するのではない

だろうか？人が自分なりに考えて、何らかの手立てを決めて実行した時に、時折裏目に出ることがある。特に親と言うものは、子どもの事を常に思っているが故に頑張っ、頑張りすぎてしまうこともある。「子どものために良かれと思ってしたことなのに・・・」とは、そうした親が、予想外の悪い結果をみて漏らす言葉である。

我々支援者も同様に、何かをした時に、良い結果を得られない事がある。「良かれと思って・・・」と言う場合に良い結果を得ることは意外と少ない。やり過ぎではないか、領分を超えていないか、本当にこれがその人にとって良いことになるのか、よくよく気をつけねばならない。下手なことをするより、傍観する方が良い場合さえある。裏目に出ることは出来るだけ避けたいと思うが、避けられない事態もある。それはそれで受け入れ、次の手立てを考えていこう。

＜噂うわさをすれば影がさす＞

人のうわさをしていると、丁度そこへその人がやってくる場合があるものだということ。「人を談うわさすれば人至る」とも言う。

この諺は、本当にびっくりするくらい真であると思う。誰もがこうした経験を持っているのではないだろうか？対人援助の仕事をしていると、しばらく音沙汰が無い人のことを、ふと思うことがある。「あの人がどうしているのだろうか？元気かしら？」と。大抵の場合、余り会いたくないケースだっ

たりするが、仲間と久しぶりにその人の話をしたりすると、電話がかかってきたり、突然来訪されたりということがある。

何故これほどの中するのか不思議な気がする。「諺って凄い！」と改めて思う。

英語では・・・

Sooner named sooner come. (名前を呼ぶや否や現れる) 又は

Speak of the devil and he will appear. (悪魔の噂をすると悪魔が現れる)

＜生んだ子より抱いた子＞

生んだだけで育てなかった実の子よりも、他人の子でも幼い時から養育した子の方が可愛いということ。

前述の『生みの親より・・・』は子ども側からの捉えであるのに対し、この諺は大人側の捉えである。育てる側にとっても、小さい時から育てていけば、実の子でなくても愛情がわき、可愛いと思えるようになるが、生んだだけで育てなければ、愛着も弱く、可愛いと思えない。最近では産んだ子を「可愛くない」と言ってしまう親にも出会う。そんな時は、誰かその子を可愛がってくれる人に預けた方がその子のためだと誰もが思うだろう。

本来的には人間も動物なので、子どもが生まれたら自然に母乳を与え、世話し、愛着形成をしていくものであるが、最近は動物性が減少し、頭で考えるがゆえに、愛着形成が弱くなってきている。

生んだ子を可愛いと思えなかったら、日々の世話は辛いだけだろう。それでも抱いたり、声を掛けたり、ミルクをあげたりと世話をしていれば、段々に反応してくれるし、可愛くも思えるようになる。たとえ生んでいなくても、可愛くなるのなら、生んでいれば余計に可愛くなるだろうと、この諺を使って今日の前の母親を支えることもある。

<運を天に任せる>

結果を恐れずに物事に取り組むこと。成り行きがどうなるかは天の意志にゆだね、運命に従うということ。以前に紹介した「当たって砕けろ」や「案ずるより産むがやすし」も近い意味合いがある。

誰にとっても明日の事はわからない。ただ、人は、明日も今日と同じように訪れ、未来も来るとの予測の中で、様々な計画を立てながら生きている。

子育て支援の中でも、子どもの未来を考えながら、親を支え、相談にのっている。しかし、時には、「えいっ！」と清水の舞台から飛び降りるような事もある。

例えば、お稽古事の話でも、「最初は本人がやりたいと言ったからやらせたけど、辞めたいと言うんです。辞めさせた方が良いでしょうか？」と相談されることがある。どのくらい続けたか、どのくらい上手になっていて、その子にあっていくかどうか、などの検討事項はあるが、辞めさせるかどうかは親が決めることになる。その結果がどうなるか、ある程度考えはしても予測は立たない。そんな時は、「運を天に任せてやってみるしかないですね。」ということになる。その結果前述のように「裏目に出る」こともあるだろう。どんな結果であっても、それはそれなりに受け入れるしかない。

また、あれこれ悩んで動けない親や支援者にも、この諺は使える。とりあえず、「やってみよう！結果はきつついてくる！運を天に任せて。」と言ってしまうのは楽天的すぎるだろうか？

今回はここまで。

例えば、卵子提供による家族形成について⑦

～ドナーとその家族におもいを馳せる～

荒木晃子

自らの意思で

2015年5月末日、本連載テーマに関する大きな転換期を迎えた。2013年秋に就任した、特定非営利法人卵子提供登録支援団体(以下、OD-NETと略称)理事及びマッチング委員長を辞任するに至ったのである。辞任を決意する要因となった具体的な出来事を、今ここで述べることは控えたい。あえて言葉の角を取り、事実即した自分なりの辞任理由を一言でいうならば、OD-NETのいう、無償卵子提供ドナーの「登録手続き」と「医療機関への紹介」のみを目的としたサポート体制に、対人援助の概念はないと判断したためとでもいうしかない。しかし実際には、卵子ドナー登録を支援するにあたり、多くのドナー希望者に対応する中で、筆者は常々、対人援助の必要性とそれを担う専門家が不可欠であると感じる日々を過ごしていた。

確かに、設立当初は筆者が直接、又は間接的に登録を希望するドナー応募者の方々の援助に関わっていた事実がある。しかし、実際に、「応募後、諸手続きを経て、無事登録が済んだドナーと、医療施設から紹介を受けたレシピエントとをOD-NETマッチング委員会でマッチングし、組み合わせが決定した後は、そ

のドナーを医療施設に紹介する」といった一連の経過を幾度か繰り返す中で、いつしか筆者とドナーの関わりは徐々に薄れていった。OD-NET内で直接ドナーと関わる作業は、ある特定のメンバーに限定され、「マッチングに必要な基本情報」以外の情報が、最終的にOD-NET内部で共有されることはなくなってしまった。応募以降、ドナーとその家族にいかなる事態が生じても、その支援やサポートができない体制に変化したと感じざるを得なかったのだ。まるで、ドナー支援はOD-NETの役割ではなく、「卵子を提供する患者となったドナー」に対する医療施設の医療業務の一部に移行されたかのようなようであった。

筆者はいま、自戒の念を込め、在任期間を振り返る。日本初の無償卵子提供ドナー登録支援団体の設立当初から辞任まで、約2年半に渡りつとめたOD-NET理事としての責務と、20組を超える「レシピエント及び卵子提供ドナーのマッチング」に携わる会議の委員長をつとめた自己の責任は今後、形を変え、引き続き果たしてゆかねばならないと考えている。

まずはその第一歩として、OD-NET在任中、理事として、またマッチング委員長としてその役目を果たすべく微力ながら尽力するなかで見えた課題や解決すべき(と感じた)問題など

を、本紙面に書き記していくことから始めたい。これまで、生殖医療を必要とする当事者を対象に営利目的のビジネスを展開する「生殖ビジネス」に対する問題意識は、社会に提起され続けてきた。しかし、OD-NET はあくまでも非営利団体であるため、団体の活動そのものに営利目的はない。しかしながら、過去に誰も試みたことも、参考モデルやマニュアルさえ存在しない「無償卵子提供ドナーを募集し、生殖医療施設へ紹介するまでの登録手続きを支援する」活動には、設立当初から課題が山積しているであろうことは誰の目にも明らかであり、また、事実と相違なかった。

ドナーが教えてくれたこと

昨年実施した、精子・卵子提供や代理出産など、夫婦以外の第三者が関わる生殖医療に関しての意識調査(厚労省研究班,2014)の結果からは、以前と比較するとかなり国民の理解は深まりつつある(あくまでも、筆者の希望的観測)ものの、現在もその実施に強く反対する声が多いのも事実である。なかでも、現在では年齢 60 を超えた(方もおられる)精子提供で生まれた人々が、匿名の精子提供者(=遺伝上の父親)が特定できないことによりアイデンティティの確立に揺らぎを覚えるといった苦悩の声は、常に筆者の脳裏から消えることはない。しかし、彼らを含め、その実施に真っ向から反対する者たちの目には、当然のことながら、精子・卵子提供者の行為が、善意、献身、貢献、人類愛など多岐にわたる思いや動機が“人を援助する”という行動にむすびついた結果だとは映りにくいであろう。同じことが、これを目にする読者の方に共通するかもしれ

ないし、果たしてそれは「一般に」という言葉に置き換えることができるかもしれない。

しかし実際に、2年半の活動期間中、筆者に届いた卵子提供を希望する女性たちの「ドナーの志望動機」には、先にあげた善意にあふれた小さな声が生かされてきたことは、まぎれもない事実である。第三者の関わる生殖医療が、提供ドナー(第三者)の存在ありきの生殖医療であるならば、まずは、提供を希望するドナー女性の声を集め、彼らに対する支援や保障ニーズに耳を傾け、更には、その家族に関する同様のサポート体制を社会で構築すべきなのではないだろうか。そして、それは、医療機関で医療者が担うべき役割でもなく、一民間団体が手探りの状況のなか、独自のルールで特定の医療施設との間でのみ契約を結び、実施すべき行為ではないとも考える。第三者の関わる生殖医療が、新たな家族形成のあり方として社会に容認されるには、その家族形成径路に即した民法の改定や、生殖医療法の整備を前提とした社会規制を含むルール作りが必須となろう。精子・卵子提供者であれ、リスクを承知で無償で提供を希望する第三者(ドナー)たちは、誕生した児が、その子を愛しみ育てたいと願う両親に愛され幸せになることを信じ、不妊当事者の家族形成の一助となればと、「提供」という行為に自らの意思で臨む/臨んだのではないのか。「生殖医療による第三者の関わり」を、そのように捉えることができる社会になることが、そこに産まれた/産まれる子どもたちの幸せになる権利を保障することにつながりはしないだろうか。人は、自分の内にある動機に基づき、自らの意思で責任ある行動を起こすとき、その人の持つ最大の力を発揮できるとの前提で、筆者は常々人を援助することを心掛けている。

最新の動向

2013年1月から始まった国内初の「無償卵子提供ドナーを募る支援活動」の中で届いた様々な当事者の声は、これまでも多領域の学術会議等でお話しする機会をいただき、各々の講演の中でご紹介させていただいた経緯がある。特に、自民党政務調査会生殖補助医療に関するプロジェクトチーム(座長 古川俊治参議院議員)へ、4つの当事者団体と共に手渡した、『特定生殖補助医療に関する法案』制定に向けた要望書に記載した要望3案件には、一法人の存続如何に留まらない「第三者提供型生殖補助医療の法案制定に関する重要な項目」が記載されている。さらに、筆者が日本学術会議法学委員会生殖補助医療と法分科会(第22期・第3回 2013.10.20)で、OD-NETの総意として報告した活動報告及び、現状の課題と問題、他にも、科研費研究会『多層化する家族と法の全体構造に関する実証的比較法研究』「A2 ユニット 親子の自然と社会性」グループ研究会(2015.3.19)で報告した内容の内、筆者が研究者として抽出するに至った課題や問題等のそれぞれに、今後も更なる分析と考察を加え、そこに見解を添えて今後記述していきたいと考える。なお、記述内容は、過去にシンポジウム、学術会議、研究会など専門家を対象とした報告会や講演など、また、報道やインターネット上で知り得た出典の確かな公開情報に基づくものであり、OD-NETの活動で知り得た卵子提供ドナーやレシピエントの個人情報には含まない。あくまでも、過去に筆者の研究活動及び経験から知り得た、もしくは、個人的に関わりのあるレシピ

エントや卵子提供ドナー、また不妊当事者カップルに了解を得た内容である旨、ここに書き記すこととする。

法整備はどこまで進んでいるか

2015年7月27日、NPO法人OD-NETは、卵子提供ドナーの募集開始から約2年半を経た現時点での状況を記者会見で公表した。その内容は、過去に筆者がマッチング委員長をつとめ成立した「レシピエントと卵子提供ドナーのマッチング」の内、2名のドナーに対して採卵が実施され、それぞれマッチング対象であるレシピエントの夫精子との体外受精に成功。作製し凍結した複数の受精卵(胚盤胞)は年内にもレシピエントの子宮に移植するというものであった(2015.7.27 毎日新聞夕刊)。この春、筆者がその情報の詳細を知って以降、その公開日まで、胸中に渦巻く悶々とした、どこか後ろめたい思いが少しは薄らいでいく感をかすかに覚えた(筆者は、個人情報や守秘義務情報以外のNPO情報は、可能な限り公開し、社会に還元すべきとの考えが前提にある)ものの、その発表内容に、現在までに表出した、また今後、新たに生ずるであろう課題や問題が提示されてはいなかった。つまり、今回のOD-NETの発表は、無償卵子提供ドナーによる生殖医療現場の進捗状況の現状報告に留まるのであって、(忌憚ない意見をゆるされるのであれば)医療現場からの報告と誤解されかねないのではないかと感じ残念に思う。OD-NETは、地方自治体の認可を受けた特定非営利活動団体であるため、提携する医療機関や、OD-NETの採用するガイドラインを作成する営利団体とは、どこかで一線を画す必要

もあろう。

果たして、(国内外を含め)過去に誰も経験したことの無い、無償卵子提供ドナーの登録を支援する活動に於いて、何一つ問題なく、トラブルも起きていないと考える人間がどれほど存在するだろう。OD-NETの先の会見では、夫婦間以外の体外受精には賛否両論あるが、望む夫婦は沢山いる。無償で卵子提供するボランティアのためにも早急な法整備を求めたい(2015.7.27 毎日新聞夕刊)とあるが、ボランティア(ドナー)の身体的リスク以外に、具体的にどのような法整備が必要かを明確に語ることはなかった。身体的リスクに対する保障とは、万が一の医療事故等に対する医療保障というのであろうが、それはあくまでも卵子提供を実施するための医学的処置が前提のものであって、ドナー夫婦関係の調整や、ドナーの子どもたちに“卵子提供の事実をどう伝えるか”等、ドナーとその家族への援助内容は含まれていない。OD-NETの活動目的である「卵子提供ドナーの登録を支援する」とは、実際、どのような支援が行われているのであろうか。ちなみに、OD-NET内に当事者は不在で、医師と弁護士を除き、人を支援するための対人援助スキルを体得した専門家や、ドナー支援及び心理的サポートに特化したスキルをもったメンバーも存在しない。また、**卵子を必要とするターナー当事者の家族が代表をつとめるも、当事者の「家族」は、当事者「本人」ではありえず、その心中の苦悩の性質が異なるのは心理学的に周知の事実である。例えば、不妊当事者女性本人は、自らが抱える病・障がい・運命を苦しむが、その母親は、娘をそのように産み、結果、苦しむ娘を(見るのが)辛い・悲しい・不憫と感じるのであって、それは母である自分の苦しみである。残念ながら、現状**

OD-NETでは、ドナーの援助は、医療現場に任せるしか術のない体制、もしくは、医療現場に任せることを目的とした体制をもつと考えざるを得ない。

現在凍結中の、ドナー卵子とレシピエントの夫精子で作製された受精卵は、(おそらく)レシピエントの子宮に着床したのち胎児として成長し、やがて新生児となり、来春には国内初の「第三者による無償提供卵子で赤ちゃんが生まれる」という事実となって新たな人生がスタートするだろう。さらに、実施医療施設内では今も、残る8組が卵子提供に向けたカウンセリング等の手続きが進行中であるという。現状で、このまま、今後も同様に卵子提供による出産が続くとするならば、そこに誕生した児とその家族の、また、無償卵子提供ドナーとその家族のそれぞれの個人情報、医療施設や医学領域のみで管理せざるを得ないだろう。つまりは、医療者による支援以外のサポートは望めず、レシピエントとドナー双方の家族に将来起きる(であろう)、卵子提供にまつわる様々な出来事には、その情報を保管するOD-NETとその関係施設が対応せざるを得ない事態になりかねないのである。

2015年8月現在、国内には、第三者からの卵子提供により誕生した児の幸福を保障する法整備も、第三者提供型生殖補助医療によって子どもが産まれることを前提にした法整備も制定されてはいない。その社会に、子ども達は生まれてくることになることを、筆者はいま、肝に銘じている。

(次号に続く)

日本のジェノグラム

早樫 一男

9

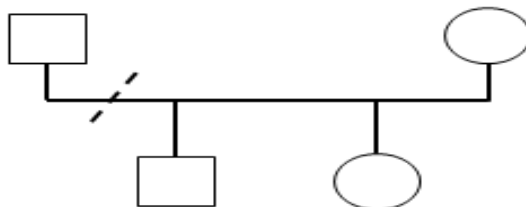
ジェノグラム記載の工夫

婚姻の形態が多様になっている現代、多様な家族の暮らしをジェノグラムとして表記する場合、忠実に反映しづらい場合があります。例えば、夫婦別姓の場合、ジェノグラム上のどこかに㊦として《夫婦別姓》などと記載することになるでしょう。

単身赴任の表記の工夫として、以下のように「夫婦をつなぐ横線に点線（破線）の斜め一本線を入れる」ことを提唱しています。ただし、共通認識として、一般に普及しているわけではありません。単身赴任は、家族にとっての歴史やその形態によって、家族関係や家族の暮らしに影響を与えることが少なくないという印象を受けています。

単身赴任：提案

- 夫婦を結ぶ横線に点線（破線）の斜線を加える



結婚による妻方家族との同居と妻方戸籍への入籍（結婚による婿養子）

今回、紹介する婚姻による妻方戸籍への入籍（婿養子）も㊦としての記載があった方がよい例かもしれません。

そもそも、妻方の親や家族と同居の場合、同居メンバー全員を囲むことになります。同居メンバーの確認から、結婚による妻方戸籍に入籍（婿養子）という可能性が浮かびますが、やはり確認が必要です。妻の親や家族との同居イコール妻方戸籍に入籍（婿養子）と限っている訳ではありません。

何時からの同居か？その理由は？戸籍上はどうなっているのか？等など、ジェノグラム作成の早い段階で同居家族の有無や家族の歴史を丁寧に確認することによって、家族関係を理解することができるでしょう。

ちなみに私の場合は、「日本のジェノグラム 6」において紹介したところですが、核家族から母方祖父母と同居となり、名字も母方姓に変更、父は養子の立場となりました。もちろん、同居後の家族ではさまざまなドラマが展開することになりました。

ある家族：面接場面でのジェノグラムの利用

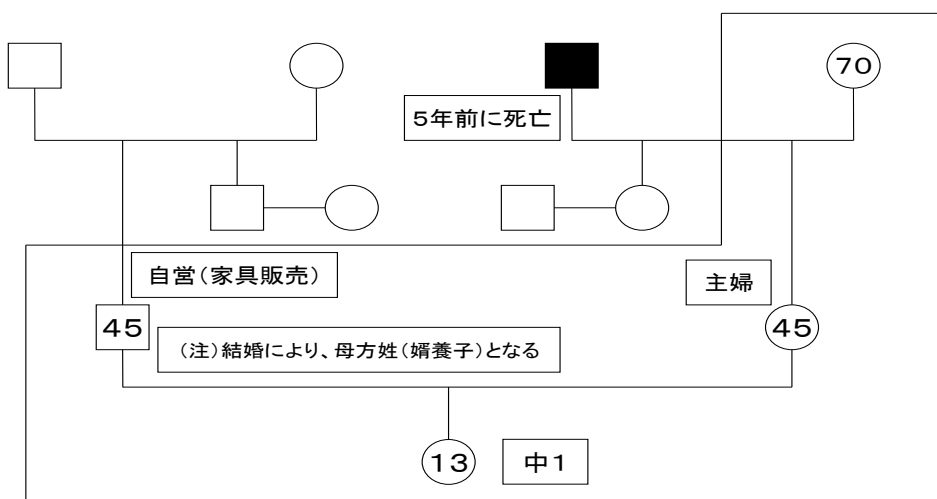
子どものことで相談にやってきた母（妻）が、相談の途中から、「仲人に騙されました」と話し始めたのをきっかけに「夫婦」問題が語られることになりました。

初回相談面接の場において、ジェノグラムを作成しながら話を聞くことを心がけていた私は、当然、ジェノグラムを作成することになりました。

家族は夫と妻と一人娘、そして妻の母です。妻の父は数年前に亡くなっています。

母（妻）が語った内容とジェノグラムは次のようなものです。（以下、夫と妻と表現）

熟年夫婦



《夫方家族》

夫は男二人の長男で弟がいます。夫の両親は元教師で、かなり厳しい子育てであった（虐待に近い）とのこと。夫が幼いころは、夫の祖父母が子育てを任されていたようですが、その祖父母もまたかなり厳しかったとのこと。

「家族」というものに良い印象を持っていなかった夫は成長するに連れ、実家から出たいという思いを抱くようになっていきました。積極的に出たいと思うようになった頃に見合いの話が持ち込まれたのです。そして、チャンス到来という思いで、見合いの話に応じたとのこと。

夫の両親は結婚に強く反対しましたが、夫が強引に押し切りました。現在、弟夫婦が夫の両親と同居しています。

【ミニコメント】

夫には配偶者選択や結婚に至る経過の特徴、実家との情緒的遮断が伺われます。

《妻方家族》

一方、妻は姉との二人姉妹。姉は思春期の頃から、父親との関係が悪く、遠方の大学を選び、実家を出ていきました。そして、大学時代に知り合った男性と恋愛結婚、男性の実家近くで暮らしています。姉の結婚に対して、妻の両親、特に父親は強く反対したとのこと。

【ミニコメント】

妻の実家にも長女と父親の間に情緒的遮断が見られます。

《結婚後》

結局、大きな反抗期もなく、「素直に育った」（妻自身の言葉）妻が婿養子を迎えることになりました。もちろん、父親が経営していた自営業（家具販売）は夫が継ぐことになったのです。店は自宅と10分ほどのところにありました。結婚後7年ほどしてから、娘が生まれました。

結婚当初、健在だった妻の父は5年前に亡くなりました。また、不況の影響を受け、家具販売もうまくいかなくなっていきました。もともと口数の少ない夫でしたが、さらに口数は減り、夫婦の会話はほとんどないという状況になりました。自宅では、店の残務整理ということで、食事場面以外、夫は書斎に引きこもっていました。夫の書斎へ妻は入れてもらえないのですが、一人娘の出入りは自由に許されていました。夫婦の寝室は別でした。

妻にとっては、この先、夫と暮らすことに積極的な展望がなく、息苦しさだけが募る日々だったのです。お弁当を持って、家を出てくれたら、「ほっとする」と強調して語りました。これからの生活を考えれば考えるほど、「離婚」の二文字が頭に強く浮かぶようにな

ったのです。娘には「離婚したら、あなたは、お父さんと暮らし！」と言っているとのことです。

【ミニコメント】

夫は男二人兄弟の兄、妻は女二人姉妹の妹です。異性の理解、兄弟姉妹の中での役割意識などの課題が伺われます。カップルとしての親密性を築いていく上で、お互いの努力が必要なのですが、お互いの理解が不十分なまま、生活を継続していたのかもしれませんが】

ジェノグラム作成がもたらすもの:妻の気づき

ジェノグラムを作成しながら、これまでのことを思い出した妻はふとつぶやきました。『離婚したら、夫はどこに行くのだろうか？結婚時のいきさつや夫の実家への思いがあった、結婚後はまったく実家との行き来はない。お盆や正月も帰ったことがない。もちろん、娘を連れて行ったこともない。口数は少ない人なので、自分の気持ちを話すことは全くないが、本当はずいぶん寂しかったのかもしれないね。』

『これまで、よくやってきてくれたのかもしれないね』

【ミニコメント】

夫に対する妻の見方が変わった瞬間でした。

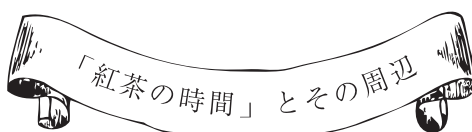
振り返ると…

その後の面接では、毎回、ジェノグラムを間に挟みながら、家族の歴史を丁寧に辿りなおす作業を続けました。数回の面接を通して、妻が夫の理解や家族全体の理解を広げ、また、妻の気づきも深まっていったのです。妻の変化が夫婦関係にもよい変化をもたらしました。家庭内別居から家庭内再婚に変化したと言えるかもしれません。

ジェノグラムを介在した面接の面白さや展開可能性を改めて感じたケースです。

つづく

きもちは、 言葉を さがしている



第21話

水野 スウ

国会と伴走中

特定のイデオロギーとも政党とも、まったく関係ない一市民の私なんだけど、今年の5月以降、まるで国会と連動&伴走してるような奇妙な感覚の中にいます。

テレビで中継される安保法案国会をにらみながら、フェイスブックでマスコミ以外の情報を追いかけてながら、毎日がなんと駆け足で過ぎていくことだろう。本来の私は、こんなあわただしい暮らしをちっとも望んでいないはずなのにねえ。

その間、「ミニとくべつ紅茶の時間」で「けんぼうかふえ」をひらいたり、憲法のお話の出前に行ったり、ピースウォーク金沢の仲間によびかけて、安保法案に対する意見を道行く人に訊くシール投票や、法案への意思表示をするピーススタンディング、などなど、金沢の街でもいろいろな人がこの法案に関心や疑問を持っているよ！ってこと、なんとか可視化したくて、あれやこれやと仲間た

ちと行動する日々が続いています。

私たちの自由と権利は、私たちの普段からの不撓の努力によって保たなきゃならない、と書かれている憲法12条。その12条の実践が、今ほど必要と強く感じる時はありません。

臨時ピース紅茶

この安保法案、衆院特別委員会で強行採決される日が7月15日になりそうと知った時、その日はたまたま「紅茶の時間」と重なる水曜日だけでも、こんな一大事の日、わが家でおとなしく紅茶ひらいてるってわけにはいかないぞ、と急遽、「臨時ピース紅茶します！ 紅茶に来ようと思ってる人、いつもシール投票やスタンディングしている金沢四高記念公園までどうぞ来て下さい」と、メールやFBで呼びかけました。

その日は、以前から公園の前で、九条の会・石川ネットをはじめ、いくつもの平和団体が共同で

ピーステントをはっているし、同じ日に近くで、金沢弁護士会の弁護士さんたちが、安保法案のシール投票行動をする日でもあり。この法案に関心を持つ県内さまざまなグループの人たちが、はからずもその公園に集合することとなりました。

私が臨時紅茶を思いついたのとほぼ同じ頃、ピースウォークつながりの若いママからFBで、「せいじをかたろう、ママの会、をはじめます」という知らせが入りました。これまた同じく15日、同じ公園に集まって、ママ同士、日ごろ話しにくい政治のこと、安保法案のこと、語りあおうよ、というもの。ところが、そのママたち、想いがいっぱいあって呼びかけてはみたものの、気づいたら中心メンバーの誰一人、早い時間からは公園に来れないことが判明(笑)。

「スウさーん、そういうわけで、もしも早目に公園にいて紅茶してるなら、集まってくるママたちのこと、よろしく願いしまーす」と追伸が届きました。もともと午後から紅茶をするつもりでいたから、もちろんOKだよ、と返事。

このあたり、日ごろからピースウォークその他で一緒に行動しているからこそ、連係プレー。ましてや、ママたちが立ち上がって、せいじをかたろう、って会をつくったのです。これはおとなとしてできることで応援しなくちゃね、という気になって当然です。

強行採決の日に、金沢の公園で

約束の時間よりも早めに公園について、目印がわりのピース旗をひろげ、顔なじみの紅茶仲間を迎えていると、赤ちゃんを抱っこした若いママが、きょろきょろ誰かを探しながら心細げな表情で近づいてきました。「あの～、フェイスブック見てきたんですけど、ここで、いいんでしょうか……」。彼女に続いて、幼子かかえたママたちが、次々、公園に集まってきます。

赤ちゃん抱っこしたままじゃ、おしゃべりするのも大変だよな、と、四高記念館(金沢の旧第四高

等学校が、今は記念館として市民に開放されている)前の芝生にちらばっていた椅子を全部集めて大きな輪にして、みんな座って、それから一人ひとりに、今日はどうしてここに来ようと思ったの?と訊くことから、語りあいがはじまっていきました。たった数時間前、国会で安保法案が強行採決されたというまさにそのタイミングで。

「安保法案や集団的自衛権のこと、何が何だかよくわからないけど、とっても不安でたまらない」「とにかく、反対!って言いたくて、今日ここに来ました」

「午前中の審議もNHKは中継しないで、いきなり採決のとこだけ見せる、これってひどい」

「こういう話、ママ友とホントはしたいけど、しゅうだんてき、とか、あんぼ、って行って、もし退かれたらと思うとこわくてできない、余計にもやもやしちゃう」

「ダンナさんとこんな話ができないのが悲しい。自分でよくわかってないから話が續かなくて、言い返されたら何も言えなくて」

「もっと知らなくちゃいけないと思うけど、どうやって知ったらいいんだろう」

「本当は2人目がほしい。でも安倍さんがこんな法案通そうとしてるから、不安で産めない。少子化なのに国はまったく逆のことしてるよね」

どの人もみんな、自分の言葉を持っている。今の政治や安保法案の一つ一つはよくわからなくても、なんかヤダな、感じ悪いな、このこと誰かと話したい、って強烈に思っている。メールやFBだけでなく、生身でじかに顔をあわせて、不安を不安としてそのまま吐き出せる場を、必死に欲している。そんなママたちの想いが、ひしひしと伝わって来ます。

公園に集まったママたちは、私の娘と同年代。私が紅茶の時間をはじめた年齢ともほぼ同じ。だからなおのこと、まだうまく言葉にならない不安にも、危機感にも、こころから共感するのです。

話し合いの最中、遅れてごめんね！と到着したのが、「せいじをかたろう」と呼びかけたママの一人。2人の幼子をかかえて、みんながこの日、こんなに集まってくれたことに感謝しつつ、率直に、熱く、語ります。

「テレビやごはんの話をふだんするみたいに、政治の話もごくふつうにしたいし、知らなきゃいけない、って思う。こんな話、もっともっとあたりまえにしたい。関係ない人なんて一人もいないんだから！」

うん、きばっと自分のきもちを言ってて、いいなあ。偶然にも彼女、娘の小学校の同級生でした。

ここに、はじめの一步を踏み出した「新しいひと」たちがこんなにいっぱいいる。私は彼女たちよりずっと先輩の一人としてただそこにいて、ママたちの話を聴きながら、ああ、今日は国会で歴史に残るひどい政治が行われた日だけでも、そのおかげで生まれた、新しいひとたちのつくる希望の種が、ここにはあるよ、って感じていました。

「こんな話、もっともっとあたりまえにしたい。」彼女の言う通りです。今、国がしていること、しようとしていることに対して、もっと知ろうとすること、自主規制しないでおかしいことをおかしいということ、こういう話をあたりまえに語れる場をつくること、ふやすこと、一人ひとりが本気で「12条をする」こと、それが民主主義をつくっていくことだろう、と私は思います。

若いママたちの言葉に耳を傾ける紅茶仲間は、私より年下の人も含めてみな、彼女たちの親世代。ママたちの不安はそのまま、自分の娘や息子たちへの想いとも重なります。

この日たまたま仕事が休み、FBを見て、金沢の街なかで紅茶をしていると知って、京都の紅茶仲間が日帰りで駆けつけました。彼女もまた、この重大な一日を京都でのんびり休養するより、久々の紅茶に来て、自分なりの意思表示をして、私たちと一緒に時間を過ごしたかったのだといいます。

石川子ども文庫連絡会のお母さんたちは「おじいさんのできること」という長編大型紙芝居を持参して、ピーステントの前で読みきかせをしてくれました。

この紙芝居、ときわひろみさんという方の四半世紀以上前の作品。朝の新聞を読んで水爆実験が行われると知った一人のおじいさんが、「おじいさんのできること」と言って立ち上がり、「核戦争に反対します」と書いたプラカードをつくって、それを持って町を歩きはじめると、おばあさんがその後ろから「おじいさんのできること、おばあさんにもできること」と言って続き、それを見たお母さんが「お母さんにもできること」と言って後ろを歩き、それを見たおばあさんが、お兄さんが……というふうにどんどん人の列が長くなっていく、という物語です。この日は、10数人の人たちがこの紙芝居の輪読をしました。

(*) 紙芝居の冒頭の動画が公開されています。

<https://www.youtube.com/watch?v=xDeiaSEQpvc>

ピーステントの人たちや金沢の弁護士さんたち、個々人で集まった人たち、いろんな年齢層の人たちと共有した分、この日あったことを、私はずっと忘れないでいられるはず。この日の臨時ピース紅茶は、めったにないほどの濃い時間を、安保法案に反対する多くの人たちと分かちあった日になりました。

私たちの声を届けようプロジェクト

「せいじをかたろう」と呼びかけたママたちは、その日の夕方、公園から自民党県連事務所に直行したそうです。自分たちのほもとより、この日初めて言葉を交わしたママたちのきもちも、じかに自民党に伝えに行こうと決めて、即、実行。アポなしで。でも事務所にはもう誰もいなくて、きもちは宙ぶらりん、モヤモヤ倍増。

彼女たちのすごいところ。もうその翌日には、「だれの子どももころさせない」を合い言葉に京都で

はじめた「安保関連法案に反対するママの会」に呼応して、「ママの会@石川」を立ち上げていました。そして、自分たちが不安に思っていること、疑問に思っていることをちゃんと表明しよう、と「私たちの声を石川の議員さんに届けよう」プロジェクトを思いつき、早速動きだしたのです。

FBのグループ内でプロジェクト呼びかけの文案を練り、それができるとなりFBのイベントページで告知し、おのおので広めて、強行採決の日に公園で出会ったママたちにも知らせ、同時に、わが子の通う保育園幼稚園のママたちや、平和サークルのイベント会場で、「声を届けよう」のちらしを手渡していく、という行動の素早さ。

その呼びかけ文はこんなふうです。

「私たちの声を石川の議員さんへ届けよう！」プロジェクトを始めます！ ぜひ、皆さんの声を届けていきたいので、参加してもらえたら嬉しいです！

「安保法制」日本の国のあり方を大きく変える法律が、衆議院で可決されてしまいました。採決後に、委員会を取り仕切った浜田委員長が「政府として（法案）を十本束ねたのは、いかななものかと思っている。」と記者団に述べたのがとても印象的でした。

今、法律をつくる立場の人たちにも、もやもやとした、いろんな思いがあると思います。ほんとにこれでいいのか？ 今こそ、議員さんたちの考えを聞きたいし、私たちの声も聞いて欲しい。

どんな未来でも、せめて「十分考えて、その結果みんなを選んだ」ものであってほしい。今のままではあまりにモヤモヤなまま、子どもたちによくわからない未来を押し付けることになるのが、心配です。

そこで、皆さんの「ここが知りたい！ ここが不安！ 私はこう思ってる！」などを文章にして届けませんか？ その声をまとめて地元の議員さんに届けます。

なんとか、一緒に考えてもらいましょう。

☆議員さんへの質問もぜひ。お返事を取りまとめてどこかで公開できるようにやってみます。☆正直で丁寧な文章をお願いします。乱暴なものは仲介できません。

「安保関連法案に反対するママの会」は全国に生まれているけど、この、「声を届けようプロジェクト」は石川が初の取り組み、ということで大きな新聞記事にもなりました（このあたり、日ごろからピースウォーク金沢が記者さんたちとつながっているので、連係プレーができる）。今後は他県でも、このような取り組みをはじめるところがでてくる、と予想されています。現に、福井にできた「反対するママの会」は、石川のお母さん達の呼びかけ文を参考にして、「私たちの声を福井の議員さんに届けよう」プロジェクトをスタートさせたところからです。

スタートしてから20日間で、4歳から80代の方まで、県内から180通をこえる「私たちの声」が寄せられました。順次、県選出の国会議員さんに届けられていきます。どうか私たちの疑問に答えてください、できることなら、議員さんと対話したいです、という要望書も添えて。

国会議員の事務所や県連事務所を次々訪ねるうちに、先生と呼ばれる議員さんの政治姿勢も、直接は会えなくても事務所で対応する秘書さんの言動を通して、そこはかたなく見えてくる。遠かった政治がどんどん近くなっていきます。

子連れで民主党県連事務所も訪ねて、元国会議員さんや県議、市議さんたちに、たっぷり話を聞いてもらいました。ちかぢか、岡田党首が金沢にきて、弁護士や学生たちと少人数で座談会をする予定、その席に、「ママの会」からもどうぞ参加してください、というご招待までとりつけました。

「私たちの声を届けよう」プロジェクトの応援団である私も、行けるときは彼女たちと一緒に議員事務所に行きますが、主役はあくまでも子育て

中のママたち。議員さんを前にして胸バクバクさせながらも、懸命にきもちを言葉にして伝えようと努力している姿を、私はまるで母親みたいなきもちで、脇から見守っているのです。

民主主義ってなんだ

安保法案を本当に止めたいと、国会前で、毎週金曜日に抗議行動を続けている SEALDs (自由で民主的な日本を守るための、学生による緊急アクション、その英語の頭文字をとって、シールズ)。彼らのもとに、6月4日の国会憲法審査会で、安保法案は憲法違反という意見を述べた憲法学者の小林節さんがやって来て、激励と連帯のスピーチをしました。

それと相前後して、多くの憲法学者さんやジャンルを超えた学者さんたちも違憲の声明に名前を連ね、7月30日の「学生と学者の緊急共同行動」では、SEALDsと学者さんたちとでシンポジウムをひらき、その後、一緒に並んでデモをして、夜には国会前で抗議行動をしました。

その緊急行動をともにした憲法学者の水島朝穂さんが、国会前でスピーチ。その水島さんの言葉を、市民メディアのIWJ (Independent Web Journal) さんが全文書き起こしてくださっています。

(*) <http://iwj.co.jp/wj/open/archives/255866>

「早稲田大学の水島です。今、全国憲法研究会の代表をしています。

さっきから『憲法を守れ、守れ』と言われていると…我々はそれで飯を食っております。飯を食っている人間がここに来ないのは、やっぱりヤバイ、ということで学者の会呼びかけ人ですけど、今日、初めて来まして、感動しました。

何に感動したかという、ずーっと砂防会館からデモをやってきた時、今コールしていた彼が (SEALDs 奥田愛基さん) が、『民主主義って何だ』って言ったんです。そしたら、その後 (みんなが) 『これだ』って言ったんですよ。

それを見た瞬間 (思い出したのは)、私は24年前、東ベルリンに住んでいて、壁が崩れるときの一年半前に行きました。あの時、壁を崩した市民勢力が最初、89年の9月4日に、ライプツィヒで権利を求めてデモをやったんです。でも、みんな怖くて来なかった。でも1000人が集まった。

『就職に響くぞ』『大学退学だぞ』…いろいろと秘密警察が脅したんですよ。『じゃあ、月曜日にもう一回集まろう』『ダメだよ、会社クビになるわ』…でもみんな行った。そしたら5000人になってた。

そして10月2日、2万人になった。10月9日、7万人になった——。

それを見たベルリンの人たちが『俺たちもやろうじゃないか』と言ったんです。89年の11月4日の土曜日に、アレクサンダー広場という、私が住んでいた目の前にある広場に集まろうと。呼びかけたのは俳優とアーティストと作家です。『おもしろそうだ』ってみんな思った。

もう一つあるんです。警察にちゃんと許可をもらった。東ドイツはデモをしてはいけないんですよ。でも芸術家の集会だから警察が簡単にハンコを押しちゃった。

さあ集まった。100万人が集まった！

そして弾圧された政治指導者が立ち上がって、『We are the People』って言ったんですよ。俺たちが人民だ、と。この東ドイツの体制は人民民主主義。『ドイツ民主共和国』なんて嘘っぱちじゃないか、俺たちは壁の向こうに行けないじゃないか、行かせてくれ！と叫んだんですよ。

そしてその11月4日の大デモンストレーションの後、5日後にベルリンの壁が崩れたんです。これはどういうことを意味していますか？

最初はベルリンの壁は崩れてなかったんです。一番最初は、小さな小さなデモから始まった。でも『定期的に月曜日に集まろうね』と、ど

んどん膨らんで、ついに100万人になったんですよ。

私はそこに住んでいて、上から見て、そこには100万人も入れません。『“100万人”は嘘ですよ』と新聞は書いた。当たり前だよ。せいぜい10万人くらいですよ。でも違うんですよ。そこに向かって電車に乗り、車で、徒歩で一杯集まってきた人、ひっくるめて100万人なんです。

だから、ここにいるのが2万だとか3万だとか、砂防会館に4000だとか、明日の夕刊フジや産経新聞が書くんですよ。でも、その向こうに1000万、2000万の国民が見ています。だから8割の国民が納得していないじゃない。

8割の国民が納得していない政権は、退陣願いましょうよ。

今日の夜10時から、NHK第一放送、NHKジャーナルに出演してこのデモのことを話します。

今、新しい民主主義が国会前で始まっている。それはなにか。今まで私が、45年前、高校生でここでデモをやった時、どっちかという後ろからついていったデモだったんですけど、全然違うの。今日、先頭で、学生といわゆる学者と一緒に歩いたんですよ。

そして、『民主主義って何だ』って彼らが問うたら、『これだ』と言ったんですよ。私、初めて、憲法やって33年、飯食って来ましたが、今日、初めて、憲法って何だって分かりました。

これなんですよ。

俺たちが人民なんです。だから、それに反対するあそこにいる政権には退陣を願いましょう。廃案しかない。廃案しかあり得ない。がんばりましょう」

(原佑介「【スピーチ全文掲載】『憲法で33年飯を食って来たが、今日、初めて何が憲法かが分かった。これなんですよ！』水島朝穂教授がSEALDs集会で熱弁〜ペルリ

ンの壁崩壊直前のドイツと国会前が今、重なる」<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/255866> (IWJ Independent Web Journal 2015年7月30日)

憲法を長年、研究していらした水島さんをして、はじめて憲法が何かわかった、と言わしめたもの。SEALDsを中心とする若者たちの、言葉だけじゃない、実際の、不断の努力の直接行動を見て、そこにご自分も飛び込んで参加して、民主主義って何だ、これだ！と水島さんは感じられたのだと思います。

SEALDsよりさらに若い、10代の高校生が「ティーンズソウルデモ」を、続いて、中学生も声をあげ、「反対するママの会」はその後も全国各地で次々に生まれ、いくつもの大学有志の会がそれぞれの反対声明を出し（金沢大学からも出ました）、与党公明党の支持母体の創価学会からも、ついに、反対の声があがりはじめました。

そして今、金沢でも若者たちが動きだしています。

SEALDsが呼びかけている、「8月23日若者全国一斉行動」をきっかけに、その同じ日、この街ではじめての行動をおこそうと決めたのです。

4人の、10代から20代の若者が中心となって、安保法案に対してなにかできることはないかとたちあげた、生まれたてのグループの名前は、TNG。Think about Next Generation。

彼らは、金沢片町のおしゃれなカフェを夕方から貸し切りにして、「Listen × Know × Talk〜私たちの未来と安保法案〜」がテーマのあらたな集会を今、準備している真っ最中です。

政治を語りにくい今の世の中。自分で考えはしても、なかなかまわりの人と、それを共有したり、共感するのがむずかしい。それは若者にかぎらず、家庭の主婦も、ミドルエイジのおばさんも、おじさんも、会社の男の人、女の人たちだって、そうかもしれない。

若い世代が、これは自分たちのことだと関心を

持って、政治を考える、知ろうとする、23日がそんなきっかけとなる日になればいいなあ、と思います。そんな若者たちの出現が、また、おとなたちをも勇気づけ、動かしていくでしょう。

30歳以下の参加費と、それより年上の人の参加費をかえて、おとなもシニアも、参加すると同時に応援できる仕組みをつくってくれているので、私も、彼らがあらたにつくろうとしている場を楽しみにして参加します。その日、私は福井へけんぼうかふえの出前に行く日だけでも、終わったら特急電車で飛び乗り、金沢駅から会場のカフェに直行しましょう。

「新しいひと」が生まれてる

「新しいひと」が、この国で、日々毎日、生まれているように感じます。国が民主主義をこわそうとしているので、これまで漠としてつかみどころのなかった民主主義が、逆説的にクリアに見えてきて、それを感じとった「新しいひと」たちが、関わり方の個人差はあっても、安保法案を自分事としてとらえ、一人ひとり、民主主義しはじめているように思います。

デモになんかぜったい行きそうにない人が、または、自分から政治を語るなんてこと一度もなかった人が、今、新しい自分の言葉を持ち、行動しようとしている、これってすごいこと。

川口の紅茶つながりの、実におとなしそうなお母さんが、もう7回も SEALDs の国会前行動に参加しているというのです。春にベルリンとアウシュビッツを訪ねる旅で出逢った女の子が、SEALDs のメンバーになり、初めてスピーチすると知って聞きにいったからというもの、何度も国会に行っているの、と知らせてくれました。

こんな例が私のまわりで頻発しています。ひえ～まさか、あの人か！ え、あの人か？ という、うれしい驚きと希望と勇気。そう、以前から動いていた人たちだけでいくら声をあげても、今の状

況はかわらない。新しいひとたちの出現があってはじめて、社会は少しずつかわっていくのだと、私は信じます。

「新しいひと」が生まれてくる時に、かならずそれに冷や水をかけたい人がいること、承知しています。3度の選挙で与党にこれだけの議席を有権者が与えた以上、国のすることに今更文句をいうのはおかしい、という人や、今の動きはいつかの熱病にかかっているみたいなものさ、という声も耳にします。

そうまで思わないとしても、何事もお上にまかせておけばいい、国が決めたのならしかたがない、選挙で勝った者が多数決で決める、それが民主主義、と思っている人もきっと大勢いるでしょう。

それでも、与党に一票入れた人たちは、この国の民主主義をこわしていいとか、立憲主義なんて無視してかまわない、とまで思って投票したのでは、おそろくないはずです。百歩譲って、集团的自衛権や安保法制に賛成する人であったとしても、こんなふうに一内閣の暴走で、この国の民主主義がこわされていっていいのだろうか、その一点にしぼって考えてみた時、今の安倍政権のやりかたに、もの申すだけの権利と義務と責任が、私たち国民にはあると、私は思うのです。

法的安定性って

すでに多くの人がもう気づいてしまいました。安保法案の本質が、私たちのいのちと安全を守るためのものではなく、アメリカのする戦争の手伝いに、自衛隊を海外のどこへでも派遣できるようにするための法案であることに。そして今の政権は、法案を通すよりもっと大きな重大な変化を、この国にもたらそうとしていることに。

そのことをもっともよく私たちに教えてくれたのは、ほかならぬ、安保法案作成の中心メンバー、磯崎洋輔首相補佐官でした。彼はまた、自民党憲

法改正推進本部の事務局長でもあります。安保法案の衆院可決後、この法案は憲法違反だ、の聲がますます高まっている時も時、この人は「法的安定性なんて関係ない」って講演会で言っちゃったのです。国民よりも、国を守ることこそ最優先、新しい法律が、法的にとか憲法的にどうこうとか、そんなの関係ない、って。

あわわわ……思わず本音を言ってしまったね、磯崎さん。新しい法律をつくる時に、法的な安定性などなくてよいなら、法律は時の政府の都合でころころかわってしまう。それでは誰も法を信用しなくなります。

そもそもが、国の未来を左右する重大な法案を通すならば、先に憲法改正を国民に問うべきです。それがむずかしいとわかったので、解釈改憲。それでもやっぱりこの安保法案、スタートの閣議決定からして無理がありすぎるから、参院で国会審議を重ねれば重ねるほど、憲法との不整合性があとからあとから。

このこと自体、法律より上に位置する憲法を軽んじていることです。主権在民を無視して、立憲主義が何か、気にも止めない人が一連の安保法案に直接かかわり、改正草案にもかかわり、私たちに国家主権を押しつけようとしている。これって、集団的自衛権は9条違反、総理大臣が憲法を守らないのは99条違反、ということよりもっと根源的な、してはならないこと。

法的安定性を重んじない安保法制をこんなやり方で通すとしたら、法治国家が成り立たないからです。こんなことを認めてしまったら、民主主義も憲法も立憲主義も、根っこからくずれてしまう。そこにこそ、私は本気で怒っているし、だからこそ、本当に止めたい、って思っているのです。

この夏の、私の宿題

マガジンに前号を書いた後、この私に今、何ができるだろう、とおおまじめに考えました。前号

の内容は、私が憲法のお話の出前先で語っていることを、おおまかなレポート風にまとめたものです。

たとえば——。憲法13条の大切さを、直感で発見した娘から気づかされたこと。それをきっかけに、私が「13条のうた」をつくったこと。実はその13条こそが、日本国憲法の核心中の核心であったと、後から実感したこと。私たちのいのちや、自由、しあわせを追求し、わたしがわたしらしく生きる権利の13条を実現するためには、まずもって、決して戦争してはならないこと。

また憲法12条で、私たちには、国のことをしっかり見ていて、国がおかしなことをしようとした時はちゃんと声をあげる、不断の努力が求められていること。「わたしの12条宣言」という文章を書いたこと。どんなささやかな12条の実践も、peaceのpiece、平和のひとかけらであって、そんなpiecesが無数に集まらない限り、もとよりpeaceはつukれないし、この流れも止められないこと。それにくわえて、自民党の憲法改正草案と今の憲法との違い、などなど。

それらはどれも、日ごろから出前けんぼうかふえで語っていることです。ならばいっそ、前号のマガジン原稿を基に、私の伝えたい憲法を一冊のブックレットにまとめよう、それが私のできることかも、と思いつきました。

でもねえ、これがいざ書き出してみると、9条のことは勿論はずせないし、日本国憲法のおいたちも、安保法制のことも、そして一人ひとりができる12条の具体的な実践例だって、書かないわけにはいかなくて、内容の幅がどんどんひろがっていきました。

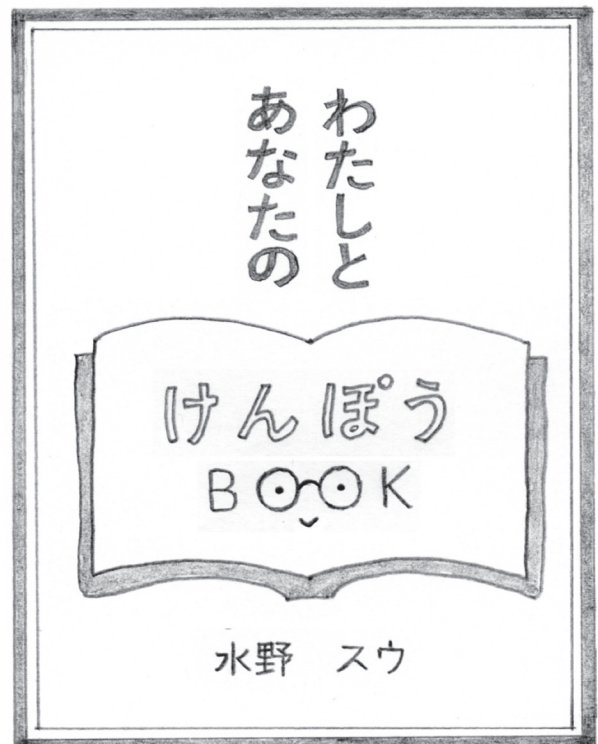
ましてや、今この国で起きていることは、単に安保法制にとどまらず、民主主義そのものの根っこを揺らがせる大事件なものだから、そのことも、記録として記しておかないとね。と、国会審議を追いながら、あらたな原稿を書き足していく日々がえんえん続き……。

うひゃ〜、もしかして私、エライことにとっく

んじゃったかも！ 途中からそう気づいたものの、これは戦後70年の夏、私に課せられた重たい宿題に違いない。この本をつくるのが、今の私にとっての12条すること。そんなふうになり位置を確かめつつ、ようやく書きあげました。『わたしとあなたの・けんぼうBOOK』。

それにつけても、今の時代を記録する場としてのこのマガジンの存在に、私はあらためて深く感謝します。感じたこと、思ったことの種を蒔ける自由な畑が、Web上のここにあることの、なんというありがたさ。その希少価値はこれから先の時代、さらに大切なものになっていくだろうと確信しています。

2015.8.22 水野スウ



七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になればと思います。大切な人の死が、縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。また、悲しみを乗り越えない生き方であればと思います。

初 七 日

1. 成仏

仏教とはどのような宗教なのでしょう。仏教とは、「仏に成る教え、仏の教え」であります。仏になる教えだから仏教とは、文字のままじゃないかと思われるかもしれません。そこで、キリスト教という言葉を考えて下さい。キリスト教はキリスト様の教えです。キリスト様は、我々人間がいかにか生きるべきかを教えるのです。生き方を説く宗教ですか

ら、生きることを終えた時、その生き方によって天国か地獄に行くことになるのでしょうか。

これに対して、仏教は仏に成ることを説いているのです。例えば、仏教では同性愛の是非を語ろうとしません。それは、仏に成ることに直結しないテーマであるからです。もちろん仏教の戒律として、律蔵の中で性も含めて細かなルールが決められています。それは、成仏のため

ではなく、出家者の集団生活を維持するためのものです。

仏教の目的は成仏にあるのです。だから、シャカ教とは言わないのです。一方でこの目標設定はアプローチの多様性を生みました。それは、山の頂上を決められたが、登るルートはいくつもあるようなものです。だから、仏教には宗派が多いのです。日本にだって、数え切れないほどの宗派があります。

2. 日本の宗派

日本仏教の数え切れないほどの宗派、私はそれを数えようとは思いませんが、ここでは主な違いを少し申し上げたいと思います。例えば、浄土真宗以外の宗派では多くのお坊さんが修行をしています。何の、ための修行かといえば、仏に成るためです。先ほどの例えで言えば、頂上を目指して一生懸命に登るのです。日常的に修行をするのが難しい一般人達も善を積まねばなりません。そして、その目的を達する前に亡くなれば、どうするのでしょうか。そこで七日参りが必要になります。この七日参りというのは、のこった人達が亡くなった方の修行を追い

足すのです。それを追善供養と言います。それが満ちて故人は仏に成るのです。ところが、浄土真宗は追善供養をしません。すなわち七日参りの意味が異なります。浄土真宗は即得成仏を説きますから、亡くなると直ぐに仏に成るのです。従って浄土真宗の場合、七日参りは追善供養ではなくお聴聞(ちょうもん)のご縁なのです。お聴聞とは仏のお話しを聞くことです。お坊さんのお話を聞くことではなく、そのお話を通して仏の教えに耳を傾けることなのです。

浄土真宗においては、成仏は死後直ぐに成し遂げられるのです。この成仏は本人の修行の結果ではないのです。阿弥陀様の力によって成仏するのです。私の力で成仏するのではないのです。

一生懸命に修行をする人達がその結果として成仏します。また、一方で自らの修行によらず成仏する人がいます。これに対して疑念をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。しかし、私はこうした疑念に反証を示すことはできません。私は死んだことがないので、動画も写真も示すことができません。

3. 信じる

阿弥陀様の力によって成仏するという何を何故いえるのでしょうか？この世に生きる我々の誰もが、それを肯定も否定もできる確証を持ち合わせません。確証がないというのは、阿弥陀様の力の存在を信じているかどうかでしょう。存在の認識と言ってもいいでしょう。科学的根拠もなく信じるというのは、宗教の教理的裏付けのない信仰につながる危険性もあります。それは日本の宗教の弊害でもありました。そうした中で、科学的根拠の装いで信者を獲得しようとしたカルト宗教の動きもありました。

修行をするなら、こういう手順で修行をなさいと言うこともできるでしょう。信じることの方法論は、成り立ちにくいと思います。論理の構築の上に信じるという行為をなすというのは、私のような思索を伴わない生活をしている者には難しいのです。私は感覚的に信じたり、信じなかつたりして暮らしています。人の出会いの中で初対面でも信じ合えたり、長年の付き合いにも関わらず疑念を持ち続けたりします。

4. あるお葬式

この信じることについて、私はあるお葬式で教えてもらいました。

それは、一月末、我が家の夕食が終わった頃に電話が鳴りました。

「今、うちの主人が息を引き取りました」と。私は直ぐに枕経に参ると言っ、車を走らせました。走りながら「いったいどうしたというのだ。あの主人といっても若いはずだ」と思いました。

何も年齢順に死に至るとは思いませんが、若い人が亡くなると「いったいどうしたと言うのだ」と思います。このご主人も40代前半でした。奥様が説明してくれたことによると、ご主人は2年間ほど深刻な糖尿病だったそうです。入退院を繰り返しました。この死は、暫くの退院の間のことだったそうです。夕食の支度をしていた奥さんがご主人の異変に気付いて、救急車を呼びました。ご主人は救急搬送中に亡くなったそうです。

私は、それを聞いた時に「なぜ、もっと長く病院に居させてもらわなかった。入院していればもう少し

でも長く生きられたのではなからうか」と思いました。私はそれを口にできなかったけれども、このお宅で七日参りをしている中で教えられたように思います。もちろんこのご主人は長く生きたかっただろうけど、病院でその時間がいくばくか延びるより、家族と共に過ごす時間が大切だったのではないかと。この家族は、奥様と高校1年生の長男と小学1年の長女の4人家族です。

私たちは人生を時間の長さで考えてしまうことがあります。どれだけの時間を生きたということより、どんな時間を生きたかが大切なように思います

5. 出棺

死は、ただ死で終わるものではありません。私たちが目を向けないだけです。私たちは死から大切なことを教わります。

このお葬式での出棺シーンも私には忘れ得ぬ姿です。

式場の玄関には、霊柩車が停められ後ろのドアが開かれました。その脇に、小学1年の娘が一人で立っていました。彼女のお兄ちゃんは父親の兄弟と

お棺に手を添えて、霊柩車に乗せようとしています。お母さんはそのお棺に付き従っていました。出棺を見守っていた私は、その女の子に気付きました。

この子は、小脇に30cm程の縫いぐるみを抱えていたのです。私は、この子が昨夜のお通夜でも縫いぐるみを抱えていたのを思い出しました。そしてお葬式の間も抱えていました。

この時、私がこのかわいい少女がどれほどに父親の死を理解しているのだらうと思いました。この思いの直後に私の心は強い衝撃を受けたように感じました。彼女は、理解していたから縫いぐるみを抱いていたのです。父親の死は、つらく、悲しく、不安なものでしょう。この耐えがたい時を越えるために、彼女は縫いぐるみを握りしめていたのでしょう。私には忘れ得ぬ情景となりました。この時以後、私は彼女の縫いぐるみを抱えている姿を見ていません。

6. お父さんはどこ？

私にはさらに教わることのあ

ったお葬式でした。

このお葬式は、寺の住職としては厳しい日程となりました。真冬の土日に通夜葬儀となりました。冬は通常より少し法事の多い季節です。加えて、私たちの宗派独特の門徒勤の報恩講が土日に予定されています。

お参りの約束をしているそれぞれの方に訳を話して、少しずつ時間を変更してもらいました。誰もが、お葬式なら仕方がないと言って、時間変更に同意してくれました。私は、喪主である奥様にお願いをしました。本来なら、火葬場でお骨を拾った後、寺の本堂に来ていただいてお勤めをしますが、時間を短縮するために私が火葬場に行って収骨室でそのお勤めをさせて欲しいとお願いをしました。この後にお参りをするお宅が火葬場に近い所なので、そうすることで待ってもらう時間が短縮できるからです。奥様の同意をもらった私は、火葬場の炉の前で送った後、飛び出して一軒のお宅にお参りをしてから、火葬場に戻ってきました。

私が硬質の草履で火葬場の大理石の床を歩くと、足音が石造風の建

物の空間に響きました。収骨室のドアの外側では、16才の少年が背筋を伸ばして立っていました。その眼差しはドアを射貫きかねないものでした。私の足音を聞いた彼は、私の方に身体を向けました。数歩足をすすめて、私の正面に立ちました。こわばった顔で。

「質問があります」

「はい、どうしたの」

「うちのお父さんはどこに行ったのですか？」

私はたじろぎました。多くの人が、大切な人を亡くしたとき、「どこに行った？」と思うのを聞きます。ドアの向こうにお骨になっているなどと、ごまかしは効きません。

私はちょっと待ってくれるように頼みました。

「あなたのお父さんは仏さまになったと、お経に書いてあります。でも、この答えで納得いかないと思います。僕は、坊さんだけれど見てきたわけではないからねえ」

「……」

「今、確かなことはあなたの気持ちです。あなたはどんな気持ちで尋ねた？お父さんのことが大好きで、だいすきで……。その思いがいっぱい

でしょう」

「お父さんも同じ気持ちだったと思いますよ。救急車の中で息を引き取って往かれるとき、あなたのことを大好きだと思っただろうと思います。お母さんのこと、妹さんのこと、みんな大好きだと思っていたでしょう」

「だから、お父さんは仏さまに成ったと思います。阿弥陀さまに仏にしてもらったと思います。だって、仏さまに成ったら、仏さまの仕事ができますから。あなた達を導き、救い、見守っていくのが仏さまの仕事で

す。少なくとも、あなたの命の続く限り見守っていくことができます」

人は大切な人をのこして往くから仏に成るのだと思います。私はなかなか仏教の論理を理解しがたいのですが、人は大切な人を思って往くときに仏に成ると思っています。大切な人をのこしてきたから、大切な人を見まもりたいからこそ成仏だと思っています。私は、七日参りのご縁によって仏の思いにあいたい。仏の教えに遇うのが、七日参りだと思っています。

第20回(最終回) これからの男性援助を考える

男性援助の視点(2)

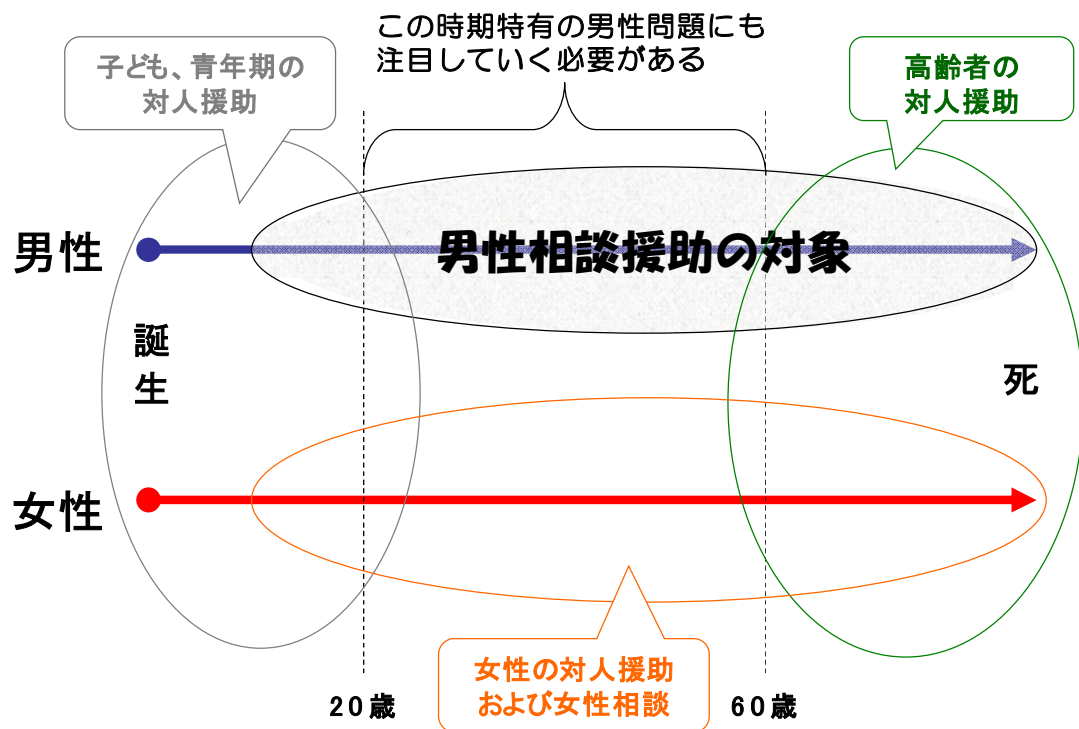
坊隆史 松本健輔

対人援助学マガジン第4号(2011年3月)から始まった本連載であるが、連載20回目の節目として今回で一区切りとさせて頂くことにした。前々回は男性援助のために有効な視点をキーワードで紹介した。最終回は、これまでの連載を振り返り、男性援助の根本となる視点を再確認して全体のまとめとしたい。

男性ジェンダーを理解して“男のつらさ”に向き合う

本連載は、男性への心理的援助は「男性ジェンダーを理解することが重要である」ということを一貫したテーマとしてきた。これは男女平等とか男性の権利といったイデオロギーの主張ではなく、男としてのつらさ、男だからこそその課題に目を向ける援助観である。それでは、どうしてわざわざ男性ジェンダーに目を向けるのか。それは第1回や第18回で述べてきたように、人間科学において男性がマイノリティ化してしまっている現状があり、男性特有の特徴を顕在を化させるためには現代社会に取り巻く男性ジェンダーの視点が有効であるからである。またその対象とする年齢層はジェンダーを意識し始める学童期から老年期までと幅広い(図参照)。

とくに成人期男性は対人援助における対象の隙間となってきた。本連載ではこうした男性問題を筆者たちの相談経験をもとにまとめてきた。具体的にはライフサイクル上のテーマとして結婚(第8~9回)、子育て(第11回)、夫婦間葛藤(第13回)といった家族の問題があった。仕事(第12回)という社会的問題もあった。また薄毛(第14回)のような生理面から生じる男性特有(男性に多い)の課題を扱うこともあった。ここからも男性たちが日々抱えているテーマは多岐に



図、性別発達軸からみた男性相談（2013,坊を改編）

わたることがわかる。また、こうした悩みの背景には、男らしさを根源としているパワーや競争の原理(第10回)が作用しており、これらを読み解くことで男性理解につながっていく。つまり男性ジェンダーの視点を有することで、男性のつらさに向き合えるようになるのである。

顕在する性差をうまく取り入れる

本稿執筆中、ある県が男女共同参画推進のためのフォーラムの交流会参加費に男女差があり、外部機関の男女参画推進員が「女性と男性が合理的な理由なく異なる扱いを受けている印象を持たれないよう、全職員が常に問題意識と緊張感をもって業務に取り組むよう努めるべきだ」とする県への意見書を公表したという新聞記事（毎日新聞ニュース、2015年8月21日）を目にした。記事ではレストランが設定している価格を交流会参加費としたため差異が生じたと記載されていた。レストランの経営者には「男性の方が食べる量が多いのだから男性の金額を高くする」という経済原理が背景にあったのかもしれない。県の担当者からは「男女で異なることについて何らかの意見が出ることは予測したが、県が料

金設定に介入していないと記載することに違和感を覚え、あえてチラシで説明しなかった」と説明があったそうだが、イベントの趣旨からすると配慮が不足していたことが推察される。

この記事は社会のジェンダーや男女平等を考えるにあたってよい題材となるのではないだろうか。私たちは自然と存在する伝統的な性別役割規範に依拠してしまい、それに無自覚であることが多い。先の交流会参加費の件も、担当者が伝統的なジェンダーに無自覚に依拠していたから生じた可能性がある。

一方で男女平等を意識すればするほど男女を区別してしまうこともある。例えば第4回で紹介した自治体の男性向け市民講座を開催するにあたって、講師である筆者が女性の希望者がいれば受け入れを検討して欲しいと相談した。すると担当者からは「女性の講座はたくさんあるが当講座は数少ない男性を対象にした講座である。男性のための講座を提供するという意味合いが薄れてしまうのでご遠慮ください」という回答があった。この担当者は男女共同参画センターが男女を分けて講座をすることはおかしいということを理解していた。過度の平等主義は矛盾に満ちたことが生じる。

そもそも男性と女性は生理的機能や運動機能の差異があり、そこから社会的な性役割が異なってくることは当然である。完全な男女平等を目指して無理に平等化をすると逆差別になり不自然さが生じる。対人援助においても性の差異が生じてきてしまうということを念頭におくことは有用であろう。そしてその差異を理解して、援助に活かすことが重要である。

さいごに

ここまで男性援助のための視点に関して、連載を振り返りつつまとめてきた。そして潜在的に存在するジェンダーを前向きに活かしていくべきであることを述べてきた。こうした姿勢はこれからの男性援助の大きな助けとなろう。

追記として、ジェンダーを意識した援助は、当然であるけれども女性の援助にも活かせることを紹介したい。筆者たちが関わるクライアントには

女性も多い。ジェンダーを意識した相談援助を行っている、女性クライアントには女性ジェンダーに目を向けた援助を行うことで、男性援助者であっても女性たちが心に抱える悩みに迫りやすくなることがわかってきた。例えば、働く女性の課題は典型である。「仕事をする人＝男性」というストーリーが優位である現代日本において、女性ジェンダーやライフサイクル観は企業原理に適応しにくい現状がある。これまで男勝りで仕事をしてきた女性職業人が結婚後、妊娠・出産・育児によってワークライフバランスに悩まされる様子は、こうした社会的文脈との不一致によるものも大きい。次々と終わることのない目標設定が与えられることに疲れを訴えた女性に対して、企業の考え方は常に競争を続ける男性性と通じるものがあると解説することで、企業風土が女性目線と異なっていることを理解してもらい、ある種の吹っ切れが生じて気持ちが楽になったという事例もあった。このように社会生活と結びつくジェンダー観を利用する援助アプローチは、男性援助はもちろん、女性の心理援助にも有用といえる。

ドメスティック・バイオレンスや児童虐待などの暴力、性的逸脱行動、ハラスメントなど男性性を読み解くことで理解がすすむ社会的課題は多い。これらのテーマを本連載で扱うことができれば良かったのだが、発展途上中の筆者たちの力量ではまだまだ言語化できず、紹介できなかったことが無念である。これからさらなる研鑽を積んだ時、今回の連載で扱えなかったテーマも含めて男性援助についての再考を発表させて頂く機会があることを願いつつ、一旦幕を下ろすことにする。これまでお読みくださりありがとうございました。本連載に少しでも目を通してくださった全ての方々に感謝いたします。

文献

坊隆史 2013 「男性相談」の取り組みについて 大阪経済大学心理臨床センター報告書第3号 3-10

毎日新聞ニュース 2015年8月21日 県主催交流会：「共同参画」なのに参加費に男女差？

<http://mainichi.jp/select/news/20150821k0000e040255000c.html>

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(18)

中村周平

「これまで自分が経験してきたことを形にしてどこかの学会で発表させてもらえないでしょうか…」、これが弁護士の方をお願いしたことでした。応用人間科学研究科在学中に一度学会での発表は経験したものの、修士論文をまとめて以降は、自分の考えや想いを可視化する作業は一切と断っていいほど行なっていませんでした。この時期だからこそ書き出したい想い、というものがあつたのは確かだったのですが、忙しさを言い訳に手を付けられずにいました。この「学会発表」は、気持ちを奮い立たせるには十分なきっかけとなりましたし、そこまで自分を追い込まなければもうスポーツ事故のことには関わらなくなるのではないかという、危機感もありました。

この無理難題を、弁護士の方は快く受け入れてくださりある学会での発表を勧めてくださいました。

「日本スポーツ法学会」という学会でした。貴学会は1992年に結成された20年以上の歴史を持つ学会です。2011年にスポーツ振興法の全面改訂によって成立した「スポーツ基本法」の成立やその内容にも大きな影響を与え、日本のスポーツ法学において先進的な取り組みを行なっておられます。また、メンバーの多くが現役の弁護士の方や法学に関わる大学教員の方で構成されています。ただ、当時の私はそのような大事なことも知らず、ただただ自分の想いをまとめることに精一杯になっているころ

でした。また、本来であれば発表内容が学会の趣旨に沿ったもの（スポーツ「法学」に関わる課題）であるかを事前に審査される所、今回は「事故当事者の声を直接聞く機会を作ってはどうか」と弁護士の方が当時の会長の方に進言してくださり（そのことも、後々に知ることとなりましたが…）、発表の機会をいただくことができました。「事故当事者が置かれている状況を発信することは、スポーツ法学だけでなくスポーツ振興、発展に不可欠」という弁護士の方の言葉に本当に頭が下がる思いでした。

2011年12月、早稲田大学で行なわれる発表の日を迎えました。ホテルのバリアフリーの状況や介助者が複数必要であることなどから宿泊による前日入りが難しいため、順番を最後に回していただけるよう事前をお願いをしていました。東京に着くまでの2時間強は、乗り物酔いと闘いながら何度も原稿を読み直しました。現地に着いてからは何とか気持ちを落ち着けることができ、やや緊張気味ではありましたが本番に臨むことができました。事故後の当事者の現状、事故対応に対する思い、司法に対して感じたジレンマ、修士論文をまとめていく上での学び・・・事故からこれまでの経緯や、その時々生じた事柄を説明していきました。課題であった法的な課題についても弁護士の方にアドバイスをいただき、全体の流れの中でいくつか触れることができ

ました。20分間の発表は想像していた以上に短く感じましたが、無事最後まで話し終えることができました。会場からは自身が挙げていた「事故当事者同士の繋がり、連絡が取り合える環境が構築されておらず、事故当事者が孤立しやすい現状が生まれている」という課題に対して、個人情報の問題や事故の補償金を受け取った事故当事者へのセキュリティの問題についての言及がありました。これまでに考えた事のなかった質問だったため、当時は的を得ない…悪く言えば、よくわからない答えをしていたように思います。しかし、ここでの返答以上の課題が自身にあることを後に痛感することとなります。

発表当日を何とか終わることができ、自身の中では少しばかりの達成感のようなものが生まれていました。一つ目標にしていたものを達成することができたことへの安堵感だったのかもしれませんが、発表から時間が経つに連れて「ある不安」が生まれてきました。それは、発表当日に学会メンバーの方が発表されている内容や交わされている会話のほとんどが理解できていなかったことでした。「民法709条?」、「過失立証?過失責任?」、「許された危険???違法性阻却事由????」。これまで耳にしたことの無い言葉ばかりが飛び交っていました。当日は達成感と安堵感から、自身の中では大きく気にかけることは無かったのですが、この「ある不安」は日に日に大きくなっていきました。

これまで大学の講義や学校・スポーツ事故の勉強会などで、事故について自身の想いを伝えてきました。応用人間科学研究科で、これまでを振り返り事故当事者ではない立場から過去の自分を見つめ直すこともできました。それは、「事故当事者」としてできることであつたと思っています。ただ、それはある意味で「事故当事者」という立場にあやかり、事故に関するそれ以外のことは深めずにきたことを示していました。「どの法律を根拠に調停を申し立てたのか」、「スポーツ事故対応における法的な問題点は何なのか」、「自身がこれから求めていきたい『無過失補償』のメリット、デメリットは」…。2002年11月17日に起きたあの事故のことを「事故当事者」の視点で語り、発信することはできても、その問題点を法的な視点から考えることはまったくできません

でした。日本スポーツ法学会での発表の際、スポーツ事故を司法の場で争うことを「司法の限界」などと表記していたにも関わらず、その司法のことについてあまりにも無知な自分がそこにいました。そんな自分が法学を専門とされている研究者の方や日々実践されている弁護士の方の前で話していたんだと考えるだけで背中に冷たいものが流れました。そして、何よりこのままの自分でスポーツ事故について発信していくことに恐怖すら感じていました。「このままじゃ、事実どころか誤った情報を発信してしまう。でも、どうしたら…」。答えはすぐにはできませんでした。ただ、無知である事実を正面から受け止め、今の自分には何が必要であるのか。そのことを考える時間が必要だと感じました。

早稲田大学での発表から数週間後、貴学会事務局から年報への投稿論文について連絡をいただきました。発表当日の内容を2万字以内にまとめ、査読を通れば年報に投稿論文として掲載してもらえるとのものでした。当日の発表用レジュメなど活用しながら作成した原稿案は文字数も足らず、内容はそれ以上に不安の残るものでした。まるでそれは、当時の自身の心境を映し出しているかのようでした。自分に必要なものは何なのか…率直な想いをお世話になっている弁護士の方に伝えました。「論文指導という点でも、今後スポーツ事故を法的な観点から研究していくうえでも紹介したい方がいる」、そのような連絡をいただきました。投稿論文をきっかけに紹介していただいたある方との出会いが、今後の自身を大きく変えることに繋がっていくことを、この時の私は知る由もありませんでした。



男は 痛い !

國友万裕

第16回

ペコロスの
母に会いに行く

1. 死

ラグビーの上田昭夫さんが死んだ。62歳だったとのことで、まだまだ若い死だった。俺はこの人が好きだった。ラグビーだけど、甘いマスクで、ソフトな物腰で、俺が一番憧れるタイプだ。俺の理想は、ソフト・マッチョなのだ。

今年は1つ違いの従兄がなくなり、母の従姉も80過ぎでなくなった。俺が不登校だった時代に大げんかした神経科の先生もついに亡くなったとのことだった。おそらく80代前半だろう。先日、ある機会に、大学院時代に同期だった人で、名古屋の大学に就職した女性が、もうとっくにこの世の人ではなくなっていることも知った。名古屋に移って、3年後くらい後に病気で亡くなったのだそうだ。まだ30代だったはずだ。

50代となって、着々と死が身近になってくるのを感じる。母からは、がん保険にはいつおきなさいとうるさく言われているところだ。俺の年で保険に入るとなれば、相当高額のはずだが、「いまは、がんは誰でもなるし、治る病気になっているから」と母は言っている。

人間だったら、一度は必ず死ななきゃいけない。俺の人生にはいつそれがやってくるのか。どこで、どういう形で、俺はこの世と別れを告げるのだろうか。俺は、若い頃は長生きしたいと思っていた。平均寿命より早く死ぬ人は、不幸な人だと思っていた。しかし、今は人生長さだけじゃないことはわかっている。俺のおばあちゃんは90くらいまで行きたが、15年くらい狭い病院に入院して、死んで

いった。つらかったろうなあ。俺は何才まで生きるのか？ 妻子がいないから、晩年は孤独だろなあ。死の瞬間にどういう気持ちだよぎるのだろうか。

2. 時は流れて

2週間に一度、俺は烏丸の心療内科に通っている。その日、先生は、俺のほうにパソコンを向けた。「ほら、『全般性不安障害』と入力しようとしたら、『全般政府案障害』と出るんだよ。ちゃんと心療内科のソフトを入れているのに」と先生は笑っておっしゃった。

この先生のところに通い始めて、もう20年が経とうとしている。ここ以外はどこにも行かなかったわけではない。他の心療内科にも通った時期はあった。30代の頃までは、まだ心は嵐だったので、ありとあらゆるところに通った。40過ぎて、だいぶ精神状態が安定してきたからは、もっぱらこの先生のところばかりになった。

初めてお会いした頃40代くらいだったこの先生は、もう70近くになっているはずだが、今でも、おしゃれで、センスのいい先生だ。初対面の時は、鋭くて怖い人かと思った。その後も、あまり親密に患者と話をする先生ではなかった。心療内科だとある程度は距離をおいて患者と接しておかないと、相手のペースに巻き込まれたら、大変なことになる。そのことを計算してのことなのだろう。その先生が、俺に対して、自分のパソコンを向けるなんて、一歩親密さを許してくれたと思ったものだった。20年も通ってくれている患者だから、心を許しても大丈夫と思ってくれているのだろう。嬉しかった。

烏丸には、京都シネマという映画館がある。この映画館の壁にはホワイトボードがあって、そこにプレミアム会員の名前が列記されている。俺の名前もものせられている。俺は、この映画館の前身の朝日シネマだった頃からこの映画館の常連で、最初からの会員であるため、常時900円で映画を見ることができる。

思えば、河原町にはめっきり行かなくなった。俺が京都に出てきた頃は、京都のスポットといえば河原町しかなかった。しかし、今となっては、当時の映画館はすべて撤退し、梶井基次郎の『檸檬』に出てくる本屋さん丸善もなくなり、新京極のシネコンMOVIX京都でたまに映画を見る以外には河原町界隈に行くことはほとんどなくなった。

昔は大宮にもいくつか映画館があったが、それもなくなり、今は映画を見るときは、圧倒的に二条のシネコンである。ちなみに俺はこの近所に住んでいる。ミニシアター系のは京都シネマ、マニアック系は九条のみなみ会館、たまにMOVIX京都や八条口のTジョイ京都にでかける。京都は街が狭いので、いずれも自転車で行ける。きわめて便利だ。

15年くらい前までは、大阪の映画館にも足繁く通っていた。あの当時は、東大阪の大学で教えていたせいで、梅田に行くことが多かった。仕事帰りだけでなく、土日に大阪の映画館まで出るのも苦にならなかった。あの当時は天満の男性グループに出入りしていたので、大阪の男女共同参画センターであるドーンセンターにもよく行ったものだった。あそこの図書館はジェンダー関連の本がたっぷり、一時期は貪るように借りて読んでいた。しかし、男性グループとのトラブルが起きてから、天満はトラウマの地となり、その当時、

あれこれ考えることあって、東大阪の大学の仕事もやめてしまった。収入は月に10万円くらい減った。つらかった。

しかし、藁をもつかむ思いで、関西カウンセリングセンターに通い、そこで出会った男のカウンセラーの先生に、俺はついに例の上半身裸にさせられたトラウマを語った。家族以外の人にそのことを語ったのは、あの時が初めてだった。事件が起きて、15年近くも経過していた。あの先生とはもう12年以上会っていない。当時、60代後半くらいだったから、もうなくなっているかもしれない。あの時、仕事が暇でなかったら、あの先生との出会いもなかった。今思い返せば、何一つ無駄はなかったのだ。

考えてみると、俺は梅田には相当の回数来ている。30代前半の頃は大阪での仕事がメインだったし、俺は大学院の博士課程は西宮だ。梅田を経由して通っていた。当時は恐れ多くてほとんど話もできなかった指導教授の先生とは、3年前に出版社の人の好意で再会した。20年の月日を経て初めて対等に先生と話げできた。握手も交わした。当時は何のために西宮の大学の大学院なんかに通っているのかと、悶々としていたが、これも無駄じゃなかったのだと思った。

今は、京都での仕事がメインになり、大阪には週に1コマ寝屋川の大学に行くだけのことだ。寝屋川は、大阪とは言っても東大阪のような大阪カルチャーではないので、ほとんど京都と気分は変わらない。仕事以外の行動範囲は烏丸から大宮、西院、そして二条界限がメインである。京都の人はわかるだろうが、阪急沿線なのだ。3年前まではずっと阪急電車がメインの交通手段だった。

ところが3年前にほんの数軒先のマンションに引っ越した。すると阪急の駅よりもJRのほうが微妙に近くなり、阪急に乗る機会はめっきり減ってしまったのだった。俺は今の通りにもう26年も住んでいる。最初のマンションは4年半。ワンルームの学生マンションだった。次はその数軒南の2Kのマンション。ここでは18年ほども過ごした。そしてそこから最初のワンルームを通り越して、数軒北の新しいマンションへと移った。思えば、俺は同じ風景を四半世紀以上も見続けているのだ。

全然違ったところに引っ越そうかと思ったこともあった。6年ほど前になるだろうか。家賃の安い山科に移ろうかと思った。当時、俺は山科の自助グループにかかわっていた。しかし、移らなくて幸いだった。その山科のグループのおじさんとも大げんかとなり、山科は天満に続くトラウマの地となった。しかし、このことがきっかけで、N先生とは親しくなり、対人援助学会にも入れてもらった。これも無駄ではなかったのだろう。立命館とも復縁である。大学時代、陰口をいわれまくった俺にとっては、立命館もトラウマの地なので、もう復縁はないかと思っていたのだが、これが実れば立命館での4年間にも新たな意味づけができるかもしれないのだ。

「この頃、少し人生上向きになってきたんだから、長生きしなきゃ」と電話の向こう側から母の声。母は、俺にとっての最大のトラウマの地である九州にいる。母は帰って来いとは言わない。俺も帰るつもりはない。しかし、死んだら、故郷の墓に入るしかないという心配がよぎる。新たに墓を買うようなお金はない。それに、親や兄弟には感謝しているので、一緒に墓に入らないのは、家族不幸だ。だけ

ど、九州で眠るのは……。若い頃は、墓のことなんて考えなかった。姑と一緒に墓は嫌だと言っている人たちの気がしれなかった。しかし、50になると、墓のことも真剣に考えるようになっていくのだった。

俺は大学で非常勤講師を始めて、23年目である。最初の頃から控室で顔を見ていた先生たちも、少しずつ定年でやめていく。知り合った当初は40代だった先生たちが、もう60代後半なのだ。学生たちと話をしても、もうご両親が俺よりも若い。考えてみると、俺が大学で教え始めた頃、彼らはまだ生まれていなかったのだった。時の流れ、切ないなあ。

俺の人生は、どこで終わりを告げるのか。これまでのトラウマの地とすべて和解して、わだかまりなく死んでいくのが理想なのだろう。しかし、痛恨の思いを抱えたまま死んでいくのも、それはそれで人生。神様に任せるしかないのだ。

俺は、様々なトラウマの地を経由しながら、今住んでいる界隈にだけは長年根強く踏みとどまっている。俺は長く嘔み続けて、味のなくなったチューインガムのように、毎日、同じ風景を眺め、同じことに囚われてきている。この囚われが、俺の人生の宿命なのだ。

3. 男性性の目覚め

この頃、スポーツクラブで、マッスル系のスタジオプログラムに入っている。バーベルや重りを用いて、音楽に合わせてながら、筋肉を動かしていくトレーニングだ。おかげで、一時期に比べるとムキムキになった。肩の筋肉が盛り上がってきて、腹筋も硬くなってきた。

プログラムに参加する人は、男女半々である。女性の方がやや多いかもしれない。俺はこのプログラムを受けながら、もし男ばかりだったらということを考える。例えば、高校や大学の体育系のクラブに入っていたら、男ばかりで筋トレということになっていただろう。普通の男子たちは、それをする中で男のアイデンティティを築いていくのだ。しかし、俺にはそれができなかった。運動神経が鈍いからということが大きな理由だが、男性ジェンダーへの反発も大きな理由だった。

先に挙げたカウンセラーの先生は、俺がすべてを語った時、「ジェンダーに囚われたとなったら、大変な苦勞でしたね」と言ってくれた。子供の頃から女の腐ったような子と言われ続けた俺は、自分が男だということに自信がなかった、男っぽいことをするのがことごとく恥ずかしかった。他の男の子たちに同一化できなかった。その俺が、冬場に上半身裸にさせられる。それも毎回体育の授業ごとになのだから、悪夢だった。この先生の教育は、どう考えても行き過ぎであった。

俺は、裸を強制されたことで、心が壊れた。俺は、自分は男ではないのではないかと思っていたので、大人になってからも、男になることに抵抗があって、自分の奥底から湧き上がってくる、自然な欲求を常に抑圧して生きてきたように思う。先生から、「男か女かわからなくなったのは、いつ頃からですか」と訊かれ、「小学校の高学年くらいです」と答えた。「だったら、大丈夫でしょう」と先生は言ってくれた。臨界期を超えた年だからということなのだろう。いつかは男としての意識を取り戻せるだろうという意味でおっしゃったことのようにだった。

俺は、少年時代に過酷な男性ジェンダーを強いられた。この点では俺は明らかに不運だった。俺は様々な男の人の話を聞いてきたが、俺くらいひどいジェンダーを強いられた経験のある人はそうはいない。俺の知り合いのある先生は、俺より5才年下で、山梨出身だが、「男は男らしくとは言われなかった」とおっしゃっていた。3年ほど前に教え子の男の子が、たまたま九州の出身で、俺と同じ小学校だとわかった時、「俺は、九州は嫌いなんだ。男は男らしくと言われるからね」と話した。すると、「あー、それはありますよね」と彼はうなずいてくれた。彼は、俺と同じ小学校を出た後、中学は俺と違ったところに通っている。「先生の通っていた中学は、柄が悪いから」と彼。確かに、例の裸教育を強いた教師は、俺の中学だからこそ、あそこまでの男根教育にでることができたのである。勉強はできないけれど、肉食系の荒っぽいタイプの子が多かったので、裸を強いたりするのはしやすかったのだろう。適度のジェンダーだったら、俺だって受け入れられた。しかし、あの先生のジェンダー教育は極端だった。しかも、周りに同一化できる男子がいない。恥ずかしさを共有したいと思う連中がいない。どうしても受け入れられないことを無理矢理に受け入れさせられた時、トラウマは生まれる。俺はあの時、心が破壊されたのである。

もう35年くらい前だが、五木寛之原作の『四季・奈津子』（東陽一監督・1980年）という映画があった。この映画のヒロインは、自分を変えるために、ヌードを撮ろうとする。烏丸せつ子と阿木耀子のヌードが話題になった。女性がメインの映画だが、原作も監督も男だから、どうも女性には反発が残ったらし

い。ある女性が、「この映画が描いているのは嘘の女だ。女は裸になることなんてたいしたことだとは思っていない。男が思っているだけだ」と映画雑誌に書いていたことを覚えている。これは俺の知り合いの映画の仕事をしている女性もしばしばおっしゃることだ。男にとっては70年代になって、女のヌードの時代になったことは画期的だったのだろうけど、「女は、人生を変えるほど特別なこととは思っていない」と彼女は言う。確かに彼女たちの言うことはあたっていて、その後になってくると、宮沢りえのヌード写真集など、自分を表現するために主体的にヌードになる人は増えていって、今では海外旅行でヌードツアーなどもあると聞いている。俺の知り合いの女性も、「若い時に撮っておけばよかったわ」ともらしていた。

ところが、男の場合だと、これとは逆の状況が起きる。男には羞恥心がないと思われているため、いやでも裸を強制される。俺は裸を強制されたことで、人生が大きく変わったわけだが、そのことを理解してくれる人がいるだろうか。この連載に何度も書いてきたとおり、男に羞恥心がないと思うのは間違いである。ある時、スポーツクラブであるおじさんからこう言われたことがある。「ムキムキになって、一度タンクトップを着てみたいんですよ」と俺がいうと、「タンクトップだと乳が透けてみえるじゃないの。恥ずかしいよ」とおじさん。男の人でこういう人は多いのである。アメリカでも、シャツレスフォヴィア（上半身裸になることの恐怖症）という人は一部に存在するようだ。男の人の場合、プールや海の場合は、裸になるのが規範だから仕方がないという思いがある。「しかし、他の場所で

裸になるのは、いくらなんでも恥ずかしい」というのが本音のはず。男の本質と男らしさは別物。好きで裸になると強制されるのでは別物なのである。マッチョな人でも恥ずかしいと思うことを無理やり強制されて、心を壊された俺は、自分の男の部分を拒否するようになっていった。俺にとっては、プールで海水パンツになって泳ぐくらいが、女性と違ったことをする部分だった。だから、俺は自分が男なのか女なのかもわからなかった。

ジェンダーを受け入れられなかった俺は、確かに不幸だった。上田昭夫さんのような体育系の男の人が、爽やかで、好ましく感じられるのは、なぜ、だろうか。おそらく、体育系の男性たちはジェンダーを受け入れている。しかも、上田さんなんかだと、品の良さ、ソフトさや優しさも備えている。その上、男たちと一団になってプレーしているため、同性愛的欲望も消化している。そのことで、男性ホルモンがうまい具合にコントロールされて、好感につながっていくのだ。自分が男だということを受け入れている男は、女も受け入れることができる。女性に対しても、ある程度はわがままを言うけれど、女性のわがままも許す度量も備えている。一方で、俺は、人生の早い時期にジェンダーに囚われているため、男同士で楽しくやれない、男のエゴを女性に押し付けることもしない代わりに、女性のわがままも許せない。そういう男になってしまったのだった。

その俺がかろうじて、男としての意識を取り戻したのは、専門学校で教えていた頃だ。40代の頃は9年間、専門学校でも教えた。専門学校は、大学とは勝手が違って、手を焼くことも多かったが、俺を男にしてくれた

のは、専門学校の男子たちだった。前にも書いたが、俺は男の子たちから身体を触られて、そのことで自分の忘れていた男の部分が目覚めたのだ。本当に思わぬきっかけで、些細なことで、男としての意識が生まれるんだなあと思ったものだった。結局、俺が必要としていたものは、同性愛にも似た、男同士のスキンシップだったのだ。他の男性とふざけて、じゃれあうことで、俺の男としての意識は目覚めたのだった。普通の人なら、10代の頃に通り過ぎるプロセスを、早い時期にジェンダーで躰いた俺は、経験することもなく40を過ぎていたのである。

男としての意識を取り戻した俺は、その後、次々といろいろな男の人と親しくなっていた。俺くらい一緒に風呂にいつてくれたり、愚痴を聞いてくれたりする男性がたくさんいる男は珍しいのではないかな。普通の男は、そこまで親密にはなれないという人が多いのである。

今年の春、かつての教え子で、スポーツクラブでお世話になっていた学生が、卒業だということで、一緒に先斗町でお寿司を食べ、それから、船岡温泉に行った。息子と風呂に入った気分で楽しかった。二人で並んで、鏡に身体を映して、「やっぱり俺の方が見劣りするなあ」というと、「そりゃ、先生はお父さんくらいの年なんだから、仕方がないですよ。ぼくの人生はスポーツの人生なんだから」と言ってくれた。また、今年の誕生日は、ある同僚の男の先生が企画してくれて、かつての教え子の男の子3人と一緒にサプライズパーティをしてくれた。

楽しい男同士の交流は続く。若い頃から男同士で風呂に入ったり、男同士の付き合いみ

たいなものに焦がれていた。しかし、学歴マイノリティで人付き合いもできなかった俺は、もがいても友達はできなかった。しかし、40になって、もう友達をつくるのは無理だと諦めかけていた頃に、俺の人生は変わっていった。本当に人生は数奇だなあ。俺の女性恐怖症も治る日はくるのだろうか。それは、神様におまかせである。

4. 『ペコロスの母に会いに行く』(森崎東監督・2013)

そんなわけで、今では自分の性自認ははっきりしている。俺は男だ。しかし、それが目覚めたのは、40過ぎてからだ。あまりにも遅い。母は、「あなたは遅咲きだったんだから、普通の人よりも、20年くらい長く生きなきゃ」といつてくれる。しかし、俺が長く生きたら、悲惨だろうなあ。女性恐怖症で、女と暮らせない俺だから、きっと孤独死だろうなあ。それとも新たな展開が俺の人生に待っているのだろうか。すべて、神様におかませするしかない。一日一生。日々に感謝して、あとは運命に任せようと思う。

この原稿を書いている最中にかつての専門学校教え子から、Facebookの友達リクエストが届いた。シンクロである。俺は今、いい人間関係に恵まれている。俺って、結構、幸せなのかも。

というわけで、今回のオススメ映画は、『ペコロスの母に会いに行く』である。この年のキネマ旬報の日本映画1位である。ちなみに外国映画の1位は『愛アムール』で、どちらも老人問題を描いた映画が1位になるとは、今の時代を反映している。今年のアカデミー

賞主演女優賞も『アリスのままで』のジュリアン・ムーアが若年性アルツハイマーの大学教授役で受賞。この頃はこういうテーマのものが多。こういう映画は見ていてつらくなることもあるのだが、『ペコロス』は微笑ましく赤木春恵扮するお母さんが描かれていて、彼女の苦労だらけの若き日々を原田貴和子が好演。女の一生ものとして見て感動的である。男は痛い！ されど、女は強し！です。

援助職のリカバリー

《15》

～「しくじりケアマネジャー」を分析する～

袴田 洋子

この連載に関して、「自分のことをありのままに書くように」というオーダーを受けて、15 回目の記事を、かつてないほどに苦しみながら書いています。500ml ビールも 2 缶目を開けていますが、「酔った勢い」が得られません。ようやく、未熟な自分を晒すことに本当の羞恥心が出てきたのかもしれません。「こんなに自分のイケテナイところをちゃんと振り返って、エライわね」という評価を放棄することができつつあるのは、悪くありません。あるいは、自分を攻撃することをしなくて済むような感覚になっているのかもしれません。これまた、悪くないです。

《「しくじり」を分析する》

私はこの連載を書く際、過去に綴っていたブログ記事を読みながら書いているのですが、2010 年頃からの内

容は、ほぼ、しくじり実践のみになっています。しくじり実践とは、ケアマネジャーとして担当したケースの支援展開がうまくいかず、「ケアマネジャーを交代してほしい」とクライアントから言われてしまうというものです。これは、ケアマネジャーにとって、かなりダメージが大きな出来事であり、大きく落ち込みます。「大きく落ち込む」などと被害者っぽい表現が、また甘過ぎです。一番迷惑を被っているのは、クライアントなのですから。10 年もやってきて、この有様は、本当に酷すぎました。今年、ケアマネジャー16 年目になりますが、「交代」に至るようなことは、ここ数年で、ようやくなくなってきました。それほど、私は、不器用な援助者でした。

援助の専門性に関する知識や情報はじわじわと増やしていているのに、なぜ、あんなにもしくじり続けた

のか、今回は、これをテーマに考えてみます。

《「地域包括支援センター」登場》

2006年、介護保険の現場では、「地域包括支援センター」という、介護や福祉相談の総合窓口のような機関が全国の市町村に設置されました。中学校区に1機関置くように、市町村は義務付けられています。自宅で暮らす高齢者の方々が、「要介護」状態になり、介護保険のサービスを利用したい時、通常、よくあるパターンは、市役所の高齢者福祉課の窓口相談に行きます。市役所では、相談に来た方のお住まいの圏域の地域包括支援センター（以下、包括）を紹介します。圏域の包括さんは、来談者の相談を聞きながら、どこのケアマネジャー事務所を紹介するか、考えます。他には、地域の総合病院の医療相談室から依頼が来ることや、また、現在の利用者さんからの紹介などもあります。だいたい、圏域の包括さんを経由してきます。こんなふうにして、「担当ケアマネジャー」が決まっていきます。

ケアマネジャーのバックグラウンドは、介護福祉士や看護師、社会福祉士など、さまざまな領域があり、その来談者のニーズに合ったケアマネジャー事務所を包括さんは紹介したりすることがあります。しかし、包括さ

んは、あくまでも行政から委託を受けている「公的」な立場なので、民間のケアマネジャーを紹介する際、あまり偏ってもよくなく、公平に「新規利用者の方」を地域のケアマネジャー事務所に紹介していくことが重要です。

《介護業界のヒエラルキー！？》

というように、ケアマネジャーにとって、この包括さんは、「包括様」なわけです。新規の利用者（お客様）をご紹介いただけるお上な存在で、日頃から、いかに包括さんと良い関係を築いておけるかが、非常に重要です。

このような存在となる「地域包括支援センター」が設置される際、私は面白くない気分を抱いていました。包括に配置される職種は、保健師（あるいは看護師）、社会福祉士、主任ケアマネジャー（ケアマネ経験5年以上で研修受ければ誰でもなれる）であり、その役割は、地域住民の介護相談に加えて、「ケアマネジャーの支援」というものがありました。自分より経験がある人たちから「支援」されるのはわかりますが、そうでない人たちから偉そうに「支援」される、と考えると、非常に不愉快な気分になりました。いかに自分がまだまだ土俵に乗った生き方をしているかがわかります。当然、このような感情は、私のノンバーバルコミュニケーションで、圏域の包括さ

んに伝わるわけであり、腫れ物に触るような感覚を包括さんは持っていたらうなあと、想像します。

《またか、自己肯定感・・・》

なぜ、土俵に乗ってしまうのでしょうか。なぜ、「偉そうに支援されると想像する」と、不愉快になるのでしょうか。おそらく、承認欲求が通常よりも強くて、自己肯定感が低すぎるのが原因のひとつだと思います。アナ雪ではありませんが、ありのままの自分でよいと思えない、評価を常に求める自分、自分にOKを出せない自分、認められたいと強く願う自分、愛されたいと思う自分、さまざまな承認欲求が強くあるように思います。強過ぎる承認欲求は、ゆがんで、「相手に認めさせなければ」という無意識となり、勝負のコミュニケーションになってしまいます。そんなシステムが、回っていたように思います。

全てが勝負、パワーゲームになっていますから、とても疲れます。なので、癒されることを欲します。与えることより、与えられることを望みます。そんな援助者は、周囲・包括さんに認められるわけがありません。でも、包括さんも「均等に」、新規の利用者さんを民間ケアマネジャー事務所に紹介しなくてはいけないので、時々、圏域の包括さんから新規の方のケアプラ

ン依頼をいただきました。そして、「よい評価をもらえるようにしなくちゃ！」と無意識に気負いすぎて、「しくじりケアマネジメント」になってしまうのです。

《不器用で、ほとんど嫌になる》

ある時、圏域包括の主任ケアマネ A さんから、新規の方の紹介を受けました。もともと A さんが関わっていたその利用者さんが、要介護認定が出たことでの紹介でした。まあ、引き継ぐような感じでした。その際、A さんから、「この利用者さんね、私、大好きなの！とてご高齢なのだけど、リハビリに前向きで、いつも何でも積極的に取り組んでいて、素晴らしい方なのよ。よろしくね！」と言われました。こんなふうに紹介を受けて、私は当然気合が入りました。しかし、不器用な私は、この A さんの言葉に囚われて、どえらいしくじりをしました。

在宅介護の支援実践では、ご本人と同じくらいに、ご家族も等しく支援されるべき存在です。が、この A さんの言葉で、私は、「A さんの大好きなこの利用者さんの気持ちを、何が何でも大切にしなければ」という無意識の感覚を持ってしまいました。そして、介護者ご家族の気持ちをないがしろにするような言動をしてしまい、担当してたった数日で、ご家族が「他のケア

マネジャーを紹介してほしい」と包括さんに連絡を入れました。あまりにも情けない展開に、スーパーバイザーに話しを聞いてもらい、自分の中に、包括さんの承認を得たい強い気持ちがあることに気づきました。

《心、折れたけど、辞める勇気なし》

他者評価にすぎる生き方をしていることに気づくことができたなら、次は、どうしたら、すがらない生き方ができるのか、ということが重要な課題となります。言い換えると、自己肯定感をどうしたら高めることができるのか、ということになります。私は、他者評価にすがらない生き方を見つけられないまま、どんどん疲れていきました。開業して、独立ケアマネジャーとしてかろうじて続けてきたけれど、「誰からも評価されない」という思いのもと、心が折れそうになりました。でも、辞める勇気もなく、気力ゼロになった時、もう、これしか道は残されていない、と考えました。大学院への進学でした。

周旋家日記 15「キャリア形成について考える④ー教員がアクティブになるための『逆向き設計』ー」

乾明紀

1. 教員のアクティブな関与

授業の中にプレゼンテーションやディスカッションの機会を設ければ、学生は座っていた状態よりも多少“身体的に”アクティブになる。言葉を発せず座っていた学生を立たせたり、横に向かせたりして話をさせるのだから当たり前である。

しかし、そのプレゼンテーションやディスカッションに学生が深く関与し、頭や思考（内的活動）をアクティブにさせ、質の高い発表や議論（外的活動）をさせようとすると、途端に難しくなる。そのためには、十分な授業準備が必要であるし、教員の教育力も向上させなければならない。

松下（2015）¹のディープ・アクティブラーニング論を参考に、図1に学習者の関与・能動性と授業との関係を整理してみたが、「深い座学」や「深い演習」を提供するためには、教員の授業への深い関与（教員のアクティブさ）が不可欠である。教員が

	内的活動が低い	内的活動が高い
外的活動が低い	浅い座学	深い座学
外的活動が高い	浅い演習	深い演習

図1 学習者の関与・能動性と授業との関係

¹松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』,勁草書房

浅い関与でも単位が取得できてしまう授業を提供してしまうと、学生は「浅い学習」を学習してしまう。

2. 逆向き設計

近年、「深い学習」を設計する方法として「逆向き設計」(Wiggins & McTighe, 1998)²が注目されている。逆向き設計とは、従来のように教員が「何を教えるか」を考え、それを元に授業を設計するのではなく、終了時に「何ができるようになっているか」をまず考え、そこから逆算して設計する方法である。具体的には、授業を設計する際に、第1段階として「求められる成果（結果）」を設定する。第2段階として「求められる成果」が達成できているかどうかを「確認できる証拠（評価方法）」を決定する。第3段階として「求められる成果」と「確認できる証拠」に対応できる学習経験と指導を計画する、という方法で設計される。

西岡（2005）³によると、第1段階で最も重要なことは図2の3つのレベルと照らし合わせながら目標を確認することである。「知っておく価値がある」内容とは簡単に触れる程度で良いもので、「重要な知識とスキル」は使いこなせるようになる必要がものという。また、『永続的』理解とは、学生が「内面化」し、詳細の大部分を忘れ

²Wiggins & McTighe（1998）、西岡加名恵訳（2012）『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法 UNDERSTANDING by DESIGN』日本標準、
³西岡加名恵（2005）「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」『日本カリキュラム学会紀要カリキュラム研究』第14号,15-29

てしまった後でも残るような重大な概念を指すという。また、『『永続的』理解』に達するために「熟達した答え」を単に教えるより、「本質的な問い」を中心にカリキュラムを組み立てることが大切であるとする。本質的な問いとは、「生徒が積極的に問いかけ、観念を試す実践をし、知っていると思っていたことを再考するようにさせることによって、複雑で抽象的で直感に反する概念を看破させる」ものであるという。つまり、学生自身が興味関心を高め、誤った概念や偏った思考を覆しながら、学問構造の中核に迫る「重要な概念」を見極めていくことのできる問いなのである⁴。

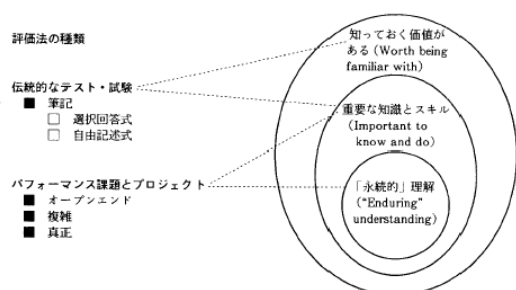


図2 カリキュラムの優先事項と評価法（西岡,2005）

第2段階は、多様な評価方法を組み合わせることで評価基準を作ることがポイントになるが、西岡（2005）が紹介する逆向き設計のためのテンプレートでは、「パフォーマンス課題」と「他の証拠」が項目として書かれている。パフォーマンス課題とは、学習者のパフォーマンス能力を完成作品や口頭発

⁴本質的な問いについては、遠藤貴広（2005）G.ウィギンズの『看破』学習—1980年代後半のエッセンシャル・スクール連盟における『本質的な問い』を踏まえて—、『日本教育方法学会紀要教育方法学研究』第30巻,47-58,に詳しい。

表、実技の実演によって評価しようとデザインされた課題を指す（田中ら，2005）⁵。パフォーマンス課題では、正確な説明ができるか、有意義な解釈ができるか、効果的な応用ができるかなどで「理解」を確認することから、説明・解釈・応用・パースペクティブ（釣り合いのとれた見方・多角的なものの見方）・共感・自己認識という「理解の6側面」を評価の視点に加えることが重要であるという。

なお、パフォーマンス課題の作成手順について西岡（2009）⁶は、①単元の中核部分に見当をつける、②「本質的な問い」を明確にする、③その問いに対してどのようなレベルの答えに達してほしいか（「永続的理解」）を明文化する、④パフォーマンス課題のシナリオを作る、の4つのステップを紹介している⁷。

また、パフォーマンス課題を評価するためには、ルーブリックは欠かせない。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数値的な尺度とそれぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述語からなる評価指標のことを指す（田中ら，2005）。西岡（2009）は、このルーブリック作成の進め方として①お互いの採点がわからないように、成果

⁵ 田中耕治編（2005）『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房

⁶西岡加名恵（2009）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ（第3回）資料

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/043/siryo/1279629.htm

2015年9月4日閲覧

⁷ 田中（2005）では、アメリカのアイオワ州が示した9つのステップが紹介されている。

物を採点する、②似た評点がついた成果物を集め、特徴について話し合う、という手順を紹介している。

第3段階は、「求められる結果」と「確認できる証拠」に対応できる学習経験と指導を計画する段階である。ここで重要なことは、「理解の6側面」だけでなく、図3にあるように **WHERE TO** と略記される7つの項目を考慮して指導計画を立案することであるという。

この7つの項目を見ていると、学習者中心の授業運営を目指していることがわかる。ここまで手厚く工夫された授業を提供すれば、学生の多くがアクティブ・ラーナーになる可能性が大いに高まることだろう。

して注目されている「逆向き設計」の概要を見てきた。大学でもここまでやる必要があるのかという声も聞こえてきそうだが、対人援助学の視点で大学教育を見れば、教員中心の教育パラダイムから学習者中心の学習パラダイムへの転換は望ましい変化であるといえる。対人援助職として大学教員を捉えれば、ここで紹介した設計方法などを参考にしながらアクティブに授業を設計し、学生をアクティブ・ラーナーに導くプロになることが求められているといえる。(つづく)

W	どこに向かっているのか？なぜか？何が期待されているのか？
H	どのように生徒の関心をつかみ、維持するのか？
E	生徒たちが「重大な観念」と「本質的な問い」を探究するよう、どう助けるか？期待されるパフォーマンスに向けて、どのように生徒たちを用意させるか？
R	どうやって、生徒たちが再考し、改訂するよう手伝うか？
E	生徒たちはどのように自己評価をし、学習を振り返るか？
T	学習をどうやって様々なニーズ、関心、スタイルに合わせて調整するか？
O	どのように学習を組織し、順序だてるか

図3 学習経験と指導を計画する上での注意事項（西岡,2005）

3. 最後に

「深い学習」を設計する方法のひとつと

トランスジェンダー をいきる (14)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「思癖」と「嗜癖」に挟まれた恋愛または恋愛感情

「恋愛市場主義」を問い直す

1 はじめに

「今、好きな人はいますか?」、「今、恋愛していますか?」

この手の質問をされる度、私は答えにつまってしまう。なぜだろうか。

確かに、「誰かに恋愛したり、恋愛感情を抱く」という感覚は、それだけで胸がときめき、どきどきする、あるいはあまりにも相手への思いが強すぎて、何も手につかない、ということもある。だが、基本的には、恋愛または恋愛感情を抱いたときの感情の動きというのは、心身ともに悩みながらも、華やいだ気分になる、と考えられているようだ。

しかし、今回テーマにする恋愛または恋愛感情というのは、そうした通常の「心身ともに悩みながらも華やいだ気分」という性質のものではない。

自己の恋愛または恋愛感情に伴う行動様式は、恋愛対象になっている他者への思い癖（思癖）と、アディクション（嗜癖）によって、特異な様相を示す。今回は、自己のそうした恋愛または恋愛感情に対してどのような行動様式をとるか、またそうした恋愛または恋愛感情をなぜ「嗜癖的」と言わなければならないのかについて記述した上で、社会に内在する「恋愛市場主義」を問い直す。

2 そもそも私にとって、「恋愛」とは何か

『広辞苑』（第6版）には、「恋愛」について、以下のように記述されている。

「loveの訳語。男女が互いに相手を恋慕うこと。また、その感情」

ついでに、「恋」というのも調べてみると、

「1 一緒に生活できない人や亡くなった人に強く引かれて、切なく思うこと。また、その心。特に、男女間の思慕の情。恋慕。恋愛。」

なるほど。恋愛というものは、「男女間でそれぞれが思いやったり、思いやられたりするものか。この定義に従うとすれば、身体・書類上の性別は女性・性自認の性別は男性という私のようなケースではいったいどのように考えればよいのか、という疑問が沸きあがってくる。

これは、GID（性同一性障害）当事者から聞いた話であるが、身体・書類上の性別は女性・性自認が男性（FTM）のやく 90 パーセント以上は、ヘテロまたはバイセクシュアルの女性を恋愛対象にしているようだ。ところが、私に限っていえば、恋愛対象は女性ではない。そうではなくて、女性性の高い男性である。女性性の高い男性とは、あくまで私の主観的な間隔であって、例えば声のキーが通常の男性より高い、背が低い、顔の髭が薄いなどの身体的にも女性的であるという側面もあるが、むしろそれよりは、細やかな感情表出、周囲への気配りの高さ、涙もろい部分といった「内面的な女性性」と、生真面目さといった「文化的マッチョな側面」の両面に焦点が当たりやすい。すなわち、心身共に男性であること、それでいて、内面は女性性が高く、マッチョな生真面目さを持ち合わせていることの 3 条件のうちの全部または 2 つを満たしていれば、恋愛対象になりやすい。この現象はすでに子供のころから自覚しており、現在でも普遍的な習性として、自己の中に顕在化している。

このように考えてみると、私にとっての「恋愛」というのは、単なる男女間で恋い慕い合うのでもなければ、大多数の FTM トランスジェンダーの人たちのように、ヘテロまたはバイセクシュアル女性を恋い慕うのでもない。私にとっての恋愛とは、恋愛対象は男性であるから、体・書類上の性別は女性であることで、一見異性愛のように思われるが、性自認が男性であり、しかもこの男性という性自認を中心に行っていることから、ジェンダーレベルでは男性同性愛という「ねじれ現象」が生じているのである。

3 「ねじれ現象」の中で生じた恋愛または恋愛感情に伴う 3 つのフォビア

このようなねじれ現象の下で生じた恋愛または恋愛感情を自覚し始めた初期のころに、下記に示すような 3 つの「フォビア」によって、恋愛または恋愛感情を「忌むべきもの」として自己の中から排除しようとする現象である。

① ホモフォビア

② 前述したように、私の恋愛対象は、女性性の高い男性であるが、彼らの多くは、身体・性自認ともに男性として一致していると思われる。したがって、私の性嗜好というのは、身体レベルではヘテロ嗜好・ジェンダーレベルではゲイ嗜好である。身体・ジェンダーともに圧倒的にヘテロ嗜好の恋愛市場においては、私のジェンダーレベルでのゲイ嗜好は容認されない。そればかりか、ジェンダーがゲイ嗜好であることで、他者とは異質の存在であると自覚し、自己への嫌悪感が生じ、恋愛感情を封鎖する。

③ ②ヘテロフォビア

- ④ 女性の身体を否定している私が、周囲からヘテロ嗜好とみなされた場合、性自認が男性であることを否定され、無理やり女性のジェンダーを押し付けられる。このような破滅の危機を防ぐために、自らヘテロ嗜好であるとみなされることに抵抗し、恋愛感情を封鎖する。
- ⑤ ③恋愛フォビア
- ⑥ 上記2つのフォビアによって恋愛感情を封鎖することで、恋愛対象になっている男性たちとの間で、いったんつながりを断ち切り、周囲から恋愛感情をひた隠しにし、自ら恋愛感情を「忌むべき感情」として排除しようとする。私はこのような現象を、「恋愛フォビア」と呼んでいる。

4 恋愛または恋愛感情に伴う男性性の構築

恋愛または恋愛感情を自覚した初期の後半になると、徐々に3つのフォビアが緩和され、恋愛対象になっている男性たちとの関係性を構築しようとする。しかし、いざ彼らとの関係性を構築しようとする、心理的緊張や注意散漫などを引き起こし、自ら構築してきた男性性に悪影響を及ぼす。そこで、次の段階では、いったん自覚した恋愛または恋愛感情に対して否認・抵抗するために、行動が活発化したり、さまざまな業績を構築するなどして、自らの男性性を意地・向上しようとする時期に移行する。たとえば、スポーツや学業でよい成績を収める、芸術や創作活動では、新しい発想によって一つの作品を生み出す、持ち物や服装が一気に男性化したり、スポーツ系ブランドを着用する、などのファッションのイメージチェンジを試みる。

このような行動様式の背景には、恋愛対象になっている男性たちへの一方的な自己の「思い癖（思癖）」の要素が強い。すなわち、自己の一方的な妄想によって、恋愛対象になっている男性たちの存在を自己の中で肥大化させることによって、「フィクションとしての監視のまなざし」を自ら構築することで、あたかもそこに彼がいるかのような錯覚をも引き起こす。そのことが、「思い癖（思癖）」として、自己の恋愛感情の一端を担い、ますます男性性を意地・向上させる結果に繋がるのである。

5 嗜癖的恋愛—あくなき男性性追及

しかし、このような恋愛または恋愛感情が長続きするわけではない。突如として倦怠期が訪れ、今まで構築してきたスポーツや学業成績が落ち始め、男性性の意地・向上への意欲も減退するなど、いわゆる「バーンアウト現象」が生じる。しかし、いつまでもこの「バーンアウト現象」に留まっているわけにはいかない。そこで、新たな恋愛対象者を見つけて、再び「忌むべきはずの恋愛または恋愛感情」を体験しながら、男性性を意地・向上させる。このサイクルから抜け出せない、あるいはこのサイクルによって、あくなき男性性の追及をある種「楽しんでいるところ」が、「恋愛への嗜癖性」といわなければならない。

また、恋愛対象の男性によって、自らの男性性を意地・向上していくということは、それだけで恋愛または恋愛感情が、一種の格闘技としての意味を持ち、恐れや恐怖を含んだ恋愛との勝負を繰り返しているようにも思える。つまり、私にとって恋愛または恋愛感情というのは、決して華やいだ甘いにおいのするものではなく、そこに人生の勝負氏としての意味をも含んでいるよ

うな気がするのである。

6 終わりに——恋愛市場主義を問い直す

現在でも、このような「嗜癖的恋愛」を繰り返しているのだが、ここに来て、恋愛または恋愛感情に変化が表れている。

「あなたは自信のある人だから、恋愛してそうな気がする」

あるとき私は、友人からそのように言われた。そこで私は逆に、友人にこう聞き返した。

「恋愛してるからって、それだけで人は自信があるように見えるんですか？恋愛してなくても、それなりに自信を持って生きている人は多いはずですよ」

友人が私に言った言葉は、社会に内在する「恋愛市場主義」に基づいているといえるだろう。また、その友人は、私が FTM トランスジェンダーであることを知っているので、恋愛対象を女性であると思っていたのかもしれない。しかし、いずれにせよ、恋愛をしているからといって、「自信がありそうだ」とか、「心理的に安定している」などと思われることに、私は疑問を抱く。なぜなら、これまで述べてきたように、私にとっての「恋愛」というのが、一般に考えられている「恋愛」とは質を異にしているからだ。恋愛しているかどうかに関わらず、それぞれがそれぞれの生きかたをしていればよい。そういう意味で、今一度、「恋愛市場主義」を見直す必要があるのではないだろうかとは私は考える。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

(1 4)

岡崎 正明

(広島市)

「問題解決」の行く先

私は対人援助の仕事を見習いからスタートさせた。

大変な仕事だったが希望していた職場だった。だからもちろん、ケース対応で悩むことはあっても、仕事自体が嫌になることはないだろうと楽観的に考えていた。

しかしわずか3年ほどで、その予想が少し揺らぐ。

もちろん辞めたいとまでは思わなかったが、あんなに望んだ仕事なのに毎日がしんどい。「少し休みたい」という本音が思わず出そうになる。そんな自分が、ちょっとショックだった。

刑事ドラマでは、主人公は毎週ひとつの事件と向き合う。

証拠を探し、様々な人の話を聞いて、真実に近づく。そして放送時間内に無事事件は解決する。すると翌週、また新たな事件がやってくる。主人公はまたそれに立ち向かう。

就職する前の仕事へのイメージは、漠然とそんな感じだった。いやむしろ、ほとんど想像していなかったといったほうがいいかもしれない。

ただ、ひとつひとつの相談事に真摯に向き合い、クライアントのことを想って真剣に取り組めば、すべてがすっきり解決！とまではいかなくても、なにか道が見えてくるのではないかな。それなら自分にもできるのでは…。その程度の想像力しか持ち合わせていなかった。

だが実際の現場の事件や相談は、ひとつひとつ、順序よくやってきてはくれない。

Aという案件が片付かないうちに、BやC、Dといった相談が持ち込まれる。では優先度の高いものから…と、AやBの手当を考えていると、Cの事態が急変する…なんてこともしばしばだ。

問題はそれぞれ複雑で、すぐには解決しない。そうして右往左往しているうちに、

未解決の問題がどんどん溜まっていく…。この見通しの持てない感じが、思いのほか大きなストレスだった。

振り返ってみれば、学生時代は問題をひとつずつクリアしていけばよかった。今日の宿題をやっているうちから、明日の宿題がやってくる…なんてことはない。宿題や試験はストレスだが、「この時間はこれだけに集中すればよい」と思えばなんとかなった。苦手な科目も「これが終われば…」と耐えることができた。ある程度見通しが立ったのだ。

しかし仕事はそうではなかった。目の前の事態になんとか対応しながら、頭の隅には解決していない他の問題がチラつく。すっきりクリアとはいかない日々が続く…。この「小骨が引っかかったまま」のような具合の悪さに、私はしばらく苦しんだのだった。

その頃職場の先輩達を見ながら強く感じたのは、
「『問題を解決する力』と同じくらい、『解決できない問題を抱えて生きる力』がいるなあ」
ということだった。

先日、その事を思い出させてもらえる出来事があった。

地域でボランティアのお世話などをしている方々と会議をした時のこと。熱心だけど、他人の意見をあまり聞かない『Mさん』という方の話題にたまたまなった。

「悪気はないんじゃないかのお」

「でもあれじゃあ人がついてこんで…」

こちらは善し悪しを言う立場でもなく、黙ってお話しをうかがっていた。

ネタが出つくした頃、それまで1番熱心にMさんの問題点をあげていた方が、

「まあしょうがないの。ああいう人じゃけ」

と笑った。その声を合図に、みなが矛を収めたようだった。

ゴミ屋敷の住人のような特殊な例まで出さずとも、マナー違反や非協力的態度、性格傾向など、いわゆる「地域のちょっと困った人」というのは結構いるものだ。

ある意味切実な「地域の問題」である。だが人はそう易々と変わらない。この問題の解決は、なかなか簡単ではない。

かといって「変わり者だから」という理由だけで追い出す・排除するという思想はとても危険だ。すっきり解決への最短距離のような気がするのは錯覚で、オールオアナッシングですべてが片付くほど、世界は単純ではない。「異物を取り除き、均一化する」というのは、工場生産の場では合理的だが、多様性が必須の生物の世界（もちろん人をふくむ）には適用できない。それを究極的に実現しようとして失敗した悪しき例が、ナチスのユダヤ人政策のように思う。

そこで大切なのが折り合うこと。前出の地域の方のように「しょうがない」と笑って受け入れ、許すことのできる寛容性だ。言いかえれば、「問題を解決せずに、放置できるチカラ」とも言える。

このある種の「いい加減さ」を持つことが、地域でも仕事でも、健康に生きる上で

とても大切なものではないかと、最近強く思うようになった。

私たちは学校でも仕事でも「問題を解決する」ことが『善』だと学んできた。何事も問題が小さいうちに早期発見し、未然に重大化の芽を摘むことが良いことだと。科学や医療、経済の分野だけでなく、対人援助の現場でもその方向は年々顕著になっている印象だ。

もちろんそれがまったく間違っているとは言わない。しかし、問題解決を目指すのは『全』（すべて）ではない。

人は、問題解決をするために生きているのではない。事態と正面から向き合い、努力して解決していくこともあれば、時にはだましだまし付き合ったり、やり過ぎたりと、いろんな対処をしながら今を生きている。そこを間違わないようにしないと、大きな落とし穴にはまりかねない。

問題の早期発見に偏り過ぎて、個性や多様性を認められなくなっていやしないか。リスクアセスメントに必死になるあまり、問題点ばかり見ようとする眼になっていないか。「長所」や「強み」を見過ごしていないか。そういう謙虚な態度が、対人援助職には必要ではないだろうか。我々は、人生の審査員ではない。

科学の進歩は世の中の「問題」を原動力にしてきた。新幹線も携帯電話も、現状に満足しない人が開発したはずだ。そういう意味で、問題を解決しようとする力は、様々なものを生み出す力にもなる、とても貴重なものである。

しかしそれらができて問題がすべて片付いたかといえば、そうではない。むしろ「もっと速くならないか」「もっと便利にできないか」と、また新たな『問題』が生まれたのも事実だ。新幹線が速くなったせいで、1泊出張が日帰りになってよけい疲れるだとか、携帯のせいで休日も仕事に拘束されるようになったとか、そんなのはよく聞く話である。

結局のところ、この世から『問題』というやつはなくなるのだから。「無い物ねだり」「人間の欲深さ」などともいわれるが、便利と幸福をはき違えないようにする賢さを、そろそろ持ちたい。

思想家の内田樹は何かの本で「問題解決なんかしちやダメ」と言っていた。問題を解決すれば、また次の問題がやってくるだけだと。なかなか大胆な発言だが、いわれてみればその通りかもしれない。最後はどこで折り合うか。そうしないと、問題解決のループから抜け出せなくなってしまう。どこまでいっても満たされない、足りないものを数え続ける人生なんて、不幸でしかない。

そういえば宇多田ヒカルの歌にも「変えられないものを受け入れる力　そして受け入れられないものを変える力をちょうだい」という一節があった。調べてみたら「ニーバーの祈り」という、キリスト教では有名なお祈りらしい。なるほど。やはり昔から「問題解決」に対する姿勢というのは、私たちにとって大きなテーマだったのだ。

ひどい雨が降っている。

空に向かって逆らい、叫んでも、なんの効果も無い。そんなこと分かっている。

でも、1人黙って、いつとも知れない雨上がりを待つのは、不安で、無力感いっぱい、なんだかやたらせつなくなる。そんなとき。

いつの間にか横にいて

「こりゃかないませんね」「しばらくやり過ごすのが正解ですね」とつぶやく、同伴者がいてくれたら。

むろん雨は止まない。

でもなんだか少しましな気がする。

「このままでいい」と、やさしく背中を押してもらっている気持ちになる。

対人援助職として、問題解決のお手伝いはもちろん、『雨宿りの同伴者』たり得たい。そう思うようになったのは、ここ数年のことである。

10代の母という 生き方 ⑫

大川 聡子

★まえがき

マガジン 14～19号で若年母親へのインタビューを基に、母親が持つ社会的経験の特徴について記述しました。21号からは、これまでのインタビューをまとめた考察をしています。

今号では、地域において若年母親がどのようなインフォーマルもしくはソーシャルサポートを受けていたのかを分析します。Borkowski(2007)は、母親としての適応、父親の関わり、社会サービス、子どもの学校での体験や学級での調整の4つの要素に焦点を当て、若年母親の子育てと回復モデルを作成しました。その中で、子育ての質に影響を与えるのは、父親の関わりや、家族や地域などのソーシャルサポート、母親としての適応等、母親を保護する要因であるとしています。本稿の対象者は、子どもが乳幼児であったため子ども自身の体験については明らかになりませんでした。若年母親が母親としての適応(本稿では“若年母親として自己肯定感を高める”と定義)を成し得ていく上で重要な要素をインタビューデータから抽出し、[図6]にまとめました。

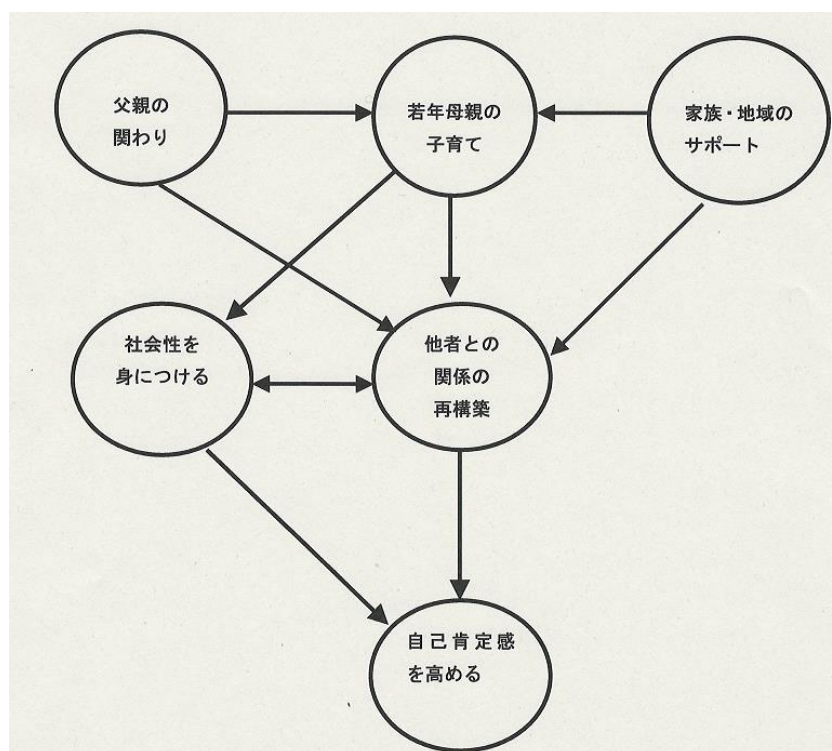


図6 若年母親の発達とソーシャルサポートの関連

本研究では、母親が自己肯定感を高めるために重要な要素を、家族・地域のサポート、父親の関わり、社会性を身につける、他者との関係の再構築の4つとしました。

母親は、父親の関わりや、家族・地域のサポートを受け育児を行なっています。若年母親はライフサイクルが交錯する存在であることから、夫、義父母、年上の母親や周囲の人々等、多くの人々との間に摩擦を起こしますが、これらの人々とうまく折り合いをつけ、母親として関係を再構築しようとしています。また、生活習慣の変化や将来の生活設計を立てることから、社会性を高めることもできるようになっています。こうした、他者との関係の再構築や社会性を高めることが、若年母親としての自己肯定感を高めることに寄与していると考えられます。

また、若年母親は出生地と現在の居住地が近く、地域の同年代の母親を一人も知らないという人はおらず、地域での若年母親ネットワークを形成しやすい状況にありました。このことから、若年母親は周囲の人との絆を感じやすい状況にあると言えます。

こうした背景に、日本の若年母親に対する社会資源の貧弱さが垣間見えます。出産した母親に対して復学や就労支援などの社会的サービスが乏しいために、彼女達は、家族のために自らの時間やエネルギーを使わざるを得ない状況にあります。このため若年母親は、個人としてでなく母親として自らの時間やエネルギーを使い、母親となることで周囲との関係を構築していると考えられました。

Borkowski(2007)が述べたように、本稿でも父親の関わりや家族・地域のサポートが若年

母親の子育てに果たす役割は大きいものでした。父親は、どのケースでも育児に積極的に関わっていたわけではなく、家族のサポートを得られず育児をしているケースもありました。若年母親の支援は、父親だけでなく祖父母も含めた家族に回収せざるを得ない状況にあります。家族の力量には差が大きく、その力量により母親の育児負担は大きく変化します。

しかし、たとえ若年母親の育児を家族が支えることができたとしても、家族による育児の抱え込みは、家族の私事化を強化させ、「コミュニティからの家族の離脱」(中村, 2001)をもたらす、〈必要以上に他人を頼らない〉、〈初対面で心を開けない〉といった特徴を持つ若年母親の他者との関係構築の機会を奪ってしまうことになるでしょう。さらに、これまで示したように、母親たちの原家族である、甘えられない、困りごとを相談できない家族を再生産していく恐れもあります。また、中根(2006)は家族による介護に「時間の限界性」を指摘しているが、育児においても長期間の身体的、精神的、経済的負担がかかることとなり、若年母親の親達がこうした長期にわたる育児を支えられる保証はどこにもありません。若年母親の育児を地域で支える道筋をつけることは、若年母親自身の社会化だけでなく、地域住民にも若年母親の理解を促進することができ、偏見の緩和につながるでしょう。また若年母親家族の育児負担を緩和することもできるため、重要な取り組みであると考えます。

今回のインタビューにおいて家族以外に若年母親を支えていたのは、地域におけるインフォーマルサポート及び社会的支援でした。地域において若年母親が社会的支援とつながり、地域住民の理解を促すためにはどのような方法があるのでしょうか。次号では、若年母親に関わる地域住民ボランティアへのインタビューを行ない、若年母親と関わることによるボランティアの認識及び関わり方の変化を明らかにし、住民との関係構築を促す方法について考察したいと思います。

★引用文献

Borkowski, J. G., 2007, Risk and Resilience, adolescent mothers and their children grown up, Lawrence Erlbaum associates publishers.

中村正, 2001, ドメスティックバイオレンスと家族の病理, 作品社.

中根成寿, 2006, 知的障害者家族の臨床社会学—社会と家族でケアを分有するために, 明石書店.

電腦援助

浅田英輔 Ver.12

Creativity

電腦にも臨床にも、創造性は大事。エライ先生のやり方をそのままやっただって、なんの役にも立ちたくない。ネットに載ってるプログラムをそのまま使っても、それほど役に立ちたくない。既にあるものをどう使っていくか、どう工夫して自分のものにするかがとっても大事である。

この頃のご時世では、「すぐに役立つもの」を重視しすぎているように思う。これは人を育てることにはつながらないし、新しいものを生み出すためのトライアンドエラーを許容しない。「成功は失敗のもと」という言葉を崇めるわりには、失敗が許されない。こんなことを声高にいうと、「お前は失敗を許さないという失敗を犯したので許されない」なんてことも起こってしまう。

ある話を聞いた。

「職場で貸与されているパソコンは、個人のものではないのだから壁紙を変えるべきではない。与えられたままのwindowsの画面のままであるべきだ」という上司がいたらしい。

たしかに、言っていることは正論だと思う。壁紙を変えているヒマがあったら仕事しろと。この正論に返せる「何も間違っていないいっぺんの曇りもない正しい論理」は提示できない。

だが、非常にばかばかしい話だと思う。

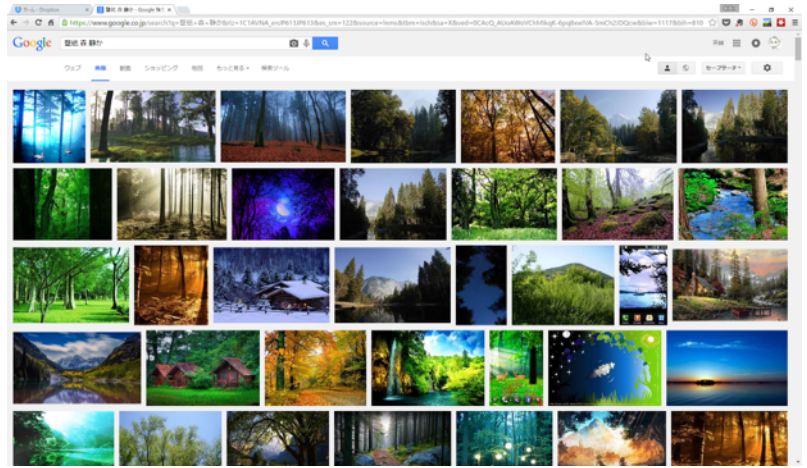
仕事にしろなんにしろ、「できあがったもの」は出来上がったものだけを作り出すものではない。人がやることは、「 $1+2+3+4=10$ 」ではなくて、「 $1+3+5+6-4+3=10$ あまり4」みたいなものだと思う。もしかしたら、「 $5+3+2+7=9$ あまり8」なんてことも起こっているだろう。できあげる過程で様々なものを作り出す。もちろん、同じことをするときには最小限の力で10にたどりつくことだってあるんだけど。

壁紙を変えること自体は仕事に関係ないといえば実際そうだし、壁紙を変えられない人が仕事できないというわけでもない。でも、大きな支障のないちょっとした遊び心って必要だよなって思う。

よし。
壁紙を変えてみましょうか。
今回は入れたばかりのWindows10
です。

まずは壁紙にする画像探しですね。
ここは無難に風景の写真だな。
ギラギラしたものは、森で、日
差しがあって、静かな雰囲気かな。

「壁紙 森 静か」で検索します。
今回は画像で検索ですね。いっぱいあって迷いますねー。

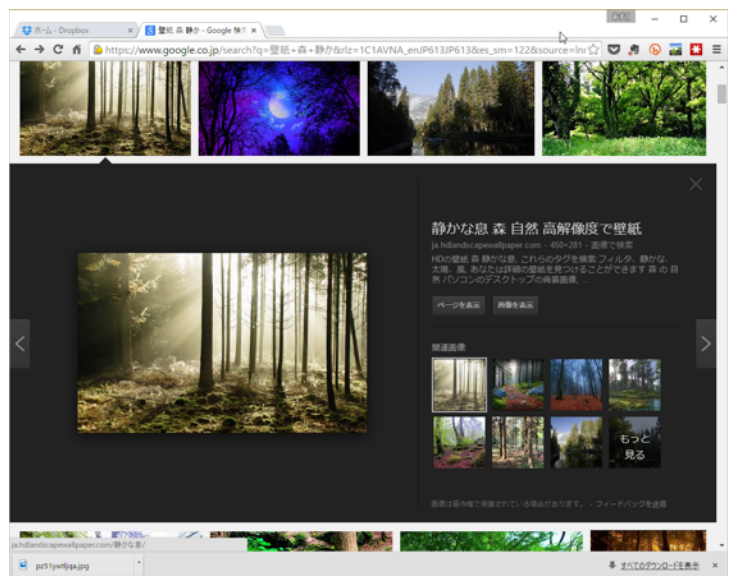


このちょっと寂しい感じも好きだなあ。
これにしてみようっと。
パソコンの背景画像だから、たぶん著作
権うんぬんは関係ないですね（私的利用な
のでだいじょうぶ）。

たいていの場合は、画像の上で右クリッ
クして「名前をつけて画像を保存」をすれ
ばいいです。

どこに保存すればいいかな。マイピク
チャーでいいかな。

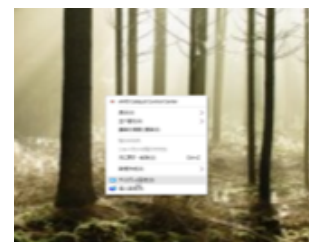
保存したあとでまた画像を右クリックす
ると、「背景に設定」できますね。

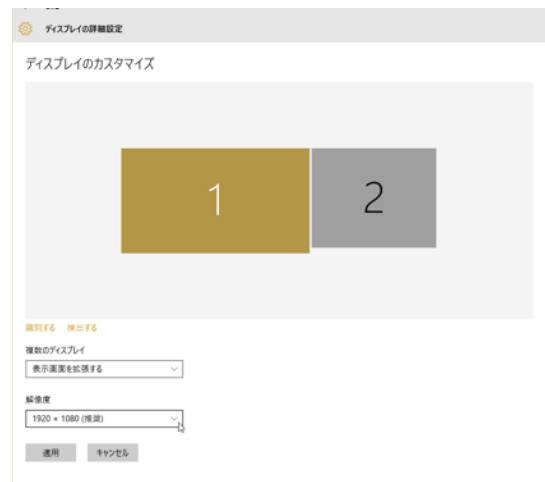
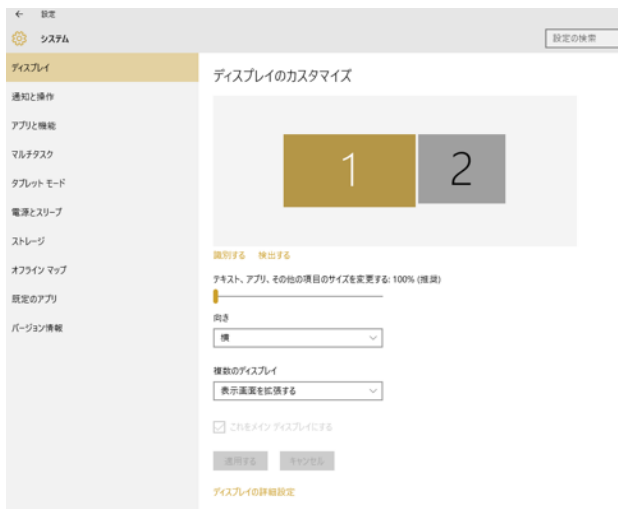


あれ？なんか画像が荒い・・・。画像サイズが関係あるのかな？
この画像は450×281って書いてます。



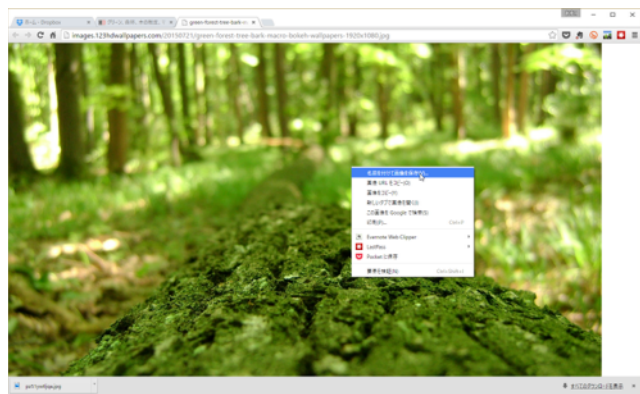
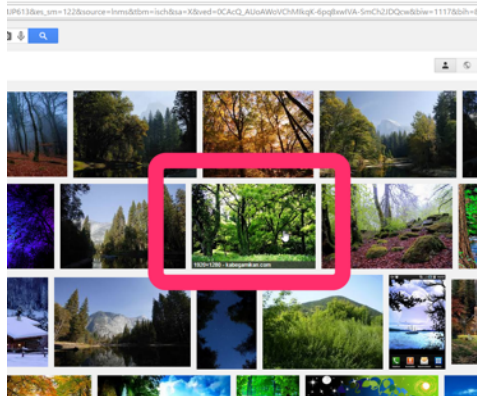
使ってるディスプレイの解像度
はどうやって調べるんだろうか。
デスクトップで右クリックすると、
「ディスプレイ設定」ってある。





ここで複数ディスプレイの設定もできますね。2枚ディスプレイがあるときは、1にだけ表示、2にだけ表示、複製と拡張ができるんだな（うちはディスプレイが2つあるので、「1」「2」と表示されています）。画面のサイズ変更もここでできるみたい。

画面の解像度は見当たらないから「詳細設定」かな？ありました。1920×1080だな。このサイズの壁紙を探してみます。



写真にカーソルを合わせると、下のほうにサイズが表示された。これにしてみよう。ダウンロードして、右クリックで設定っと。できた！

でもボケた感じが焦点が変になる気もしてきた・・・

こっちにしてみよう。なかなかいいじゃないですか！！



さっきの写真も捨てちゃうのもったいないな。スクリーンセーバーにしてみようかな。Windows10にしたばかりなので、設定の仕方がわからない。Googleに聞いてみましょう。いっぱいヒットしましたね。たぶんどれも詳しくかいてあると思われます（いろいろなサイト名がヒットしたので、載せないでおきます）。

ロック画面にも設定できるみたいだし、フォルダの背景画像もできるみたい・・・

・・・なーんてことをしていると、いろいろいじってみたくなってくるのです。

仕事に直結はしないと思いますがね。でも、もしかしたら研修案内をつくるときに役立つかもしれない。ディスプレイサイズの見方もわかった。画像はとりあえずマイピクチャーに入れとけばいいというも学んだ。サイズの小さい画像は拡大すると荒くなってしまいうってのもわかった。自分でパソコンをいじれた気がしてうれしかった。

臨床心理学にしたって、「臨床心理士になるために、臨床心理にかかわる勉強だけをずっとしてきました」なんて人は、まず間違いなく臨床心理を仕事にするのには向かないだろう。「心理の仕事をするためにいろいろと学んできました」とはかなりニュアンスが違う。

人はそんなに簡単にできているものではないと思う。間違いもするし、寄り道もするし、遊びもするし仕事に関係のないものに興味を持つだろう。職業的技能に役に立つものもあるだろうし、役に立たないものもあるだろう。100の力を注ぎ込んで3しか「得」しないものもあれば、10の力で50、得するものもあるかもしれない。

一般的には少ない力で多くの利益が得られるものがよいだろう。それはそうだろう。ただ、目の前の利益が全てなのか。一見、何の役にも立たないものも「次はそれをしない」という「選択肢を狭めておく」といった役に立つことだってある。それをする事で、思いがけない発見があったりもする。

逆に、「100回試して10回うまくいく」くらいであれば十分なのではないかとも思う。残りの90回は今の目的には不要なものかもしれないが、次の目的にたくさん役立つものを含んでいる可能性もある。

その「残りの90回」は無駄なのか。たぶん、今の目的には役に立たないものだろう。なきゃなくていいし、10回うまくいくことだけが目的なのであれば、いらぬもの、無駄なものといえるだろう。

でも、仕事も人生も続く。10回うまくいって終わりなのであればそれでいいが、そのあとには「別の10回分」が待ち構えている。もちろん、別の10回が終わったあともまた別の10回が、また別の10回が、と続いていく。

ある一人のクライアントにしか通用しない「臨床心理学」なんていうものは、多くのクライアントの役には立たない。ただ、逆に「誰にでも使える臨床心理学」なんてのもたぶん無駄だろう。「なんにでも効く風邪薬」と同じたぐいのものだろう。



我々は、10あれば足りるところに50くらい費やして、「40いらなかったな」と思いながらも次の場面に役立てていこうとするのではないだろうか。いらなかった40は、本当にいらぬものなのだろうか。10必要なところに10だけ費やして、「とても効率的でよい」というものなのだろうか。

最初に戻ると、私が言いたいことは「壁紙くらい好きにさせろ」ってことではない。「壁紙はWindowsのままであるべきだ」というのは本当に、本当に、中学校の一部の校則と同じくらい意味がなく、管理することが目的なだけの物言いではない。「靴下は白でなければならない。」ということと全く一緒である。全部同じにしておくことが、人にとっていいことだと信じて疑わないのだ。そして同じ口で「みんな違ってみんないい」などと言うのだ。

人を管理するには、みんな同じにして、規則を決めて、それを守らない人を罰すれば良い。規則を守らないものを「悪いやつ」にするような雰囲気を作ればよい。余計なことはせず、言われたことだけやっていると指示する。掲げる目標はあくまでも「自分で考えられる人」「個性を大事にすること」などである。表面的には自由に見える面もあるかもしれないが、創造性は養われず、出る杭は打たれ、平均的な「言われたことをする集団」の出来上がりである。

道具を使うということは、「興味のある使い方から始まる」のだ。ほかの人がステキな壁紙にしていたら、「自分も好きなのにしてみたい」と思うのではないだろうか。「その写真、どこから手に入れたの？」と聞くかもしれない。「壁紙を変えるのってどうやるの？」って聞くかもしれない。使おうとした壁紙がうまくはまらなくて、「どのくらいの大きさがいいの？」って聞くかもしれない。そういう興味こそが、進歩につながる第一歩といえる。パソコンライ、なんていう人だって、好きなアニメを見るためにはいろいろ調べるかもしれない。仕事を効率的に進めるために、エクセルの使い方を調べるかもしれない。ステキな見た目の書類を作るのに、ワードの使い方を調べるかもしれない。そういうことの第一歩は、「こういうことはできるのだろうか」という興味だろう。

パソコンに興味のないベテランの女性が、一生懸命やり方を調べたり聞いたりして好きなアイドルの画像を壁紙にできたなら、多少なりともパソコンをいじるのが楽しくなるのではないだろうか。「調べたらできるんだ」って思えることは、仕事においてもとても大事なことと思う。

私は多少のパソコンのスキルがあるが、これだって失敗や無駄なことの積み重ねの上にあるものである。トラブルに対処できるということは、それだけ多くのトラブルに見舞われてきた、先人のトラブルを多く見てきたからなのである。どうせ失敗するなら、簡単な失敗から始めてみてはどうだろうか。

じゃあ、まずは、壁紙を変えてみよう！！



講演会 & ライブ な日々④

古川 秀明

京都の西院というところに在日大韓基督教会がある。
ご縁があってここでライブをさせてもらった。
来られる方の国籍は中国、韓国、そして日本の三カ国。

ここでいったいどんな歌を歌えばいいのだろう。
ずっとこの三カ国の関係は微妙だ。
竹島や尖閣諸島の領土問題、ヘイトスピーチ、従軍慰安婦問題・・・。
いろんな考え方がある。
大切なのは「自分が今、韓国と中国と日本人に何を伝えたいと思っているのか」だと思った。

あらためて考えて見ると、自分は今までアジアの国際情勢について深く考えることなどなかったことに気付いた。
教科書やマスコミから教えられる情報を、何の疑いもなく他人ごとのように受け取り、そして流していた。

何かを伝えたいと思う時に、どの視点に立つかで見える景色はまるで違う。
世界やアジアの中での自分の存在をマッピングして考えた時に、何にも考えたことがなかった自分に気付いた。
何かを歌にして伝えようと思った時に、グローバルな視点のかけらもない自分がいた。

このライブはそんな自分に気付かせてくれるチャンスくれたようにも思える。

洗礼を受けたキリスト教徒ではないのだが、せっかく教会の神様の前で歌わせてもらうのだから、嘘や偽りのない気持ちを歌いたいと思った。

世間は憲法9条や安保保障関連法案で揺れている。
きなくさい。

安保で想定している敵国は韓国や中国だろう。
その時に私の頭の中にある言葉が浮かんできた。

「ゆりかごを動かす母の手は、やがて世界を動かす！」

そうだ！憲法がどうの、安保がどうのも大事だが、お母さんが我が子に「戦争に行くのは許さない！」と幼い頃から諭せばいいのではないか！
日本、中国、韓国のお母さんが手をつなぎ、連携して我が子を戦にやらないようにすればいい。

よし、決めた。そんな歌を歌おう。

会場には日本、中国、韓国のお母さん達がたくさん来てくれた。
まずは日本と中国と韓国は、こころの深い所で歌でつながっているのだということを実証してみた。

拍子（リズム）と音階でそれがすぐにわかる。
韓国で有名な「アリラン」という曲を軸に考えた。

みんなびっくりしてくれた。

そして、日本、中国、韓国の平和を願ってこの歌を歌った。

「母」のことを中国では「まあ」と呼び、韓国では「おんま」と呼び、日本では「おかあさん」と呼ぶ。
「まあ、おんま、おかあさん」という歌を作って聴いてもらった。

【ま～、おんま、おかあさん】

中国語で「まあ」、韓国語で「おんま」、
日本語で「おかあさん」
お国で呼び名は違っても
母の願いはみな同じ
子供を戦にやりたくない
子供を殺されたくはない

海に浮かんだ小さな島を
みんなが争い奪い合う
自分が産んだ息子達が
戦争に行って殺されて
小さな島を手に入れても
母に残るのは遺骨だけ

まあ、おんま、おかあさん
手をつなぎましょう
二度と戦にならぬように
政治も男も軍隊も
母の愛には敵わない
母が我が子を諭しましょう
話し合いで解決なさい

政治も男も軍隊も
母の愛には敵わない
我が子の命を守りましょう
世界中の母の力で

歌っている途中から泣いている人が見えた。
歌が終わると大きな拍手をもらった。

日本の京都という小さいエリアの中で、100人ほどの小さな集まり。
その中で歌を認めてもらっても、アジアの情勢になんの影響もないだろう。
会場を出て10分もすれば、みんなこの歌のことも忘れてしまうだろう。

それでも私は今までにない幸福感に包まれた。

神様の前で、自分に嘘をつかずに歌えたことも大きな喜びだ。

このライブで、歌を売って成功するんだ！という今までの歌に対する考えが大きく変わったように思う。

Journey to my PhD@York in イギリス Vol.7

浅野 貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

1年ぶりの掲載になります。前回・前々回と筆者の子ども達の学校生活について紹介しました。その中で、こちらでの英語教授法についても触れましたが、今回は、英語習得に関連して私が感じていることを述べたいと思います。

日本人としてのアイデンティティ

少し前に、ヨーク大学の大学院に留学している知人の日本人から、修士論文のためのインタビュー調査への協力を依頼されインタビューを受けました。修士論文のテーマが、日本人のナショナル・アイデンティティ (National identity) についてで、日本への帰属意識と日本語との関係性の考察が論文の目的だったのですが、インタビューの質問の中に、次のような質問がありました—「私は日本人なので日本語を話す」「私は日本語を話すので日本人である」。読者の皆さんが感じる、日本人としてのアイデンティティと日本語の関係性に近いのはどちらでしょうか。この二つの捉え方は、一見似ているようですが、“日本人”をどのように定義するかを考える上で大きな違いがあるように思います。私は、インタビューで後者を選択しましたが、その理由として、前者の場合、捉え方によっては、歴史的に様々なルーツを持つことが明らかにされている日本人の定義を狭く規定し、例えば、在日韓国人やアイヌの方々をその定義から

意図的に外すということにもつながり得るのに対し、後者の捉え方をすると、多様な人々を日本人の定義に含められることが挙げられます。私自身のこと限定すれば、日本国籍を有し、日本人の両親の元に育ち、日本語を母国語とし、日本語で教育を受けてきましたから、前者の捉え方でも違和感はありません。しかしながら、どのような人々を日本人と捉えるのかという問いについて考えると、前者の捉え方にはかなり違和感があります。単に法律的な話であれば、「日本人＝日本国籍保持者」ということになるのですが、日本人としてのアイデンティティと日本語との関係性ということになると、話はそんなに単純ではありません。

読者の皆さんは、普段生活をされる中で、自身が日本人であるというアイデンティティを意識することはあるでしょうか。私は、留学するまで具体的に意識したことはなく、自身が日本人であることは空気のようなもので、そこに疑問を挟むこともありませんでしたが、アメリカ、そしてイギリスでの留學生活を通して、日本人としてのアイデンティティを強く意識するようになりました。以前の回でも触れましたが、ヨーク大学の留学生に占める日本人学生の割合は、同じアジアの留学生の中でも、中国や韓国を始め、東南アジア諸国と比べると非常に少なく、大学内や街で声を掛けられると、決まって中国人だと認識されます。私は、

今はそういった場面でも特に何も感じることはなく、例えば、“Hi!”といった日常の挨拶と変わらないぐらいの当たり前のものとして受け止めています。そうした経験が、自身が日本人であること、さらに、同じアジアだけでなく、アラブ、ヨーロッパやアメリカ等の国々に対して、自身がどのような前提 (assumption) を持っているかへの気付きの機会を与えてくれたように思います。私にとって、日本人であるというアイデンティティは、日本と他の国々との関係性を意識した時に、初めて自身の中で感じるものであり、それを抜きにして語ることはできません。そして、その関係性も政治、経済、及び文化のダイナミズムの中で変化し続けます。この20年間の、日本の経済力の落ち込みと、それに伴う国際社会における日本のプレゼンスの低下、そして、中国の台頭によるアジアにおける盟主の交代という日本が置かれた現状をどう理解するかが、それぞれの日本人としてのアイデンティティを形成する上で大きく影響を及ぼすように思います。そうした現状を良しとしない人にとっては、上記の例のように、外国の街中で中国人や韓国人に間違われたとしたら、自身の日本人としてのアイデンティティが傷つけられたと感じるかもしれません。また、日本に対する批判的な議論に対して、自身への批判と同一化して反発を感じ、さらに、私のこの文章に対しても不快に思うかもしれません。私は、そうした“naive”な態度に対しては距離を置きたいと強く思います。

アイデンティティと日本語、そして英語

冒頭のインタビュー調査の質問に戻りますが、日本人としてのアイデンティティが形成される上で、日本語が果たす役割は非常に大きいと思います。両者の関係性を考える上で、国際結婚している両親をもつ子ども達のケースが興味深い示唆を与えてくれます。ヨークには、数は少ないながらも、イギリス人と国際結婚している日本人の方々おり (※ほとんどが女性ですが)、彼等を中心とし

た日本人のネットワークが組織されていて、子ども達、そして親同士の交流を目的とした集まりが定期的にあります。その集まりには、私の家族のような留学組も参加します。国際結婚組は、普段の生活環境が英語中心になるため、それぞれの家庭で子ども達の言語教育についての方針を持っています。例えば、母親と話す時や兄弟間で話す時は日本語で、イギリス人の父親と話す時は英語で話すようにするというルールを設けている家庭が多いです。しかしながら、子どもが、日本の幼稚園や保育園にあたるpreschoolやnurseryに通うようになると、家庭の中でも英語が占める割合が高くなってきて、上記のようなルールは続かなくなるケースがほとんどです。また、イギリス人の父親が日本語でコミュニケーションができるというケースは、私の知る限りでは全くないので、母親の方が、父親が理解出来ない日本語で子どもとコミュニケーションをすることをためらう気持ちも、子どもの成長に伴い大きくなってきます。国際結婚組の方で、子どもの日本語能力の向上のために、ヨークから車で30分程の距離にあるリーズ (Leeds) にある補習校に子どもを通わせている人もいますが、授業は土曜日の午前中のみのため、日本語の向上のためには普段の家庭学習が不可欠です。補習校では日本の教科書が使われるのですが、学年が上がるにつれて、習得しなければならぬ漢字が増えてきて、親の思いとは裏腹に、そこでつまづくケースがかなり多いようです。

これは、国際結婚組に限った話ではなく、両親が日本人であっても同様です。私の友人で、ヨークで長年就労し、子ども達もこちらで生まれている家族がいるのですが、その子ども達にとっては英語が第一言語で、日本語は第二言語になっています。彼等と日本語でコミュニケーションをすることは可能ですが、例えば、独り言を漏らす時や兄弟げんかをする時などは英語です。学年では上級

ですが、低学年で習得する漢字も身に付いていないため、国語の教科書を読むことも難しいですし、他の教科でも、例えば、算数の問題の意味を理解するのが難しいようです。両親は何とか日本語を身につけて欲しいという思いから、日本語の本を読ませたり、ドリルなどをやらせようとしても、泣いて嫌がるそうです。彼等が日本に一時帰国した際に、空港で「みんな日本語が上手だね。」と言ったという話も聞きました。傍目からは、彼等は英語と日本語のバイリンガルのように思われるかもしれませんが、彼等にとっては第一言語はあくまで英語であって、日本語は、聞けば理解できて話せるけれども、読み書きについてはかなりの困難を伴う第二言語という位置づけでしょう。グローバル化が急速に進む中、日本でも、リンガ・フランカ (lingua franca) である英語の重要性がますます高まっており、英語の早期教育の必要性が叫ばれていますが、本当の意味でのバイリンガルになるというのは決して簡単ではありません。

言語学の専門的な定義ではありませんが、ここでバイリンガルを、英語と日本語の双方で読み・書き・話すを抽象的思考を伴うレベルでできるケースとすると、私の知る国際結婚組の方の子どもで、そのレベルに達していると思われるケースは一人だけです。そのケースの子どもは、現在中学生で、イギリス人の父親と日本人の母親の元で育ち、先述のリーズにある日本人補習校にも通い、また、毎年イースター休暇を利用して1ヶ月程日本に一時帰国した際には、公立小学校にも通っていました。その子が、他の国際結婚組の方の子ども達と違い、バイリンガルのレベルに達している (と思われる) 要因として、本人の日本への興味・関心が非常に高いことと、また、将来、日本の大学への進学や就職も現実的な選択肢として考えていることが大きく影響を与えているように思います。その子にとっての日本語は、あくまで興味のある日本のテレビを見たり、好きなアイドルなどをチェックするための手段であって、勉強する目的ではないのだと思います。対して、他の子ども達にとっては、

日本語は勉強するものであって、日本語を使って何かをするという位置づけではないように思います。そうした違いは、本人の特性や興味関心に依るところが大きく、親がいくらお尻を叩いても、本人に動機付けがない限り、日本語、さらには日本への興味を維持することは非常に難しいです。彼等に自分自身を何人だと思えるのかについて聞いたことはありませんが、日本語能力が、彼等のナショナル・アイデンティティの形成にかなりの影響を与えているかもしれません。

私の子ども達については、ヨークに約4年間暮らし、上の2人は現地の小学校に通っているため、英語の能力も向上し、学校生活でそれほど不自由なくコミュニケーションができるぐらいのレベルですが、家庭では基本的に日本語です。しかし、兄妹で話をする時など、日常のちょっとした場面で日本語よりも英語が頻繁に登場します。私の場合は、4年間という限定でイギリスに留学し、その後は日本に帰国することが決まっていたため、帰国後に、子ども達が日本の学校や習慣、考え方になるべく戸惑わずにアジャストできるように、事あるごとにイギリスと日本の違いについて、どちらが良い悪いという話ではなく、それぞれの常識が違うことを説明するようにはしてきました。また、日本語の習得に関しては、日本語の絵本の読み聞かせをしたり、日本から取り寄せた公文のドリルを毎日させるなどしていますが、日本の小学校に通う同級生の子ども達と比べたら、普段接している日本語の量が圧倒的に少ないでしょうから、帰国後に通う小学校に慣れるまではしばらく時間がかかるだろうと思います。子ども達も、そのうち日本に帰国し、日本の小学校に通わなければならないということを理解しているので、渋々ながらもドリルに取り組んでいます。もし日本に帰国することなく、私がこちらで就職して生活することになっていたら、子ども達が日本語を学ぶ動機付けを維持することは難しいでしょうし、先述の両親とも日本人のケースの子ども達

のように、遅かれ早かれ、英語が彼等にとっての第一言語になるであろうことは容易に想像がつかれます。ふたりとも日本で生まれていますが、日本での記憶があるのは9歳の長男だけで、6歳の長女にはほとんどありません。ヨークでの生活を通して、様々なバックグラウンドを持つ友人達にも恵まれ、こちらの習慣、そして考え方に馴染む中で、彼等の中でイギリスへの愛着が確実に育っています。少し前にカナダで行われた女子サッカーのW杯の準決勝で日本とイングランドが対戦し、日本が勝利しましたが、長男は母国である日本とイングランドそれぞれに愛着があるようで、日本の勝利にうれしい気持ちがある一方で、イングランドの敗退に残念な気持ちもあるようでした。このままイギリスに住み続ければ、彼等にとって日本はあくまで両親の出身国であって、ナショナル・アイデンティティはイギリスに対して持つようになるかもしれません。親としては、彼等には日本人としてのアイデンティティを持って欲しいという気持ちはありますが、強制できることではないので、帰国後は、こちらでの経験を通して得た視点を大切にしながら、言わばアウトサイダーとして、単に日本の習慣や考え方を無批判に受け入れるのではなく、それぞれの視点を持ちながら自分達なりのアイデンティティを育てて欲しいと考えています。言葉に関しては、英語を使う機会もほとんどなくなるでしょうから、早晩忘れていくと思いますが、英語力の維持のために特別に学習する機会を持たせる考えはありません。英語に限らず、母国語以外の外国語は、本人に動機付けがない限り身に付くことはないであろうことは、明らかのように思います。私の子ども達が、帰国後に、こちらの友人達と交流を続けたいという気持ちがあればメールやスカイプを利用できますし、また、日本でも機会があれば英語でコミュニケーションをすることもありますが、そうでなければ、将来、本人達が英語が必要だと思った時に、本気で取り組んでくれればと考

えています。私が子ども達に対して強く思うのは、英語よりも、自分とは異質な習慣や考え方に接した時に、自分の考えが正しくて、相手は間違っている、または、自分の（国の）方が勝っていて、相手（の国）は劣っているというnaiveな態度ではなく、その違いを尊重し、楽しむことができるような態度を持って欲しいということです。よく言われるように、英語はあくまでコミュニケーションのためのツールですから、そうした態度が涵養されることなく英語を学ぶことにどれほどの意味があるのか大いに疑問を感じます。繰り返しになりますが、英語を使って”何を”したいかが重要なのであって、その動機付けが曖昧なままで英語を習得するのは、非常に難しいと思います。

以上、知人のインタビューをきっかけにして改めて考えさせられた日本人としてのアイデンティティと日本語、さらに英語との関係性について述べました。本稿が、読者の皆さんにとってのそれぞれの関係性を考えるきっかけになれば幸いです。最後に、インタビューのことを掲載することを快く了解して頂いたIさんに心より感謝致します。

養育里親

～もうひとつの家族～

10

坂口 伊都

家族が増えました

この連載を始めて10回目、2年半の年月が経過した計算になります。この夏休みから、里親委託となり、家族が増えることになりました。元気な小学4年生の男の子です。長期外泊を何回か繰り返したタイミングで、この子に児童相談所のワーカーから「坂口さんの家に住んでみない？」という話をしました。話を聞いた時の反応は、「中学になってからにする。学校を変えるの嫌」というものだったと聞いています。その話を聞いた直後の外泊は、何事もなかったかのように過ごしていました。私達の方も、いつもと同じように過ごしながら、「パパもママもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、みんなあなたのことが大好きだからね。待っているよ」と伝えまし

た。照れくさそうに笑いながら、小さく「うん」と頷いていました。この子にとって、大きな人生を左右する選択です。言葉での表現が少ない子なので、どのようなことを感じ、思っているのかよくわかりませんが、2回目にワーカーが話をした時には「いいよ」とこちらが拍子抜けするぐらい、あっさり答えてくれたそうです。それまでに、いろいろ感じながら、ちょっとずつ気持ちを整理してくれました。決断してくれたことに感謝です。

委託当日は、この子の引っ越しの日になります。児童養護施設で、最後の別れを惜しむように、いつもケンカしていた年上の子と戯れていました。その年上の子は、この子のために施設で撮った写真をボードに飾りつけて貼って、手渡してくれました。いっぱい絵も描いてくれて、心がこもっていることがよくわかります。

でも、これを手渡す時は、ぶっきらぼうで照れくさそうな様子でした。そういうところは、二人ともよく似ているなあと思い、微笑ましかったです。

お別れの時、正面玄関に施設の皆が集まり、見送ってくれました。玄関いっぱい子どもも大人も集まり、この子にとってこの引っ越しが、とてつもなく大きな意味を持っているのだと感じました。この子の担当職員は、涙を浮かべていました。長い間、育ててくれた所です。この子にとって大切な場所です。また、こちらの生活が落ち着いたなら、訪ねに行かせてもらえますかと尋ねると、快く受け入れてくれました。車に乗り込み、窓から手を振ると、子ども達が車を追いかけて手を振ってくれました。もちろん、ケンカしていた年上の子は最後の最後まで追いかけて、大きく手を振って見送っていました。

いろいろな気持ちが入り混じりながら、家族が増えることの大きさを感じています。今回は、長期外泊ではなく、家族として受け入れる意味について考えていければと思います。

直前準備

委託の日が決まると、この子を受け入れるための準備が必要になります。事前の学校見学を経て転校の手続き、住民票を移す作業、放課後の過ごし方をどうするのかの話し合いとその手続き作業等をしてきました。そんな作業に追われながら、この子と過ごしていると、児童養護施設で過ごす自分と坂口の家で過ごす自分を無意識に使い分けている印象を受けました。スイッチを切り替えているようなイメージです。それを顕著に感じたのは、幼い頃から通っていた担当医の引き継ぎ時です。施設以外の場所で施設職員とこの子、私の3人が顔を合わせることはあまりありません。その日は出会いから落ち

着かない状態でいました。担当医が私を指さし、「この人誰？」と質問をすると、「幽霊」と答え、そんなこと言ったら悲しくなるよと言われると、うーんと考えてから「坂口さん」と答えました。家にいる時は、パパ・ママと自然に言っているのですが、誰かに改めて関係を聞かれると、何て答えていいのか躊躇するのでしょうか。改めてこの子に、「あなたのパパとママだからね」と伝えました。私達が思っている以上にパパ・ママに呼び方には、この子なりの思い入れがあるのかも知れないと感じました。

また、この子の部屋を整えるために、机や整理棚がついたベッドを買いに行きました。どれがいい？と聞くと、ベッドの下が秘密基地のようになる空間がある物を選びました。家具の発送日が決まると、とても嬉しそうにいつ来るの？何時に来るの？と何度も訪ねてきました。

ベッドが届き、部屋の配置をあれこれ試し、今ある物を片付けると、子ども部屋の様相になっていきました。この子は、ベッドの上に寝転んでみたり、秘密基地に犬を誘い込んだりして満喫しています。部屋ができると、他の家族のメンバーもいいねえ、落ち着くねえと集まってきます。客人が来ると、自分の部屋を見てもらいたくて、いろいろなアピールをしていました。そんな素直な反応を見ると、本格的に一緒に生活していくのだと実感がわいてきます。これから先、どのような生活になっていくのかと不安と、やっと一緒に暮らせるのだという喜びの両方を感じています。

養育里親をしようと思った時は、覚悟を決めたという感覚でした。そして、養育里親をしようと思っていると語ると、夢に向かっているのですねと言われてたり、好き勝手なことをして周りに迷惑をかけていると非難されたりします。私の感覚では、どちらも当てはまりません。上手く言えないのですが、違う感覚のような気がしています。

社会的養護の場で育つ子どもと出会っていくと、家庭というこの子を手厚く養育できる環境下で育つと力が伸びるのだろうなあと感じる子どもがいます。子どもにとって、養育里親で育つことが大きな意味を持つと思うから、それができそうなら、行動に移してみようと思いました。具体的に動くためには、家族との話し合いを重ね、整理をしてという時間が要り、息子も娘も夫もそれぞれに覚悟を決めてくれたので、実行に移せました。実際に私達家族が関われる子は、一人だけかも知れません。それは、とても小さなことです。それでも、意味があることだと思うからやるだけです。

これだけの準備をしてきましたが、養育里親をしようと動き始めると非難されることも起こります。正直、養育里親をしようとして、何でもそこまで否定されなければならないのだろうと打ちのめされる日もあります。そこまで責められるぐらい、私は悪事をしようとしているのだろうかという疑念に襲われますが、責めてくる人はだいたい、詳細を知ろうともせずに攻撃をします。何か新たな事柄をしようすると、波紋のように周りが揺れるようです。子どもと生活を共にする家族間の話し合いは何回も重ねてきましたが、その家族の周辺に理解を求めるのは、予想以上の苦労が待っていました。これは、感覚でしかないのですが、養育里親の意味合いを理解しようとする前提がある人との話は、前に進んでいく感じがしてきません。ゼロではなく、マイナスからの出発です。養育里親の概要を話すと、共感してくれる人もいます。反応は、その人によって様々です。ただ、子どもは何も知らずに生まれてきただけで、何の責任もないこと、生きていく上で児童養護施設出身だと告げることで差別的な扱いを受けている子どもが実際にいるという事実を伝えると、子どもに罪はないという言葉がよく返ってきます。ですが、それでも何でも家族を巻き込んでまです

ないといけないのかと責められます。

例えば、私の実母は、何も聞こうとせずに養育里親に反対していました。聞く耳を持つまでに時間が必要なのだろうと感じていました。時間がある程度経過したある日、母から食事に行こうと誘われました。その日は母と私、息子、娘、そしてこの子の5人で食事をする事になり、この子にも声をかけていました。慣れるまでには、もう少し時間がかかるのですが、受け入れようとし始めてくれたのだと感じます。そのことを有難いと感じますし、母の行動から可能性を学びました。人が変化を受け入れるのにも、準備期間があるのでしょう。もっと養育里親が世の中に広まっていけば認識が変わるのだろうと思います。

以前に、息子も娘もこの子と一緒に暮らすことをいいよと了解して暮らし始められればいいが、それができるかどうかはまだわからないと書きましたが、我が家では3人共が家族になって一緒に暮らすことを了解することができました。この子達の覚悟に感謝です。

娘は、成り行きでこの子の引っ越しの日に児童養護施設までついてきました。本人にしてみれば、ただついてきただけなのに、お別れの日立ち会い、圧倒されていました。思わず、「来なければよかった」と口にしていました。「驚いたよね。でも、なかなかできない経験だよ。これだけ、この子にとっては大きな門出なのだね」と話すと、その言葉を嘔みしめるように聞いていました。正面玄関に皆が集まってくれた時、子どもの多さに驚いたのかも知れません。自分と同じぐらいの子、それよりもずっと小さな子ども達もいました。施設内にバラバラにいる時はそれほど感じませんが、同じ場所に集まると人数の多さに驚きます。

この子と暮らしていた子ども達も複雑な気持ちなのでしょう。それぞれに考えるところがあるでしょうし、寂しさも込み上げて当然です。

施設の職員が、「この子がいなくなることはマッチングの時からわかっていたと思いますが、実際にこの日が来ると、一緒に生活してきた子達は身を切られるような想いをしていると思います。その気持ちに寄り添っていきます」と話してくれました。いろいろな気持ちが込み上げてきます。

委託の直前には、いろいろな所が揺れました。予想していた以上に大きな揺れでした。まだ揺れ続けている所もあります。当の本人は、車に乗り込んでからもいつも通りに何事もなかったかのように過ごしていましたが、どんな気持ちになっているのでしょうか。じわじわと気持ち芽生えるのかも知れませんし、平気な顔をしているだけなのかも知れません。何にしても、大事にしなければと改めて思う瞬間でした。

名字

養育里親をしていて、必ず悩むのが子どもの名字をこの子の戸籍上の姓にするか、我が家なら坂口の通称名を使用するか否かです。子どもは、里親の戸籍に入るわけではありませんから、保険証や書類上はもともとの姓になり、変えることはできません。児童養護施設で生活していた時は、他の子ども達も生活していましたから、当たり前のように戸籍の姓を名乗っています。養子を希望する里親の場合は、今後のことを考えれば、家族と同じ名字を名乗っていくことが自然でしょう。養育里親の場合は、子どもが原則 18 歳まで、大学等に行っている場合は卒業するまで措置延長が認められるようになりましたが、いずれ独立しなければならない時期が決められています。独立すれば、通称名を使用しても、もともとの姓を名乗ることになります。そのことを考慮して、学校によっては卒業証書を通称名と戸籍上の姓の 2 種類を用意する所が

あるそうです。卒業式の間では通称名が使われ、就職の時等に不利益が起こらないために戸籍上の姓の卒業証書も用意するという理由です。

それならば、戸籍上の姓で生活を続けた方が、名前が変わらず子どもへの負担が少ないのではないのだろうかとも思います。ですがそれをする、戸籍上の姓を名乗りながら、里親宅でこの子一人だけ名字が違うことを日常的に目の当たりに暮らすこととなります。以前に、里子ではありませんが、家族の中で一人だけ名字が違う状態で生活していた方が、疎外感や異物感を抱きながら生活をしていたという話を聞き、家族として受け入れる姿勢を考えなければならぬと感じました。どのような選択をしていけば、この子を大切にできるのだろうか。どのような選択をしても、すぐに答えなど出ません。だから、悩むのでしょう。

学校に行けば、何故両親と名字が違うのかという素朴な疑問を友達から投げかけられます。私が学校に行けば、子ども達から「誰のお母さん？」と質問されます。血の繋がりがこそありませんが、この子のお母さんであることは何ら変わりありません。

この子には、坂口のメンバーは皆、あなたを家族として迎えたいと思っている。坂口の家にいる間は、同じ姓でもいいかと尋ねました。すると、「いいよ」と答えてくれました。それは、とても簡単に言っているように聞こえてきます。その後「今の姓もあなたのお母さんの大切な名前だから、両方の姓を大事にしていこうね」と話しました。この子にとって、わかりにくい難しい話なのだろうと思いますが、ちゃんと伝えたい事柄です。

当たり前ですが、この子の持ち物には戸籍上の姓が書かれています。夏休みの宿題も同様です。それを、どのように坂口に変えていけばいいのだろうか悩みます。どうしても、戸籍上の姓を修正ペンで白くしたり、二重線で消したり

する気持ちになれません。別表紙を新たにつけ、そこに坂口と書きました。学校に行く前に、この子と名前についての話を少しだけしています。今は、坂口の名前になることを楽しみにしてくれているようです。これから先、里子だと言って回る必要もありませんし、必要以上に里子であることを隠す必要もありません。私達が、お互いに家族としてぶれないことが大事なのでしょう。今も将来も大事にする選択ができればと思っています。

家族と一言で言っても、形は様々です。ステップファミリーや養子縁組も血の繋がりが無い親子です。血の繋がりが無い親子だからと言って卑下する必要はなく、そこで悩み続けることにあまり意味があるとは思えません。夫婦にも血の繋がりはありません。それでも大切な家族にも成り得るし、破滅の関係に至ることもあります。夫婦も親子も家族もお互いに押し引きしたりしながら、作っていくものです。この子との関係も作っていけばいい。とても幼い子どものような行動も見られますが、これも関係を作っていく過程なのかなと思うと、まあいいかという気持ちになります。

実際に学校に行ってから、自分の名前を坂口と言えるだろうか。坂口さんと呼ばれて、返事ができるのだろうかと心配は尽きませんが、一步一步進んでいけばいいのでしょう。

最後に

この子との生活は、本当に始まったところです。部屋にこの子の物が溢れている状態を見ると、「あー。一緒に住んでいるのだなあ」と感じます。2匹のミニチュアダックスフントも、この子を受け入れているようです。すぐに抱きにくるこの子から逃げたり、尻尾をふったり、抱かれてくつろいだりしています。

まだ、生活リズムがどのようになるかも想像が付きません。感覚としては、長期外泊が続いているかのようです。今回は、生活リズムがだんだんつかめているかも知れません。学校、放課後をどのように過ごすか、試行錯誤している最中です。この子も私達も生活の見通しが早く持てるようになりたいです。

この子は、父が帰ってくると、嬉しそうに待っていましたという様子で近づいています。「パパとお風呂に入る」「パパと寝る」と言って、すっかりパパっ子です。ママとお風呂入るのは嫌なお？と聞くと、ううん、そんなことないと言いながら、お風呂でする水鉄砲がしくて仕方ないと訴えます。私と入る時は、ママに水鉄砲かけないでと言っているの、面白くありません。何気ない日常が繰り返される心地よさを感じます。

その一方で、初めて見るこの子のアルバムから、一緒に過ごしていなかった時を知ります。この子が赤ちゃんだった時、私は何をしていたのかなと思います。仕事で何度か訪れたことがある児童養護施設なので、将来こんなことになるとは思わずに挨拶を交わしていたかも知れません。縁とは、不思議なものですね。

養育里親をしていこうとする両親にそれほど気持ちの余裕があるわけではありません。自分の子どものこと、我が家に来てくれようとしている子どもを護れるように考えるだけで精一杯です。自分達の思い通りに事態が動くわけではありません。周りの支援者達と何回も話し合いを重ね、この子にとって生活の場所を変える時期をいつにしたら、負担が少なく済むのかを考えました。お互いにでき限りのことを協力してきました。この子にとってどうなのかを一緒に考えられる輪の存在は、里親にとっても子どもにとっても大きな支えになっています。

周辺からの記憶8

～2012年度 宮城（仙台・多賀城）～

村本邦子（立命館大学）

2015年6月27日～7月5日、JR西日本あんしん社会財団の助成を受け、京阪三条駅にて、「未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト：団士郎 家族漫画展」を開催した。「心の防災」をテーマに街頭インタビューを試みたが、たくさんの方が足を留めてくださり、20名の院生・修了生たちの協力も得て、なんと250もの声が集まった。分析作業は大変だが、なかなか興味深い結果が出るのではないかと思う。少しずつ紹介していきたい。引き続きWeb展をやっているので（2016年5月30日まで）、是非、訪問してください（<http://www.cocoro-kasanaru.jp/>）。



あわせて、『臨地の対人援助学～東日本大震災と復興の物語』（晃洋書房）も刊行された。是非ご一読ください。

いよいよ、今年もむつから、5年目のプロジェクトが始まる。いろいろな形でお力添え頂いている皆さんに感謝するとともに、新たな出会いと展開を楽しみにしている。



準備

初年度は開催を見送った宮城だったが、今年は何とか実現したかった。さまざまなルートから色々な可能性を検討していたが、7月に入って、宮城で災害子ども支援窓口を受託している「災害子ども支援ネットワークみやぎ」「特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ」が受け皿となってくれることになった（2012年度、政府は被災三県に災害子ども支援窓口を指定した）。

チャイルドラインの方が動いてくださって、8月には、「せんだい男女共同参画センター」の共催で、「エル・ソーラ仙台」を会場に使わせてもらえることが決まった。「エル・ソーラ仙台」は、仙台駅に隣接した31階建の再開発ビル「アエル」の28・29階に入居する仙台市の男女共同参画施設で、「エル・パーク仙台」とともに、子育て、女性、家族支援の機能を担っている。実は、昨年9月の営業回りでは、「エル・パーク仙台」に立ち寄って話をし、「エル・ソーラ仙台」の方にもつなげてもらったが、すでに企画が一杯だと断られた経緯があった。「アエル」は、1998年の完成時点では東北最高層だったそうで、仙台のランドマークとなっている。

さらに、仙台市内よりも沿岸部に支援ニーズがあるということから、多賀城市でも小さなプロジェクトを試みってみることになった。仙台では、10月1日～6日の漫画展、6日（土）のプログラム、多賀城では、7日（日）の漫画展とプログラム。企画内容に

ついて相談する中でわかってきたのは、どうやら、ニーズはスタッフの養成と個別相談（スーパーバイズあるいはコンサルテーション）にあるらしい。相手方のニーズに応えることは重要だし、柔軟であるべきだが、バックボーンは必要である。私たちのプロジェクトの趣旨は、個別対応よりコミュニティへの働きかけにウェイトがあり、ひとりひとりと出会いながらも、そこから視点を社会へと広げていくこと、心理主義的介入の枠を破っていくことにある。そうでないと十年続かないだろうと思うからだ。

時期的には、現地で被災者支援にあたっている人々に疲れが出ていること、時間経過とともに表れてきた被災者の「心の荒れ」をどう受け止め、静めていくかに苦慮しているということだった。仮設住宅の子どもたちの不機嫌や暴力が増えてきたのだという。その一方で、支援にあたっている人たちの研修疲れの声があがっており、貧困、離婚、発達障害など、ハイリスクへの対応が課題になっているという話も聞いた。全体が日常の再構成に向かおうとすればそれだけ、もともと負荷を抱えていた人々の負荷がさらに大きくなって取りこぼされていくことになるだろう。個別対応や支援者への研修で解決できない問題である。とりあえず、今回は、外部にも開いた支援者支援セミナーとプラスアルファで個別質問コーナーを設けることにした。

9月に入って、ようやくチラシもできあがり、今年宮城でのプロジェクトの開催が実現することになった。

10月5日、多賀城市の仮設住宅へ

新幹線で仙台へ。駅近くの宿にチェックインして荷物を置いてから、漫画展会場のエル・ソーラに立ち寄る。なかなか立派な建物で、活気ある駅前の様子からはもはや震災の痕跡は見えない。とは言え、仙台市のHPによれば、死者・行方不明者は700人を越え、津波による住宅被害は全壊2.5万件以上、大規模半壊・半壊10.5万件以上というのだから、被災状況による差は大きいはずである。実際、いざJR仙石線で多賀城へ移動しようとする、沿岸部の線路はまだ復旧されていないことがわかる。



多賀城駅からタクシーを拾い、多賀城公園野球仮設住宅へ向かう。チャイルドライン代表の小林純子さんのはからいで、仮設住宅の様子を見せて頂くことになったのだ。宮城県HP(2012年8月31日現在)によれば、多賀城市の死者は200人を越え、住宅被害は全壊・半壊合わせて約5500件、仮設住宅が6ヶ所あるとのこと。短い道中ではあったが、タクシーの運転手さんは、車を走らせながら、あたかも実況中継をするかのように被災状況を話してくださる。JR

多賀城駅周辺は津波が1.8mの高さまで上昇、津波が引くのに丸2日かかり、橋のあたりにはボートが木の葉のように積み重なっていたという。

2台のタクシーに分乗したが、もう1台の方でも同様に被災状況を聞かせてもらっていた。1年半経った今、過去を振り返って外から来た人に話したい時期になっているのだろうか。私の乗った車の運転さんの家は、津波は入ったものの住める状況だということだったが、もう1台の方の運転手さんは仮設に住んでいるとのことだった。地震が来た瞬間は浜に向かって車を走らせていたが、「豆腐に乗ったような」揺れに慌てて方向転換し、神社のある丘へと向かって命拾いされたそうだ。生々しい話に鳥肌が立つ思いだが、このあたりの人々は、多かれ少なかれ、そういう体験をされているのだろう。



仮設住宅は緑に囲まれた小高い丘の上にあった。入口付近に黄色い図書館バスが止まっていて、NGO「幼い難民を支える会」のスタッフが子どもの遊び相手をしていた。100軒ほどが暮らしているそうだ。個人情

報をもらえないので、どのくらいの世帯に子どもがいるのか不明だが、学童前の子どもが 10 人は確認できている。中高生を入れるともっと多い。



集会所の中に 4 畳半くらいの小さなキッズスペースがあるが、子育て中のお母さんたちはチャイルドラインが入る金曜しか来ない。子どもがうるさいと苦情が出ることを恐れているらしい。外で遊べる日はまだ良いが、寒くなってくると屋内での遊びのスペースが限られているので、問題が顕著になるだろう。せめて 1 日 2 時間だけでも集会場を子育て中の親子が使えるようにと提案しているが、話し合いはなかなか前に進まないそうである。

棟続きの仮設住宅では、隣の声がうるさい、子どもがうるさいなど、本来なら問題にならないようなことが問題になる。子連れが迷惑がられるため、親が子どもを必要以上に叱る、普通なら許容できることができなくなっている。多賀城中心部では核家族が多いが、沿岸部では 2 世帯、3 世帯住宅が多く、広い敷地にそれぞれの世代が

各々家を建てて住んでいたもので、6 畳+4.5 畳の仮設住まいは大きな負担を強いている。若い人たちはローンを組んで仮設住宅を出て行くが、年金生活の高齢者は収入源がないので取り残される傾向にある。仮設住宅が閉鎖されて公営住宅に移行するとき、その家賃に補助が出るのかなど、今後の課題は多い。震災から 1 年半になるが、風呂の追い炊き機能が設備されたのは、ようやく最近だという。

そんななか、15 市町村に通って支援を行っているチャイルドラインは、多賀城公園球場仮設住宅をモデル事業として位置づけている。子どもの権利を言いすぎると大人たちが嫌がるので、バランスを取りながら、しかし子どもにとっての遊びの重要性を代弁してゆかなければならない。災害直後は市の役員に「子どものことどころじゃないんですよ」と言われたそうである。どうしても子どもは後回しになる。みんな自分のことに必死で、許容力が落ちる。障害児を持つお母さんが一旦は仮設住宅に入ったが、周囲の目線に耐えかねて半壊した家に帰ってしまったこともあったという。厳しい現実である。

おおぞら保育園

その後、チャイルドラインの車で、多賀城でのプロジェクトを共催してくださるこ

とになったおおぞら保育園へ向かう。小林さんに「コンテナの保育園で、小さな小さなスペースに 20 人もの子どもたちがすし詰め状態になって、見たら涙が出ますよ」と聞き、胸が痛む。しかし、いざ到着してみると、コンテナに大きく描かれたパンダに出迎えられ、へちまが巻きつく階段をトントンと登って小さな入り口からなかに入ると、そこには暖かく明るいスペースが広がっていて、なんだか秘密基地のようなワクワク感がある。夜になっていたので、小さな1室に子ども3人と先生2人がいらして、子どもたちはおとなしく折り紙などしていた。すし詰め状態を見ていないから言えることかもしれないが、私はこの小さなコンテナ保育園がすっかり気に入ってしまった。とは言っても、園庭もなく、小さな象の滑り台が砂利の上に置いてるだけだった。雨の日は辛かろう。



黒川恵子園長にお話をうかがう。被災当時、黒川先生は、多賀城市八幡、砂押川のほとりにあったクローバー保育園に勤めていた。地震が襲ったとき、先生方は、小さい子どもたちをトランクの中に、大きい子どもたちを机の下に入れ、建物が倒れないように皆で柱を支えた。たまたま配達に来た郵便屋さんと一緒に柱を支えてくれたそう。2日前に起きたM7.3の地震を受け、いざという時のために市役所に避難先を確認し、八幡小学校に避難することを保護者に伝えただけだった。

大きな揺れに耐えた後、どの道に行くべきか不確かではあったが、小雪の降るなか散歩車を押し、手をつないで、いつもの散歩道である砂押川沿いを歩いた。誰からというでなく、いつも散歩の時に歌っているトトロの歌を歌いながら歩いた。途中、逃げ惑う人々と何度か交差したが、道一本違うと被災状況がまったく違い、川沿いも本当は危なかった。考えればぞっとするが、まったくの偶然が生死を左右した。



▲藤原佳世さん撮影

避難先の小学校に着いた時には、すでに大勢の人たちが詰め掛けていて、校門の中に入れてもらえなかった。そこで初めて後を振り返ると、さっき歩いた散歩道に津波が押し寄せていて、「津波だあ！」と慌てて中に駆け入った。小学校の中に入れてなかったので校庭で、園児たちにブルーシートを被せて雪をしのいだという。

クローバー保育園の経営者は、本業が被災したこともあり、同じく被災した保育園を廃園にした。子どもたちの保育と解雇された保育士さんたちの雇用のために、黒川先生は、2011年9月、障害児施設、太陽の家に間借りをして保育園を再開させた。被災後は物件も少なく、たまたまネットでトレーラーハウスの診療所を見かけ問い合わせていたが、12月、いよいよ借りていた部屋を明け渡さなければならなくなり、2012年1月27日、高崎にコンテナハウスの保育園を開園した。被災したときに経営者だった人には市から補助金がおろるが、黒川さんは経営者ではなかったため補助金が出ず、それでも何とか協力を求め、市から土地を借りて、自費でコンテナを買ったという。黒川先生のアパートも被災し、現在のアパートに引っ越すまでは、避難所からおおぞら保育園に通っていた。

コンテナの立つ駐車場は砂利が敷いてあるので、そこで園児を遊ばせるわけにはいかない。テラスを広げる案を模索していたところへ、駐車場を保育園にするのは建築

法違反ではないかと県の土木課に近所の人から通報があったという。駐車場の周りにフェンスを建てたら、また通報。何かするごとに通報されるので、テラス拡張に踏み切れずにいる。以来、なるべく近隣の理解を得られるようにと、草むしりなど町内会のイベントに参加するように心がけているそうだ。お金があったら新しい園舎を建てられるから、「思わず宝くじを買っちゃいました」と黒川先生は笑うが、何ともやりきれない。



▲廃園となったクローバー保育園

仙台でのプログラム

10月6日(土)、仙台市エル・ソーラにてプログラムを実施。女性センターにはさまざまなチラシやポスターが貼ってあって、

活発に女性支援が行われていることが感じられる。昨年、エル・パークを訪れた時には、「まだ女性の問題が十分に見えてこない」と言っていたが、その後、「仙台の女性たちは頑張っているよ」と耳にしていた。

午前中は、団さんの漫画トーク。人は記憶（物語）の塊であり、過去はもちろん、未来はまだ始まっていない物語の時間。大きな被災物語に小さな物語は打ちのめされがちであるが、未来に向けてどのような物語を紡ぎ出すか、復興した未来はそこにあるのではということ、家族漫画を通して多様な「家族の物語」に触れてもらう。「あなたはどのような人ですか？」と尋ねることで、家族についてのナラティブが変化していくことに、支援や問題解決のヒントもあるという趣旨だったと思う。



お昼をはさんで、午後は私が支援者支援セミナーを担当する。まずは、自己紹介を兼ねて、プロジェクトをスタートさせた経緯について話したうえで、レジリエンスという概念について話した。紹介したのは、Mullender(2000)の DV シェルターで行われた子どもたちへのインタビュー調査である。危機的状況において、子どもたちに重要だったことは、①当事者として自分の声に耳を傾けてもらい、真剣に取り扱ってもらうこと ②解決法をさがし、意志決定の援助に積極的に関わること のふたつだった。子どもたちは本来、力を持っており、自分の人生の物語の主人公であることを保

証されることによって、その力を存分に発揮することができるのだ。3人組でレジリエンスを感じたエピソードについてシェアしてもらった後、支援者は自分のケアが後回しになってしまいがちなので、互いにサポートしあおうという話をして、もう一度、シェアの時間をとった。



全貌はわからないが、テーマについてよりも、そこを入口にしてそれぞれ被災体験が語られたようである。15分の予定だったが、ひとたび話し出すとなかなか終われない様子で、後で参加者から「自分たち支援者たちは、まだ十分に被災体験が語れていないのです。こんな時間がもっと必要なんだと思います」と言われた。物語るためのきっかけや枠組が求められているのかもしれない。被災状況も支援状況もあまりに多様だったようだが、互いの声に耳を傾け互いの力を引き出す小さなきっかけになったらいいがと思った。



上山真知子さん&モリスさんとの交流

プログラム終了後、漫画パネルの撤収をすませてから多賀城市へ移動、上山真知子さんとお連れ合いのモリスさんと落ち合う。上山さんとの出会いは、9月の心理臨床学会だった。上山さんのことはすでに聞いていたが、災害のシンポジウムに参加し、フロアから質問した上山さんに気づき、遠くから服の色や形を目に焼き付けておいて、終了後、たくさんの人のなかから探し出して、声をかけた。我ながら目的があればわき目も振らずまっしぐらという性格を可笑しく思うが、それでもこの性格ゆえにさまざまなことが動いてきたのだ。上山さんは山形大学の心理学者だが、自宅が多賀城にあって、震災後、現地で大活躍されていた。

今回のプロジェクトに合わせて約束を取りつけていた。

モリスさんはオーストラリア人の歴史学者で、途中、被災の状況を説明しながら、夜の街を案内して下さる。この交差点には 7m の津波が押し寄せ、この左手では火の手が上がった。JR 多賀城駅沿いの川は決壊し、川原には死体の山があがった。ご夫妻の住まいはそこからほんの少し上流で辛うじて無事だったが、通りすがりの人々や近隣の方々と助け合って日々をしのぎながら、とにかくできることをと支援を展開されてきた話には感心するばかりだった。

「食いしん坊」というお魚料理屋さんで夕飯を御一緒しながら、お話を聴く。2011年3月の段階で、避難所に子どもの遊び場を作ったり、4月には地元の教師たちのワークショップを開催したりと、非常に早い時期から活動されていた。ストレス対処法を話してもらったら、とても盛り上がり、同職種が集まるとこんなに力になるのだと知ったそうだ。震災直後からたくさんの団体から多種多様な支援の申し出が相次ぎ、なかには怪しげなものもあったが、国際 NGO プランジャパンの申し出をさまざまな支援をつなげていった。WHO による PFA を翻訳し、子どもたちが撮った子ども眼線の写真を使った冊子を作成した。また、途中、「食いしん坊」のお嬢さん、土井真理さんが合流したが、実はこの方、ドラムカフェ・ジャパンという会社を立ち上げてビジネスを展開されていたが、震災後、これを使ったコミュニティ支援に力を入れておられた。このドラムカフェというのがなか

なか面白く、後に私も経験することになる。この活動とプランジャパンをつなげたのも上山さんだったが、本当に地域には力強い人々がおられるものだ。



多賀城でのプログラム

10月7日(日)は多賀城でプログラム開催である。仙台のホテルをチェックアウト

して、再び、多賀城市へ向かう。会場となった多賀城文化センターは、新しい立派な建物だが、当初は避難所になり、人々が折り重なるようにして寝ていたようだ。

部屋の壁に椅子を並べ、椅子にパネルを立て掛ける形で手作りの簡易版ギャラリーとし、その中でプログラムを実施する。メニューは仙台と同じで、団さんの漫画トークと私の支援者支援セミナーであるが、対象が異なることからどのような内容が良いものかギリギリまで迷っていた。実は、早朝に起きて新しいパワーポイントを準備したのだが、開始時のメンバーは保育園の先生方のみだったので、予定変更してパワーポイントは使わず、グループ形式で話すことにした。簡単な自己紹介と、今、気になることをあげてもらうが、仙台と同様、被災体験を語られる方が多かった。そうこうするうちに、遅れて次々と新たなメンバーが加わり（15人ほど）、進行がとても難しい構成になってしまった。

それぞれの参加者のニーズに少しずつ応答できるよう臨機応変に進行したつもりだが、難しさは、あらかじめ参加者の状況を把握することができなかったこと、狭いコミュニティでの参加者同士の関係性が見えないなかで一緒にやらなければならないことによるものが大きかったと思う。通常のグループであれば、遅れた参加者を受け入れられないものであるが、今回はそういうわけにもいかず、今後の反省として、目的と対象を絞る方が良かったと思った。とは言え、年々、変化するなかで、目的をどこに置き、どのような内容にするのか難しい課題だ。時間

経過とともに被災のことより、一般論に持っていく方がよいのだろうか。一年に一度、立ち止まって振り返ってもらう機会になればという思いもあるが。もうひとつ感じたことは、被災地の状況は予想以上に厳しく、意識レベルのニーズと本来のニーズにズレがあること、両方を理解する必要があると思った。





今後に向けて

仙台と多賀城、1日ずつというスケジュールはやはり忙しい。じっくり地域の方々と出会うという意味では1ヶ所に絞る方がよいような気もする。仙台は規模が大きく、支援もたくさんあるということから、多賀城に絞ろうかなとも思う。

岩手に関しても、沿岸部である大船渡でやってはどうかという話が出て、その方向で準備を始めている。同じ地点で十年と思って始めたものであるが、十年続けられそうな開催地を特定するのはなかなか難しい。

つづく

病児保育奮闘記

(7)

子どもサポート H&K

大石 仁美

飛び込んできた女神♥

開設して4年目を迎えたある日、年配の女性が訪ねて来られました。お孫さんの申し込みに来られたのかしら、と思って対応しましたが、どうもそうではなさそう。とても緊張しておられてピリピリ感が伝わってくるので、私の方も少し緊張して向き合って座りました。

初対面どうし、お互いに相手のことを何も知らないまま、「お願いしたいことがあって・・・」という次の言葉を私は真摯な気持ちで待ちました。まじめな方ということだけは、はっきり分かったからです。

この突然飛び込んでこられた奇妙な来訪者の話を、思い出しつつ整理してみると、次のような内容でした。

「私は保育士で、一昨年まで某保育園で働いていましたが、若いとき教育大学で学んでいたのを、途中で放り投げてしまっていて、そのことがずっと引っかかっていた。もうすぐ定年という年になって、このままでは何もかも中途半端に終わってしまうという焦りに似た気持ちになり、思い切って、職場を退職し復学いたしました。おかげ

さまで、来春卒業というところまで漕ぎ着けましたが、卒論に選んだ病児保育というテーマになかなか切り込めず、時間ばかりが経ち、頭はまるでセメントで固めたようにコチコチで動きません。もうあきらめようと何度も思うのですが、その度にまわりの皆が励ましてくれます。なにも出来ない自分。人にも会いたくない。確実に病気です。そんな時、自転車で走っていてこの看板を見つけました。お願いします。ここで保育実習をさせてください。なにかが掴めるような気がするのです。どうぞお願いします。」

後から聞くと、彼女はもし断られたらどうしようと悲壮な覚悟だったようです。あと半年に迫った卒論を前に、恥も外聞もなく、助けてほしいと手を出されたら、振り払うこともできません。

「小さな施設です。なにも得られないかもしれませんが。」そう言ってその場で了承したのでした。

後々彼女は、まさに救いの神様だったと述懐していますが、実は私たちにとっても彼女は、女神様だったのです。(以後、彼女をFさんと呼ぶことにします。)

さあ、どうする！？

利用者の声が聞きたい

Fさんは、少子化に歯止めがかからない現状の中で、子育てと仕事をしていくうえで一番大変なことは何かという問いかけに、「子どもが病気の時」と答えた親が一番多かったという情報をすでに持っていて、だからこそ病児保育を卒論のテーマに選んだのでした。でも、現状と課題を浮き彫りにするためにどうやって切り込めばいいのか、社会の変化と制度の変遷を整理したり、各施設のパンフや行政のチラシ、病児保育に関係ありそうな子育てにかんする書物や資料を集めたり、京都市の担当部署を訪ねて（当時は保健増進課）五か所ある病後児保育施設の利用状況や、京都市の今後の方向性などの話を伺ったりもしていました。

京都市では、2001年に5か所での体制が整いましたが、利用者はなぜかとても少ないのが現状でした。そこで各施設に“事業の拡大”をお願いする一方で、市民に広く認知されていないのかもしれないと、スーパーやコンビニでも気軽に手に取れるような名刺サイズの案内チラシを、主に保育園、児童館等に置くなど、工夫を重ねていました。それでも目に見えた効果は見られなかったようです。

2003年に開設されたばかりの子どもサポートH&Kと年間の利用者を比較してみると次のようです。

京都市5施設合計	子どもサポートH&K
2003年 361名	172名
2004年 530名	320名
2005年 609名	445名

このあと子どもサポートH&Kは、500名近くで横ばい状態が続きます。市の方も600名余りが続いたようです。“あ～あ 暇やなあ～”という日も

結構ありましたから、市の方はもっと暇だったでしょう。5で割ると一施設あたり100名。年間240日稼働しているとして、一日あたり0.42名。一施設800万円ほど補助金を出しているはずなので、これではあせると思います。

なぜ利用者が少ないのか？ それは宣伝が行き届いていないからではなく、利用者のニーズに合っていないからに他ありません。

- ① 欲しいのは病後ではなく病中保育
- ② 診察を受けてからしか利用できないので大幅遅刻になる
- ③ 前日予約なので、急な発熱には対応できない。
- ④ どの施設も市周辺部で交通の便が悪い

これでは絵に描いた餅にすぎません。

Fさんは、利用者側に立ったサービスを提供している当施設での実習を通して、問題点が明確になったのです。（実際、市は2011年から上記の①、④を改善して、利用希望者があふれるようになっています。）

Fさんは、利用者の声が聞きたいという思いを強くし、アンケート作成にとりかかりました。担当教官の指導のもとに作られたアンケートは、大学側からの調査目的とお願いの文書に、子どもサポートからの協力依頼の文書を添えて、全会員さんに発送されました。発送人、受取人はFさんで、個人が特定されないよう工夫されていたのはもちろんです。

これほどまでに・・・♥

想像以上の感謝のことば

苦勞してアンケートを集計、整理されたFさんからの報告を受けて、驚いたのは私たちでした。回収率は57%でしたが、自由記述欄には用紙の裏までびっしり親の気持ち、病児保育のありがたさ、

そして子どもサポートH&Kの経営の心配まで書かれてあって、感謝の言葉が溢れていました。

- 他のところ（ファミリーサポート、ベビーシッター等）では、朝いちばんには連絡がつかなかったり、断られたりしますが、いつも快く引き受けていただけてとても有難く思っております。
- 共働きで親類が近くにいない私たちにとってなくてはならない存在です。
- 急病でも安心して預けられるという環境がすごく有難いです。
- 保育園にお迎えに行ってもらえることが有難いです。おかげで、職場に気を遣わなくなり、精神的に楽になりました。
- スタッフの方がいつも同じなので、安心です。子どももとても慕っていて、あたたかくてほっこりした時間を過ごしているんだと思うと、親としてうれしいです。
- 病気の子どもばかり看っていて、先生方が体を壊さないか心配です。こんな良いところがなくならないように、なにか出来ること出来ないか考えています。
- 経営が大変だと思いますが、ぜひ頑張ってください。看護休暇があればよい、病児保育所が整備されればよいというものではありません。仕事と子育ての両立で辛いとき、そのつらさを共感してくれる人がいてくれることが大切なのです。本当に頼りにしていて有難く大きな存在です。
- 病気以外のことで相談にのって頂き、不安な子育てから少し楽になれました。数えきれないほど利用しつつ、乗り切ってきたので、H&Kのスタッフは頼れる子育て仲間です。

いくつか抜粋してみました。このように有難い言葉がたくさん述べられていて、私たちは感動して胸が熱くなりました。利用者に喜んでもらえて

いる！それが目に見える形で伝わってきたことで、疲れも一瞬で吹き飛びました。Fさんが来てくれたお蔭です。

私たちが一番気にしていた利用料については、

- 良心的な料金でよくしていただいていると思います。
- 他に比べて、低料金で信頼できます。
- 保育の質を考えると妥当な金額だと思います。という人たちと、
- 金額が高いため、家計的にきついです。
- もう少し下げただけだとありがたいです。
- 公的な病児保育施設がほしいです。という人たちとはっきり二つに分かれます。これは家庭の収入によって当たり前のことで私たちにも納得でした。

私たちは、若者がこの事業に参入してくれることを願っていて、なんとか若者の生活が成り立つようなモデルになりたいのですが、今の料金でもなかなかそうはなりません。ただ、はっきりしたことは、高くないと思っている層の人たちをもっと取り込むことです。専門職で仕事に穴をあけられない人たちの客層を広げること、それしか生き残る道はありません。一方で高いと思っている人たちには、公的施設ができるよう運動してもらおうこと。すみわけしかないと確信するに至りました。

Fさんは多くの人に励まされながら、なんとか卒論を書き終え、無事卒業されました。私たちもほっとし、同時に人と人とのつながりの不思議さをおぼえます。卒業後のFさんは、その後6年にわたって子どもサポートH&Kの強力な助っ人として献身的に働いてくれることになったのでした。

さすがベテラン保育士♥

Fさんが当施設に毎日通ってくるようになって、雰囲気のがらりと変わってきました。資格は持つ

ているというものの、堅物で、教師のくせが抜け切れない爺ちゃん保育士と、子どもが病気の時は、べったり甘やかすのが最高の薬と思っている看護師のペアです。子どもの接し方がまるっきり違うので、衝突することも多いのですが、そこにFさんが入ってくると、うまく緩衝材の役割をしてくれ、彼女の接し方を見て、「ううん、なるほど」とお互い納得するという具合です。

子どもが、おもちゃの取り合い等でぐずり始めたら、他のことに関心が向くよう気持ちを切り替えてやればいい、そのテクニックもさすが。「う～ん」と唸ることも度々でした。また、眠くて泣く子のあやし方は、ゆりかごのように、横にゆするより縦にゆすると効果的ということも。考えてみれば、今どきの子の移動はほとんど車で、車の中で眠るということになれているのですね。だから車のようにゆらすと、本当によく寝てくれるのです。私たちはありがたいことに、時間とお金を使うことなく保育実習をする機会を手に入れたのでした。

ある朝のこと、出勤した私の顔を見るなり、「風邪ひかれたんですか？」とFさんの声。この時ばかりはびっくりしました。本当に風邪気味でしたから。風邪をひいたときの特有の目の表情を彼女は見逃さなかったのです。さすがベテラン！

短大での保育保健の講義にも、彼女の話をよく例として取り上げさせてもらいました。「ベテランはすごいよ。登園時の子どもの健康状態は、まずどこをみる？目だよ。目は口ほどに物を言うというよね。目は心の窓とも。彼氏とデートの時も、じーっと目を見て相手の心を見抜かなきゃダメだよ。と余談を入れながら、関心をひきつけて、「目が充血していないか、寝不足かもしれないし、泣いた後かも知れない。結膜炎かもしれない。風邪をひいた時には鼻も耳も目も細い管でつながっているから、特に目はうっとうしくなる。おろおろして焦点が定まっていなかったら、心理的になに

かあるかもしれないね。目が輝いていて大きな声で挨拶出来る子は大丈夫。あれ？なんか変。そういうことに気付く。私の目を見て一瞬で気づく、ベテラン保育士さんってすごいよね。」とまあ、こんな具合で、保育士の勉強をしておく、将来自分の子育てにもどんなに役に立つかを話して学習意欲をかきたてます。

実際、異常を見つけるのはいつも彼女が最初でした。「この子、おなかに2つ発疹があります。虫刺されでしょうか？」「あらほんとね。しばらく様子を見ましようか」「あのう、数か所増えてきました」「あら、水痘の可能性があるわね。隔離しましょう」という具合です。このように先輩保育士としてのFさんの例を教材に使わせてもらうことで、学生の士気はずいぶん上がったと思います。

こんなこともありました。夕方の5時過ぎ、そろそろ仕事を終えたお母さんが子どものお迎えに来られる時間です。忘れ物がないように荷物の点検をしているとき、電話が入りました。保育園へのお迎え依頼です。仕事の途中で今動けないとの事。はい。分かりました。と答えたものの、滅多にないことに狼狽しました。スタッフがひとり外に出ると、お母さんがお迎えに見えた時の対応をしている間、もう一人いる子どもが放っておかれることになります。とっさにFさんに電話をしますと、すぐに自転車をとぼして駆けつけてくれました。その間10分ほど。なんと有難かったことでしょうか。

Fさんは、私たちに恩があると思っておられるようですが、私たちこそ、教えられ、助けられ、励まされてきたのです。ひとのいい、ちょっぴりおっちょこちょいのところもある、愛すべき女神様に感謝でいっぱいです。

ラホヤ村通信

(5)

高垣愉佳

1. ESL

少し前に、日清カップヌードルの CM で、明治初期辺りの武士が刀を振り上げて、「英検 3 級なめんなー！」と叫びながら、大砲を持った白人兵士に突撃していくという自虐ネタの CM があった。確か CM のタイトルは『survive』だったと思う。私の英語はまさにあんな感じで、しかも私は CM の武士より下の英検 4 級しか持っていない。中学の時に受けたきりだ。そして、これまで英語圏の国には海外旅行で行った事すらなかった。英語が苦手ゆえに大嫌いだったので、英語圏をずっと避けて来たのだった。渡米する事にも気が進まないまま渡米した。当然、渡米前に英会話教室に通おうなどという気すら無かった。そんな状態で渡米したのだから、しばらくはまさに毎日がサバイバルだった。

不動産屋さんのエレーナが「ゆかは ESL (English as second language=第二言語としての英語=英語学校) に行くといいわ。大学で無料のクラスがあるらしいわよ。中国人達は皆そこに通って英語を勉強したっていった。」とアドバイスをくれた。生活に必要な物が一通り揃って生活が落ち着くと、早速私は家から一番近いカリフォルニア大学のオフィスに話を聞きに行った。

ところが、カリフォルニア大学には無料

の ESL クラスは無かった。パンフレットを見ながら説明を受けたのだが、無料どころか、あまりの学費の高さに思わず私はのけぞってしまった。何と 1 か月 1700 ドル、1 ドル 100 円で計算して 17 万円もするのだった。「私の英語力でスタートして、ある程度流暢に話せるようになるにはどのくらい通う必要がありますか？」と尋ねたところ、「三か月くらいは通う必要があると思う。」という返答が返って来た。3 か月ということは、51 万円。無理だ。がっくりと肩を落として、とぼとぼと家に戻った。

でも、エレーナは、中国人達は大学の無料の ESL で英語を学んだと言っていた。ということは、この大学以外の大学にそれがあるはずなのだ。そう思って、それからしばらくインターナショナル・センターで中国人に出会う度に「その英語はどこで習ったの？」という質問を繰り返した。多くの人は「中国の大学で習った。」と言っていて、中には「教会で習っている。」という人も居た。何でも教会はバプテスト派のキリスト教教会なのだが、中国人専用の教会で、週に 2 回、聖書をテキストにして中国語と英語を教えるクラスがあるらしい。中国人専用の教会だが、中国語が話せるあなたは参加出来るから、一緒に行かないか？と誘ってくれた。ミッションスクールで育った私

は聖書は学校でさんざん読まされてもうこりごりだし、信仰心も無いので、丁寧にお断りした。

留学しに来たわけでもないし、英語が好きなわけでもないし、全く通じなくて困っているわけでもないから、まあいいかなあ。と思い始めた頃に、大学の無料 ESLに通っているという中国人に出会った。インターナショナル・センターのリサイクルショップでボランティアの店員をしているリーさんという人だった。

彼女に聞いた大学の名前を検索して調べた。サンディエゴ生涯教育 (San Diego Continuing Education) の一環として、郡内の 8 か所の大学に場所を置いて行われているらしかった。リーさんが行っている大学よりも、別の大学の方が家から近いということが分かったので、早速家から一番近い(と言ってもバスで 40 分程かかるのだが)ミラマーカレッジという所に話を聞きに行くことにした。

ミラマーカレッジの事務所に行って、無料の ESLに参加したいのだが、と告げると早速申し込み用紙を渡された。住所、名前、国籍、身分、これまでの英語学習歴等の質問項目があった。身分の回答欄には“亡命者”“難民”などの項目があり、アメリカらしいなと思った。

申込用紙を提出すると、奥の部屋の机に座るように言われ、テスト用紙と鉛筆を渡された。英語のテストが大嫌いな私は、テスト用紙に触れるのも恐ろしくて、しばらく固まってしまった。そんな私を見て、オフィスのお姉さんは、「このテストはクラス分けの為に必要なの。あなたに一番合ったクラスを見つけるためのテストだから、良

い点数を取らなくてもいいの。ベストを尽くしてくれたら、それでいいのよ。」と励ましてくれた。

オフィスのお姉さんが優しくかったので、何とか最後までテストをやり終えた。中学の教科書程度の英文の音読、長文を読んで 4 択でマークするテスト、絵を見て状況を口頭で説明するテスト、絵を見てそれが過去の物語だと想定してお話を書くテストの 4 種類のテストを受けた。

テストの結果、「レベル 4」との判定をもらった。が、あいにくレベル 4 のクラスは満席なので待機リストに登録する。空きが出たら電話で連絡するから待っているように言われた。通常なら 2~3 週間で空きが出ると思うとのことだった。

しかし、1 か月以上経っても連絡は来なかった。どうなっているのか?と再度問い合わせたが、空きが出たら電話をするから待つようにと言われるばかりだった。そんな時に、別の中国人と出会って話す機会があった。その人の奥さんもレベル 4 でメサカレッジと言う別の大学に通っていて、そのカレッジでは現在空きがあるから、ユカもメサカレッジに行つてはどうか?と教えてくれた。

英語を話すのが苦手な私は、ミラマーカレッジが空くまでメサカレッジに席を置きたい旨の手紙を書いて持って行った。結果的に再度別のレベルチェックテストを受ける事になり、レベル判定が終わるとそのままレベル 6 のクラスに連れて行かれた。

サンディエゴ生涯学習のホームページを隅から隅までしっかり読んで申し込んだわけでも無く、事務所でも詳細な説明があるわけでもなく、あれよあれよといううちに

テストを受けてクラスへ送り込まれたので、ずっと後になるまで知らなかったのだが、この ESL は“移民”の為のクラスだった。

この継続教育制度は州によって制度が異なるらしいのだが、サンディエゴ継続教育のホームページに書かれている内容（カリフォルニア州の制度）を箇条書きでお伝えしたい。

- ・ 8 つのキャンパスで開講。
- ・ 一般英語は初級から上級まで 7 レベル。
- ・ 午前、午後、夜に開講。
- ・ 一般英語以外に、無料のコンピュータークラス、特別クラス、大学進学クラス、就労支援クラス、市民権クラスも開講。
- ・ 18 才以上でカリフォルニア州の住人であること。
- ・ 18 歳未満でも高卒、既婚、軍関連でカリフォルニア州の住民であれば受講可能。
- ・ USCIS（合衆国市民移民サービス）によって、学生ビザ、商用ビザ、観光ビザ、及び越境カードの人は継続教育クラスの受講は禁止されている。

予算はアメリカ政府から出ているらしい。学生は毎 Semester 毎にカリフォルニア州が実施する CASAS テストというものを受けなければいけない。リーディングとヒアリングから成る、TOEIC に似た形式の、しかしテストに使われるトピックスは経済だけではなく幅広い内容のテストだ。このテストのスコアが前回と比較して上がっているとその学校に予算が下りるが、スコアが前回よりも下がっていると予算が削られる仕組みらしい。だからかどうかは知らないが、無料のクラスとは思えないくらいにいい先生が多く、授業内容もしっかりしていた。

アジア人のクラスメートに「今はアメリカに居るし、母国に帰るつもりはないけれど、やっぱりアジアが慣れているし安心だ。将来の移民先として日本も検討しているのだが、日本にもアメリカと同じように無料で日本語を学べる制度があるか？」と聞かれたことがある。国際社会福祉情報の飯田さんの報告によると、「日本語を学ぶ公的な政策はない」らしい。

ミラマーカレッジの事務所でテストを受けた帰り道、一人の女性に話しかけられたことを思い出した。年齢は 50 代くらいの背の小さなおっぱ頭の女性だった。「あなた、勉強？」と言いながらニコニコと教室を指射していた。「あなたもこの学生ですか？」と聞くと、「私、勉強。」とまたニコニコ。単語一言の返答しか返ってこなかったのも、あまり話は出来なかったが、レベル 1 のクラスで学んでいるベトナムから来た女性だった。私が日本から来たと伝えると、「ニャ、ニャ、ジャパン、ニャ、ベトナム。」と教えてくれた。ベトナム語で日本はニャと言うらしい。

名前も知らない、一度しか会っていない人だけれど、英語が話せないにもかかわらずアメリカに渡り、あの年齢で一から学んでいる姿に、私はずいぶん勇気づけられた。私に日本の移民政策状況を尋ねたアジア人の友人は日本語を全く知らない。もし彼女が日本に来たら、きっとあのベトナム人女性と同じように一から日本語を学ばなければならない状況になるのだろうと思った。しかし、日本には日本語を学ぶ公的な政策が無い。残念ながら気安く「日本においてよ」とは言えないなと思った。



ESL で通ったメサカレッジの生涯学習用校舎。

2. アメリカ人とは？

アメリカに行ってから、日々のあれこれを SNS に書き散らしたり写真を載せたりしていた。それを見た友人知人から時折メールをもらう事があった。メールの中には「アメリカ人はどんな感じですか？」といった内容の質問が書かれているものが度々あった。初めのうちは「オープンだよ。」とか「フレンドリーだよ。」などと返事していたのだが、よく考えてみると『アメリカ人』とは誰の事を指すのだろうか？という疑問が湧いた。私も含めてアメリカに住んでいる人が必ずしもアメリカ国籍だとは限らない。そしてアメリカ国籍を持っている人たちの中にも、つい先月までは別の国の国籍でしたというような人は決してめずらしくはないのだ。事実コミュニティーカレッジの語学コースのクラスメートは、全員外国籍のアメリカ在住者だったし、ケアアシスタントコースのクラスメートも、半数はアメリカ国籍を持っていなかった。

移民によって出来た新しい国なので、アメリカ人だから見た目が必ずしも西洋風という事も無ければ、アメリカ人だから必ず

しもネイティブの発音というわけでも無い。なので、誰がアメリカ人で誰がアメリカ人でないかを見分けるのは極めて難しい、というかほぼ不可能だ。

先月まで別の国籍でしたという人に会った例としてこんな出来事があった。アメリカ式のバスタブは日本式のバスタブとは異なり、お湯をためてつかる事は出来ない。その代わりマンションには敷地内に共用の屋外スパ（湯船）が用意されていて、水着で入るというスタイルだった。屋外スパはマンション住民の一種の出会いの場、交流の場のような機能もになっていた。英語があまり得意でない私は、話の輪に入れられると、その間ずっと頭を高速回転させていなければならないので、いつも本を持って行って読んでいるふりをして話しかけられるのを避けていた。が、たまたま手ぶらで行った日に白人男性から話しかけられた。ロサンゼルスから友だちの家に遊びに来たのだという男性だった。聞き取りは大体出来るようになったと思っていた矢先だったのだが、その日はなかなか聞き取れず、何度も何度も聞き返した。あまりに頻繁に聞き返すのを申し訳なく思い、「ごめんなさいね。私、日本人だから、英語が下手で上手く聞き取れなくて。」と謝ると、「いや、君は悪くないよ。僕の発音が悪いんだ。」と言われた。「そんなことないよ。だって、あなたはネイティブだもの。私の英語力が低いんだよ。ごめんね。」と言うと、その男性はしばらくうつむいてスパのお湯をかき回しながら、「実はね、僕は先月アメリカ人になったんだ。それまではセルビア人だった。大学院を卒業して、ロサンゼルスの会社にこの秋から就

職が決まったから、アメリカ国籍が取れたんだ。だから、僕はネイティブじゃないし、君が聞き取れないのは君のヒアリング力のせいじゃなくて、僕の発音が悪いせいだ。本当に君の英語は悪くないよ。」と言われた。あまりの話の展開に驚いたが、「おめでとう！就職が決まって、アメリカ国籍を取れたなんてすごいじゃない。」と言うと、「でも、家族でアメリカ国籍を持つてるのは僕だけなんだ。。。』と。

このように、アメリカ国籍を持っている人にも色々な人がいた。語学チューターをしてきていた大学生の内の一人は、両親共にメキシコから移住してきたメキシコ系 2 世だった。が、彼女の外見はメキシコ人というよりはヨーロッパ人に近かった。不思議に思ったので尋ねてみたところ、父方の祖母がスペイン人なのだという事だった。

マンションを紹介してくれたエレナはフィリピンから来た 1 世だということだった。が、見た目は極東アジア人で、中国語が堪能だった。「エレナはアメリカ人なんだよね？」と尋ねると「そうよ。」と笑顔で答える。「もしかして中国人？」と尋ねると「そうよ。」とまた笑顔で答える。「でもアメリカ人になる前はフィリピン人だったんだよね？」と尋ねると「そうよ。」と更に笑う。「私、混乱するわー。」と言うと、「私は、中華系アメリカ人なのよ。」と私の混乱具合を楽しむように更に笑っていた。

ヨガを教えてくれたクリスの外見は一見するとイタリア人っぽい。が、生まれはアメリカで、育ったのは何と南アフリカだと言う。そして、ご両親はアメリカ人とイラン人で、今はスイスにおられるらしい。このような感じで、国籍がアメリカであって

も、生まれや育ちは本当に様々で文化や価値観も地球規模な人達にたくさん出会った。

語学コースには、金髪碧眼のいかにも西洋人的風貌の先生も何人か居たが、建国されて日が浅い国なので当然の事と言うべきか、自分の祖先がいつからアメリカに居るのか分からないという先生は一人も居なかった。なぜこのような事が分かるかという、まさか私が一人一人に聞いて回ったわけではない。授業のディスカッションのトピックスとして「自分のルーツ」というトピックスの日があったのだ。先生の先祖は 1860 年代にイギリスからアメリカに渡って来たとのことで、アメリカ人にしては歴史ある家なのだと自信ありげに言っていた。その授業の日、ルーツについての一通りの説明を終えた後、先生が茶目つけのある顔をしながら、「日本人のルーツは面白いわよ。ゆかに聞いてみましょう。あなたの先祖はいつから日本に住んでるの？」と聞いた。「いつから？分かりません。何千年か前かな？」と答えると、クラスがざわめいた。「じゃあ、あなたが住んでいた京都にはいつから住んでるの？」と聞かれて「京都には 100 年くらい。」と答えると、「その前はどこにどれくらい住んでいたの？」と質問が続き、私がそれに答えると、クラスメートは口を開けてぼかんとした顔をしていた。「ね、日本人は面白いでしょ。歴史が長いからね。国によってルーツのあり方は全然違うから、後はグループの皆でディスカッションを楽しんで。」と言われた。この授業を通して、国によって国民の構成員やルーツが様々に異なるという当たり前の視点に出会う事が出来た。当たり前の視点だが、この視点はアメリカに来るまでの私に

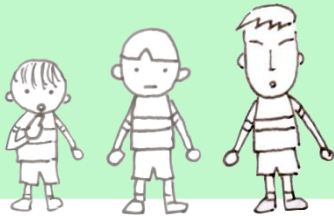
とっては、当たり前視点ではなかった。

「アメリカ人とは誰を指すのか？」との問いに対する答えは、やはり今でもよく分からないし、「アメリカ国籍の人」以外の答えが見つからない。が、「アメリカ人はどんな感じですか？」との問いに対する答えは見つかったように思う。アメリカ人とはアメリカ国籍を持っている人だとすると、あまりにも多様な背景を持った人達が集まっているので、そんな問いをすることには意味は無いという事だ。



アメリカ人も外国人も一緒に。インターナショナルセンターのボランティアさん宅のお庭でのパーティー。

知的発達障害の家族の



日々4



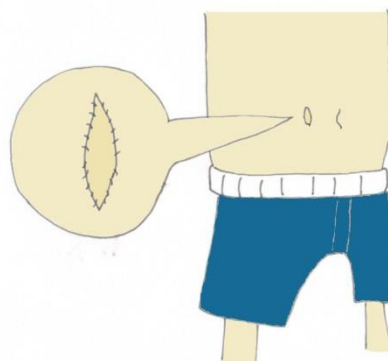
大谷 多加志

タブー

物心がついてからは何となく「なぜ弟は他の子とちょっと違うのだろう？」という疑問を持っていました。障害がある、ということは弟が就学したあたりでわかっていたのですが、“で、障害って何？”ということから“なぜ弟にはあって、自分や他の子どもたちにはないのか？”ということまで、よくわかっていませんでした。

疑問には思っていたのですが、このあたりのことは両親から話題にすることはまずありません。その時点で子ども心に「あまり聞いたらあかんのかな・・・」とってはいたのですが、時々少し遠回しに「アイツって、いつ頃からあんな感じなん？」等と聞いてみることもありました。それでも返ってくるのは短く、歯切れの悪い返事か、何となくスルーされることがほとんどで、そのことが益々“やっぱり聞いたらあかん”という思いを強めていったように思います。

弟のお腹には、手術の後があります。



“よく入院してるから、そりゃ手術くらいしてるよな”という、よく考えると訳のわからない理由で納得していた気がしますが、その傷跡を興味深く触ったりいじったりしている時に、父に強く叱責されました。これも、私の中で触れてはいけないものの1つになりました。

お腹の傷跡は、水頭症の治療として「シャント」を行った際の跡でした。水頭症とは頭蓋内に脳脊髄液が溜まり、結果として脳を圧迫してしまう病気です。治療法である「シャント術」では、頭に溜まった水を腹部に迂回させて脳圧を下げるようにしています。私がこの手術の話両親から直接聞いたのは、大学生になってからでした。

弟が水頭症になったのは1歳の頃。夜になってもあまり眠らずひどく泣き叫ぶので、病院に連れていったところ、水頭症とわかったそうです。

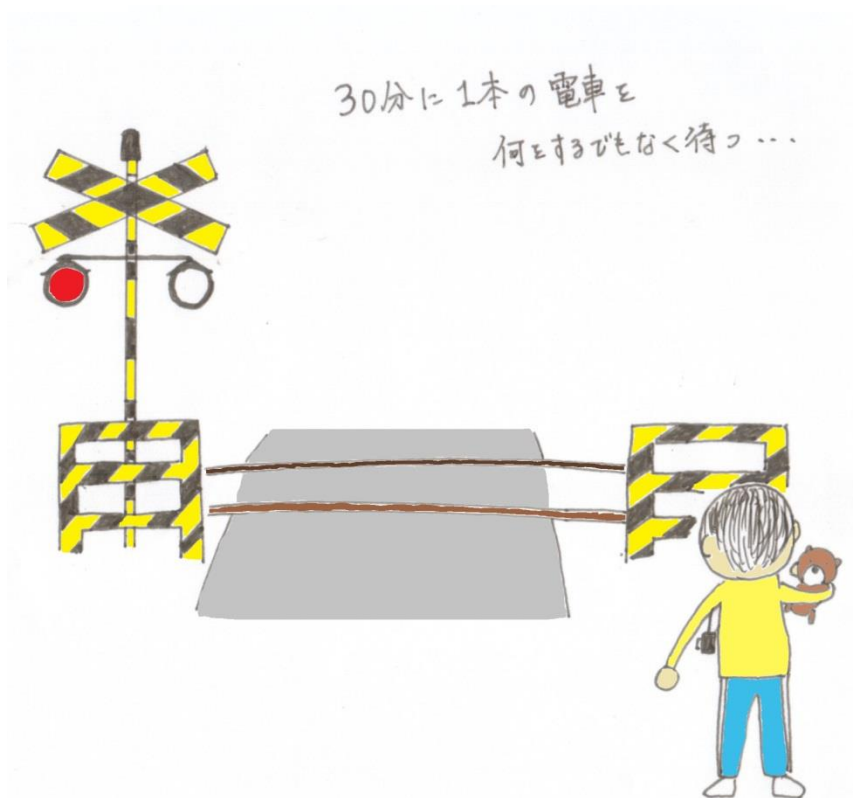
両親には、“水頭症が原因で障害になったのでは”“もっと早く気づいて対処していたら、障害にはならなかったのでは”という思いがずっとつきまとっていました。家族である私に語るまでに20年近い歳月を要しました。そして、この後悔にも似た思いを、おそらく今も持ち続けているのだと思います。

趣味と友達

障害を持った思春期、青年期、成人期の人たちについて、「趣味を持つこと」や「友達（仲間）を作ること」の大切さが言われることがあります。

行く場所（職場や事業所）があり、スケジュールが決まっている平日の方が調子よく過ごすことができ、スケジュールのない休日になると暇を持て余したり、生活リズムを崩して月曜日からがつらくなる・・・という話も耳にします。のんびり趣味の時間を過ごしたり、友達と一緒に遊びに行くなど、休日を充実したものにすることは、QOL（Quality of Life）の向上という視点から考えても大切でしょう。

弟は小さい頃から電車が好きでした。それは青年期になってからも変わらず、平日の夕方や休日は、近くの駅や踏切に電車の写真を撮りに出かけていました。少し離れた大きな駅まで行ったりすることもあったのですが、やはり一番よく行くのは近所の踏切。30分に1本しか列車の来ないローカル線で、通る車両の種類もほぼ1種類でしたが、飽きることもなく、ずっと通っては電車を眺めたり写真を撮ったりしていました。地味ですが、穏やかで、幸せな時間だったと思います。



状況が変わったきっかけは、仕事をしている事業所に、同じく電車好きの友達が出来てきたこと。同じ趣味を持つことから仲良くなり、休みの日に一緒に電車を撮りにでかけることもありました。

ここまではよかったのです。

しかし、その友達の電車への理解度や知識は弟を軽く上回るものでした。弟が見たこともないような電車の写真や、車体番号（モハ〇〇・・・とか）にこだわった写真など、色々と披露してもらったようです。基本的に、人のすることは真似をした

い弟。「オレも撮りに行く！」と張り切ったのですが、初めての駅まで遠出しようとして路線を間違えて迷い・・・、辿り着いたもののお目当ての電車を見つけられずに怒り・・・、はては「車体番号が〇〇の電車はいつ、どこの駅を通るのか？」とJRに電話で問い合わせ担当者を困らせるというありさまで、電車にまつわることが、弟にとっても家族にとっても少しずつストレスフルなものになっていきました。

友達との出会いが、悪いものであったとは思いません。それに、その友達に出会わなくても、弟は他の誰かの何かの趣味をうらやましく思い、「オレもせねば！」という思いにとらわれていたであろうことは、想像に難くありません。また、このようなトラブルを避けるために新奇なことにはなるべく近づかない、という方法が良いとも、決して思いません。

何を持って気持ちを充実させたり、リラックスできたりするかは人それぞれです。また一般的に平日は大勢の集団の中で過ごす人が多いでしょうが、休日については、仲間と遊びに行くか、一人で自分の時間を過ごすかは、人それぞれの志向があるでしょう。

「余暇を充実させる」とはどういうことなのかな、と改めて思う時、弟の場合はあの「近所の踏切での電車観察」の情景が、頭に浮かんでくるのです。

弟が写真を撮り始めた頃は、彼のカメラは「写ルンです」でした。現像のたびに「お金がかかる・・・」と父がぼやいていましたが、撮る頻度は少なく、デジカメになってから撮影枚数は増えました。

初期はピンボケも多かった弟の写真ですが、次第に上達し、よく雑誌でみるような「電車の顔と後ろの車両がよく見えるアングル」できれいに撮れているものも見かけるようになりました。私にわかる範囲では、上達していたように思います。



対人支援点描（3）

「入院に頼らない精神医療②」

小林 茂（臨床心理士）

1. 個人的な序論

北海道に来てから、あっという間に8年目が過ぎた。最初の2年くらいは、自分も車も北海道仕様とはいえず苦戦した。更にしばらくは、古い傾斜した借家に冬でもポータブルストーブ1台で5年くらい過ごしていた。冬場は台所のシンクの水滴が凍り、外の外気から逃れるため屋内にネズミが出やすくなる。夏は夏で雨が降れば床下が水たまりになり、カビが発生する。トイレも壊れたまま、まともに使えない。そんな住環境であった。我ながら、よくあの環境で生活していたと思う。しかし、「なぜ、そんなところを借りて住んでいたのか」と問われるかもしれない。だが、家賃30,000円で借りられるところが他になかったのである。当時の私の身分では十分な収入もなく（今も大差ないが）、これぐらいの家賃価格が適当であった。自分でもあまり良い住環境ではないと感じつつも、人から言わせれば、「よくその家賃で借りられるところが見つかってよかったね～」という話になる。仕方なく住んでいたが、健康を害することが増えてきたので3年前に家を買って求め、引っ越しことをした。現在は、見晴らしの良い丘の上に建つ古い公務員官舎一帯を買って取り、きれいに改装して移り住んでいる。海からの風は強いが、丘の上から先に見える太平洋を一望できる景色を楽しんでいる。今の生活が向上しただけに、それ以前の住環境は、何を意味しているのだろうかと思わされる。

2. 賃借料が高い街、浦河。

浦河町という土地は、町に日高振興局（旧名称：日高支庁）がある。昔から日高地方で一番人口が多い新ひだか町静内というところに北海道庁の分所があってもよさそうなのだが、なぜか2～3番目の浦河に分所がある。そのため、地方裁判所、税務署など公立の機関はもちろん、札幌に本社がある会社の営業所も浦河にあった。その上、浦河赤十字病院と看護学校があり、競走馬のJRA関係施設があり、小中高校もある。こうした職業に就く者は、総じて所得水準も高く（高いのは所得だけではないのだが）、もともと通勤族が多い町であった。こうした理由からか、家やアパートを借りるにも、家主の言い値で相場が形成されていった。浦河に唯一の不動産を訪ねても、紹介される物件は50,000円からが普通である。築20年を越すようなアパートでも、家賃事情は変わらない。この水準を下ると、途端にトイレ、お風呂は共用か、建物にお風呂自体がない住居になる。こうなると、地元の方はお風呂をどうしていたのだろうかという疑問が起るかもしれない。だが、家にお風呂がなくても、銭湯に行けば良かったのである。かつては町内に3つの銭湯があった。この“か

つては” というのは、この6~10年ほど前に2つの銭湯が廃業したからである。だが、徐々に個々の家にお風呂があることが一般的になり、その結果、町の銭湯の需要が減り、旧来から借家に住む地域住民があおりを食うようになった。ちなみに、町営住宅には、最初からお風呂、給湯器は付属していない。町営住宅へ入居する際は、必要であれば自前で取り付けるわけである。従って、町営住宅への入居者は、基本的にお風呂のついていないのが前提となる。おまけに、町内には単身者用の町営住宅はない。所得の少ない単身者には、特に厳しい条件がある。

近年は、北海道の経済が厳しく、日高支庁が日高振興局に縮小再編され、他の公共施設の機関も同様の動きにある。浦河にあった諸営業所も撤退し、だんだんと借り手が少なくなってきた。しかし、借り手が減少しても、既存の借り手の家賃が下がらないので、新たな借り手のための家賃設定が下がることがない。今しばらくは、市場が崩れないままではないかと、私は見ている。毎年、250~300人の人口の減少があるが、空き家があっても借り手市場にはならない。賃借物件を持つ家主も、ある程度の年齢になると家賃収入を元手に札幌に移り住む傾向にある。北海道の人口の三分の一の人口が札幌に集中するが、賃借業に限って言えば地方財政が吸い上げられ、中央で消費される現象があるのではないかとみている。しかし、問題は、この構造を維持するためにも、浦河の賃貸住居の家賃が下がることは、なかなか望めないということである。

3. 障害者が地域生活を送るために

筆者は、現在、精神障がい者ためのグループホームなどの居住系の支援に関わっている。支援で関わる人々の大半は、生活保護受給者か、年金と生活保護の受給を受けている方である。こうした方々を支援するうえで、最初に起こる難題が生活保護の住宅扶助の範囲内で入れる住居を探すところにある。長期入院患者が退院し、地域で暮らそうとした時、いつも彼らが単身者であり、部屋を借りるにしても条件が合わないことで苦労する。

たとえば、浦河町近隣の生活保護の住宅扶助額は24,000円が基準額となっている。障がい者加算が認められたとしても、28,000円ほどである。この範囲で住居を求めなければならない。先に、浦河町の賃貸事業について紹介したが、この家賃で入れるところは浦河町にはない。生活保護のケースワーカーに交渉しても、「国が決めている基準額だから、諦めてください。」としか返事が返ってこない。浦河町の町営住宅の利用ができると良いが、「単身者は受けつけていない。他に入居希望者も待機しており、借りに入居できるとしても時期は保証できない。」と答えられるだけである。

このような事情もあり、筆者が所属する法人は、これまで浦河で病棟ではなく地域生活を送りたいという利用者のために、彼らが入れる（生活保護担当者が許可できる!）家賃設定の住居を確保してきた。とはいっても、自前で物件を建てるだけの資金もなく、建物を一棟ごと借り上げ、生活保護の家賃扶助の範囲で提供してきた。高く借り上げ、安く貸し出し、おまけに居住系の支援費が安い現実には、思わず我が国の精神保健政策に陰性感情が起こる。

2014年11月に筆者は研究仲間とイタリアのトリエステに調査に行ったのだが、「住環境を整えることが第一優先だ」と誇らしく語るトリエステの支援者の言葉に同意するととも

に、浦河の現状に情けなさを感じた。イタリアの居住環境については、別の場所で共同研究している先生とまとめる予定だが、実質的に家賃制限がなく、公営住宅の提供が受けられる住宅事情は、羨むばかりである。

4. まとめ～退院も大事だが

浦河赤十字病院の精神科病棟がなくなったのだが、退院するためには住む場所が必要である。筆者らは、この住むための支援をし、実現してきた。取り組みには、それなりの自負心がある。病棟に頼らない精神医療は可能であると実感している。

だが、精神科病棟を維持したい立場の人たちは、地域に住む受け皿がない理由をすぐに挙げる（実際には、全国的にグループホームの供給は進んでいる！）。しかし、地域に受け皿の確保を妨げているのは、そういった特定の精神医療なのだろうか。表面的には、そうかもしれない。だが実は、地域移行についても、旗振りだけで相変わらず民間任せにしている我が国の精神保健の政策に問題があると感じている。呉秀三が『精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察』（1918）のなかで述べた『我邦十何万の精神病者は実にこの病を受けたるの不幸の他に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものというべし』という時代から何が変わったのだろうか。同じお金を使うにしても、国の政策として、安心して暮らせるということに、しっかりと手当てをすることが大事ではないだろうか。

「あ！萌え」の構造：序論

(2)

応用人間科学研究科 齋藤清二

11. 「萌えの本質」を論ずることはなぜ難しいか？

前節では、「萌え」という現象が、生物に見られる普遍的現象である「ホメオスターシス」とは真逆の、「対象をある程度手に入れてもそれで満足せずに探求行動がさらにエスカレートしてしまう」という性質をもっているのはなぜか？という問いについて考察してきた。そして、そのようなエスカレート傾向を推進しているメカニズムの可能性のひとつとして、私達が「萌えの対象」と認識しているものは、実は「真に私達が手に入れたいもの」とは微妙にズレているのではないかという可能性を提案した。それでは、その微妙にズレているものとはいったい何なのだろうか？あるいは、ズレているといっても、それは具体的にはどうズレているのだろうか？

この問題を探求することは難しい。え、

最初からそう言われたら考える気がしなくなるって？ いや確かにそのとおりで、私もすでにイヤになりかかっているのだが、それに挑戦するのが、この「序論」の大きな目的なので、愚痴は我慢して先にすすんでみようと思うので、みなさんにもつきあって欲しい。それにほら、原稿の締め切りが過ぎていたので、編集者に怒られるのは怖いではないか。

話を戻して、この探求は難しいという理由をまず整理してみたい。まず第一に、この問いは言ってみれば「真実とは何か？」といった類いの問いと同型だからである。ズレを認識するということは、私達が「ズレがズレとして認識されるための基準点」をすでに知っているということが前提になる。つまり、偽物が分かるためにはあらかじめ本物が分かっている必要があるということである。ところが本物がすでに分かっているのなら、偽物など最初から問題にな

らないはずである。だから、出発点から矛盾なのである。

しかし現実に私達は、こういう経験をよくする。つまり「正解は何だか分からないが、『これは違う！』ということだけは分かる」というやつである。こういうことは結構よく起こるのだが、当人は、それはなぜ違うのかを説明できない。強いて言えばそれは直観としか言いようがない。最近の世の中には「直観なんてそんな非科学的なものは信用できない！」という人が多いので(こういう「科学的」な人は、大学とか研究所とかそういうところに偏在して生息しているので、私にそう見えるだけかも知れないが...)、むしろ世間一般では、「直観こそが一番信頼できるもの」という人も結構いるのである。

話はズレるが(←おい!)。(非合理的な)直観が大切か、(合理的な)思考が大切か?という議論に対して、「いやそれはタイプの違い」と、あっさりと割り切ってしまうような考え方は意外と古くから存在している。みなさんご存じのユング心理学の性格類型(え、知らない! それはいっこうに差し支えないですよ)などはその典型である。人間の自我機能をまず心的エネルギー(いきなりエネルギーとか波動とかを持ち出すからオカルトとかトンデモとか言われるのだが、これはあくまでもメタファーであって文字通りの物理学的現実ではない)の方向性によって「外向」と「内向」にわけ、さらに合理的判断機能として「思考」と「感情」にわけ、さらに非合理的機能として「直観」と「感覚」に分ける。人によって傾向がはっきり現れる人と、そうでもない人はあって当然なのだが、それでも全ての人(…と言い切ってしまうところが怖いのだが…)、例えば、

「外向—思考—直観」とか「内向—感情—感覚」とかいう3点セットの組み合わせで類型化される。いやいや、最新のパーソナリティ理論(ビッグファイブとか)を学んでいる人達は、このような類型論は科学的根拠がないから信用できないと言うだろうが、そもそもその態度自体が思考優位タイプのなせるわざなのです。

もう一つユングの類型論でおもしろいのは、これらの自我機能の典型的パターンは定まった静的なものではなくて、その人にとって優勢な機能(例えば思考)は、それに対立する劣勢な機能(例えば感情)によって補償されると主張していることである。その人の一生を通じての成長過程(これをユング心理学では「個性化」と呼ぶのだが)において、その人の成長や変革に重要な働きをするのは、むしろ優勢な機能ではなくて劣勢な機能である。ぶっちゃけていうと、ヒトは自分の優勢機能と通常は同一化しているが、人生のどこかの時期に自分がそれまで気づいていなかった劣勢機能に気づき、自分自身の劣勢機能の助けを借りることによって、より全体的な自分に成長する道を歩むというストーリーがユング心理学では想定されている。ここで、もうひとつ重要なことは、劣勢機能への自覚が初めて生じる時には、それは「自分ではないもの」として認識されるということだ。つまり、優勢機能と同一化した「自分=自我」の視点からは、「自分の」劣勢機能は「他者=他我」として認識されるということである。これを深層心理学の用語では、「投影」というわけだが、このへんの理屈になってくると、あとで批判する、深層心理学にありがちな、「あんたが自分の無意識を意識化できないのは

けしからん」式の難癖とあまり区別のつかない論理構造になってくるので、このへんはこれくらいにしておく。

もちろんユング心理学は、現代の「科学的心理学」から見れば「科学的な根拠をもたない」信用できない理論ということになっているが（え、そうだったのという人もいるとは思いますが）、人間は、自分自身あるいは他者との交流を通じて、自らのストーリー（自己物語）を常に生成し変容していく存在であると考える立場（物語論）から見ると、まだまだ捨てがたい魅力と有効性をもった理論なのである。ちょっと長くなったので、ユング心理学の基本的な世界観と「萌え」の関連については、またあらためて論じたいと思う。

話を戻すと（←またかよ！）、つまり、私達が「萌えの対象」と認識しているものは間違いであって、私達が追求すべきものは実はただひとつの「真なるもの」である、といった前提そのものが、なかなかやっかいなものなのである。え、どうしてそれがいけないかって？ いや別にいけないということはない。ただ、私はたぶんそれはうまくいかないだろうと思っている。え、なんでそう思うのかって？ ぶっちゃけて言えば、人類始まっていらい、それは幾多の天才達や天才でない人達（つまり私達のような凡人のこと）が、数限りない機会に挑戦してきたが、たぶん成功していないからである。しかし心配はいらない。私はこのような問いの解答を得ることは難しいと思っているが、だからといって、その探究をやめたほうがよいとは思っていない。そのような探求を続けることには意味がある（たぶん）。それに例え意味がないとしても、少なくとも

もそのような作業は楽しいではないか。

しつこいようだが具体的な問題は、その「萌えの対象とよく似ているがズレているもの」あるいは「ズレているもののズレを生み出しているその微妙なもの」（あー！ややこしい！）にある程度接近し得たとして、それが「真」のものであるかどうかを判断する基準を設定するのが難しいということである。誰もが納得する基準がすでにあるのであれば、その「真のもの」はすぐに見つかる（だろう）。しかし、そもそもそれが「真」であるかどうかは、基準があって初めて判断できるのであるから、これはどうどうめぐりのニワタマ論争になるのである。

話題はそれるが（←いいかげんにしろ！）、これと良く似たようなことは、何らかのこれまでには確立されていなかった新しい病気や障害や症候群などの新しい概念が提唱される時によく生じる。例は何でもよいのだが、例えば「スマホ依存症」などというのは、これまでは存在しなかった疾病概念の代表である。だって、スマホがない時代にはそんなものは存在しなかったことは確実だから。ところがある時に誰かが、「現代の若者の半数はスマホ依存症だ」などと言いだし、マスコミがそれを大げさに報道する。どこかの大学の学長が、「スマホやめますか、大学生やめますか？」などと、入学式の訓示で言ったりするので（実話）、ますます「スマホ依存症」なんて病気（？）が本当に実在すると多くの人は信じ込んでしまう。

しかしそれでは、ある学生が「スマホ依存症」であるかどうかはどうやって判断するのか？ 多くの場合、それは「スマホ依存症尺度（あるいはチェックリスト）」なるものを作って、それによって判断するのである。

例えば複数項目からなる質問に答えさせる自己記入調査表を作り、カットオフ値というものを決め、それによって、大学の授業で学生の調査をしたり（←授業の評価と絡めると倫理違反だから気をつけよう）、インターネットでホームページを作って調査をしたりする（たまに詐欺もあるから気をつけよう）。そうすると酷い場合には全体の半数以上の学生がスマホ依存症と診断されてしまう。

少しでも「エビデンスに基づく医療：EBM」について勉強したことのある人であれば、こういったやりかたは明らかにおかしいということに気づく。新しく作られたスマホ依存症のチェックリストは、その診断能力（感度、特異度、陽性的中率、陰性的中率、尤度比など）のエビデンスが実証されている必要がある。そのためには、スマホ依存症の人とそうでない人を判別できるゴールドスタンダード基準との比較が必要になる。しかしスマホ依存症のゴールドスタンダードは前もっては存在しない。もしあったとしても、そのゴールドスタンダード自体が何を基準に作られたのかという問題が生じる。だからスマホ依存症診断チェックリストのエビデンスは理論的に実証不能なのである。スマホ依存症などという病気は存在せず、それは恣意的に作り出された仮の診断基準とそれに基づく診断ツールによって作り出された幻の現象に過ぎない。（ここでは、かなり荒っぽい議論をしているので、厳密に言えばこのようなアプローチに全く意味がないとも言えないが…）

というわけで長くなったが、（←勝手に長くしているのだろう）、要するにここで言いたいことは、「萌え現象の本質」に迫ろうと

する努力には著しい困難があり、直接的なアプローチは難しく、周りを回るように絡め手から接近するしかないということなのである。（え、そんなこと最初から分かっているじゃあないか、と言いたくなるあなたは正しい。ごめんなさい）

そこで、次なる戦略として、「萌えの本質」に直接迫る作戦ではなく、とりあえず、「萌え」と非常に区別しにくい、それとは微妙にズレているものについて考察していくことにしたい。（異論の多くなるテーマであることは承知の上である）

12. 「萌え」とよく似ているが 区別すべきものの候補（1）

そこで、「萌え」の本質について語ろうとするときに、一番扱いにくく、かといって避けて通れないものとして、単刀直入に「性欲」の問題について論じてみたい。「萌えの対象とは要するに性欲の対象なのではないか」という言説は、おそらく大きな議論を巻き起こすか、あるいは反対に「それってあたりまえでしょう、今更何を？」と言われるかのどちらかだろう。最近では、某市のマスコットキャラの「萌え表現」が「性的搾取ではないか？」「性的差別ではないか？」ということで、大きな議論を巻き起こしている。具体的な問題に踏み込むと炎上は避けられないので、ここでは不本意ではあるが抽象的な議論に留める。

で、結論から先にいうと、「そのどちらも間違いとは言えない」というふうに私は思っている。「萌え」の問題を扱う時に、「性欲」の問題を避けては通れない。しかし、「萌え」

と「性欲」は同一のものではないし、少なくとも「萌え」は「性欲」には単純に還元できないというのが私の考えである。

その論拠の最大のものは、「性欲とはほとんど関係を持たない萌え」というものが存在するからである。ただし、このような見解に対しては、色々な方面からの反論があり得るだろう。一番単純なものは、「性欲に関係ない萌えがあるなどという主張は、自分の性欲を抑圧するか否認しているに過ぎない、要するにごまかしているだけ」という見解だ。これはもちろんそう考えざるをえない場合もある。しかしこの古典的精神分析の見解によく似た主張は、実はとてもずるいやり方なのだ。「おまえが〇〇に『萌え』を感じるのは、要するに『性欲』に過ぎない」と言われて、「そうかも知れない」と言えば、「ほーらそうではないか」ということになるし、「違う」と言えば、「それはおまえが無意識の欲望を否認（あるいは抑圧）しているからだ」と言われる。

このような「お前は自分の無意識を意識していないのだ」という言説は無敵である。言い換えればこのような言説が他者に向かって用いられる時、それは絶対に否定できないが、結局のところ不毛であり、意味のある結果をもたらさない。それは要するに言葉を発する方が絶対に負けないための戦略なのだ（最近はこの「どこまで上目？」などという）。だから近年、若い人を中心にそのことを見抜く人が増え、精神分析的言説は前ほど信用されなくなったし、進歩的集団を名乗る輩が昔よく使った「総括せよ！」「自己批判せよ！」「それは自己責任！」みたいな言説は、多くの人からうさんくささの目で見られるようになった。良い

ことだと思う。自分が意識できない自分の領域に思いを馳せるという行為は、それを「自分が行う」時にのみ意味のある行為となる。他人にそれを強制することは欺瞞的で非倫理的な行為である。

話がそれだが、性欲が「萌え」を増強させることは、おそらく間違いない。だから萌え現象が人生において最も強い影響力を持つ年代は、思春期から青年期である。しかし、だからといって萌えは性欲そのものではない。萌えを「何かに強く魅せられる現象」と定義するならば、それはまだ生物学的には性欲が感情や行為の前面には出てこないような幼い時代にも明らかに認められる。

精神分析はおそらく、それを意図的に逆転させ、幼児にも性欲があると倒錯的に理屈づけしてしまった。さらに言うと、あきらかに生物学的には性欲の必要性が無くなる、あるいは非常に低下する、生殖年齢を過ぎた老年期にも「萌え」はあきらかに存在する。もちろん、定年間近の老教授や、あっと驚くような高齢者が、普通に考えれば色恋沙汰としか思えないような事件を起こしたりすることがあるのも事実である。だからといって、それを全て性欲に還元するのは無理がある。むしろ、「萌え」=「何かに強く魅惑される現象」は、対象を変えつつ（あるいは不変の対象に対して）一生涯持続すると考えるほうが実情に合っている。このあたりは実証的に証明することが非常に難しいので、もともと見解が違う人とは水掛け論に陥ってしまうことはある程度避けられないが…。

一方で、性欲は萌えを増強し、萌えは性欲と容易に結びついてしまうということも多くの場合事実であろう。これはおそらく

人間の生物学的、生理学的、あるいは心身相関的な基本的メカニズムによると思われるので、これを無視することはできない。くりかえしになるが、「萌えは性欲にすぎない」という説を完全に否定する科学的証拠を提供することはできない。しかし、「萌え」と性欲との緊密な関係を認めつつも、萌えを単純に性欲に還元することなく本質を探究する姿勢を保つことは、人間にとって非常に重要なのではないかと思うのである。どうも、考察というよりは意見表明みたいになってしまったが、人間にとって、自身あるいは関係の中での性欲の影響をどのように扱うかは極めて難しい問題であることは認めた上で、できるかぎり萌え=性欲という単純化した図式に陥らないようにする努力は、重要なことだと私は思っている。

少し露骨な話になって恐縮だが、萌えと性欲の関係が絶対のものでないというもうひとつの証拠は、身体的な性欲の満足は、必ずしも萌えの探求を減少させないということである。これは、「萌え=性欲」という単純化に対する一定の反論を根拠づける。つまり一時的な身体的な結合に基づく関係は、決して長続きしないのである。異性（同性でも良いが）における身体レベルでの結合が、永続的な関係を維持することは極めて少ない、言葉を変えれば、ハッピーエンドが永続するような恋愛物語がほとんどないということも、この見解を補強する。性欲は萌えよりもさらに永続性に乏しい上に、エスカレーションの悪循環にはまり易い（モーツアルトのドン・ジョバンニのオペラを見れば一目瞭然だろう）。それゆえに、性欲はおそらく萌えの本質ではなく、むしろ萌えの「みせかけの部分」に参与している

と考えられるのである。だから、萌えの本質に接近しようとするならばむしろ、性欲と萌えを同一視しないことが重要になるのではないかと思うのである。一応、性欲と萌えの関係については、はぎれが悪いがこれで終わりにする。次に性欲と一見似ているが、ある意味かなり違う概念としての「恋愛」を取り上げることにして、今回はここで終わる（次回に続く…と思う [たぶん]）。



[追記]:先日久しぶりに衣笠キャンパスへ出勤したところ、バス停の向かい側に2015年度の国勢調査の大きなポスターが掲示してあった。その図柄を見てちょっとびっくり。ついに日本国総務省も「萌えキャラ」を作ったのか!と思ったのだが、どうやら勘違いで、彼女らは、京都伏見稲荷にゆかりのアニメのキャラであるらしい。ちなみに京都市の地下鉄の「萌えキャラ」の名前は「太秦萌(うずまさ・もえ)」というので、もろに「萌え」の字が使われている。いや、だからどうというわけではないのだが、追加してみました。

海の向こうにでて見れば

(2) マレーシアという国

石田 佳子

よく言われることと実感していることの違い

ロングステイ財団の調査によると、マレーシアは「ロングステイしたい国」9年連続の一位です（注1）。また、その他メディアでもマレーシアについて報道する機会が増えています（注2）。その時よく言われるのは、①気候が温暖で過ごしやすい、②治安が良い、③物価が安い（日本の1/3位）、④インフラ、公共交通、医療水準などが先進国並み、⑤英語が通じるといったことですが、実際に住んでみると当てはまる面もあるけれど現実を反映していない面もあると感じます。良い面が誇張されすぎて誤解を与え易いように思うのです。メディアの情報を鵜呑みにして楽園であるかのような夢を描き、移り住んでから幻滅する人がいるという笑えない話も耳にしますから、住むことを検討する場合は耳触りのよい情報だけでなく耳に入れたくない情報も知っておくべきでしょう。そこで今回は、私が実感しているマレーシアという国について、ざっくりとですが描写してみたいと思います。

まず、上記の「よく言われること」との違いについて、①から順に見て行きます。

- ① マレーシアは熱帯雨林性気候の国ですから、雨季と乾季はあるものの、年間を通して夏が続きます。地震や台風の心配はありませんが、屋外を歩けないほど照り付ける太陽や、前が見えないほどの豪雨、轟音を伴う雷などに見舞われることはしょっちゅうです。また、環境問題に対する意識があまり高くありませんから、ごみのポイ捨てや無造作な焼却、大気汚染（ヘイズ）、水質・衛生管理の問題などが気になる人にとっては「過ごしやすい」と言えないでしょう。

私はクアラルンプールの郊外（住宅地）に住んでいますが、普通の時でも毎日床を拭いているにも関わらずモップが埃で真っ黒に汚れます。ヘイズが酷い時には霧がかかって遠方が見えなくなり、家に籠って空気清浄機3台をフル稼働させても気管支系統に痛みなどが出るため、耐え切れなくなり空気のきれいな田舎町へ緊急避難したこともあります。

- ② 治安は近隣諸国の中では良い方ですが、日本のように安全ではありません。2012年の犯罪統計を比較すると、殺人は日本の約2.7倍、強盗は日本の約25倍の発生率です（注3）。

私の実感としては、誘拐や強盗についてはニュースで耳にするくらいですが、窃盗・ひっ

たくり・ぼったくりなどは、知人が多数被害にあっているため、日常茶飯事の印象です。なおその背景には、不法移民や避難民が多数流れ込んでいる状況があるとされています。

- ③ 物価は年々上昇しており「日本の 1/3」は昔の話です。電気・ガス・水道や公共交通機関の料金は今なお格安ですが、住居費や食品価格などは目に見えて値上がりしています。仮に屋台飯だけ食べて暮らせば食費を安く抑えられますが、油・塩・砂糖を多用するため生活習慣病の温床となるでしょう。アルコール、日本食品、乳製品などは日本より高価ですから、平均的な日本人が贅沢せず暮らすとすれば、今は日本の 1/2 位と思われます。
- ④ インフラなどの設備は「いちおう」整っています。どのような意味かと言うと、建築物などのハード面は充実しているけれど、機能やサービスなどのソフト面がいまいちなのです。例えば、断水や洪水がたびたび起きますし、漏電による事故・火災、エレベーターなどの故障もよく起きます。また、電車やバスが時間通りに来ないのは当たり前ですし、政府機関や銀行などの施設でもコンピューターのシステムダウンで営業を停止することがよくあります。

病院は、都市部に限って日本人医師や日本語通訳のいる所もありますが、数が少ないので、コミュニケーション、医療技術、院内連携などに関して日本と同じレベルは期待できません。私の乏しい経験の範囲でも、氏名や左右の書き間違い、服薬指導の間違い（医師と薬剤師の指示が違った）などのケアレスミスが頻発する上、採血が異常なほど下手だったり、検査室に薄着のまま長時間放置されたり、麻酔を打たれてから英文書類にサインを求められたりと散々でした。しかもなぜか（入院患者の存在は度外視なのか？）心を込めて冷やしてあるため、私にとっては「防寒具を持参しないと風邪をひいてしまう場所」の一つです。

- ⑤ 英語はわりと通じますが、それは都市の中心部や観光地でのことで、地方や、クアラルンプール市内でもローカル色の濃い地域ではマレー語や中国語しか通じないことがよくあります。基本的に、マレー系はマレー語、中華系は中国（北京、広東、福建、客家など）語、インド系はタミール語といった具合にそれぞれの言語を継承して暮らしており、他民族とのコミュニケーションの道具（共通語）として使われる第二言語が英語なのです。そのため、マレーシアの英語は「マングリッシュ」と揶揄されるほど癖や訛りの強いもので、英米国の英語とは別物と捉えて慣れる努力が必要です。そんな風ですから、正しい（英米国の）英語を話さなくても問題はありませんし、流暢でなくてもわかろうとしてくれます。

ただし、公用語はマレー語なので役所関係の書類などはマレー語のみの表記です。また、マレー系の人には、たとえ片言でもマレー語を話すと非常に喜ばれます。

パッチワークのような国

日本とマレーシアの最大の違いは、日本が単一民族国家とみなされるのに対して、マレーシアはマレー系（67%）、中華系（25%）、インド系（7%）からなる多民族国家であることでしょう（注4）。しかもマレーシアではそれぞれの民族がそれぞれの地域で、それぞれの言語、宗教、文化、伝統を継承しながら暮らしているため、同じ多民族国家でも「人種のるつぼ」や「サラダ

ボール」と称されるアメリカとも違って、各民族がほとんど融合していない「パッチワークのような国」なのです。

具体的には、住む場所もマレー系が住む地域、中国系が住む地域などがあり、それぞれの地域へ行くとそれぞれの民族固有の建物や街並み、服装や食べ物、宗教施設や行事などを見ることができます。また、繁華街を歩くと肌の色も顔も服装も異なるさまざまな民族を見かけますが、マレー系はマレー系同士、中華系は中華系同士といった具合に同じ民族同士でカップルになっています。マレー系はイスラム教、中華系は仏教、インド系はヒンドゥー教を多く信仰している上、国民の多くを占めるイスラム教徒は異教徒との結婚を禁止しているため、異民族（異教徒）同士が生活を共にするのはハードルが高いのだらうと思われまます。（写真：左はマレー系の多い住宅地で開かれる市場、中央は中華街、右はインド人街の風景。）



宗教が生活の軸

今年は6月18日から7月17日までがラマダーン（断食月）でした。これはイスラム教徒の大切な義務の一つで、信徒は日の出から日没まで飲食物を口にできません。そのため、いつもは賑わう飲食店も昼の間は閑古鳥が鳴いていました。しかし日没後には街の様子が一変し、マレー系住民の多い地域ではローカルフードの屋台が立ち並び、大勢の人が繰り出して楽しそうに飲食物を購入していました。また、ラマダーン明けの第一日目はハリラヤ・プアサといって、家中を掃除してごちそうを用意し、家族や親戚が集まって祝います。この時期は学校も休みとなり、首相官邸でオープンハウスが催されるなど華やかなムードに包まれます。

ラマダーン以外でもイスラム教徒は一日に何度もお祈りをするため、電車の駅やショッピングモール、路地裏など至る所にお祈り専用の部屋があります。モスクからは日に何回もお祈りの音が聴こえますし、言動の端々から信仰が生活の軸になっていることがうかがわれます。しかし、彼らが異教徒に自らの宗教を押し付けたり排除したりする雰囲気は、少なくとも表向きは感じられません。街を歩くと異なる宗教の施設がとても近くに建っていたり、イスラム教徒の祝日、仏教徒の祝日、ヒンドゥー教徒の祝日、キリスト教徒の祝日がすべて国の休日として祝われたりしています。（写真：左はイスラム教のモスク、中央は中華系の寺院、右はインド系の教会。）



ブミプトラ（土地の子）

では、マレー人には敬虔なイスラム教徒が多いから寛大に、多民族や多文化を受け入れているのでしょうか？異なる民族が一つの国で共存することは、それほど簡単ではないようです。イギリス植民地からの独立後、政治は一部の裕福なマレー系が、経済は中華系が牛耳り、富の不均衡が生まれました。そのため、貧しい国民（マレー系）の不満が高まり、1969年5月13日に史上最悪といわれる民族紛争が起きました。中華系とマレー系が衝突して、死者196名、負傷者438名を出す惨事に発展したのです（注5）。

政府は国民（マレー系）の不満を抑えるため、1971年にマレー系を優遇する「ブミプトラ（土地の子）」という国策を施行し、現在もこれが続いています（注6）。この政策は民族による比率を設けてマレー系を優遇するもので、具体的には、マレー系は（入学定員の比率が高いため）国立大学に入りやすい、公務員や政府系の基幹産業に採用されやすい、（民間事業主は一定割合のマレー系を雇用する義務があるため）就職しやすい、（マレー系を入居させる比率や販売時の割引率が決められているため）住宅も得やすい、良い条件で銀行融資を受けられる、金利も低いなどというものです。

マレー系の経済力を高めて国民全体の生活水準を押し上げることが目的とのことですが、このような不公平が非マレー系にとって面白いはずはありません。また、このような「頑張らなくても守られる」環境が与えられることで、もともと勤労意欲に乏しいマレー系がますます働かなくなる、といった弊害も指摘されています。

現ナジブ首相は「ワン・マレーシア（一つのマレーシア）」というスローガンを掲げて民族融和を志していますが、最近の世論調査（注7）や暴動に発展しかねない事件（注8）などを見ると、紛争の火種は常にあり燻り続けているけれどギリギリのところまでバランスを保っている、というのが実情のようです。なお、マレーシアでは政府の意に反する報道をしたメディアは営業停止処分を受けることがあるため、政府への批判や民族間の軋轢などセンシティブな問題についてはその一部しか報道されなかったり、まったく報道されないことも少なくないようです。現代日本人の感覚では抵抗を感じるところですが、さまざまな背景を担った異なる意見をまとめ上げて行くには、強い統制力が必要なのかもしれません。

今回は、「私の目に映ったマレーシア」を書こうと試みるうちに『群盲象を評す（触れた部位によって、長い、平たい…etc）』の喩え話を思い出し、それでは全体像が伝わらないと考え直して調べたことを書き加えたため、だいぶ固い文章になってしまいました。しかし、これを書くことで自分の勉強になった事も多々あり、マレーシアという国がより一層身近なものに感じられるようになりました。次回からは、もう少し身近なテーマについて書いて行くつもりです。

- (注1) この調査は、ロングステイ財団が主催/後援したイベントやセミナーの参加者を対象としたアンケートを集計したもので、「実際に長期滞在している日本人が多い国」ではない。<http://www.longstay.or.jp/newslist/open/entry-1654.html>
ちなみに、外務省の「海外在留邦人数調査統計（平成27年度要約版）」によると、海外に長期滞在している日本人が多い国の1位は米国（約24万人）、2位は中国（約13万人）で、3位以降はタイ（約6万人）、英国、オーストラリア・・・と続き、マレーシアは11位（約2万人）である。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000086465.pdf>
- (注2) 最近放映されたテレビ番組には、2015年6月9日（毎日放送）の『世界の日本人妻は見た!』がある。<https://www.youtube.com/watch?v=BPJEFz2kSA>
雑誌記事には、オンライン東洋経済で連載中の『マレーシア子育て最前線』（野本響子）がある。<http://toyokeizai.net/category/malaysia>
- (注3) このデータは、在マレーシア大使館のHPから引用した。
http://www.my.emb-japan.go.jp/Japanese/guide2014/guide2014-2_2.html
なお、民間の国際的研究機関である経済平和研究所（IEP: Institute for Economics and Peace）が毎年発表する「世界平和度指数ランキング（2015年）」では、日本が8位、マレーシアが29位だった。<http://ecodb.net/ranking/gpi.html>
- (注4) このデータは、日本外務省のHPから引用した。なおHPによると、マレーシアの国土面積は日本の約0.9倍、人口は日本の約1/4（2,995万人）である。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>
- (注5) この紛争は「5月13日（5.13）事件」とも呼ばれる。当時、建国の父であるラーマン初代首相は3民族からなる連立政権を率い、政治・文化系の大臣はマレー系、経済系の大臣は中華系と、権力を分有していた。しかし、同年同月に行なわれた総選挙でそれら与党が議席を減じて野党中華系が勢力を拡大したため、意気軒昂となった中華系がデモを行ない、不満と危機感を抱くマレー系のデモと衝突して、銃撃や放火（約6,000に及ぶ中華系の家屋など）を含む暴動に発展した。そのため非常事態宣言が出され、首相が責任をとるかたちで退任し、1971年2月までの21か月間議会が停止した。
- (注6) ラザク第二代首相は、5月13日事件の誘因を経済格差の問題と捉え、マレー系を優遇する新経済政策を打ち出した。また、これまで中華系が担ってきた経済系の大臣ポストもマレー系に与えて政治経済の指導権を握り、言語・教育・文化の面でマ

レー文化の普及を推し進めるため、憲法や扇動法の改正を行なった。これは市民権・マレー人の特権・国語としてのマレー語・スルタンの地位などについて公的に議論することを禁止するなど、言論の自由に箍をはめるものである。なお、マレー系を優遇する政策はイギリス領から独立した 1957 年からあるが、これほど徹底したものではなく、「ブミプトラ」という用語も公には使っていないため、1971 年に導入されたこの新経済政策を「ブミプトラ」と呼ぶのが一般的と思われる。

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/malaysia/democratization.html

- (注 7) 2014 年 7 月に世論調査機関ムルデカ・センターがさまざまな民族・年齢層の 1012 人に「5 月 13 日と同様の民族衝突が再び起きると思うか？」と質問したところ、マレー系の 53%、中華系の 22%、インド系の 47%が「起きる」と答えた。どの民族においても「起きる」と答えたのは、中高年層よりも若者層に多かった。

http://www.merdeka.org/pages/04_inNews01.html

- (注 8) 今年 7 月 12 日夜、クアラルンプールの繁華街にある電腦ビル Low Yat Plaza で起きた窃盗事件が引き金となり、100 人以上の抗議者がビルに押し掛ける騒動となった。発端は、前日同ビル内のスマートフォン販売店（店主は中華系）で 22 歳の若者（マレー系）が窃盗の容疑で捕まったことである。その後、男の仲間が店に押しかけて商品や設備を破壊し、店員を殴るなどして逮捕された。その光景を撮影した動画を SNS で公開する者、民族問題に起因すると書き込む者など現れたため、翌日マレー系の非政府組織（NGO）代表者を含む 100 人以上がビルの前に集結して暴徒化し、その場に居合わせた車（持ち主は中華系）を破壊したり、取材していたジャーナリスト（中華系）に暴行を加えたりし、7 人の負傷者を出した。騒動はいったん終息したが、政府は民族間対立を煽るデマを飛ばす者を厳重に処罰すると警告し、警察は異例の速さで噂を流した者を含む関係者ら（約 20 人）を逮捕した。



～シーズン1「SMクラブの受付」～

エピソード 2:みちのり

しすてむ♥きよたけ

前回、予告として、面接日のことを書く
と添えました。しかし、「面接日」を置いた
ことで、「SMクラブの受付」になるまでの
僕と性風俗の接点が気になり、エピソード
2を「道のり」にしました。何気なく進み、
やり過ごしていたかのように過ごし、そう
見せかけながらもあれこれ考える機会にな
った体験を綴っています。

ラインアップは、「僕と水商売の出会い」、
「水商売域にいる人たちとの出会い」。×は、
「僕と性風俗の出会い」でございます。

1. 僕と水商売の出会い

大学生だった頃の記憶が、僕の頭の中に
蘇る。

水商売をしている友人が数人いた（ガー
ルズバーやキャバクラ、クラブ、ラウンジ
などと色々なジャンルがあるがゆえに、一
括りに「水商売」と言うのはいかななもの
かと思うが）。給与は、学費や生活費の一部
にしていたようだった。働くきっかけや働
く理由でもあったのだと思う。また、彼女
たちのような理由で「水商売」以外のアル
バイトをしている人もいた。

どうして「水商売」を選んだのか、と関
心が引き寄せられる人もいるが、僕は、始
めた理由にあまり興味が湧かなかった。そ
こで働いている理由だなんて、「水商売」以
外のアルバイトをしている人へは、そうそ
う興味をもって尋ねることはない。あると
いえば、面接の時くらいだろう。そうだか
らか、「水商売」となると、生まれる質問を
不思議に思っていた。

でも、全くそうだったと言い切れるかと
自分に尋ねてみると…「水商売」がその他
の「アルバイト」と全く違うものだと思っ
ていたわけでもないし、ときには違うもの
として認識していたから、区分していなか
ったわけでもしていたわけでもなかった。
僕の「水商売」に対する関心はそれら両義
性を内包させていたのだろう。

そうした関心は、断定し難いが、僕自身
が「夜の仕事、向いてると思うよ」と言わ
れた（る）こともあり、それがなぜだか知
りたい好奇心になっていたのだと思う。そ
して、すでに体験していたアルバイト経験
から、楽しみやそこから生まれる存在価値
は働きはじめてから変わっていき、それも

また人それぞれ様ではないと思っていた。

振り返ればその場にいる理由なんて、始めた頃と変わることだって、そして、後から気づく何かもあるのだから、口を揃えて言うような入店動機よりも、実際の体験が気になっていたってことだろう。



しかし、「『夜の店』に行ったの？」と聞かれれば、NO だった。当時大学生だった僕は、「夜の店」をバイト先の選択肢の1つになっていたってよかったと思う。居酒屋で明け方まで働いていたり、ある時は、朝から夜まで営業マンになっていた。十分な仕送りをもらいながら、貯金をし、一括でバイク購入を試みたり、目的ももたずに知人の知人がルーマニアにいるというだけで、1ヶ月滞在（滞在記を書くなら、夜道さまよい路上で放尿くらいの経験）してみたりしていた。もっと怠惰なことをあげれば、当時付き合っていた彼女の家でゴロゴロして過ごす、クズみたいで独りよがりだったかもしれないハッピーライフ。

お節介ライフもしていた。部屋が空いてるというだけで、彼氏といざこざあった女の子に数日部屋を貸してみたり、別れてくれない彼氏に付きまとわれている女の子からご飯食べた？ってことで、つつい行ってみたら最終的に窓を割って入ってくる血

まみれ男に遭遇し、ビビりながらもカップルお別れの瞬間に付き合い、ほっておけばいいのに血まみれ男にすぐに病院に行くよう勧めてみたり、その後、身内同士の喧嘩でしょーと法で定められていないことには関与できない（この時期恋愛間におけるDVやストーカー行為に規制がなかったはず）とかほざく警察さんに来るのが遅いだけの現場の声を聞けだのボロカスいってみたら、故郷が近いの云々かんぬんで一人盛り上がる警察を目の当たりにして、警察って何してんだ？とうんざりしてみたり。そもそも、付き合ってる時は、話したいと思えば、時間を合わせるのに別れなくなったら一気にスパッと切るのもどうなん？と思うけど、別れ話ほど面倒だと思ってもないなーと思いながら、人の恋愛に首突っ込んでみる余計な人でもあった。

そんなことをしていた当時の僕のキャンパスライフといえば、学校に行ったとしても、教室に入らず、キャンパス内でタバコを吸いながらぼけーとしていたのだった（授業も出てました！たまに）。

ふらふらしていたんだから「夜の店」に遊びに行く時間もお金もあったと思う。自分の「時間」と「お金」の都合で、行く場所を選択することだって大いにある。場所との出会いの始まりと言いかえることもできると思うのだが、「行く理由」も「行かない理由」がなかった。理由がないと始まらないこともあるってことかもしれない。

未だに思う。理由を明確にして場へ入ることって、すごく難しい。目的や目標を明確にして、とか、ビジョンをもってとか、あたかもそれが、成功へ導くかのように言

う人もいるが、僕は欲しいものだけを手にいれることが富や名誉や幸となるなんて信じていないし、それが成功とも思わない。欲しいもの以外が見えなくなる貧しさも、そこにはあると思うから。でも、知りたいことだって、欲しいものだって、手に入れたくなるときだってあるし、いらぬものはとことんいらぬと思うことだってある。

明確な理由はなくとも、たまたま選んだ場所で、それなりにやっていくということは、人や社会の流れに合わせて出会い、進んでいくこと。これは誰もが持つ賜物であるような気がする。

「夜の店」に辿りつくのにそんな大きなこと掲げなくても行けるのに、当時大学生だった僕らにとって「夜の店」は、理由がないと行き着くことがなく、理由を作ることができるから行き着く場所だったのかもしれない。なんのために行くのか、不透明だったのだろう。だから、「夜のお姉さん」は、何かテクニシャンだと思う。何かの流れに合わせて辿りつき、理由もそれとなく持つことができるわけで。さらに、指名を取り始めるのだから、巡り合わせでたどり着いた男たちを次は、個人に会いに行くようにすることができる人たちなのだ（もちろん、男にも事情があって魅了されるのだろうけど。）

学内で会う彼女たちは、勉強や仕事で慌ただしくしていたと思うが、充実したように見えていた。教室に行きたくないから行かない選択をしている僕の興味は、彼女たちの夜と昼両方の生活にあったのだろう。そして、僕の知らない世界、そこで働く楽しみやそこで何が起きているのかというこ

とにそそられるテクニックにやられていたといってもいいかもしれない。

それで、彼女たちに興味があることを伝えたの？…当時、僕が完全に惚れ込んでいた人は「夜のお姉さん」もしていたから、聞く環境はあった。しかし、NOだった。

「色恋」を聞くことになるかも？それって、複雑な気持ちになりそうだし、聞いても聞かなくても、彼女は彼女なわけだし、僕が彼女を好きなことには変わりはない。

全てが「色恋」だったかなんて確信はないが、まー知る時が来てからでいいかーと流していた事実は残っている（イメージを作る場が、知らなくても勝手な想像や妄想でやきもきする気持ちを浮上させていたのだろう）。

かといって、何も知らないわけでもなかった。彼女の充実している姿から、もしかしたら「色恋」や「お金」だけで過ごす場ではないのかもしれないと感じていたのだから。それらだけの場合もあったかもしれないが。

余談

「夜のお姉さん」なのに金を払わず、一緒に過ごしていた時間があったと思うと不思議なものだ。「夜のお姉さん」である彼女が好きだったら、せこい男だと思うがそうではなかった。

でも、「夜のお姉さん」であることで、男に嫉妬が生まれる。どんだけ小さな男だと思うが、夜のお姉さんをしている貴女を丸ごと愛しているだなんて、若干の上から目線になることすらできなかった。結局、「目の前にいる彼女」が好きだったという話で…

「なんで俺/私のこと好きなの？」とかいう理由も楽しいのは始めのうちで、後にはそんなささや

き鬱陶しくなるものだし、案外「そこ!？」なんて思って「聞かなきゃよかったんじゃない!？」なんて時期だって迎えることだってあるだろう。好きなものは好き。それ以上、それ以外に理由はないものだ。でも、この理由が相手にとってドンピシャだと、恋に落ちるといふ現実もあるだろう。外見、内面、地位、名誉、富も恋愛対象に含まれるだろうが、儚くもそれは対象からそれていくことだったあるのだろう。上記の中でも、地位、名誉、富が変わっていないとしても、外見や内面のキモさが気になり始め、愛せない事態だって訪れることもあるだろう。そんなキモさはもともとありましたっていう場合も、時が経てば眼について止まらないなんてことも当たり前起こる。

そんなこと、始めからわかっているのに、人はそれでも恋を成就させ、やめとけばいいのに、本当の愛なんてわけのわからないものを探し始める(人もいる)。



2. 「水商売」域にいる人同士の出会い

教室に入らず、キャンパス内で過ごしていた僕は、あの場をいろいろなファッション雑誌の集結だと思っていた。カジュアル系、エスニック系、ヒップホップ系、ゴスロリ系、お姉系(最近オネエ系ってあるけど、これは同じ表現だとしても、ファッションジャンルじゃない、はず。切り離せない気もするけど)、ギャル系、お兄系。一冊

の雑誌を買わなくても、あそこに行けばいろいろあるぞ!と思い、キャンパス内でぼーっとしていたのだった。(大学を何だと思っていたのだと不思議なものだ。授業をサボると楽しいよ!とサボりを進めているのではない。だが、サボるなら器用に堂々と休み、十分に楽しむことは、おすすめする。一応、添えておくが、あの頃授業に出ていた友人たちの人生は、今でもユニークだし充実している。教えられることは、未だに多々ある。)

あの場所に「あ、水商売の人っぽい」とか思うことが、ちらほらあった。「お姉系」「ギャル系」「お兄系」ファッション誌に、「夜のお姉さん」や「お兄さん」が「読モ(読者モデル)」として載っていたり、彼らの髪型が流行になっていたこともあった。

夜のお兄さんやお姉さんが、なんだか、お昼のキャンパスに出てきてるなーと思う光景だった(実際「水商売」をしている人とは限らなし、むしろ違うことの方が多いと思う)。「夜の」お店がある場はある程度決まった場所にあるから、僕は学内で不思議な感覚を持っていた。しかし、お昼に出没ともなれば、昔と比べてこの業界を受け入れている人たちが増えてきているってことかーと思ったし、僕と「水商売」は、決して懸け離れた仕事ではないなーと思っていた。

余談

「人は外見より中身」なんてこと言いますが、いやいや、そんなことガチで言ってます?と思っただ体験をここで。

僕は、上記であげたファッションに魅力を感じず、可愛いともかっこいいとも思っていませんで

した。でも、最近、「ラウンジ」に行ってみたのですが、「アリ！」と思いました。高級そうなソファーとか、ピカピカしたグラスがある場に、ちょっと清楚な女性たち。また、ある人は、カチッとキメた髪型をしている女性。そこには確かに「夜のお姉さん」がいる！と感じた。ええ。ええ。それはそれは、魅力的だと思いましたよ！だって、不自然じゃなかったんだもん。なるほど…人を魅了するのは、外見だけでもない！外観も含めて外見判断してるわ…と思ったのでした。

ちなみに、「夜のお姉さん」はお昼間でも、同じ服を着る人もいます。TPOに合わせた着こなしをするようです。夜は、スカーフを巻いてみたり、お昼とは違うアクセサリーをつけてみたり（だから、お昼キャンパス内でみかける、それらしき人が、「必ず夜のお姉さん」だとは限らないと思うわけ）。

お昼の姿との違いを、最も感じさせるのは、髪型だと思いました。彼女たちは、美容室でセットをしてからご出勤のようです（僕が知る方々は）。この話を、「夜のお姉さん」にしてみると「自分でしない」ではなく「自分でしたらいけないの！」とピシッと言われ、見栄え作りにルールと拘りがあるようでした。でも、しなくてもいいから、とにかく来てと声がかかる場合は、そのままご出勤のようです。男はその些細な準備姿を知らないが、男がいなければ、こんな準備もしないのではないだろうかと思いました。男もまた、そういう場に行くから、身なりを気にする。

遊びに行った日の僕は、短パンに寄れたTシャツで、そのまま行こうかと思ったのですが、ジーパンによれよれしていないTシャツに着替えて行きました。帰宅後、僕もちょっと見習ってもいいのか？と思いタンスに入った縫れたTシャツを取り出し、捨てるか否か悩んだ。結局、気に入って

いるから捨てず、これからも着ることにしました。

3. 僕と性風俗の出会い

(1) そこそこの高級車内にて

「みさえ、彼氏が借金あるから風俗で働き始めたらしいよ」とそこそこの高級車内で、そらが話す。「へー。その彼氏って…」
「彼氏はAVに出ることにしたらしい」「…え?!」。

AV男優をして借金返せるの?そんな状況の中で、気持ちよくなってどうするん!?違う仕事だってあるって話だろうが!と借金返済の苦勞と性的快感をひっかけ、みさえのセックスワークを援護するような発言をしていた(AV男優も、普段の性行為と違うからけっこう大変であるにもかかわらず)。同時に、いろいろな男と性的関係を持つ彼女と、いろいろな女と性的関係を持つ彼氏だったら、それはバランスがとれてるって解釈もありか!?と思った。とはいえ、「えーっと、病気とかって大丈夫かね?」とみさえの体を心配していた。

(2) 欲望誘惑をするハコ

下世話な話と思う人もいるかもしれない。「最近アソコが痒い」と発する女、「軟膏や!っていうか、医者に行きなよ」と返す僕。性風俗で働いている人に限らず、性病になることだってあることは承知だ。

僕のみさえに対する心配は、「性風俗」=「不特定多数の人と性的接触がある」=「性病感染リスク」こういう思考をしていたのかもしれない。しかし、この思考は、何か見落としていないだろうかと思っていた。

確か、みさえは「ヘルス」で働いていたと思う。「ヘルス」でお遊びをする場合、短時間（だいたい30分以下かな？）コース以外は、ゴム（コンドーム）無しのような。言うまでもないが、性病予防のために用いるゴムであるため（一般的にはゴム＝避妊という認識が高い。「ヘルス」はそもそも本番行為を禁止しているため、避妊のためという用い方は、前提に置かれていないということになる。）、ゴム有りのお遊びと比べれば、ゴム無しの性的行為の性病感染リスクは上がる。しかし、「ヘルス」でゴム有りのお遊びコースもある。それは、短時間（30分くらいだと思われる）コースの場合だ。短時間コースの方が、リスクは低くなるのかもしれない。

しかし、短時間コース＝安全だという話ではない。一人の相手と性的行為をもつ時間が、短時間＝不衛生になる場合もある。時間があれば、シャワーでイチャイチャも楽しみつつ、イチャイチャと見せかけてキャストが念入りに洗う時間を短縮させなくなる男もいるだろうから。

建前は、飲食店である「ピンサロ」を例としてあげると顕著かもしれない。そもそも、そこには、シャワーが無い。性風俗関連特殊営業に位置づけられない業種であるため、おしぼりが使われるようだ。だって、飲食店という位置付けだから。

飲食店では、当然のように席についたら、おしぼり（チェーン店ではおしぼりより、ウェットティッシュが出てくる率高いかな？）がでてくる。「ピンサロ」も当然、飲食店の接客としておしぼりを。でも、普段食事に行ったら、手が触れるモノや口に入

れるモノを拭くことはないけど！？と思うのだが。食品衛生面が、万全であることを前提に置かれているのだからいたし方ない。

それを知っていて利用する人たちもいるわけで、ただただ、リスクがどーのこーので人が場へ辿りつくわけではないと思う。

（あまりないと思うけど）飲食店だから入りやすいのかもしれないし、手っ取り早く抜けるから気楽、一人の人と長時間過ごすよりは会話をする時間も短く精神する減らすこともあまりないからいい、とか色々あるだろう。

「性の商品化」を大肯定も大否定もしない僕であるが、商品化されないが故におきる個人の判断や責任はついてくると憶測させられ、肯定したい思いも出てくる（「受付」をしていた時、あえて「商品」として、扱ってきたこととそうではなかったかかわりがあったので、個人的には「性の商品化」以外の言葉はないものか、と思っている。あと、何が商品なのかわかんなくなる経験もあった）。飲食店として管理していないモノだって、場にいるキャストと客は触れ合う。それは、接客といった人と人の関わりだろう。

しかし、ヒトとのかかわりそのものがサービスであり、ここは管理しようがない。一方、衛生管理していたとしても相手がそうでなければ、その管理は無念に終わることだってあるだろう。だって、人はそれぞれ異なる経験をもって他者と出会うのだから。そこから、賛否両論ありながら、あるから、調整しながらかかわりあっていく。それぞれの場の位置付けが違うのだから、そこには違うかかわりがある。そして、そ

ここで生まれる楽しみも人によって異なるの
だろう。

客も表向き飲食店としての接客をされる
ことをわかって、もしくは、短時間のコー
スでゴム有りだとわかって、お遊びをする
場を選んでいるのだろう。性病うんぬんで
人は場を選んでいないことだってあるのだ
ろう。気楽さや手軽さを求め辿りついでい
ることが、それだ。相手とうまく過ごせる
ことがいいことのように過剰に取り上げら
れている時代だから、やり過ごせる関係だ
って欲してしまう。もしかすると、人とい
い関係を築くだなんてわけわからない表現
より、風俗や建前飲食の方が、ルールがあ
ってかかわり方が理解しやすく、接しやす
いこともあるのかもしれない。リスクもあ
るかもしれないが、何をするかわかる場と
いう枠に惹きつけられ、中では多様な楽し
みが生まれるのだろう。



(3) 確かに3人いた

そう思うと、もしかしたら、「借金返済」
のためではあったが、みさえにもそこに居
たから知った、生まれた楽しみが、あった
かもしれない。なかったかもしれないが。

でも、あの頃の僕とそらは、そこまで考
えられなかったと思う。僕とそらは、そこ
その高級車内でタバコに火をつけ、みさ

えの事情を煙で紛らわすかのようだった。
また、軽快な洋楽をそこそこの大音量で流
しながら、どうしようもなさで溢れ流れて
しまったかのようにもあった。「それで、最
近自分どうよ？」と互いの近況に辿りつい
ていたのだった。

その後、みさえは、どうしているのだろ
う…そらは、どうしているのだろう…。僕
は、そらと連絡取れる状況であるが、連絡
していないし、もう何年も会っていない。
僕は、転々と拠点を変えて暮らしているし、
同窓会があっても顔を出すことはほとんど
ない。でも、「そら、みさえはどうしている
のだろう」とふとした時に思う。きっと、
そらのことだから、今でもみさえと会って
いるか、連絡を取り合っているか、それな
りに関わりがある気がする。みさえも、そ
らだから「性風俗」で働いていることを話
したのだと思うから。

(4) 魅惑的な彼女たち～「SM」の扉～

とある室内。居心地が悪かった感覚が残
っている。そこに20人くらいいたろう
か。ふらふらしている僕には似つかわしく
なく、拘束ある時間、指定の場所がある処
に出席をした。そこは、時に発言を求めら
れる場だった。基本的に喋りたい時にしゃ
べる人だったから（今もそうだけど）発言
を求められると分かれば、極力避けたく
なる（避けないこともあるけど、それは、自
分が思うようにいかないことだってあるか
ら頑張ってみよう！くらいで、頑張ってい
る）。

そこで、2人の女の子に遭った。綺麗目
の顔立ちにさらりと着こなすデニム姿。ハ

キハキした口調。でも、どこか天然！？と思うような人。もう1人は、ラバーのコルセットを巻いて、奇抜なわりに恥ずかしそうに入って来た小柄な人。彼女たちの名前は、和美と貴子。

はじめは、どちらも気にならず、2人の存在すら意識していなかった。だが、2人が一緒に居たとき「うわ。俺この人たち気になる…」とそそられた。そのときの印象が先に綴った風貌だった。2人の共通点が見つからず、「そもそも、仲がいいのか？」と疑問に思ったこともあり、風貌だけが僕に残した印象ではなかった。特に、貴子は1人で居たら、変わってるやつとか、可愛い女の子、で終わっていたかもしれない。しかし、和美がいるとその2つのインパクトに拍車をかけていた。和美も同じ、1人でいても、美貌と天然のギャップは感じただろうが、貴子がいるとそれらが煌びやかに引き立っていた。

数日後、外をうろちょろしていると和美とばったり会った。「おー！何してんの？」と声をかけそのまま「飯行こうや！」「あ、ここに連絡して」と連絡先を受け取った。ほとんど知らない人同士にしては、軽やかなやりとりだった。軽快さとは裏腹に、実際はあたふたしていた。

ナンパしてしまった感が強かったからだった。軽く言ったものの、願っていたご飯だったのだろう。「あ、貴子も誘って〜2人の日程が会う日に行こうか」と貴子も連れてきてもらうよう頼んだ。デートに誘いたいけど断れるかもしれないし〜対一だったら緊張するし〜的誘い文句で、だせ〜なとか思ったけど、そんなことどうでもよく、

2人とも気になったから、同時にという単純な誘いを決行していた。

彼女たちからすれば、気軽に誘ってきた僕に対する、なんだコイツ！？度は高かっただろう。

そそくさ和美にメールをしていた。すぐに返事があったどうかは忘れたが、3人で飯に行くことになった。

夜遅くの集合だったと思う。焼肉屋かお好み焼き屋を提案され、「俺、お好み焼きはそんなに好きじゃないから焼肉行こう」ってことで、3人で焼肉を食べた。二人は、1、2杯酒を飲み、飲めない僕は「焼肉には米だ」と思い、ジュージュー焼ける肉とともに米を頬張っていた。

そのときの話の内容を見事に覚えていない。貴子が夢中になって何かを喋っていたのだが…ウィスパーボイスすぎる彼女の声は、肉が焼ける煙とともに紛れ混んでいたのだった（確か、不思議な彼氏について夢中になって話していたのだと思う）。焼肉もお好み焼きも貴子には合っていないな…と思った。でも、何もわからなかったわけではなかった。ちょーニヤニヤして酒に酔っているというより、自分の恋話に酔っていたように見えた貴子の印象は、忘れられないくらいだ。

焼肉屋を出た。涼し気でちょっと寂し気な夜道だった。「2人って普段なにしてんの？」と唐突に聞いた。「同じ臭いがするけど…それは、夜の人って感じかな…」と加えた。「ま〜それは当たってるかも〜」と和子。ほんのちょっとの間だったと思うが、少し灰色の空気が通り過ぎていくかのような感覚があった。「そうだけど〜えへへへ〜

ちょっと違うかも。お昼でもしてるもん。うふふ」と貴子。「あー風俗か？」と言ったら、「そうそう。そうなの〜SMしてる〜」「へー。…は!？」と納得しつつ予想もしていなかった「SM」という言葉を飲み込むことができなかった。

「SM」？そこは一体何をするのか？そして、何をされるのか？が同時にきた感覚だった（SとMと二つの役を言っているからね…）。さらに、「SM」＝「性風俗」と思考回路がつながるまでに時間がかかった。性風俗でお遊びをしない僕にとって、「SM」というカテゴリーがそもそもなかったのだろう。

戸惑いに反して「そこって、人募集してない？」と言ってしまっていた。だが、「え？聞いとく」とかなんとか言われたまま、話は止まった。

タイミングは、1人で動いていない。相手の状況にもよりけりだ。

(5) 空白の1年

この間、僕の周囲の人も貴子の仕事を知るようになった。それは、ある人がSNSを使って、俺の友だちは〜って具合に貴子が働いている店のリンクも貼ってつぶやいたそう。そこから、瞬く間に貴子の話が伝わってきたのだった。

僕は毎回、初めて聞いたかのような顔をしていた。噂話も武勇伝語りも世の中にはあるけれど、それは楽しい話題提供か？と思っていた。偏見だってある仕事だから、多くの人が公開しない職種。だからこそ成り立つところでもある。また、なかなか身近にいない仕事をしている人だから、特別。

だから、持ち上がりやすい話かもしれない。だけど、貴子が「SM」をしていることを知っているとか知っていないとかの話が、つまらなかった。

「すごいサービスをしている」とか「風俗とかってさ…」とか肯定・否定の話で止まるが多かったからかもしれない。また、「風俗嬢」という言葉を盾にして、それぞれのお遊びや恋愛事情を聞くことが多く、本題はそっちか…貴子が、ぜんっぜん特別にされてないじゃん！と思っていたのだった（僕は、ここでの会話は、それ自体が本題だし自然だと思うので、それはそれで楽しめますが…）。

「SM」って特殊だと思うし、そうじゃなくなったら意味なくなるんじゃないかと勝手に解釈をしているから、噂話でどんどん広がってたら、なんだか貴重じゃなくなる気がしたのかもしれない。僕もよく知らないくせに高飛車だったかも？と思うし、広める野郎と大して変りなかったと思う。

この時期、僕の状況は、なんか仕事ないかな。どうせふらふらしてるんだし、今までしたことのない業種に行ってもいいかも。誰かとともに何かしている感覚ある仕事が楽しいんだけどなんかね〜。食っていきゃなんないから、そんなこと言っている場合じゃない！仕事見つけよう！でもな、同胞と思っている相手でも、結構違う人扱いになるしな。それなら最初から違う人として入れるといいな〜どうせ一人になんてなれっこないんだから、まずは一人でやっていきたいな。こんなモヤモヤを抱えている時期だった。

余談

水商売や風俗がある界隈を歩く男集団が自分と女の子のかかわりについて盛り上がっている会話場面に遭遇します。「あの子ちょー可愛かった」とか「俺のこと好きなんじゃないか!？」とか「テクニックが、(は) んばなかった」とか。細かく書くのは避けますが、女の子に対するネガティブ発言も含めて、なかなか自信ある口調でおしゃべりしている場面をみかけます。女集団だったら(もしくは、女がいると)ランチ行こうってだけで、上記と会話内容は別だとしても付き合っている相手とかの話って自然とあがるようですが、男もこういう話をしだしたら止まらないなんてこともあるのかも?ただ、きっかけ次第なのでしょう。

(6)「面接日」ゲット

和子と貴子と飯に行き、1年後くらいのことだっただろう。もやついている最中、僕が咄嗟にとった行動があった。

ステップ1: 貴子を思い出してしまった!
ステップ2: うん?これも何かの縁!?
ステップ3: 貴子に連絡してみよーっと
ステップ4: 「貴子の職場、男募集してない?バイト希望なんだけど」
以上。

ここから、少しだけ彼女を知っていくようになった。返事をくれた際、「聞いておきまーす」だけでなく、入れる曜日や時間帯の確認をしてくれた。それも適切で簡潔な問い。かつ、それが丁寧な印象だった。不気味な雰囲気を持ち主だけど、礼儀正しくどこか自分と相手との距離をうまくとっている感じがし、好印象だった。先に聞いておけば、店の人に伝えやすいというものもあ

るだろうが、業務的な印象ではなかった。

1週間後くらいだった。貴子から連絡がきた。「店的にも是非」とどうやら人手不足だったようで、僕の電話番号を店長に教えてもらうことになった。ただ、この時期暇をしていたとはいえ、僕が出られないこともたまたあり、僕から電話するよう貴子に伝えた。すると、「店長」=「熟女というかマダム」とお知らせがあった。てっきり、男が出ると思っていた。

貴子は、段取りがいいが業務的でなく、おしとやかにさらりときっとこの先知っておいたほうが相手にとっていいだろうと思うことを告げることができるいい女。咄嗟に出る僕とは大違い。

(7) 認識違い

反対者が現れた。当時付き合っていた彼女だった。「おれ、SMクラブの受付をするかも」。面接に行くことを言っただろうか。言ったけど、反応が悪く、行く的発言に止めておいたような…。

貴子に「彼女が反対しているけど、なんとかして行くわ」「大丈夫ですよ・・・ファイト!」みたいなやり取りをした気がする。真剣に働いていたし、ひとまず彼女に打ち明け、了解してもらった。



(8) 面接日決定

店長に電話をかけた。サクサク面接日時が決まり、店まで行くことになった。とはいえ、HP をみても場所は明確に示されておらず、とある場所に来るよう伝えられた。そこから電話をすれば、口頭で道案内をしてくれるということだった。

不安と混乱でしかなかった。「店」と言っているのだから、店舗はHP を見ればすぐわかるだろうと思った。しかし、「無店舗型」のため「店」はないはず。でも、HP に「ご来店」の場合の指示があったため「店」はあるってことか！？それなら、どこで何をしているのか、さっぱりわからなかった。また、そもそも「店長」＝「熟女」と言われていたにもかかわらず、「本当に熟女！？」と言ってしまうくらいに、「おばさん」の声ではなかったことにびっくりしていた。

貴子に面接日が決まったことを伝え、「本当に熟女！？」と加えた。と同時に貴子が、「マダム」と言葉を足していたことに納得していた。声のトーンと話すペースから、気品を感じた（「熟女」に気品がないってわけではないと思うが）。しかし、僕のもどかしさは残ったままだった。「店長」が女性であるということに納得したに過ぎなかった。また、貴子から「変な職場」だけど頑張ってみたいな返事が来、どんな場所で面接が行われるのか全く想像できなかったのだろう。決まるといいなと思えば緊張し、「マダム」ってどんな人なんだ！と思えば、あー楽しみじゃないか！！と思った記憶が今でも鮮明に残っている。

今思えば、あの緊張はいらなかったと思

う。一般的には、面接をして、採用するか検討され、合否が出される。しかし、思い返せば、貴子から来た「お店的にも是非」という返事の時点で、ほぼほぼ雇われることは決まっていたようだ。

そこも職場の面白さを出していたと思う。貴子とちょこちょこ会っていたにしても、互いを知る機会は、ウィスパーパーボイス焼肉音にかき消されてたデーの時くらいじゃなかっただろうか。女の子だけが居る場所、厳しそうな社会なイメージと思っていた僕は、マダムはよく採用決定をしていたなーと思う。貴子がそれだけ信頼されているキャストだったのだろう、と当時を振り返る。

余談

「熟女」＝「おばさん」ではないことは周知のことだと思えます。「おばさん」と言われ「熟女」という解釈はしませんし。

でも、「熟女」ってなんっすか！？という疑問が、僕の脳裏に何年もつきまっています。30代以上の女性を表していることもあれば、40代、50代の場合もあるんです。基準は、年齢じゃなかったのか！！と思うことも多々あります。

性風俗というカテゴリーで話しを進めているので、「性風俗」の場から話しますと、「熟女」がいる店でもいろいろな風貌の人がいます。店側のイメージによりけりですし、キャストもそのイメージに引き寄せられて面接までたどり着きます。あるところでは、若ッ！と思う雰囲気の人もお見かけしますし、また別のところでは、結構年齢いってるよね？と思う人もお見かけします。熟女店のタグに「人妻」とあり、20代くらいの方が在籍していることもあるます。客側も自分の「熟女」イメージにあった人を選びます。「熟女」認識は多様です。

「熟女」とつけばそんな性的な表現！とか、性的行為無理〜という方は、ラベルに惑わされずに確かめていただくのもアリだと思います。

ちなみに、僕の「熟女」認識年齢は、年々上がっています。30を超えた今、僕はオッサンであると自覚する今日この頃で、気軽さが一歩間違えばセクハラおじさんになる層に突入です。オッサン自覚中の僕にとって、30代女性は、熟女に入りません。認識する人の年齢にも関係している、「熟女」認識。

社会の状況によって「熟女」風俗店の人気に変動があるとか、ないとかです。

綴り人/しすてむ・きよだけ

[清武システムズ](#)という看板を引っさげ、活動中。しすてむ・きよだけは、アイデアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。

清武システムズ限定コース解禁!!□

ートーク about 熟女コースー

「私、熟女です」、「いいえ！私は熟女じゃないってば！」、「熟女ワードで私を見ないで！」、「俺がイメージする熟女は・・・！」などいろいろ思うことがある貴女/貴方♥□□□是非、しすてむ・きよだけとお喋りしませんか？

「いいよ♥□」□とおっしゃってくださる方は、下記連絡先に、ご希望の日時、セッション場所をご連絡ください。いくつかの希望候補をあげていただくとありがたいです。是非とも、「熟女」で悩んでいる僕を、リードしてください♥□

1対1でも複数でも可能！複数ご希望の場合は、お友だちをお連れください。なお、プレイ開始後の乱入も可能でございます。

あなたとあなたのお連れ様のお好みのタイミングをお選びいただけます！

まずは、お気軽にお問い合わせくださいませ♪

【料金】 無料

（セッション場所や交通費、飲食代は、甘えてもいいですか？）

【指名料】 無料

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

そうだ、猫に聞いてみよう No. 2



小池 英梨子

前回のおさらい

前回の連載では、猫流の「問題の本質の捉え方」を書かせていただきました。

おさらいすると・・・

☆問題の本質を立体的に捉えるポイント☆

- ① 悪者探しをしない
- ② 3つの視点で捉える
 - ・ミクロな視点で見えているものを理解する
 - ・メゾな視点で全体図を捉える
 - ・マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす
- ③ 背後ストーリーを理解する

以上3点のステップが猫流問題の捉え方でした。その中でも「①悪者探しをしない」をメインに書きました。

今回は、「②3つの視点で捉える」をメインに書いていきます。自分はどの視点で、見て考えているのか把握した上で、他者はどの視点で、見て、考え、主張しているのか、理解することが問題の本質を捉える上でとっても大切です。ここがあやふやだと、主張が永遠にかみ合わないまま、時間だけが過ぎていってしまいます（連載No1. おじいさんとおばあさんの例参照）。また、ミクロ、メゾ、マクロ、3つの視点を獲得していくことで、活動内容がどう変化していくのか、立命館大学猫の会の事例を紹介しながら解説していきたいと思えます。また、猫との関わりを通して生まれる学生の心理的な変化にも焦点を当て、大学猫活動の教育的意義にも触れられたらいいなと思っています。

大学猫活動ってそもそもなんだ？という方がほとんどだと思いますので、まずは、立命館大学猫の会について、紹介したいと思います。しばらくは、3つの視点の話というよりも活動紹介になってしまうかもしれませんが、それはそれで興味深いものだと思うのでよろしければお付き合いください。

1. 「RitsCatの大学猫活動」紹介

現在の活動内容を具体的にまとめると、

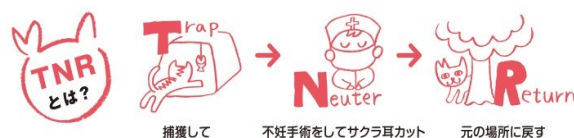
- ①大学内の猫に不妊去勢手術（TNR）の実施
- ②毎朝毎夕の餌やり
- ③猫のトイレ掃除
- ④猫の健康管理
- ⑤適切な猫との関わりの啓発活動

といった内容である。

ここからは、それぞれの活動内容を説明していきます。

①大学内の猫に不妊去勢手術（TNR）の実施

大学構内に住み着いた猫を捕獲し、不妊去勢手術を施しその印に耳さきをV字にカットし、再び構内に戻すこと。この取り組みは、「TNR（ティーン・エヌ・アール）」や「さくらねこTNR」と呼ばれる。何の略かという、「Trap（捕獲）」「Neuter（不妊手術）」「Return（元の場所に戻す）」のことで、何故英語なのかという、日本で始まったオリジナルの取り組みではなく、世界的な取り組みだということである。



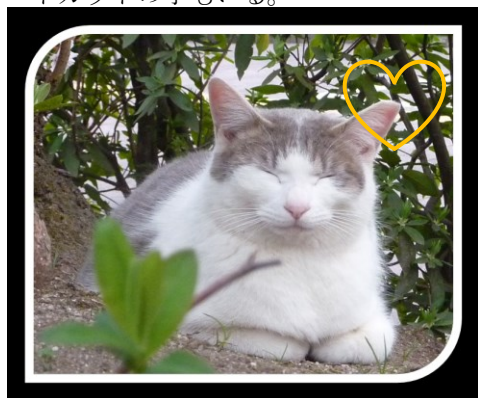
©公益財団法人どうぶつ基金

実際に、「TNR と CAT」などで検索すると多くの海外論文や web サイトがヒットする。ただし、日本で主に実施されている TNR はノラ猫の迷惑行為が人の生活に及ぼす影響や殺処分数を抑える目的で実施されているケースがほとんどだが、海外では、希少動物を猫が捕食してしまう問題に対する対策として実施されているケースが多い。中心となる問題と目的が異なるため、海外の事例と日本の事例を同じ TNR だからと並べて考えるのは少し注意が必要だ。話がそれてしまったので、戻すと、TNR の目的はこれ以上の繁殖と、発情期特有の人にとって迷惑とされやすい鳴き声やマーキング行動の抑制を行うことが目的である。



甘えん坊の食いしん坊「ぐり」

不妊去勢手術済みの印としてV字に耳先をカットする方法が一番メジャーなため、RitsCat でも採用している。V字のさくらカット他に、ストレートカットや、刺青を行う地域もある。RitsCat の初期の頃に不妊手術をした子はアニーのようにストレートカットの子もいる。



気分屋アイドル「アニー」



②毎朝毎夕の餌やり

不妊去勢手術を施し、一代限りとなった命を大切にするため、毎朝毎夕に餌やりを行う。この餌やりには、命を大切にすることを目的の他に、ゴミ漁りの防止や、定時に餌やりを行うことで新参者にいち早く気づくこと、捕獲を容易にする目的の餌付けも含まれる。



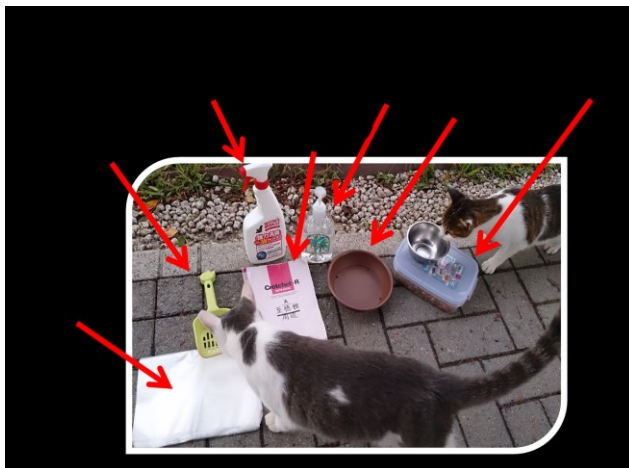
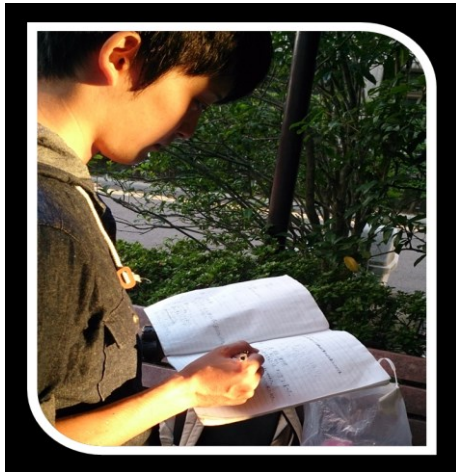
③猫のトイレ掃除

夕方の餌やりは一時間ほどかけて行われるが、その際に猫のトイレスポットの清掃を行う。具体的には糞尿を取り、消臭スプレーをする。これにより、猫の糞尿の臭いを軽減させ、猫に嫌悪感を抱く人を減少させることができる。



④猫の健康管理

毎日の餌やり時に、どの猫が食べに来ているか、変わった様子はないかといった健康管理を行う。体調が悪い猫がいる場合は、写真や動画を撮り掛かりつけの獣医さんに相談する。場合によっては捕獲し通院する。猫の健康状態が良いことは、キャンパス衛生にも少なからず良い影響がある。



⑤適切な猫との関わりの啓発活動

「人の食べ物を与えないで」といった餌やりに対する啓発看板の設置や、日本の猫の殺処分の現状と、地域猫活動や大学猫活動といった取り組みの有効性と可能性の普及啓発活動を学内外に向け行っている。

啓発ポスターのひとつ

Ritscat が TNR のために
エサの管理をしています

Ritscat と
TNR については
ウラを
ご覧ください

人間の食べ物は
猫の健康を害します

人に近づくようになり
トラブルが起きます

活動内容はざっと以上の内容だ。補足すると、医療費は、学校からは出しておらず、学生の会費と、サークルの活動を知った方からのご寄付で成り立っている。現在は、不妊手術対象の猫も新参者が入ってこない限りいない上に、会員数が多いので、積極的な寄付の呼びかけは行っていない。

2. 活動の成り立ちを3つの視点から読み解く

上記のような活動内容を確立するまでに、どのように、ミクロ、メゾ、マクロ、3つの視点を獲得し、活動内容を変化させていったのか、記述していきたい。

2-1. はじまり (ミクロな視点の理解)

立命館大学猫の会 (以下 RitsCat) は 2010 年に発足 (正式設立は 2011 年) し、立命館大学衣笠キャンパス内の猫の世話や管理を行っている。2015 年現在は会員が 100 名を超える人気サークルの一つだ。

2010 年、立命館大学衣笠キャンパスには 15 頭ほどの猫が生息していた。地域の特徴としては、閑静な住宅街と山に囲まれたキャンパスで、猫好きの学生や職員がそれぞれ餌をあげたりと思いきいに可愛がっていた。そんな平穏な日々の中、突然設置された餌やり禁止看板――――。



問題となった餌やり禁止看板

これに対し、「なんで猫に餌やったらあかんねん!」と疑問と反感を抱いた学生(後の RitsCat 初代代表の T さん。以下 T さん)は、大学事務局

に事情を聞きに行くが、相手にしてもらえず説明が得られなかった。しかし、Tさんは諦めず、質問状を作成して提出し、大学事務局との対話の道を開いた。

この段階は、第1の“ミクロな視点で見えているものを理解する”前の段階である。ここから、大学事務局との対話の道を開いた学生は、近隣住民から猫の苦情が寄せられていること、大学事務局としては苦情に対応しないわけにはいかず、仕方なく看板を設置したことを知る。それによって、自分の視点で見えていた猫の愛くるしい状態は、あくまで自分のミクロな視点であり、別のミクロな視点では、近隣でトイレや喧嘩をする迷惑な猫という見え方もあるのだと知る。自分の視点の認知と他者の視点の認知。これが、問題の本質を捉えるための、3つの視点の第1段階「ミクロな視点で見えているものを理解する」である。

2-2.提案（メゾな視点の獲得）

その頃学内では猫の殺処分に大学が動くのではないかと噂が広がり、初代表のTさんは猫を殺されたくないという思いから大学側との対話を繰り返した。様々な価値観を持つ学生が生活し、近隣住民と接している大学の立場としては、猫の世話をするような対策には踏み切れないと感じ取る。そして、Tさんと同じように猫を可愛がっていた職員さんのアドバイスも受けながら、悩んだ末に不妊去勢手術を学生がやると提案する。そして、不妊去勢手術を実施するためには、猫の個体把握が必要であり、捕獲のために人にある程度慣らす必要があること、つまり餌やりを行う必要があることを根気強く説明した。そして、大学側も猫を減らすための活動であるという前提を確認したうえで、餌やりを容認していった。

この段階で、Tさんは、感情に任せ反対するのではなく、第2の“メゾな視点”で全体図を捉えた。そして悩み模索した結果、「不妊去勢手術を行う、その代わり餌やりの許可をもらう」という落

とどころを見出した（両者の妥協点ではなく、両者 Win-Win の取り組みなので、超越点と表現したいくらいだが、この段階ではTさんの視点はミクロとメゾ視点に留まっており、殺処分の現状や大学猫の出産問題を踏まえての不妊去勢手術決定ではない状態なので、あえて落とすところと表現する）。当初を振り返りTさんは「はじめはこんな活動をするつもりではなかった。ただ、猫を可愛がりたいだけだったのに。」と、当時を振り返る。

今回の連載の趣旨からズレてしまうので、割愛するが、いくら理にかなった活動であっても、前例の少ない状態で、それを理解してもらうのは、並大抵の事ではない。時には心無い言葉を受けながらも強い責任感でサークル発足につなげたTさんの努力を強調したい。

2-3.充実化（マクロな視点の獲得）

捕獲と不妊去勢手術は少しずつ進んでいったが、2年間ほど置き餌を行い、トイレ掃除の週1回程度と、衛生管理は十分とは言えなかった。三代目の代表に変わった年に、活動の改革期が訪れた。日本で行われている猫の殺処分の現状と、その打開策としての地域猫活動の先事例があることを勉強し、自分たちの活動の未熟さを知る。それと同時に、自分たちの活動の社会的意義に気づき、活動内容の精緻化を進めていった。また、活動内容を充実させるためには、もっと人数が必要であったため、勧誘活動を頑張り、15名程度の人数であったRitsCatに50人の新入生を集めた。本当の意味でキャンパス衛生に貢献するためにトイレ掃除を毎日実施し、不妊手術も徹底するようになった。餌も起き餌を止め、朝夕2回に増やし、土日も行ふことになった。HPだけでなく、Twitter、FacebookでRitsCatのアカウントを作成し、人の食べ物に猫に与えないよう啓発活動にも力を入れ始めた。

第3の「マクロな視点」の獲得が活動変革期の大きな原動力だといえるだろう。社会の中で自分

たちの活動を捉え直したことにより、自分たちの活動を成功させ、それを社会に発信することで、同じように困っている地域の人や猫を助けることに繋がり、ひいては猫の殺処分減少に影響を与えることができる可能性を有しているのだと、社会的意義や可能性を認識した。大学構内にいる猫を守りたいという視点では、トイレ掃除や不妊去勢手術は餌やりを許可してもらうために気持ち程度実施するだけでも良かった。しかし、日本中の猫を守りたいというマクロな視点を獲得したことにより、活動に新たなモチベーションが加わった。それが活動変革期の大きな動力となったと考えられる。



同志社大学と京都大学との合同勉強会で活動報告

このように、行動の変化には必ず視点の変化が伴っている。つまり、3つの視点を獲得していくことにより、自身の活動の欠けている部分や、持っている可能性に気づくことができるのだと考えられる。

3. なぜ3つの視点で考えることが重要だと思えるのか。

なぜ3つの視点で考えることが重要だと思えるのか、それにはもう一つ大きな理由がある。それは、「負のパターナリズム」を極力防ぐことに繋がるからだ。

パターナリズムとは、「干渉される人の為に干渉する」行為であるとされている(澤登, 1997)。(ここでは、「干渉される猫の為に干渉する」と

言い換える場合もあるが) 自分の利益に関係なく当事者(当事猫)にとって最善の方法を当事者(猫)に変わって選んだり、勧めたりすることで、医療や福祉の現場でよく出てくる言葉だ。きちんと機能する場合は決して悪いことではない。しかし、一方で相手に十分な情報・判断材料・機会を与えずに、相手のためと言いながらも、当事者の真の利益より、実は自分にとって利益になる方法を選んでしまう、「負の機能」も有している。

大学猫の活動は、猫の意思を確認することが出来ない以上、全てパターナリズムだといっても過言ではないだろう。だからこそ、猫の為と言いながら自分よがりの行動になっていないか、考え、問い続けることが必要なのだと思う。

一つの視点に偏っている時に、負のパターナリズムは発生しやすい。負のパターナリズムの厄介なところは、「あなたのために」と、相手のことを思っていると自分自身も思いこみながら、弱者の支援という名のもとに、強者利益の決定を行ってしまうことだ。特に、強烈な正義感に裏打ちされている場合は注意が必要だと思う。盲目的正義感は攻撃性になりやすい。ちょっと話がそれるが、ラブソングで「世界中を敵に回しても僕は君を守る」といったような歌がよくあるが、そういった曲を聞く度に、違和感を覚える。はたして、世界中を敵に回す以外に“君”を守る方法はないのだろうか。「僕だけを見ていて欲しい。僕だけを信用してほしい」という独占欲のような自己利益の感情に裏打ちされているのではないだろうか。あるいは、世界中と仲良くするためには、コミュニケーション能力や、自分が好きな人のこと以外に大事にしなきゃいけない社会的責任など、大変なことが多いけど、世界中を敵に回して守るのであれば、武力とか有無を言わずねじ伏せる力さえあれば可能だ。それって、自分の怠慢を「君を守る」というかっこいい正義感あふれる言葉で隠してないだろうか? 「君を守らなくていい」世界を、つまり守る必要がないくらい平和な世界を作る努

力をした方が、“君”の利益は大きいのではないだろうか。…なんて書くと夢いっぱいラブソングにケチ付けるなど怒られてしまいそうだ。でも、“僕”が自分の視点から見えている「敵」たちを、“君”の視点に立って見直してみたらそれは、「敵」ではないかもしれない…。

こんなエピソードがある。大学院生の時に教授から「猫にインタビューしてきなさい」と課題を出されたことがあった。んー、と思いながらも、大学猫たちのたまり場のベンチに座り、パソコンを開いてインタビューをした。もちろん自問自答だが、その時の文を抜粋して紹介する。

筆者「嫌いな人ってどんな人？」

アニー「近寄ってきてうるさい人かな。」

筆者「そっか、猫が嫌いな人は寄ってこないから、アニーが迷惑なのはむしろ凶々しい猫好きなのか。」

自分で答えているはずなのに意外な気づきを得たと灰色マークをしていた。この頃の筆者は猫嫌いの人からどうやって猫を守ろうかと考えていた。おそらく、これは自分の視点でしか見れていなかった筆者が、アニーの視点になりきって質問に回答しようとする中で、自分の視点はあくまで自分の視点であり、アニーの視点からは別の見え方をしているのだと気づいた。3つの視点でいう第1の視点、「ミクロな視点で見えているものを理解する」ことが出来た瞬間だったのだろうなと振り返って思う。



インタビュー場所。学生の間座るアニー

次に他の猫にインタビューしようと、今度はお弁当屋さんの裏を縄張りになっているグリの元へ行った。ここはベンチはないので、地べたにパソコンを広げ寝っころがってインタビューをした。人通りも多く落ち着かない場所だ。

筆者「久しぶり。ちょっとやせた？顔つきが疲れて見えるけど、大丈夫？ここは人通りが多くてうるさいね。」

グリ（トレーの荷台の下に潜り込む）

筆者「あ、そっち行くの？ここは煩くて集中できないなあ。あ、モノが多くてごちゃごちゃしてるけど、グリにとっては隠れ場所が沢山あるんだね。なるほどね。換気扇の上は温かいしね。人通りが多いから、人目を気にして猫好きが近寄ってくるのも少ないのかな？さっきアニーが猫嫌いで近寄ってこない人よりうっとうしい猫好きが嫌だって言ってた。そう考えると、ここは良い環境だね。人目が多いから危害を加えるほどの猫嫌いも、度のすぎた猫好きも長居しない。なるほどねー。」

地べたに寝っ転がって低い猫目線になったことで、うるさくて落ち着かないと思っていた弁当屋の裏のグリの空間と、ベンチがあって、開けていて落ち着く環境だと思っていたアニーが居る空間との価値観が逆転した瞬間だった。人目線で落ち着く空間が猫目線でも落ち着く空間だとは限らないと気づいた。これは、アニーとのインタビューによって、ミクロな視点で見えているものを理解した後に、「物の配置」と「猫」と「人」の存在を客観的に捉え直したことによって、3つの視点で言う第2の視点「メゾな視点で全体図を捉える」ことができたことによって得た気づきだと思う。

猫インタビューが面白くて、その後も修論に詰まると猫に相談しに行くようになった。それが、今回の連載のタイトル「そうだ、猫にきいてみよう」に繋がっています（笑）

4. 活動における葛藤

本当にその行為は、猫や人のためになるのか、負のパターナリズムに陥らないように、行動を決定する作業は大きな葛藤 (Conflict) を伴う。ここに、活動の中で生じた葛藤と、その両者の意見を反対意見と賛成意見に分けたものを紹介したい。タイトル部分が RitsCat 決定である。



インタビューに協力してくれたグリ

Table1.大学猫活動における葛藤

タイトル	反対意見	賛成意見
Conflict.1 不妊去勢手術を実施する	1)野生動物に手を加えるべきではない。 2)手を加えるのであれば責任が伴う。そんな責任負えないだろう。 3)可哀想。人間不信になってしまう。子孫をも残すことが最も重要な本能ではないのか。	1)猫は野生動物ではない。殺されるよりはまし。共存を目指したい。 2)手術だけで終わらず世話をする覚悟はできている。100頭の子猫を殺処分するより25頭の母猫を手術する方がまだ可哀想ではない。 3)なつかせることが目的ではない。
Conflict.2 全頭不妊去勢手術をする	1)可哀想だから手を加えるのは最低限にとどめるべきでは？ 2)金銭的に全頭は厳しい。 3)ノラ猫が絶滅してしまう。	1)オスの去勢手術によって迷惑行動の抑制になる。オスのみ残すことによりメスを求めた徘徊や喧嘩が増してしまい逆効果。長期スパンで見ればここで全頭することが最小限につながる。また、数頭だけ手術していないメスがいたら、そのメスにオスが集中しボロボロになってしまう方が可哀想ではないか？ 2)寄付や部員を増やすなど努力をするべきである。 3)ノラ猫という種はなく、ゆるやかにであってもゼロにする取り組みである。
Conflict.3 手術の際に妊娠が発覚した場合、堕胎させる	1)命を大切にすることが第一。出産前でも命。 2)子猫は里親に出せる。	1)減らすことが第一。生まれる前で線を引き割り切るしかない。 2)母子の面倒をみれない。里親さがせない。学生では保護することができない。
Conflict.4 置き餌はしない	1)定時にこれなかった猫が可愛そう。 2)30分から1時間も待てない。 3)強い猫しか食べれない。	1)猫も賢いから時間を覚える。 2)置き餌には虫が湧くしカラスが食べてしまう。衛生的に良くない。捕獲の為に餌の時間を管理する必要がある。 3)エサ皿を複数用意すれば力関係に関係なくあげることができる。
Conflict.5 毎日餌やりをする	1)肉食動物だから胃を休める日があった方が猫の健康管理にいい。 2)狩るの練習も必要。 3)休日も学校に来るのは負担だ。	1)飼い猫は毎日あげる、人の都合のいい言い訳でしかない。 2)人が世話を放棄しない限り狩りは必要ない。 3)手を加えている責任がある。休日もやるべきだ。
Conflict.6 子猫に離乳食を与えたり治療をする	1)子猫は自然淘汰に任せるべき。動物愛護団体じゃない、動物福祉団体だ。 2)離乳食をあげずに育ってきた猫がいるから大丈夫。	1)大学に猫が生きていける自然はない。大学の猫の世話をする団体だと言っている以上、子猫であれ大学の猫なはず。人の都合のいいように理由を付けて助けられる命を見捨てることは動物福祉ではなく愛護だ。出来ない理由を並べ立てるのではなく、どうやったら出来るのか考えるべき。 2)キャットフードで生きて2、3代目の猫は狩り能力も弱っているはず。親がネズミを食べているならまだしも、ドライフードしか食べていないんだから、自分たちがあげなければ死んでしまう。現に1匹手遅れになってしまった。
Conflict.7 子猫を里親に出す	1)里親を信用できない。へんな人に渡してしまった辛い失敗があった。 2)保護しておく場所がない。そこまで学生ではできない。 3)大学の方が新しい環境より幸せ。猫の幸せの定義が分からない。親兄弟と引き離す時つらい。 4)保護中に死んでしまった時、辛い。長生きすることがいいことなのか？	1)きちんとした手順を踏んで、誓約書・譲渡証を渡せば大丈夫。 2)協力者が保護と里親探しをしてくれるから手伝えいい。 3)子猫はまだ大学環境に慣れていないから大丈夫。自分の家があった方が幸せ。猫の幸せの定義は分からないが、ノラ猫でボロボロだったりおびえている状態よりも、家庭でお腹出してゴロゴロ寝ている方が幸せそうに見える。親兄弟を分離することはとてもつらい。 4)ノラ猫は3年~5年の寿命だが飼い猫は15年以上生きる。ノラ猫を減らしたい。子猫は猫嫌いなにとっては物凄く嫌なものであり、成果が出ていないように見えてしまう。そんな簡単に成果がでるものではないけれど・・・。

前のページで紹介したような様々な葛藤を話しあいながら、活動内容の精緻化の仕上げとして、2014年3月に決定したサークルの根幹である活動理念・活動目的・活動方針を載せ、3つの視点から簡単に考察を加えたい。



左から、ガジュ、マル、アニー

右が RitsCat の活動理念・活動目的・活動方針である。

活動理念および活動目的どちらも「共生」ではなく「共存」を掲げている。また、活動目的 i において「人と猫が共存できる大学環境を確立し、維持する。」と、「猫好き」と「猫」という二者関係の共生ではなく、猫が苦手な人も含め、「大学環境」をマネジメントしようとする視点が伺える。一方、活動理念においては視点が社会に向いており、活動の社会的意義の認知が伺える。他方で、実際の活動としては「ii 原則として、本団体は立命館大学衣笠キャンパス外の猫に関して、直接は手を出さない。」と自分たちのキャンシティに配慮している視点も見受けられる。

“どの猫までを対象とするのか”というマイクロな目線と“大学環境をマネジメントする”というメゾ視点、そして“社会に発信する”というマクロな視点をもつ活動理念及び活動目的であると言えるだろう。

あとは、会員が 100 人を超えた今、どれだけのメンバーがこの理念や目的を覚えているのか、作ったメンバーの想いをどれだけ伝承することができるのか次なる課題だろう・・・。

(其の一)活動理念

「人と猫が共存できる社会の実現を目指す」

(其の二)活動目的

- i、人と猫が共存できる大学環境を確立し、維持する。
- ii、立命館大学衣笠キャンパス内に住む猫を「大学猫」として管理し、一代限りの生を全うしてもらおう。
- iii、本団体の掲げる理念の実現の為、本団体の活動及び全国の動物行政と地域猫活動の現状を大学内外に周知させる。

(其の三)活動方針

- i、あらゆる問題に対して、初めから諦めないで、その都度試行錯誤して、自分たちに出来ることを実行する。
- ii、原則として、本団体は立命館大学衣笠キャンパス外の猫に関して、直接は手を出さない。
- iii、「妊娠の疑いがあるメス猫でも手術を行い、仮にそのメス猫が妊娠をしていた場合は子猫ごと子宮を摘出する」ということに同意する。
- iv、大学猫の傷病 1 回につき、本団体が経費として治療費に充てる事が出来る上限額を 3 万円までと定める。
※治療費が 3 万円を超える場合の対処については、その時の具体的な判断材料をもとに当事者となるメンバーで話し合う。
- v、わからないこと・困ったことがあれば、補助会員・大学職員・動物病院といった協力者の方々へ相談することも忘れずに。
- vi、全ての協力者の方々への感謝の気持ちを忘れない。

負のパターナリズムを最小限に抑えた活動は、別の立場や価値観を持つ人からも受け入れられるWin-Win な取り組みとしてコミュニティで機能する。RitsCat が餌やりを行う際には、大学から支給された腕章を付け、大学公認として餌やりをしている。



餌やり時の腕章

大学が猫の餌やりを公認するなんて・・・と驚く方も多いだろう。しかし、よくよく考えると、RitsCat のような特定のサークルに餌やりを許可することは、動物愛護とは切り離しても、大学にとってメリットは非常に多いことが、前回連載から読んでくださっている方は分かっているのではないだろうか。よく、「どうして立命館大学は、猫の餌やりを認めたんですか？」と聞かれることがあるので、動物愛護目線を一旦無しにして、大学目線で餌やりを公認するメリットについて返信したものを載せたい。



体系の性格も丸くなったガジュ

サークルの餌やりを大学が公認する理由は主にキャンパス衛生の観点から3点です。

1. 新参者をいち早く見つけ、TNR を行うため。

継続的にキャンパス衛生を管理していくうえで、猫の管理は重要です。新参者をいち早く見つけ、捕獲し、手術を行うことが必要です。そのためには、毎日の餌やりを決まった時間に決まった場所で行うことで、猫の個体管理が行うことができ新参者に気づくことができます。

さらに捕獲にあたって、ある程度の餌付けがされていない猫をピンポイントで捕獲することは非常に困難であり、捕獲をスムーズに行うためにもルール化された餌やりは有効です。

2. 置き餌、まき餌の禁止

不特定多数の人が不特定多数の場所で餌をまき、清掃を行わないこと、いわゆる猫の餌の“置き餌”が非常に不衛生であり解決すべき課題です。その対策として、立命館では猫サークルに大学の腕章を発行し、腕章を着用していない学生および教職員の餌やりを禁止しています。学生サークルが毎日決まった時間に餌やり（置き餌ではなく片づけまで）を行う代わりに、一般学生や教職員の餌やりを禁止する張り紙等啓発活動を大学事務局に代わってサークルが行います。猫の排他的ではなく共生的な視点からの餌やり禁止看板は理解されやすく効果があります。また、学生が餌やり時に猫の糞尿の清掃を行っています。

3. キャンパス衛生を守る人員確保

①②の観点から猫サークルは大学側から見ると、キャンパス衛生を守る団体と捉えることができます。その活動を継続してもらうには人員確保は不可欠であり、ただ、猫の頭数を把握し、新参者を捕まえ手術するサークルでは人は集まりません。餌やりは学生のモチベーション維持に非常に重要なポイントです。

全部ではありませんが、近年急速に広まっている取り組みであるという説明に使っていただけるよう、思い出せる範囲の先行事例を紹介します。それぞれ、大学名とサークル名で検索していただければブログなり Twitter など出てくると思いますので、正解な情報は再度ご確認ください。

岩手大学：いのちのサークルねこの手

東北大学：とんねこ

千葉大学：ちばねこ

筑波大学：HS CaT

横浜国立大学：ネコサークル

早稲田大学：わせねこ

慶應義塾大学：ひよねこ

埼玉大学：埼玉大学さくらねこサークル

新潟大学：にいがたカレッジキャット

静岡大学：はまねこ. com

中部大学：中部大学猫サークル

名古屋大学：なごねこ

岐阜大学：岐阜大学ねこサークル

大阪府立大学：ひと☆ねこサークル

同志社大学：DoCat

立命館大学：RitsCat

京都大学：ねこサークル Cat-Ch

三重大学：みえねこ

長崎大学：にゃんかつ

九州大学：ねこ部



出逢えたら恋の予感？ハートを持つマリン

5. まとめ

前回の連載から、猫流の「問題の本質の捉え方」と題して、自由に書かせてもらってきました。

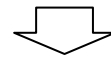
☆問題の本質を立体的に捉えるポイント☆

- ① 悪者探しをしない
- ② 3つの視点で捉える
 - ・ミクロな視点で見えているものを理解する
 - ・メゾな視点で全体図を捉える
 - ・マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす
- ③ 背後ストーリーを理解する

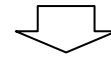
その中でも今回は、「②3つの視点で捉える」ことにより、問題を解決しようとする取り組みがどのように変化していくのかに焦点を当てました。問題への対策が今ひとつな場合は、改善しようとしている問題の本質を掴みきれていないケースが多いのではないかと思います。よくよく考えているのに、改善点が思いつかないのは、視点が固定されてしまっていることが大きな原因だと猫が教えてくれました。

3つの視点で考える流れ

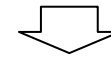
- ①様々な価値観を持つ人々のミクロな視点を理解し捉えることによって、“問題”を多角的に見る。



- ②メゾな視点で“問題”と環境、人々を俯瞰的に捉え、問題発生しているシステムに合った“対策”が考える



- ③マクロな視点に立ち、社会システム中で捉え直すことによって、対策を再評価する。



- ①②ミクロな視点 or マクロな視点に戻る

今回の立命館のケースでは、ミクロ⇒メゾ⇒マ

クロと、視点が広がっていく事例でしたが、ミクロ⇒マクロ⇒メゾ、あるいは、マクロ⇒メゾ⇒ミクロという順番のように、社会問題の認知から入るケースもあります。どちらにせよ、3つの視点を行ったり来たりしながら、繰り返し考えていくことで、“問題”を多角的にみることに繋がり、3つの視点が重なる点、つまり問題の本質が見えてきます。

以上が、筆者が猫と向き合う中で、学んだ問題や葛藤との向き合い方、「3つの視点で捉える」でした。とてもとても長くなってしまいましたが、最後まで読んでくださってありがとうございました！

今回、予想以上に長くなってしまったので、活動を通じた学生の心理的变化や、大学猫活動の教育的意義については、次回に回したいと思います。なので、今回は、猫流の問題の捉えかた「③背後ストーリーを理解する」の前に、「共生」と「共存」についてや、「共感」の再考といった心理的な部分について、エピソードを紹介しながら書かせていただきたいと思います。

参考文献

加藤謙介 (2005) . 「地域猫」活動における「対話」の構築過程 ボランティア研究
 加藤謙介 (2014) . 「地域猫」活動の長期的変遷に関する予備的考察 —横浜市磯子区の実践グループ年次活動報告書に対する内容分析より— 九州保健福祉大学研究紀要
 環境省 (2015) . 「平成 25 年 犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容状況」
 (http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html、2015年1月10日)

小池英梨子.....
 2015 年立命館大学応用人間科学研究科修了
 現在は、公益財団法人どうぶつ基金に所属。

～RitsCat の紹介～

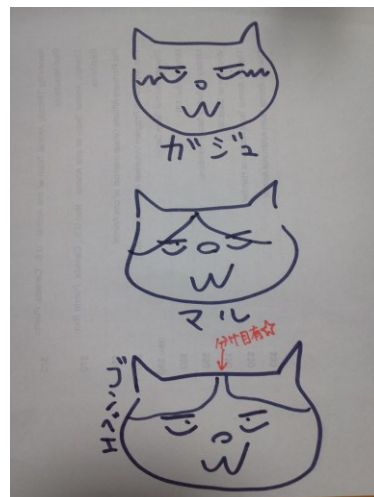
HP <http://ritscat.jimdo.com/>

Facebook <https://www.facebook.com/Ritscat>

紙面が余ったので、おまけ



不妊去勢手術したての頃。栄養状態が悪くガリガリ。今では少し肥満疑惑。右から、ガジユ、マル、ゴンベエ。ゴンベエは後にメスだということが発覚する。



ガジユマルゴンベエの見分け方は、「分け目」。

編集後記

編集長(ダン シロウ)

年4回、22冊目の編集である。マガジンを発行することは私にとって、生活の一部になりつつあるから、やらなければならないとか、締切に追われてという感覚はない。

お正月が来るとか、GWだとか、誕生日だとか、そんな感じに近い。定期的なものだから、他の用件を前後に調整しながら、年4回の編集時間枠を確保する暮らしだ。

同じく10年近く引き受け続けてきた家族心理学会のニュースレター(年二回発行)編集は、今年度末で交代して貰うことにした。あちらは1000人規模の学会の、前任者から引き継いだもので、それなりの約束事がベースにある。だから原稿依頼もしなければならないし、同じ人ばかりが書いているのは、いかがなものかという懸念もある。印刷物発行だからコストも配慮していた。

その点、この全記事連載物、web発行のかたちをとると、そういう心配が一切ない。連動して、ワガママな企画やトライアンドエラーもしやすい。

私自身あちこちで、ますます、やりたいようにやる自由を持たせて貰っているので、その結果元気だ。生活者としても、子ども達は皆、独立し、夫婦二人の暮らしである。年齢的にも、そういう時期に入っている。

ところが、編集員の二人(千葉・大谷)は、何もかもが真っ直中である。仕事のノルマをこなし、自主的研究や多様な役割を果たし、同輩との関係もこなす。

その上で、年四回、この時期には分担の原稿の編集作業を果たす。自身の原稿締め切りがあり、遅れる原稿の打診もしながら、ほぼ期日通り発行の季刊誌のスタッフとして機能する。

こういう仕事を使命のように果たし続ける人に、様々な恩寵が降りてくるのは必然だろう。二人の若いお父さん達の人生が、ますます充実し、次世代育成に

公私ともに励むのを嬉しく見ている。

編集員(チバ アキオ)

今年の夏、初めての経験をした。「デモ行ってきました。」学生からこう声をかけられたことである。1972年生まれの私にとって、国会前、全国各地、そして私の身近でデモの話題がこれほど飛び交うのは43年の人生で初めてである。

「こないだ習ったあの先生おられたじゃないですか」「はいはい、あの先生やんね。」「こないだあの先生にデモで会いました。子どもさんと一緒に参加されましたよ」「そうなんや〜」…似たような会話がおそらく日本のあちこちであっただろう。学生と先生というだけではない関係を生み、つながりをつくり出しているのである。

…そんな夏が過ぎた 2015年の秋に対人援助学マガジン 22号が発刊となる。学会ニュースレターという企画から始まったマガジンがこうして22号を迎えることも、そして全国でデモ、国会前に数万人が集まるということも想像ができなかった。動いたら、継続すること！それがテーマだろう。

ここでも以前に取り上げたかもしれないが『独裁体制から民主主義へ 権力に対抗するための教科書』(ちくま学芸文庫、2012)の著者ジーン・シャープは非暴力運動の事例を長年研究してきた。その経験から世界の独裁的政治状況下にある国々の活動家が教えを乞うてきた。本の中には様々な行動が記載されている。それを読むと「そんなことやるよりも…」と話題になった「ハンガーストライキ」も立派な方法として紹介されている。他にも「ユーモラスな寸劇やいたずらを行う」「演劇や音楽会をする」「死者への墓参りをする」「セックスストライキをする」…。こういった様々な方法を織り交ぜて、これまで人々は、社会を変えようと日々努力し、成し遂げてもきた。その偉大さを思うと同時に、私たちが様々なことができることはまだあると感じる。そして、一方ではこの本を読むと、日本が抱えている状況は他の国に比べるとまだまだ恵まれていることがわかる。

われわれはこのマガジンでも既成の社会システムに働きかけている。私たちが意図しているのは緩やか

な変化だと思う。そういう働きかけが私たちのマガジンの持ち場だろう。

編集員 オオタニタカシ

最近、思わぬところで「マガジン、見ました！」と言われる機会が増えました。とはいえ、頻度は年に数回程度です。ポイントは「思わぬところ」という方で、こちらが読者として想定している範囲を超えたところで読まれていることがあります。先日の「見ました！」の声は、遠く地球の裏側から届きました。一方で、これは一面ではリスク要因でもあります。前号、千葉編集員が編集後記で書いた「ぎりぎりのところ」というのも、その通りです。

内輪でしか通じない理屈や議論がまかり通ってしまう集まりもある中、あえてWebという世界と通じる場所に自らの論を置くのは、覚悟が必要です。執筆者の皆さん、改めて尊敬です。そして、開かれた場に「マガジン」が置かれていることで生じてくる「思わぬこと」の中に、これまでにない新しい展開の可能性が秘められているように思います。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻22号

第6巻 第二号

2015年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第23号は2015年12月15日
発刊の予定です。

原稿締切2015年11月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけはありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

漫才師

若いコンビの漫才と客席の老人達とのギャップを、微笑ましく見ていられた時代。紳助・竜介のテンポに、ついて行けない客席が気の毒に思えた時代。みんな昔のことになった。光り輝いていた人がスキャンダルで消えた。

そしてお笑いから新しいスターが現れる。又吉直樹の小説「火花」は100万部突破の芥川賞小説になった。

このマンガは、描いたけれども何処でも使わなかった作品だ。たしか二人の舞台衣装が描いてみたかったのだった。